關係を有つもので、某督は犧牲法を成就したまふたのである、「祭物」、「祝節」、「契約」などを見よ。

おきて（モーセに依て與へられた律法及び恩と律法）。一、モーセに依て與へ給ふた律法は（一）「モーセの契約」に於て三になつて居る、（イ）十誡 出廿〇―廿六 は神の義なる聖意を顯はす者である、（ロ）律例 出廿一〇二 は殊にイスラエルの社會を治める道德と行爲との規則であつた、（ハ）法憲 出廿四〇十二 は重にイスラエルの宗教に關する者であつた。（二）此等は一體なもので往時人が律法に反きし時若し命ぜられた犧牲か、供物を獻げたならば罪なき者と看做された 路一 雖三。 是には恩寵をも含まれたが、同是罪人は其罪を贖ふために供物（恰も假の如く）を供へなければならなかつた。（三）神が律法をもつて人間を處置ふたさいふても不都合はない 加三〇十三、廿四。 神が律法を與へ給ふた時より耶蘇基督の死に給ふた時迄の間で救はれると教へた人は貴められた 加三〇十二。 （四）新約時代には惟恩惠に由る耳ならず同是律法を守るに依て人は神の恩で救はるゝ。舊約時代の人に神が要求し給ふた義を新約時代の信者には恩寵として人に歸せしめたまふ 出十九 約一〇 十七 羅三〇 十〇三 哥前一。 （二）律法其ものは聖く義く善にして靈なる者である 羅七〇十 二―十四。 （三）律法に由つて人類は神の詛の下にあることが解る 羅三〇 十九 加三。 （四）基督は己が身に律法の詛を負ふて律法の詛より我等を救ひ贖ひ給ふた故律法は我等の主たる可き者ではない 加三〇 十三 四〇五。 （五）罪人は律法に服ふ事に由て救はれない、又信者は自ら一身を聖別むることはできない 加二〇三 二三〇 十一、。（六）信者は律法に對しては死んで居て 羅七、其宣告より贖ひ救はれて居る故恩寵の下に在りて律法の下にあらず 羅六〇 十四 七〇 四。 加二 四〇 ―七 提前一。 （七）斯く恩に由つて救はれたる信者は神に 加九 〇八、九。 二刻・せいれい 聖靈が寓り給ふて律法の義を行ひ 羅八〇 二―四 服ふ心になり 來十〇、 恣意が變り 哥前九、 基督の律法を 喜び 加六 五 五 ―十八。 督責の意味が深長くなるのである 提後三 羅十三〇 弗六〇 一―三 〇八、九。

おきて―キリストの（律法―基督）、**おきてのふみ**（律法の書）、辭＝キリストの律法を 加四〇。 （七）は契約の書といふ意に外ならず。ある時は出廿〇―廿三〇をいふ。然し舊約といふ意で廣義に用ゐらるゝこともある。

おきてとキリスト（律法と基督）、基督とモーセに由れる律法との關係は左の如し、（一）律法の下に生れたり 加四 〇四。 （二）完全く

律法を守り給ふた 約八〇 四十六 太十七 徒前二〇廿。 （三）猶太人に對して（イ）律法に附てきた餘計な傳說を取除き、（ロ）律法にのみ信賴む人を律法に遵がはせ譬へば 路十〇廿、 五―弁七 （ハ）併しモーセの契約即ち「先祖に約束したまひしとを堅固うし」 羅十五。 （四）潔白なる生涯と十字架の代贖とに由つて儀表なる犧牲を成就して律法を廢し給ふた 來九〇十。 （五）基督は律法の咒詛を己が身に負給ふた故、アブラハムの契約の通り信ずる者は救はれる 加三〇十。 （六）信ずる者を律法に服ふべき僕とせずして神の子となし給ふた 加四〇。 贖を設けて新約を建て給ふた。是に由りて信者は恩惠と確信を得て居る 羅五 來八〇六、 又基督の律法が設けられたので信者はこれを守り、信者の德は增して來るのである。

おくぎ（奧義）、奧義とは今まで隱れて居たが、神が其大部分を顯し、併し未だ多少自然以上に顯れない部分が存つて居る者である。重なる奧義は（一）天國の奧義 太十三〇。 （二）此時代に於てイスラエルの頑梗で 羅十一 〇廿五 の前後。 （三）此時代の終に活きて居る聖徒は世より雲に携へらるゝ事 哥前十五〇五 撒前四〇十。 （四）新約の教會が猶太人と異邦人とで成立た事 弗三〇一 羅十六 弗六〇 西四。 （五）教會は基督の新婦たる事 啓五〇廿。 （六）基督が信者の衷に在り給ふ事 加二 西一〇廿 六、廿七。 （七）父なる神と基督の奧義 西二〇 哥前二。 （八）敬虔の奧義 提前三。 （九） 〇十六。 （十）七の星の奧義 默一。 （十一）バビロンの奧義 默十七 〇五、七。 である。

おく（鬼）、新約全書に書いてある鬼は實際ある者で、人格を有つて居る。鬼の本源は明瞭して居らないが、 太十二〇四 十三、四十五 、またサタンの使者であるとは違ふ。鬼は靈なる者であり 太十二〇 四十一 。數は頗る多く其主サタンの爲に動けぬ所はない 可五 〇九 。人と動物との中に入つて居て其者を支配する 可五〇八、十 一―十三 、然し入つて居らぬと惡事ができないと見える 太十二〇四十 十三、四十四 可五〇十 ―十二 。鬼が人を感動せしむる事と人に憑く事とは違ふ、鬼が人に憑く事に就ては 太四〇 廿四 太八〇十六、 三十二 太九〇 二十二 太十二〇 十一 可一〇 三十二 可一〇 十六、〇十五 路八〇 十六 徒八 〇十六 を見よ。鬼は汚れたる頑固な猛しい憎むべき者である 太九〇 三十三 〇十 太十 四十三 可五〇 三―五 可九〇 十七、廿 路六〇 十八 路九〇 十九 。耶蘇基督を神の子とし、此上もなき權威を有てる者として認めて居る 太八〇 一―弁二 可一〇 三―五 徒十九 十四 〇十五 雅二〇 十九 。鬼は自ら其滅亡の永遠の痛苦である事が了解る 太八〇 三十一 病氣を起す 太十二 〇廿二 太十七〇十 五―十八 路十三 〇十六 、然し精神病は一種の病氣であつて鬼が精神を亂す事とは違ふ。鬼の動作に由りて人は形式的になり、厭世的になる事もあり 提前四〇、 彼後二〇 十―十二 。鬼の感化を受けて居る一の證據は聖書の眞理を離る〻事

である ○一(提前四。鬼は特に靈的信者と戰ふ 居る 啻六○ 十二 提前四○。未信者は鬼に憑かれやすくある ○二。其を禦ぐ方法は祈禱と肉慾を 一一三 制する事とである ○廿一 啻六○十 三一十八。耶蘇基督の聖名に由りて鬼を追出した事もあつた ○十八。此時代の最後に底なき坑より鬼の出で來るは 默九○一。最も恐怖しいとである 默九○一。辭一一惡寃。

おほなやみ(大難)、辭解—再臨。大難とは將來世に起らんとし、今迄になかつた非常な苦難で、數年間の事である、○五 默二 の引照を見よ、又 默 十一章—十八 章。世界中 ○十 默三 に起る苦難であるが、殊に「ヤコブの患難」となる 耶三十 ○七。おほなやみ 大苦難の最も烈しい 場所はエルサレムとパレスチナとである。信じない神の民は其苦難に遇ふ、大苦難の間は三年半で(即ち「ダニエルの第七十週間」の後の半分) 但九○廿 五一廿七 默十一 二、三、大苦難の時は(一)猶太人と契約を結んで其を破約つた「海より出る獸」 默十三 ○一 の殘酷な代 但九○ 廿七 ○太廿四 廿五 後 二○。(二)大なる捕虜を以て 默十二 ○十二 「獸」に權能を予へるサタンの活動 默十三 ○四、五。(三)今迄にない惡鬼の非常な活動 默九○。(四)默示錄十六 章の恐怖るべき金椀の罰、此大苦難の時にも或人々は救拯を受くる、其中にはイスラエルより選ばれたる者 默七○、又 四一八 計算られない程數多の他の人々もある 默七○。此大苦難が終ると直に基督は榮光の中に世に臨り給ふ 太廿四○、又 廿九、帖 帖前十二、默 ○五 獸 伯七 默十九、 ○八 ○廿 アルマゲドン 默十四 ○十四 併し必ず 辭—再臨を見よ。

カイザル、羅馬帝の 啻三。(一)テベリオ ○一 つとめの名で、我が國で「元首」 路二○。 といふに似て居る。新約全書に見ゆるカイザルは四人で、(一) アウグスト ○八 (二) ○廿一。(三) クラウデオ 徒十一。及び(四) 子ロ 徒廿五 である。

カイン、世界開闢以來第一の子(即ちアダムの長子)で、雙親の罪を遺傳せられて罪の性質を有つて居つた。然れば罪を棄てぬのみか、彌〻信仰なく、神の聖旨にかなはぬ心を以て獻祭をさゝげ、悔改めて深く神を信じた弟アベルを嫉み、遂にこれを殺し、世界最初の兇殺者となつた。 創四。

カインは世中の人の儀表で、宗教の形式だけあつても罪と贖との必要を感ぜずに居つた 猶後。カインのする禮拜は我意で、神に對して怒り、罪を贖ふ犧牲を携て來ない、弟を殺し神を詐り、流離子となつたが、神は彼を保護せられた。カインの開化には田舍と都會とある、都會の生活もあり、種々の職業又製造業もあつた 創四○十。カインの近い子孫の名を見れば神の名(エル)が彼等につけてあつたが、後には神の御名がその裔に見えなくなつた、是で神を忘れるやうになつた事が解る 羅一○廿 一—廿三。カインの開化 創六 ○四 は立派であつたかも知れないが、神と物質を見ず、道德を見て人を鞭き給ふ 創六○。 五—七 カインの 例 いはゆる開化はノアの時の洪水に由つて滅されてしまつた。

かぎりなきいのち(永生)、(一)基督に於て顯はれたる神の生命 約二 五○ ○四 廿六 ○一約二 ○二 は永生である。(二)聖靈は神の言をもつて主耶蘇に信賴させ 約三○三、 ○十五 信者に此永生を得させ給ふ、此を再生といふ。(三)永生を得たる者は「新に作られし者」となる 哥後五 加六○。 ○十七 十五 (四)信者の有て居る此永生は耶蘇基督にある神の生命と同一と見える、葡萄樹と其枝とにある生命と」 約十五○ 哥前十三○。 十二—十四 である如く首と體との生命も一である 哥前六 加二 西一○ 三○一約五、十一—五 十二 一—十五。

がくしや(學者)、原語は「物を書く人」、「列べる人」、「數へる人」である。學者の職務は(一)聖書を寫し、傳說(聖書に記てない)、律法を區分して、其を講へたり、又舊約全書の字を數へたりするのであつた。舊約の如き時代には斯る職が必要であつた 拂後八 ○十七 廿○ 廿五 王上四 ○三 即ち禮拜式問題に就てのラビ(先生)の決議した所を組織的の說明「カバラ」を作り、此等を聖書の如く重んじて敎へた、耳ならず舊約聖書の註解「ミドラシム」、亦此註解に就ての論「ハガダ」、其から聖書の神秘的の說明「カバラ」をも附加へた。文面的に聖書を解明して其精神を感じなくなつた。此等の餘計な機々の者が聖書に附加へられたが、基督は此等の者を承認なさらず、唯聖書のみ信じて居られたので學者等に憎まれた。

かくしん(確信) は神の約束し給ひし救拯を基督の御動作に因り自分が確實に受けて居り、亦永久も有つて居るといふ信仰である、 羅井二 ○十七 の引照を研究せよ。確信の基は我爲したる行でなく、惟基督の御動作耳である 雅二○十 四—八 多二○ 三○四 一陪 路七○四十。 四—六 十四 路七○四十。 四—五十

かず(數)、聖書の或部分に記してある數には靈的の意味があらしい、譬へば(一)は始と一致。(二)は完全又復活。(三)は創造たものある物或は世界の物。(四)は人の數。(五)は靈的の完全、聖靈に關する數、聖靈に由つて書かれた聖書にはよく七といふ數がある。(六)は完全。(七)は政治上の秩序的完全の意である。廿七は三の意が强められ、又三と七と十と十二とは完全といふ數である。此四の數の積は二千五百廿となる、是が時代の完全な數であるといふ。

かつれい（割禮）　神はアブラハムと契約を結びたまふ時、割禮を行ふ事を命じ給ふたが、これが割禮の濫觴である。其時から猶太人の男兒は生まれて八日を經れば必ず身體のある部分を（創十七〇、九＝十四）割去る割禮を行ふことゝなり、これを行ふものは罪を切斷て、神の特別のものとなり、身體に神の特別の記號を受けた者であるといふ事となり、此時其兒に名をつけたのである。舊約時代の猶太人は割禮を受けない人と結婚するを禁じられてあつた。割禮はアブラハムの契約の表號であつた（創十七〇、一四）。「埃及の羞辱」（ヨシ五）とは埃及に居つて抑壓を受けたる時代の末に割禮を行ふ事を怠りし（出四〇廿四＝廿六）、亦曠野に彷徨へる間も怠つて居つたをいふ。此を新約の信者に適用めて見れば世に負ける事、即ち基督と偕に死に、偕に甦つた事（羅六〇二、四＝十六）を承認せず、其貴任と特權とを拒絶むのであり、聖靈に由りて身體の慾を滅すのである（羅八〇十三）。基督は自ら律法を成就せん爲（太五〇十七）に同是割禮を受け給ふた（ヨ二〇。初代の猶太人の信者は割禮を受けなければならぬと思ふたが、實は基督の時から受ける必要はなかつたのである（加六〇十二、徒十五〇廿。

カナン　一方からいへばパプテスマは割禮と同意義をもつて居るので割禮の代用となつた。

猶太國、即ち自今のパレスチナと同國で、小亞細亞の西部、地中海の東岸に沿ひて南北に長き國である。神はアブラハムと其の子孫とに永く此の國を與へると約束したまふた。猶太人は當今世界中の諸國に散らされて居るが、遂に此の國に歸つて舊時の如くなるのである。

カナンびと　は狹い意味に於てパレスチナの西、即ち海岸に居り、又ヨルダンの谷と其西の谷と低い原野とに居つた人種であつた（創十五、一九。低い原野は最も肥沃た土地である、低い所でなければカナン人の有て居る戰車を使用る事が出來なかつた。重なる邑はシドンとガザとの間の海岸にあつた（創十〇。然し廣い意味に於てはカナン人とはカナンが征服せられない前にカナンに在ただけの人種即ち（創十〇十六＝十八）に記てあるエブス族、アモリ族、ギルガシ族、ヒビ族、ヘテ族、アルキ族、セニ族、アルワデ族、セマリ族、ハマテ族等は非常に偶像を拜み、他の罪を犯した爲、神はイスラエル人にカナンびとだいぶんのをさめ爲カナン人は餘程存つて居り、イスラエルに年貢を納めて居つた（士一〇廿七＝卅六、王上九〇。カナン人は商業に從事して居つた故「カナン人」即ち「商賣人」（箴廿三〇八）と同意味になるに至つた。

かみ（神）、有名な定義に依れば神は此の上無き至尊の存在者であり、宇宙と人間の造主であり、總ての生命と智慧と權能との源なる絕對者である。神は靈（約四〇廿四、提前一〇十七）であつて、其存在（出三〇（約一四〇、西二〇、西二〇九、十四、來九〇、智慧（提前一〇十七、三〇二）、權能（創十七、太廿八、來二、徒一、〇八、聖潔（利十九、路一〇、羅一、啓十五、〇四）、正義（創十八、詩百卅五、〇廿四）、永遠（詩九十、提前一、約八〇、來九〇、十四、〇廿七）、眞實（詩百卅四十、羅三〇十、約十四、哥前二〇、十、十一）、仁愛（一約四〇、七、十八、徒十三、〇二）、無限（耶廿三、西二、詩百卅、〇廿四、〇九、九〇七）、不易（馬三、來十三、來九〇、約十四、〇八、來十四、〇十六）、善美（詩十八、徒十〇、詩百四十、三〇十）、

御名及び基督と聖靈とに關する總ての定義を見よ。

かみのみな（神の聖名）、舊約に在る御名、一、神即ち「エル」、「エラ」、「エロヒム」。「エロヒム」は舊約書に凡そ二千五百回用ねてある（創二〇、四、七、十八、四〇、十五意、これは複數（創一〇、三〇、廿六、廿七、三〇、で三位一體の意を含んで居る。「エロヒム」は力あり、譽を守り給ふ者と云ふ（十七、廿一〇、民前一、〇三）。二、エホバ（創二、四）自ら存在し、己を現す者と云ふ意である。エホバと云ふ御名は殊に人間を贖ふ事に關する名である（創三〇九＝羅三〇廿、出三〇十。エホバの人を救ひ給ふ者として現す所の御德は、（イ）聖き事（利十一〇四、十九、二〇、廿六、二、十三、（ロ）罪を憎み、それを審判き給ふ事（申卅二〇卅、創六〇、詩十一〇、六十六、〇六、七、出卅四、五＝四十二、五＝七）、（ハ）罪人を愛する義なる愛（エホバが犧牲なしに罪人を救ひ給ふ事は聖書にない）（創廿二〇、廿一、出十二〇、十二、十三、利十六、〇二、三、亞五十三〇。人間を救ひ給ふて終まですべて其乏しき所を補ひ給ふ者としてエホバには七ツの御名がある（い）エホバエレ即ちエホバは（犧牲を）備へ給ふ（創廿二〇、廿一、出十七〇、肉に勝つ力を與へ給ふ（出十七〇、（ろ）エホバラパエホバは癒し給ふ（出十五、廿六（身をも靈をも）、（は）ニッシエホバ即ち我儕の旗（出十七〇、八＝十五、（に）エホバシアロム即ち我儕の安也（士六、〇廿四、西一〇、廿一、（ほ）エホバラーア即ちエホバは我が牧者也（詩廿三〇、十、（へ）エホバツイドケヌ即ちエホバは我儕の義也（耶廿三、六、（と）エホバシアンマ即ちエホバは此所に居らるゝ（出廿八、廿四、十五、代上十六〇、詩十六、〇二、九十七、〇五、太廿八、來十三。又エホバとはイスラエルと契約したまふ御名である（出十九、廿二〇、一＝卅四。三、主「アドン」、「アドナイ」、原語は「主」又「夫」と云ふ意である（創廿四〇、九＝十二、哥後十一、三、主と僕との關係に於て僕は主に從はればならぬ（約十三、〇十三、太廿三、路六〇、廿六、〇八。神の種々の御名の用ゐ方は場合に依るのである、たとへば（出四〇十二）を見れば「モーセエホバにいひけるはわが主「アドナイよ」云々即ちモーセは僕の方面から云ふて「アドナイよ」といふたのである、そこで神の力の源として答へ給ふから「エホ

パかれにいひ云々」とある、又（雲七〇八）を見よ。四、エルシャダイのエルは強きもの、（創一七一）シャダイは乳房と云ふ意で、神は養ひ、力を與へ、滿足と慰安とを與へるもの、又果を結ばせ給ふものであるといふ、（創十七一、一一四八、〇三四）の如し、故に懲治をも與へ給ふ（果を結ばせるものは懲しめる權威がある（約十五 來十二 〇廿一）、故にヨブ記には天に果を結ばす樣に懲めるものはエルシャダイであつたからである（伯五〇十。七廿五）。五、エルエルヨンとは天地の主なる最高き神と云ふ意である（創十四〇十、八廿三）、故に萬民にその產業を分ち給ふものとして神はエルエルヨンといはる（申卅二 〇八）、又（但三〇 四〇十七、廿五 五〇十）。神は一天地の主」として、天ををさむる權威があり（但四〇卅 五、卅七 十三、十四 〇 太廿八、〇十八）、地をもをさめ給ふ權威がある（申卅二 〇八 詩九〇 二一四 四十七〇 二五、六 五十六〇、八十二〇 八十三〇六、七 九十一〇 九一十二 瑪後廿二〇 十四、十五 但五〇。 十八）。六、エルオラムとはかくれたまふたもの、又永遠より永遠までのもの（賽九十、）、又永遠のもの（創二一三三）と（一一）と（一二）とをみよ）と云ふ御名の用ゐられる所は（一）神と人との關係で、（イ）造主として（創二〇七、一四五）、（ロ）人間を統治したまふ神として（創十三〇八。一五廿一）、（一二）神と人との緣を定め、統治し給ふ神として（創十七一。廿一 三〇十六一十九、）、（二）人を贖ひ給ふものとして（創廿四 廿二一廿四 三〇十六一十九、）、（三）人を見よ（創一一〇二）、此の御名の內にアドナイの方に重きを置いた所は（創十五 申三〇 九〇 詩七 土六〇 十六〇 將後七〇 十八 〇王上二 〇廿六 〇七 廿四 六〇 十二 雷七〇十三 十九、廿 十〇四十、十二〇 十二 〇 得前二 〇廿 王上二〇 四十八 一四〇 三 六〇 十二 〇一 〇王下九 十〇 八上廿二 代下一 〇九 讀一 〇三 賽廿一 〇十七）。八、アドナイ、エホバに就ては（一）、（三）を見よ（創一一〇二）。九、エホバサバオテに就てエホバの事は（一）に書いてある、ふわけ（詩廿四 〇十）で、人がもの足らぬ時に助け給ふ神の御名である。イスラエルが困つた時殊に用ゐられた御名である。故に預言者エレミヤは八十回、ハガイは十四回、ゼカリヤは五十回、マラキは廿五回萬軍のエホバと云ふ御名を用ゐた。（一）萬軍とは天に居られるものであるのみならず、神の民の用うべき神のすべての力、天にあるスラエルを助け給ふ時に用ゐる神の御名（王上十八 十九〇 賽一 八〇十一 〇十五 十四 〇九 十四）。（二）諸ての事物を決定め統治め給ふといふのは神の聖旨の普通の意である。（一）時さして人が隨意に決定た事を實行するのを神は赦し給ふ。其に由り其人は多少の恩惠を受くるが、それは神の與へる第一でなく、第二である、譬へばヤコブの家族の居るべき地はエジプトでなくカナンの國であつた（創廿六〇、然し其でも神は年老のヤコブにエジプトに居る親族と偕になる事を許し給ふた（創四六〇三）。又（母前八〇 九廿一 〇 申一〇十。 九廿二）。又パラムの歷史に於ても神の許し給ふ聖旨が現はれて居る。

かみのくに（神國） は神の統治を受くる所、即ち神の聖旨の行はるゝ所である。天國に三個の意がある、（一）天。（二）世界中にある敎會。（三）信者の心である。然し宇宙は神の統治したまふ神の國である、故に一方から見れば世にあつて神の統治したまふ所は天國とも云ひ、神の國とも云はるゝ。神の國とは意が廣く萬有といふ義で、其中に人間の如き、精神ある者の好んで神の統治を受くる者が含まれて居る、譬へば天使、敎會、過去た時代と現在の時代との聖徒が入つて居る（詩十三〇 來十二〇。廿八、廿九 廿二、廿三）。天國は中保者なる基督に特別に關係があり、ダビデの契約にも關する者である、天國の目的は神の國を此世に設立するのである（太三 詩廿四十五〇 廿四 廿五）。要之神の國は基督が世に設け擴め給ふ天國である。（二）神の國に入るは靈魂の更生に由るのである（約三〇三。五廿七）。此時代に於ては有名無實の信者が天國に多少入つて居る（太十三 太廿五〇一。十一、十二）。（三）天國は此世にある神の國であるが故に同語を以て雙方を記載する事ができる、夫故マタイは種々の譬をもつて天國の事を言ふが、マコとルカは同譬をもつて神國の事をいふ。併注意すべき事は麥と稗子の譬と網の譬との中には（太十三〇廿 四廿三十 六廿四十三）神の國に就て記いてない。神の國には稗子も惡い魚もない、併數種の譬には神の國の事が書いてある（太十三〇 路十三〇。十三〇 廿一）。何故ならば神の國の眞正の敎にはパリサイとサドカイとヘロデの黨との敎が混つて居るからである（太十三〇。）。（四）神の國は現れて來る者でなく（路十四、十七 〇十七）、專ら靈的な者である（羅十四、十七）、然ども天國は組織的で榮を以て世に現れんとする、（辭—王國 亞十二 〇八 路一〇廿 一廿三 哥前十五 〇二十七。）。（五）天國は（哥前十五 廿四廿五 廿八）の如く終に神の國と落合て其時ら偕に流れて行くのである。

かみのこたち（神の子等）、或說によれば（創六 〇二）の「神の子等」は猶太書の墮落した天の使であつたと、併し「神の子等」とは聖書には天使といふ意でなく、他の意味もある（賽四十。三〇六）。又天使には男女の區別はなく、天には結婚なしと記いてある（太廿二。）。故に（參考）の普通の解明即ち信仰あるセツの子孫と（創四〇、信仰なきカインの子孫との間の結婚であるといふ解明が眞正ではないが、併し途を離れたセツの子孫と益々惡くなつたカインの子孫とを神は罰し給ふより他に途はなかつた（賽一〇二—來六〇 十〇廿六。七、廿四—廿五 四—八 —廿一）。

アが百廿年間傳道しても衆人は悔改めなかつた程、其時代の人間は惡かつた故に洪水の罰が與へられたのである（箇十四、創七〇。十五、十一）

かみのあらはれ（神の顯現）、神は間接に（約一〇、提前六、十八、〇十六）貌をとつて人間に顯れ、或は主の使（創十六、〇七）、或は（出卅二、卅三〇、〇卅四、十四）の如く契約の使者（馬三、〇一）、又終に肉體と成り給ふた基督に於て己を人間に顯現し給ふた、（一）舊約時代の顯現に就ては（創十二、〇七）の引照を見よ。舊約時代の顯現は暫時の者であつた（創十八〇、士十一、三〇）、併し幕屋の至聖所に於ては常に神の榮光が顯れて居つた。素は（出十三〇、廿一、廿二）火の柱となり、又シナイ山に於て（出十九〇、廿四〇七、十六、十八、六、十七）、又（出卅三、申五、〇十一、〇四）現れ給ふた、殊に（出四十〇、民十九〇、民七〇、王上八〇、卅四、卅五、十五、十六、八十九、十、十一）を見よ。（二）基督は其肉體に於ても直接に神を顯し給ふた（約一〇。十四）。また（三）今後御再臨の時に於ても（從一〇、撒後一、默一、十一、〇七、〇七）、辭＝再臨。

かみをおそるゝこと（神を畏るゝ事）、「神を畏るゝ」とは神を信ずる人が罪を憎みながら神を敬愛し、信頼する事である。

カヤパ、基督の頃の祭司の長であつた、祭司の長は元來終身職であつたから他に祭司の長のあるべき筈はなかつたが、羅馬政府は其頃猶太の律法を無視し、カヤパの義父アンナスが職に在るに拘らず、妄にカヤパを祭司長に任じた、されば同時に二人の長ある奇觀を呈したのである（路三、〇二、約十八、〇十三）。カヤパと其外舅アンナスとはバプテスマのヨハ子の時に祭司の長であつて、カヤパは紀元後三十六年迄奉職て居つた。此人は耶穌の贖罪に就て預言し（約十一、〇五十）、併し耶穌を執へる謀を自分の邸の庭でした（太廿六、〇三、四）。耶穌はアンナスの前で詮議を受け、後カヤパの所へ遣られ（約十八、〇廿四）、神の子たる事を宣言し給ふた爲に死刑に定められた（太廿六〇、六十六）、猶ペテロとヨハ子との審判にも關係した（徒四、〇六）。紀元後三十六年にカヤパはその權威を取られた。

カルデヤは全世界帝國の第一帝國の起つた國であつた（紀元前約二千三百年頃）。

かんおう（感應）、神は聖書を書いた衆人に默示を予へ給ふた時適當な用語を教へ給ふた故、モーセ、ダビデ其他使徒等の書いた原書の言には誤謬がなかつた、然し屢寫替へたから文字の誤謬が起るに至つたが、餘程注意した爲傳へられた原書には誤謬が極僅少である。新約全書には二千字の中に一字位間違つて居るかも知れない。神が聖書の作者に默示を與へ給ふた方法は（哥前二〇、九＝十四）に記いてある、殊に十三節を見よ。聖靈が聖書の作者の筆を指導いて記かせ給ふた時に、作者を器械になし給ふたのではなく、唯誤謬なき樣作者の精神と手とを指導き給ふたのである。靈的信者即ち聖靈の權を受けた信者でなければ聖書の深い意味を認めない（哥前二〇、默廿二、十五、十六、〇十九）。聖書の各卷を書いた人々は（一）神より受けた默示と權威とをもつて書くといひ。（二）思想のみならず、言まで教へられたといふ（哥前二〇、七＝十五）を見よ。（三）耶穌は舊約全書を神の聖言として確證め給ふた。又明白に創世記、出埃及記、利未記、民數紀略、申命記をモーセの書いた書と言ひ給ふた。（四）亦新約が與へらるゝ樣に聖靈が臨り給ふたら、猶默示が予へらるゝと約束し給ふた、是で信用すべき新約全書もできた理である。（五）新約の作者は舊約全書を神の言で權威ある者として深く信じて居つた（彼後一、〇十六、哥前二、〇十三）。

きゝん（饑饉）、舊約歷史時代には時々饑饉が起つた（創廿六、四十、〇一、一〇）。（エジプトの二箇の古い石碑に由れば紀元前千七百年迄七年間ナイル河の水が汎濫ない爲作物が豐らず、恐しい饑饉があつたと記いてある、是はヨセフの傳（創四十、一〇卅）と同饑饉であつたに相違ない（創四十、二〇五、得一、〇一、母後廿四、〇十三、詩百〇五、〇十六）。神は饑饉を以て其民を懲治め、また未信者、不信者を導き給ふ事もある。饑饉に遭ふ衆人が世の物質の不足い事を承知し、神の予へたまふ物質的又靈的恩惠を懇求るのは神の聖旨である。

きせき（奇跡）は萬物を創造り、維持け、統治め、指導き給ふ神が證として行ひたまふ異能である、（一）奇跡を以て神は其聖德を顯し、又眞理を誨へ給ふ。（二）聖書の教義に適ふものである、適はない者ならば眞正の奇跡でなく僞の奇跡である（申十三〇、撒一＝三、使二〇、默十六、〇十四）。（三）行ひ給ふ目的は贖罪に關するものである。（四）奇跡を見た人が信用せらるゝ人でなければ奇跡の事を證明すべき資格がない。奇跡の多く行はれた時代は（一）神の民が埃及より贖はれ、救出された時代、出埃及記、利未記、民數紀略、約書亞記、士師記。（二）エリヤとエリシヤの時代即ち偶像教と死活の爭鬪の時代、列王紀略上、同下。（三）俘囚中神がダニエル等によつて偶像教の人々に其權能と權威とを顯し、其民を救ひ給ふた時、但以利書。（四）耶穌の神の子たる事、亦己の神より來りし事を證據だてる爲に行ひ給ふた奇跡もあつた。使徒の時代に於ても使徒の權威を確實める爲行つた奇跡もある、聖書中に記いてある奇跡に就ては（創五〇、廿四）からの引照を見よ。

キリストのおきて（基督の律法）、基督は舊約の律法と預言とを廢せずして成就し給ふた（太五〇、十七）。一言でいへば基督の律法は愛の律法である（路十〇、廿七）。併し唯の愛でなく救はれた心に聖靈が感動いて作り給ふ愛である（羅五、〇五、來十〇、十六）。而して其愛が自然に神の愛し給ふ

者を愛するに至らしむ（哥後五〇 十四ニ廿 ○七、八）。此律法は自由の律法である（雅一〇 廿五 十二）。モーセによれる律法は愛を要求し（剌十九 ○十八 ○五 廿七）、キリストの律法は愛を生ぜしむ（羅五 一、約四 一〇）。又新になつた心より自然に出づる愛である。

キリストのかうりん（基督の降臨） さは基督が天から此世に臨り、人間の肉體と靈魂とをとつて世に在られた事である、辭＝神の顯現、又再臨。

キリストのひ（基督の日）、（哥前一 五〇 ○八 哥後一 辭一〇 十四 六、十六 ニ〇 十六）を見れば御再臨の時に聖徒に報賞を予へ給ふ時の事であるとみえる、辭＝再臨。

ぎん（銀）、（出卅〇十 ニ＝十六）を見れば廿歳以上のイスラエルの子孫は貴賤貧富に關係らず、皆銀のシケルの半分を靈魂の贖の金として納めなければならなかつた。此贖の金を以て幕屋の竪板の座（出廿六〇十 五＝廿五）を作つた（出卅八。故に銀の靈的意は贖罪であるとみえる。

ぎとせらるゝこと（義とせらるゝ事）、人間のうちに義人は一人もない（羅三、哥前一。イエスが罪人の罪を己が身に負けて悉も御自身の罪の如くなし給ふたから、悔改めて信頼する罪人は無罪と看做さるゝ、（一）義とせらるゝ事の原は神の恩寵である（羅三〇 四、五。（二）又神は律法の守るべき者である事を明瞭にし、其上で律法を成就せんが爲に基督の十字架上に全き贖を設くる事をゆるしたまふ（羅三〇廿 四〇 一五〇 加二〇 三〇八。罪人が神の裁判所に入り、裁判を受くる時に贖主基督は辯護してくだされ、神は判事の資格をもつて信者の無罪を宣言し給ふ（羅八〇廿。（三）善行に由らず、信仰に由る（羅三〇廿 四 五 九、十六）。

ぎせい（犧牲）、（創三〇 廿一）にある「皮衣」は犧牲動物の皮であらう。○（創四）のアベルの義は彼が獻げた犧牲に因つたのである（來十一。神がモーセに依つて律法を明瞭に予へ給はない時は各家族の長が其家族の祭司となつて居つたが、律法が予へられてから特別に選ばれた祭司ができて、彼等のみ犧牲を獻げる權威があつた、然れば元來犧牲といふ者があつて、唯犧牲のみに由つて人間が（罪ある者である故）神に交り、又神の赦を得る事ができた。樣々の犧牲があつたが、皆世の罪を負ひ給ふ大犧牲なる基督の儀表である、利未記の緒言及び希伯來書を見よ。基督の成遂げ給ふた大犧牲の意は（一）萬民の受く可き罰を受け給ふた（加三〇 哥後五。（二）萬民の代僕になり給ふた（羅一 哥後五 六、六三 ○四 哥後五 ○廿一 彼前二。（三）自ら甘んじて犧牲となり給ふた（創廿二 約一 十八）。（四）贖罪を設け給ふた（加三〇 ○廿一 哥前六。（五）挽回の祭物となり給ふた（羅三〇。（六）和げ給ふた（哥後五 十八、十九 來二〇 廿一、廿二）。（七）效力あること（約一 二〇 廿二、廿三 來九、十 ○廿一 哥後五 十二 來九〇十一、廿六）。

（十〇十 一約一 ○七 ○五）。（八）神の聖德を顯す事（約三〇 ○九、十四）。

キユヒト、尺度の名で、大凡一尺五寸。もつと長いのもあつた（百十、又玉であつた（伯後七〇。預言者も祭司も王も皆證明さして膏を沃がれ、其職に任ぜられた故（王上十九 出廿九 哥前十六 ○十三、イエス耶穌も膏の表號たる聖靈を受け（以後 太三〇 何一〇 路三〇廿 二、約一〇廿 三、約二〇 西二、三、辭＝神と三位一體。基督は永遠より神の生み給へる獨子として神の裏に居られた「ロゴス」である（約一 一〇。（二）人となり給ふ事に就ての預言は（創三〇廿 四、十五 ○二）にあるが、舊約の時代にも世に現れ給ふた事があつたと見える（創十八〇。神の臭へ給ふ犧牲との關係（來八。モーセによつて神の予へ給ふた律法との關係（太五〇。イスラエルとの關係（利一〇。エホバの僕（賽四十 四十二。耶穌は己を虛うし卑くし給ふ事（腓二〇。肉體をとり給ふ（太一〇 約一〇。インマヌエルとなり（賽七〇。人の子となり給ふた（太八。系圖（路三〇。バプテスマ（太三〇 十五。試みらるゝ事（太四。（二）基督の預言者たる事、辭＝福音、新しい教義（太十一。基督の律法（哥前九 一約二 加六 二約一。路四〇。其御工、辭＝奇跡。會堂と安息日との關係（太十二 十六。基督の變貌（太十七。（四）基督の祭司たる事、メルキセデクは其儀表であり（創十四 來五、六、又アロンも（出廿八、基督の祖難と榮光との預言（路廿四十 一〇 太十七）自ら（太廿七 ○五十。贖罪をなし給ふた（利十六、六。親戚なる贖主（賽五十。異邦人の爲にもなる（太十五 約十二 二〇六。（五）基督の王たる事＝預言せられた（賽九〇。王さして生れ給ふた（太二。王の權能（太八。イスラエルに王さして予へられた（申十二〇十。然し棄てられた（太廿一。王さして贖り（太廿八 羅四〇 太廿一。天に昇り（羅三〇 太廿八 ○九 ○四）。

又但七〇默五。十三〇七。聖靈を遣し給ふた。賜與約十七。〇二。信者の基督に於ける身分弗二〇十。〇十。教會を愛し給ふ弗五〇。廿五。善牧者約十。〇七。信者の主太八〇二。十一弗四〇。（六）御再臨、辭＝再臨、預言、亞十四〇四。馬三〇一。賽四十二〇一。五十九〇廿。の通り實際顯れ給ふ哥前一。〇七。又徒一〇十一。太廿四〇三。廿五〇一。基督の日約十四〇三。哥前一〇八。猶太人の遺餘者賽四十九〇。（七）基督の儀表。銅の祭壇出廿七〇一。銅の蛇民廿一〇九。赤牝牛民十九〇二。アダム創五〇一。羅五〇十四。哥前十五〇廿二。アベル創四〇二。アロン出廿八〇一。利八〇十二。アロンの杖民十七〇八。イサク創廿一〇三。廿二〇九。廿四〇一。至聖所の幕出廿六〇卅一。磐出十七〇六。民廿〇八。太廿一〇四十四。彼前二〇八。牛利一〇三。枝賽四〇二。香を焚く壇出卅〇一。馨しき香たる犧牲利一〇九。金の燈臺出廿五〇卅一。犧牲の血利十七〇十一。犧牲の山羊利一〇三〇。契約の櫃出廿五〇十。愆祭利五〇六。羔羊利一〇三〇。祭司アロン利八〇十二。祭司メルキセデク創十四〇十八。罪祭利四〇三。酬恩祭利三〇一。親戚の代贖者利廿五〇四十九。賽五十九〇廿。主の節利廿三〇二。踰越の節出十二〇十一。素祭利二〇一。供前のパン出廿五〇卅。洗盤出卅〇十八。ダビデ王代上十七〇七。地の穀物書五〇十一。ナザレ人民六〇二。二羽の鳥利十四〇四。二匹の山羊利十六〇五。合歡木出廿六〇十五。ノアの方舟創六〇十四。燔祭利一〇三。光創一〇十六。ベニヤミン創卅五〇十八。四十三〇卅四。マナ出十六〇卅五。書五〇十一。恩と結亞十一〇七。モーセ出二〇二。門出廿七〇十六。約十〇七。鳩鳩利一〇十四。ヨシユア書一〇一。ヨセフ創卅七〇二。處女の生まんとする子賽七〇十四。牡綿羊創廿二〇十三。

キリストのしんせい（基督の神性）、一、舊約に於て（一）神は肉體の如き像をとり、人間に交り給ふた創十六〇七＝十三。十八〇二＝卅三。卅二〇廿四＝何十二〇三＝五。出三〇二＝十四。（二）メシヤは神又神の子たる事が明白である詩二〇二＝九。詩四十五〇六、七。來一〇八、九。詩百十〇一。太廿二〇四十四。徒二〇卅四。來一〇十三。詩百十〇四。來五六〇六。七〇十七廿一。亞六〇十三。（三）處女より生まれ、インマヌエルとなり給ふ賽七〇十三、十四。太一〇廿二、廿三。（四）メシヤには神の聖名が附て居る賽九〇六、七。（五）メシヤの死給ふ事を預言した所で、エホバの「伴侶」と稱へらるゝ亞十三〇六、七。太廿六〇卅一。（六）其永遠無窮なる事米五〇二。太二〇六。約七〇四十二。二、基督御自身は其神の子たる事を主張し給ふた、（一）エホバの聖名を己に附け給ふた約八〇廿四、五十六＝五。十九。廿三。十七〇四＝六。（二）自ら「アドナイ」であると言ひ給ふた、辭＝神の聖名、太廿二〇四十。二＝四十五。（三）父なる神と同一であると主張し給ふた太十八〇十九。可十四〇六十二。約十〇卅二。約十四〇八、九。十七〇五。（四）神の權威を用ゐ給ふた可二〇五＝七。路七〇四十。八＝五十。（五）遍在性太十八〇廿。約三〇十三。（六）全智なる事約十一〇十一＝十四。可十一〇二＝八。全能なる事太廿八〇十八。路七〇十四。約五〇廿一。六〇十九。路九〇十六、十七。約二〇九。十八〇。（七）人に拜まれ給ふた太十四〇卅三。廿八〇九。三、新約全書の各卷を書いた人々は基督に神の聖名を附けた約一〇廿一。廿八。徒廿〇四。羅一九〇五。撒後一〇十二。楊前三〇十六。多二〇十三。來一〇八。一約五〇廿。四、神の聖德は基督にあるといはれた太十一〇廿七。來一〇八。廿八〇廿。約一〇二。二〇廿三＝廿五。三〇十三。五〇十七。廿一〇十七。來一〇三、十三十一、十二。默一〇八、二〇十七、十八。廿三。十一〇十七。廿二〇。十三。五、神の御工も約一〇三、十。西一〇十六、十七。來一〇三。六、神の如く拜むべき御方である徒七〇五十九、六十。哥前一〇二。哥後十三〇十四。腓二〇九、十。來一〇六。默一〇五、六。五〇十二、十三。七、基督の聖と復活とによつて其神の子たる事が解る羅一〇四。また約八〇四十六。

キリストのひながた（儀表）、に付ては辭＝基督。

キリステアン、基督信者、此名は紀元後四十三年頃アンテオケで始めて反對者から附けたやうである徒九〇廿六。又徒廿六〇十八、廿三、廿八。彼前四〇十六。羅馬の歷史家タシトス（紀元後百十六年）は「子ロ王の時（紀元後六十四年から六十八年）此名が通例よく用ゐられた」と歷史に書いて居る。我が國にて昔時天主教徒を「切支丹」といふたのはこれであらう。

キリストにてきするもの（基督に敵する者）、即ちアンテキリストは種々ある一約二〇十八。又アンテキリストの靈もある一約四〇三。アンテキリストは皆耶穌基督は神の生み給へる獨子でないといふ約一〇十四。太一〇十六。右の多くのアンテキリストは來らんとする一人の大なるアンテキリストの爲準備する者である、此大なるアンテキリストは、默十三〇十一＝十七の「地より出づる獸」、又默十六〇十三。十九〇二十。二十〇十の「僞の預言者」であつて、諸教會の終局の首となる、迫害をする時にも一匹の獸即ち萬國の首より權能を受て酷く人を窘迫る默十九〇廿。

ギリシヤびと（希臘人）、聖書には異邦人と同義に用ゐてある徒十一〇廿。約十二〇廿。また希臘語を用ゐる猶太人をもいふた徒六〇一。

きうやく（舊約）、舊約全書の緒言を見よ、又辭＝契約、神は衆人を救ふ爲に早くより創三〇十五。契約を予へ給ふた。元始は種々の表徵と儀式と儀表とを以て信賴する所の心を作り、耶穌の血に立つる所と新約に因つて最明白に救はるゝ方法とを人間に得させ給ふた、辭＝新約又新約全書の緒言を見よ哥前十一〇。舊約緒言を見よ。

きよめ（聖潔、聖別）、聖書に記いてある聖別、獻げる、潔められたといふ樣な語は人に就いて或は事物に就いても神に獻げ奉つた者といふ意もある。聖き神とか、聖き天使の如きは無論道德性が潔白といふ意になる利十一〇四十五。但四〇十三。併し人間が潔いといふ意は神に獻げられたといふ意もある、斯る人は聖靈を特別に得て次第に心が潔くなる、創二〇三からの引照を見よ。

くいあらため（悔改）、己の罪を悔い、併し悔る耳でなく哥後七〇八＝十一。自今罪を犯さないと決心するのを悔改といふ太廿一〇廿八、廿九。原語の意味は「心變する」といふ意である亞八〇十四。太三〇二。民十七〇卅。神が「悔いた」といふ意は原書の方面から言へば神が氣を變へ給ふたとい

ふ事で、勿論罪に少しも關係はなく、又聖旨を變へ給ふたのではない。神の御定の前後を知らざる人間の目から見れば聖旨が變つた樣に見える耳である。神の大計畫に於ては進歩もあり、變化もある人間社會に其程の變化があつた時は人の氣が變つたと論ずる、即ち原因が變つた故結果も變つたといふ、神の聖旨といふ原因は少しも變る事はない故、何程現象が變つたと見えても神が氣變りせられたと論ずる事は出來ない。

ぐうざう（偶像）、創四〇廿六の「此時人々エホバの名を呼ぶことをはじめたり」とある意をエホバの名を他のものにつけたとの意に解釋する人もある。「エノス」とは弱い、果敢き、死ぬべき人といふ意である、又猶十四、十五を見よ。此を眞の解釋とすれば偶像は初代からあつたと見える羅一〇廿二廿五、雷廿四〇二、創卅一〇。廿二廿五。埃及にもカナンにもあつた出廿〇四、五、廿三〇廿四、申七〇五。偶像とは拜む物の像或は拜む物を含んで居るもので種々の物からできて居つた詩百十五〇四、賽四十四〇、十三＝十七、また創卅一〇卅四、母前十九〇十六、但三〇一。元來偶像の果敢き弱き事は明瞭に敎へてあつた母前五〇三＝五、詩百十五、賽四十四〇九＝廿。イスラエル人が交際つてをつた國民は巴西人を除き皆偶像を拜んで居つた。イスラエル人は他の感化を受けて元は偶像に由つてエホバを拜んで見たが、終に他の所謂神々を賴む樣になつた、辭＝バアル。新約時代の信者は常に偶像敎に包圍れて居つた故能く使徒等に其關係を絶つ樣に勸告られた、徒十五、哥前八〇、十〇十八、〇廿九、四＝十三、卅三を研究せよ。聖書中に偶像の憎むべき事、又危險な事は強く記いてある。偶像敎の行はれて居る土地にできた信者の中には偶像に獻げた供物などについて種々面倒の起つたこともあつた。譬へばコリントでは偶像に犧牲を獻ぐる時、祭司は其の動物を殺し、三分して一部を祭壇に燔き、一部を奉獻者に還附し、一部を祭司の所有として取つた、然し祭司は其の肉を肉店に賣渡したので、店には供物の肉が多く賣られて居つた。かゝる事情であるから基督信者が肉店に肉を買ふ時「此の肉は偶像に獻げたのであらうか」と心配した、又偶像信徒は自分が貰つて來た肉を以て人を饗應したことがあるので、基督信徒が招待かれると「これは基督信徒が食ふべきものであるか」と心配し、決心がつきかねて大に困却したことがあつた。そこで信者はパウロに食ふて善きや否やと問ふたことがある徒十五、〇廿。然しこれは知識の問題であるから知識に依つて定むべきものである。さればある人は元來偶像の死物であり、意とするに足らぬものであるを知るので、何とも思はずに食ふた、然し知識の無い信者は悟る所が無いから食ふことを恐れたので、心配せずに食ふ信者は食はぬ彼等を「無知識」といふて誇つて居つた、これらは愛なき驕傲であるからパウロはこれを戒飭めたことがあつた羅十四、〇十四。

くわいだう（會堂）、イスラエル人と猶太人とがバビロンに擄はれて居る間神を禮拜す可き場所即ちエルサレムで禮拜ができない故處々に會堂を建て、其處で聖書を誨へ、祈禱をする習慣があつた。會堂では犧牲を獻げる事は無つたが、漸次と會堂の數が增してきて基督降世後百年迄にユダヤ人が居る處には必ず會堂があつた。學者は會堂で律法を敎へ、學校にもなり、又小裁判所にもなつた太十〇、十七。學者が寫した聖書の高價き卷物は會衆に向ふ箱に置かれてあつた。安息日毎又毎週二回禮拜式があり、其時に聖書の卷物を出し律法と預言書とを朗讀で說明したり、奬勵したり、祈禱したりするのであつた。會堂を司る衆人は長老等で路七、〇三、其首は宰であつた路十三、徒十三、〇十四、〇十五。然し說敎する衆人は長老等でなく、會衆の中の適任者が依賴れた。其故耶穌はナザレの會堂で聖書を讀む樣に招かれ給ふた路四〇、十六。又屢會堂で敎へ給ふた事もあつた太四〇、廿三。パウロとバルナバはアンテオケの會堂で奬勵を賴まれ徒十三、〇十五、使徒等は傳道の巡廻をする時先づユダヤ人の會堂に行つて說敎を始めた徒十三、〇五。初代の敎會は會堂の如きものであつた。

くわんさい（灌祭）は神の前に灌ぐ葡萄酒で、凡て物體の上に灌ぐ事があつた創卅五、〇十五。飲む事はなかつたが、他のそなへものと共に捧ぐるものもあつた民六〇、十五〇一、十七＝十二、又た詩廿三、〇十四、賽五十三、〇十二を見よ。

けいづ（系圖）、イエスの系圖は馬太一章と路加三章とに書いてある（一）これら兩方をヨセフの系圖とすれば路三〇廿四のマツタテはヘリを生んでから死んで寡婦を遺した、マツタンは其の寡婦を娶つてヤコブを生み、またヘリは妻を貰つて子なしに死んだ。其の（異父）弟は申廿五、〇六に從つて寡婦を貰ひ、ヨセフを生んだ。それで一方から云へばヨセフはヤコブの子であり、また一方から云へばヘリの子であつた。もう一つの說明に依ればヤコブは男の子がなく、女の子「處女マリア」があつた、併しヘリは男の子があつて彼は伯父ヤコブの後繼と成り、又それでダビデの王位の嗣子に成つたと。（二）馬太にある系圖はダビデの王位を嗣ぐべきヨセフので、路加にあるのはダビデの血統のマリアの系圖であるとの說もある、（エホアキン太一〇十一＝十三、路三〇廿七は男の子がなくとも女の子があつて子りの妻に成つたとすれば民廿七〇八＝十一シアテルはエホヤキンの後裔と成る、兎に角シアテルは法律上から云へばエホヤキンの後嗣となる）。注意、

ヘブルの系圖には名を省畧く事もあり、また「生む」と云ふ言の意味は廣くて其後をいふこともある。

けいやく（契約）、神は人間に生命と救拯とを得させんが爲七の大契約を與へ給ふた、一、エデンの契約即ち行爲の契約といふのである。最初の人間の責任は（イ）子女を生む事「生めよ繁殖よ地に滿盈よ」（創一〇、廿八）、（ロ）人間の益になるやうに「地を服從せよ」（創一〇、廿八）、（ハ）地に動く所の諸の生物を「治めよ」（創一〇、廿八）、（ニ）蔬菜と果物とを食ふ事（創一〇、廿九）、（ホ）エデンの園を理め守る事（創二〇、十五）、（ヘ）善惡を知る樹の果を食ふべからず（創二〇、十七）、（ト）神の命に背く時に其罰は死である。二、アダムの契約即ち生命の契約は救主に由つて人間ハ救ひ給ふ（創三〇、廿一）、（イ）サタンは詛はる（創三〇、十四）。サタンの用ゐた動物（蛇）は素最も美はしき物であつたが、最も憎むべき者となつた。此で罪の結果と贖罪の深い意とが解る（創三〇、一十四、民廿一〇、四五、約三〇十四、十五、哥後五、一〇）、（ロ）來るべき救主に就ての最初の約束（創三〇、十五）今後來るべき救主の先祖（肉體の）の事が記いてある、アベル、セツ、ノア（創四十、ユダ（創四九、十、母後七〇、ダビデ（撒後七、五、十七）、インマヌエル即ち基督（賽七〇九、十四）、（ハ）婦の資格が變つた（創三〇、十六）苦しみて子を產み、夫に服ふべき者となつた（創三〇、十六、提前二〇、十四、二、彼前三〇、廿五）、（ニ）人の罪のために土は詛はれ（創三〇、十七）、怠惰るよりも勤勞つて動くのは墮落した人等にとつて幸福である、（ホ）エデンの園の簡易い動作は（創二〇、十五）勞動と變つてきた（創三〇、十九、二、廿一）。三、ノアの契約、（イ）人間と地との關係が定つてくる事（創八〇、廿一）、（ロ）天然の秩序が確實められた（創八〇、廿二）、（ハ）人間政治が設立せらるゝ事（創九〇、一一、六）、世界は此の後洪水によつて滅されない（創八〇、十一）、（ホ）ハムの子孫が卑くなる（創九〇、廿五）、（ヘ）セムの子孫と特別なる關係ができる（創九〇、廿七）。神はセムの子孫によりて基督は肉體に於てセムの子孫となり給ふた、人間に默示を與へ給ふた、（ト）ヤペテの子孫は高く大なる者となる（創九〇、廿七）。四、アブラハムの契約（何十二〇、一一四、利十三〇十、四二十七）、（イ）アブラハムの子孫は大なる國民となり、ヘブル人は大なる國民となつて居る（創十三〇、三十七）。又アブラハムの靈的子孫（約八〇、羅四〇十、九、八、加三〇六、七、廿九、又イシマエルの子孫（創十七〇、（ロ）神より恩惠を受くる、目に見ゆる恩惠（創十三〇十、四十五、十七）、（ハ）其名が高くなる（創十二、

加三〇十、三、十四）、（ホ）「我は汝を祝する者を祝す」（創十二、三）、（ヘ）「汝を詛ふ者を詛はん」（創十二、〇七）、（ト）「天下の諸〳〵の宗族汝によりて福祉を獲ん」（創十二、三）。注意、アブラハムの子孫が國を與へらるゝ御約束には三度國を失ひ、三度國へ還さるゝといふ條件が附いて居つた（創五〇十六、十耶廿五〇十二、十二、申卅八〇六十、一卅卅〇、既に二回國を失ひ、二回國へ歸り、現今は三回目にて、イスラエル人は國を失つて居るが、基督の御再臨の時には國へ還さる（申三十、五卅八、路一〇卅、徒十五〇十、五、毛）。

ーセの契約はモーセに由つてイスラエル人に與へられた、（イ）十誡（出廿〇、一卅六、是は神が萬民に就ての聖き旨意を現はすのである、（ロ）イスラエルの社會に關する律法（出廿四〇十二、此三種の事は新約全書に一般に記かれた「律法」となつて居る、譬へば七、太五〇十八、十誡を守つてみれば却て罪の罰たる事を錄計に認むる（羅後三〇、七卅九）。犧牲に就ての律法に由つて舊約の人は罪の贖を得た（利十六、其犧牲は十字架の儀表で有つた（來九〇、五卅六）。信者はモーセの契約を守るに由りて救はれるのでなく恩惠の契約に信賴んで救拯を得て居る（羅三〇廿、六〇十、加二〇、三〇、一卅七、四、十五、十六）。

契約、イスラエルは其國を受くべき者となつて居る。イスラエルは未だアブラハムの契約の通りに國を領つた事はない、（四）を見よ（創十五、一二、十二）。パレスチナの契約は、（イ）イスラエルは神に背きて散らされた（申三十、三、六八、〇十八）、（ロ）イスラエルは將來に於て散らされたる儘で悔改める（申三十、〇二）、（ハ）主の御再臨（申三十、歷九〇、九、徒十五、四、十七）、（ニ）國へ歸された（申三十、十二、十二、三、八）、（ホ）國民として信するやうになる（申三十、〇六、廿六、廿一〇、傳二〇十、四、十六）、（ヘ）イスラエルを壓制する者の受る審判（申三十、〇七）、（ト）國民の福祉（申三十、歷九〇十一、四、十四）。

ダビデの契約（撒後七〇、八、十七）、此契約の上には「肉體に由れば」ダビデの苗裔より生れ」給ふた基督の榮ある王國が基くに至る。此契約に就ては（イ）ダビデの家系が續く、（ロ）位即ち王の權威があり、（ハ）王國即ち統治し給ふ範圍がある、（ニ）此契約は永遠く繼續して行く、（ホ）一の條件がある、即ちダビデの子孫が神に背けば罰を受くるが、契約は廢せられない からエルサレムの位に坐するダビデの子孫は無つたが、エホバの誓ひ給ふた契約は破られない（詩八九〇、一一、六、廿七）、（ヘ）ダビデの孫ヤラベアムの時にも、又國民がバビロンへ擄はれた時にも（王下廿五、一七）、猶甚く其罰せられた、其時に臨みて更に給ふた契約は永久迄も確なる變らざるものである。

八、新しき契約（來八）は基督の贖に由つて信ずる者に永遠の幸福が與へられ（加三〇十、三、廿九）、此契約は永久迄も確なる變らざるものである。

右の契約は基督と大關係がある、(一)エデンの契約に於て基督を「第二の人」、「終のアダム」として（哥前十五〇四、十五＝四十七）第一の人アダムの喪た位置と資格とを有つて事物の首となり給ふた（西二〇十、七＝八）。(二)アダムの契約に於ては婦の裔として（創三〇十五、約十二〇卅一、一約三〇八、加四〇四、默二十〇十）勞して（可六〇三）順ふ心を現はした。(三)ノアの契約に於てセムに與へられた約束はセムの最大なる裔即ち基督に於て成就せられた（創九〇一、西二〇九）。(四)アブラハムの契約に於て基督は約束を受けし裔であり、死に至る迄順ひ、尚ほアブラハムの裔であつた（創廿二〇十八、加三〇十六、腓二〇八）。(五)モーセの契約に於ては罪なしに全く其契約の律法を守り、我等に代り、其律法の詛を御自身に受け給ふた（加三〇十＝十三）。(六)パレステナの契約に於て基督は猶太人としてユダヤに居られて其契約を爲遂げ給はんとする（申廿八＝卅〇一＝九）。(七)ダビデの契約に於て基督は「裔」、「嗣子」、「王」である（太一〇一、路一〇卅一＝卅三）。(八)基督の犧牲は新約の基礎である（太廿六〇廿八、哥前十一〇廿五）。

けいやくのはこ（契約の櫃）、「神殿」と「贖罪所」とを見よ。

けうぎ（教義）は或る事に就て、たとへば信仰またはパプテスマ等に就て聖書中に書いてある凡べての教を集め合はせて定義とする所を教義といふ。

けうくわい（教會）、神の選びたまふた猶太人と猶太人に與へたまふた律法、儀式、犧牲、禮拜式などゝは即ち舊約教會と稱せられた。其の教會の首は神であり、其の現示は舊約全書である。其の有職者は祭司とレビ人（其の條を見よ）、其の禮拜は聖書を聽き、祈禱、讚美を爲し、獻金を爲し、最も重要なることは犧牲（辭解「いけにへ」と「そなへもの」）であつた。舊約教會は徹頭徹尾基督の儀表であつて、新約教會は凡て舊約教會を成就するものである。其の首領は基督で、其の現示は舊約及び新約全書である。其有職者のことは以弗所書四〇十一、十二等に見ゆ。其の祭典は同是聖書をきゝ、祈禱、讚美、獻金等である。然し今は已に基督が一時に萬民を救ふた足り、力ある贖罪を設けたまふたので犧牲を獻ぐる必要はなくなつた（弗五〇廿三＝卅二、默十九〇四＝九、默廿二〇十七）。これが教會の濫觴であるが、教會と譯した原語は「世から選ばる」、「主のもの」との二つの意がある、主の者として一つの靈に在りてバプテスマをうけ（哥前十二〇十三）、首なる基督の身體であり（弗一〇廿一、廿三）、また聖靈の殿である（哥前六〇十九）、又（弗五〇卅、卅一、哥後十一〇二＝四）を見よ、辭解「歷史」。

けうくわいのひながた（教會の儀表）に就ては「けうくわい」を見よ、また（弗二〇十五、五〇卅二、默十九〇七）。

けうくわいれきし（教會歷史）、最初の人間の時代から教會歷史が始まつたといふ人もあり、又神がモーセに由つて舊約の儀式等を人間に與へ給ふた時から始まつたといふ人もあるが、今簡略に定義を述べて見やう教會歷史は基督の肉體と成り給ふた以來の事で、三の時代がある、(一)古代（基督降世（紀元）前四年より降世後五百九十年まで）。(二)中古（紀元後五百九十年より千五百十七年まで）。(三)近代（紀元後一千五百十七年より今日まで）。教會歷史の舊い時代（紀元前四年から紀元後五百九十年）は即ち法王グレゴリ一世の時迄である。此時代は四期に別れて居り、一、使徒等の時代即ち第一世紀の末期迄。耶穌の臨り給ふ迄の古い世中は失望し、失敗して居つた、譬へば希臘には種々の哲學者が居つたが、宇宙と人生との意義は不解らず、道德も不滿であり、羅馬の宗教は多神教であつたが、同時に希臘には完全な國語、高尚なる理想、美術等が發達して居つた。亦羅馬帝國には世界中に通ずる大道が竣成き、秩序もあり、法律もあつた。猶太人の中には既に偶像を棄てた者もあり、其國人の或部分は六百年前より東はアッスリア、北は小亞細亞、西は歐羅巴、南は亞弗利加へ散つて唯一なる神といふ思想を各國民に予へた。紀元前二百八十三年から聖書は希臘語に飜譯され、基督教を受納るゝ準備として世界中は何處からか救拯が起ればよいがと唯俟望て居つた。處へ基督が肉體を取り、福音を宣傳べ、人の罪を贖ひ、墓より初穗として甦り、天に昇り、聖靈を遣し、大なる賜として教會を世に予へ給ふた。世は新生面を展き耶穌の弟子等は世界を巡廻つて福音を傳へ始めた。ペテロは專ら猶太人に、パウロは專ら異邦人に傳道し、最初の時代の救はれた人々は（重に地中海の近邊）處々に教會を設立けた。併し間もなく反對者が猶太教の中より、又異邦人の社會と政府とから起つてきた。羅馬帝子ロは甚く最初の信者を迫害め、羅馬府火災の罪を無理に信者に被せ（紀元後六十四年）、或信者をば獸皮を被せて犬に嚙殺させ、或信者をば十字架に釘け、また或者をば瀝青を塗つた衣服を着せ、生きながら身體を炬火として燒いた（紀元後八十一年から九十六年）。羅馬帝となつたドミテアンも亦信者を迫害し、耶穌の預言の通りエルサレムは陷られ（紀元後七十年に）、神殿は滅亡されてしまつた、辭解エルサレムの滅亡。教義に關しては第一世紀に猶太人の信者の中に舊約の儀式を廢めないため教會を多少困難せた人もあり、ノステックの異端もあり、辭解ノステック見よ。ニコライ宗もあつた（默二〇六）。第一世紀中に新約全書全體

が書かれた。最初の教會の禮拜式は純粹、簡單で、七日の最初の日（現今の日曜日）に集りて祈禱をし、讃美として詩篇を歌ひ、舊約或は使徒等の記いた書を誦讀だり、奨勵者の勸話を聞いたりするのであつた。パプテスマを施す時に聖靈を受けさせるやうに手を按く事もあり、晩餐式を行ふ事もあつた（辭解愛餐。二、使徒等の死後の時代（紀元後百年から百七十年）に於て漸次と教會は處處にでき、英國までも傳播まつたといふ。基督信者の在る所は大抵羅馬帝國の領分であつて、再々政府は基督教を誤解し、根本的に言へば羅馬人は多神教で不道德であつたから信者は社會の如く信ずる事も行ふ事も不可能い點が許多あり、尙ほ羅馬政府は基督教を謀叛した猶太の宗派と思ふた故迫害た。最初から十回の大迫害があつて、此時代には名高い教父があつた、クレメント、パルナバ、イグナテオ、ヘルマス、ポリカルプ、ジヤステン等で、彼等は帝王の前亦猶太人に對して基督教を辯護した。三、ニカヤの會議迄の時代（百七十年から三百廿五年）、此時代にも教會は播まつてアルメニア、アラビヤ、ペルシヤ、カルタゴ、メミデア、ヒスパニア、パリー、ルアン、コロン、メッツ等迄に及んだ。最初の宣教師はよくライン河とダニューブ河さにある都市に傳道した。三百十四年にフランスのアルに大會議が開かれ、亦他處にも此の如き會議があつた。其代りに敵が許多でき、其中にセルサス（百七十年）とルキアン、ポルペリ（二百廿三年）さが居つた。政府からも時々迫害があつた、羅馬帝デキヤスの時（二百四十九年から二百五十一年）同是誤解があつて基督教を廢せぬと帝國が繼續かないと考へ、信者に命じて偶像に香を燒かしめ、拒絕む者は拷問した、パレリアン帝も迫害し、又ドミテアン（二百八十四年から三百〇五年）は元は信者を迫害なかつたが、終に會堂を毀ち、監督人と長老とを牢に入れた、また亦三百〇四年に道を棄てないと殺すと威したが、信者の過半は服はないので酷く窘められて殺された。次のセベルス帝も同是迫害をしたが、彼は無益と認めて止めた。三百十一年から漸く迫害が停止んだ、此時代に小亞細亞、北阿弗利加、ゴール、ヒスパニア、羅馬に大會が設きた。イレニアス、テルトリアン、クプリアス、オリゲンなどいふ名高い教父が居つた。教會には種々の有職者ができて監督人を手傳ふ侍者、誦讀者、悪鬼を迫出す信者、戸を守る信者、下執事、女執事等があつた。アンテオケ、エルサレム、羅馬の監督人が偉くなり、權威をもつたが、其中にも羅馬の監督人は第一であつた。四、ニカヤ會議から法王グレゴリの時迄の時代（三百廿五年から五百九十年）、三百廿五年にコンスタンテは羅馬帝（三百卅七

年まで）となり、彼は或時空に輝つて居る十字架を見たが、其十字架に「此記章によつて勝て」と記いてあつたといふので、忽ち基督教を信じて國教としたといふ。コンスタンテンの後は後に道を棄てたといふユリアンが帝となつた（三百六十一年から三百六十三年）、併し其後基督教に敵する帝はなかつたが、餘程後で帝さなつたユステニアンは强ひて人民にパプテスマを受けさせた程變つてきた。教會はアルメニア、アビシニア、フランス、ブリテン、アイルランド、スコットランド、亦ゴス人の中に繼盛になり、諸國の帝王はニカヤで（三二五年）、コンスタンテノプルで（三八一年）、エペソで（四三一年）、カルケドンで（四五一年）、またコンスタンテノプルで（五五三年）會議を開いた。大監督人の監督地は即ちアレキサンドリヤ、アンテオケ、エルサレム、コンスタンテノプル、羅馬の境界と決定り、北羅馬は素より使徒ペテロの時から監督人が繼續いて居つたといふて大監督人の中第一位に立つべき者と主張した。殊にこれは法王レオ九世（四四〇年＝四六一年）の要求であつた。此時代には神學問題が樣々出てアリヤスは基督の本質に就て異端を說き、ニカヤ會議（三二五年）でアタナシヤスは彼の論に答辯し、其でニカヤ信條ができた。此會議には二百五十人の監督人と他の教師等も許多集まつた。コンスタンテノプルの會議（三八一年）で聖靈の神たる事を明白に定めた。此時代にアンブロース、ジエローム、クリソストムの徒が輩出した。子ストリアスの基督の人格に就ての異端に對しカルケドンの會議（四五一年）で基督は唯一のペルソナで、其裏にある神性も人性も完全な者で混成らない、分れない、分離れない者であると明瞭に宣言した。此時代の教會は漸次とクリスマス、復活節、四旬齋、受難週を紀念すやうになつた。又誤解つて聖晩餐を犧牲のやうにしたり、晴昔の聖人と殉教者との懇求を恃んだり、處女マリアを拜み、像を用ゐたりするやうになつた。

教會歷史第二の時代即ち中古（紀元後五九〇年。此は法王グレゴリ一世の時から改革迄である。北歐洲の野蠻人種は羅馬を征服し、更に進んで希臘、イタリヤ、ヒスパニヤ、オーストリア、スウ井ス、北阿弗利加を征伐した。五百七十年にマホメットが生た、彼は頗る神經家であり、癲癇を病ひ、素より偶像を排斥けて、基督教に反對しなかつた、彼は亦舊約を信じたが、六百十年に默示を受けたといひ、劒を以て其教を播め、權威が增すに從つて基督教を迫害した。素の制慾主義を廢めて十一人の妻を娶り、其弟子にも多

妻を許した。スリアを征伐しやうさ念ふた時熱病に罹つて死んだが、此宗教はアラビヤ、パレステナ、アフリカ、印度亦支那の或地方に傳はつて居る。グレゴリ一世は教會を改良し、グレゴリ二世は歐洲の西部に基督教的國家を設けた。シャレマンは其領分を廣くし、遂に殆ど以前の羅馬帝國ほど擴張し、八百年に聖羅馬帝國の帝王になつた。法王は益々權威を有つやうになり、殊に聖羅馬帝國が創立て以來法王は教會を改良し、グレゴリ二世も各政府の上に權威があるさ主張した。法王政治の絶頂は有權者イノケント三世の時一二九四年で、其時から改革一五一七年まで漸次衰微へてきた。法王の權威は中古時代に益々旺盛になり、漸次さ歐洲の諸國民が福音を聽くやうになつた。オーガステン五九六年は英國に傳道し、コロンバナスはアイルランドから宣教師を伴れて獨逸に傳道した。其後英國のボニパセも獨逸に活動いたが、社會の道德は腐敗くなつた。九〇〇年＝一〇〇〇年即ち此一世紀は「暗黑世紀」さ謂はれた。然し其間に教會は誤謬もあつたが、社會の腐敗を防止る鹽さも成つた。此時迄一致した教會は東西に分離れた一〇五四年。其理由は歐洲の政治上からいへば西部は東部より強く、教會の方からいへば羅馬は世界一さいふ權威を要求した、又教義、禮拜、習慣等に於ても差があつて遂に西は天主教會（羅馬教會）、東は正教會（希臘教會）さなつた。此時代に十字軍の大運動があつて、七回大戰を爲した、目的は回教の支配からパレステナ（聖國）を奪還す爲であつた。

修道院も此時代に起つた、病人を看護する修道師、信者なる奴隷を世話する修道師もあつたが、最盛大な修道院はメンデカンツさいふた、彼等は三條件を守る約束をした、即ち法王に服從ふと、節操を守ると、貧乏い生涯を送るとであつた。メンデカンツの中に二種あつた、（一）ドミニカンス一二〇〇年は說教する方。（二）フランセスカンスはアッセのフランセス一一八二年＝一二二六年の設立けたので、千二百五十年迄に八千の修道院ができた。中古時代中教會は學問を保存し、希臘、羅馬等の文學耳ならず、教會の教父の書物、神學、教會の法律を保護つて居つた。復教會に由つて處々に大學校も創立られた、其時代の有名い學者はアンセルム、アベラルド、ベルナルド、ペテロロンバド、アクワイナス、ダンススコタス、ラジアベコン、レモンドラール、トマスアケンピス一三八〇年＝一四七一年、タシテ一二六五年＝一三二一年等であつた。千四百五十三年にコンスタンテノプルは土耳古人に占領れ、其で希臘の學問が歐洲中に傳播つたさ同時に磁石、火藥、印刷術が發明せられ、斯く社會も教會も活動し始めた。當時の教會には惡弊があつて遂に改革を來らしたのである、其一は罪を犯した人が羅馬教會に金子を出せば赦されるさいふので、甚だしきに至つては犯罪前に其赦罪を買つておいて後に平然罪を犯すに至つた。又羅馬教會が所謂異端者を拷問する事もあつた。改革前にも改革者があつて英國にはウ井クリフがあつて一三二〇年＝一三八四年聖書を譯し、ボヘミヤにはジャンハス一三六九年＝一四一五年がウ井クリフの書によつて其說を播め、罪の赦免を買ふ事を責めて燒殺された。伊太利のフロレンスにはサバナロラ一四五二年＝一四九八年が其都市の惡弊を改良し、宗教を基礎として其處を統治め、唯信仰のみで救拯を得るさいふ福音を宣べて、遂に絞殺され、其屍體は燒かれた。彌々教會を潔める必要が明白にみえ、教會歷史の近代の初期に改革が起つた。改革の近因は獨逸にルーテルが起り、千五百十一年に羅馬で功德を積む爲に聖段（廿五段あつた）を昇りながら急に此く身を苦しめても効力がない、義人は信仰に由りて生くべしさ感じて急變した。其後聖書の教義を說明し、九十五箇條の論文をウ井テンベルグ教會の戸に帖附け聖書の外に權威あるものなしさ言ふた。彼は新約全書を獨逸語に飜譯した。千五百廿九年スパイヤスの會議でルーテルの布教を禁じたが、サクソニーの選擧侯さ他者さは贊成、帮助したが、是がプロテスタント派の基であつた。瑞西にはズウ井ングリ、英國にもジュ子ーブにもファレルさカルビンさの改革者が起つて、改革は彌々旺盛になつた。北歐洲にも改革がおこり、漸々さ新教は有力くなつた。本來は「新教會」さ稱ふ可き者である、何故なれば「新教」の教義は新しくなく、素より傳來つたので、傳說を聖書の如く重んぜず、唯聖書をのみ信賴むからである。此宗教を設くる時西班牙にも和蘭にも異端糺問所ができ、卅年間の戰爭もあつた。此時代にヂエスイトさいふ傳道團ができて歐洲アルメニア、アビシニア、印度、支那、日本（ザビエー師）に傳道し、日本には三百年前まで盛に傳道して居つた。熱心ではあつたが不幸に方便を用ゐ、到る所の傳道地の以前の宗教の曖昧な事を基督教に合せ、亦法王に諸て服從はせるさいふこさもあつた。素より信仰箇條を定むる必要があつてルーテルの贊成したアウグスベルグ信條一五三〇年、瑞西のズウ井ングリの贊成したヘルビテク信條一五三六年＝一五六六年、カルビンの贊成したガリカン信條一五五九年、ベルヂク信條一五六一年、ハイデルベルグ信條一五六三年、英國教會の「卅九」信條一五七一年、ウエストミンスタ信條一六五三年等ができた。改革の時から新教が起り、其主なる宗派の起つた顚末は左の如くである、（一）獨逸にはルーテルの時代からルーテル教會があつたが、冷淡になつた時に、（二）モラビア教會（兄弟團體）が起り、ゼンセントルフ伯爵が開祖で、

靈的、單純、外國の傳道に熱心な敎會であつた。(三)羅馬教會から分離れた英國敎會一五三二年＝一五三四年も起り。(四)和蘭リフォルムド(改良)敎會の信條と政治とはプレスビテリアン(年表一五一七年を見よ)と違はない、又瑞西にも佛蘭西にもリフォルムド敎會ができた。(五)獨立敎會には二種あつて信者會衆に敎會政治を委任る方は組合敎會(日本で)といふ。(六)會衆の選擇んだ長老に政治を委托せるを長老(プレスビテリアン)敎會といふ。(七)フレンド(日本で友會といふ)敎會はフオックス一六二四年＝一六九〇年の創めた一派で、靈的に重を置き、何事も單純に行ふべしと主張した、其運動の結果としてリバイバルが起り。又(八)メソヂスト敎會が起つた、其開祖はウエスレー一七〇三年＝一七九一年で、規則正しく(メソヂスト)、靈的、福音的のものである。(九)バプテスト敎會、辭解年表。

けうし(敎師)、徒十三〇一、羅十二〇七、哥前十二〇廿八、廿九、西一〇廿八、提後一〇十一を見よ。

けうはふし(敎法師) モーセの法を敎へる人、辭解學者。彼等はパリサイ人と同樣にバプテスマのヨハ子の敎を受け入れなかつた 路七〇卅、また耶穌に反對し 太廿二〇卅五 路十〇廿五、耶穌は彼等が民に重荷を負はせ、及び誤敎へ、怠る事をきびしく告め給ふた 路十一〇四十五＝五十二。

けつこん(結婚) は神が一人の男子と一人の女子との聖き緣として決定め給ふた者である 創一〇廿七、廿八 二〇十八＝廿四 太十九〇五 哥前六〇十六 詩百廿八〇三 箴五〇十八 弗五〇卅一。大抵諸國には男と女の數が同一で、神の御定に循つて結婚するは夫婦の爲に利益である。人間は此聖き緣を解く權利がない 太十九〇三＝九 哥前七〇十五。無理に離緣した人は再婚する事を許されない 太五〇卅二 十九〇九 哥前七〇十、十一、一方が死ぬ時は生存つた方が再婚してもよい 羅七〇二、三、一方が姦淫を行ふ時には緣を解てもよい 創三〇十＝廿。モーセに由つて予へられた律法を見よ 出廿〇十四、十七 廿一〇二 利十八〇廿〇。あまり近い親類との結婚は許されなかつた 創廿〇十二 廿九〇廿六 利十八〇六＝十八、夫が子女なく死んだ時は夫の兄弟が寡婦を娶つた 申廿五〇五。青年が結婚する時には其父が新婦を選擇んだ 創廿一〇廿一 卅八〇六が、子も自分の望を言ふた 創卅四〇四＝八 士十四〇一＝十。新婦と其兩親等に贈物をした事もあつた 創廿四〇廿二、五十三 卅四〇十二。結婚式又婚姻は大切なもので多分誓約をしたのである 箴二〇十七 瑪二〇十四 結十六〇八。結婚の日に新婦は白衣をき 詩四十五〇十三、十四 默十九〇八、珠玉をつけ 賽六十一〇十、結婚の帶を結め 賽三〇廿四 四十九〇十八 耶二〇卅二、面帕を被り 創廿四〇六十五、花を以て頭を飾つて俟つて居た。新郎も同是衣服と冠冕とを飾り 歌三〇十一 賽六十一〇十、其友人等が伴侶となり、新婦の家へ往き 士十四〇十一 太九〇十五、樂器を奏し、夜ならば炬火を携へ 太廿五〇七、また伴ふ人も居つた、行列が新婦の家に着くと新郎は面帕を被つて居る新婦を受取り、其時新婦の親等と友人等が彼を祝し 創廿四〇五十九 得四〇十一、新郎に遣す。其から新夫婦は新郎の家に往く、途中には音樂、歌、踊等がある 詩四十五〇十五 歌三〇六＝十一。亦新夫婦の伴侶なる童女が附添となる 太廿五〇六、新郎が或は其親の家で饗應がある 太廿二〇一＝十 約二〇一＝九。若し新郎の家が遠方ならば新婦の親の家でひらく 太廿五〇一 創廿九〇廿二、廿三 士十四〇十、十五。婚筵は一週間か二週間程續く事もあつた 創廿九〇廿七 士十四〇十二。エホバと其民との緣故を結婚の譬喩を以て敎へられた 賽六十二〇四、五 何二〇十九。信者の道を離れる事を妻の姦淫に譬喩へてある 賽一〇廿一 耶三〇一＝廿 耶二〇 何四〇十二。新約にも同樣く結婚の譬喩で基督と敎會との緣故を譬ふてある 太九〇十五 約三〇廿九 哥後十一〇二 默十九〇七 弗五〇廿三＝卅二。

ケモシ はモアブ人の拜んだ神 民廿一〇廿九 耶四十八〇四十六、モレクの樣に幼兒を犧牲として拜む偶像であつた 王下三〇廿七 士十一〇廿四 王上十一〇七 王下廿三〇十三。

けもの に就ては默示錄十三〇註また辭解再臨。

ケルビム とは宇宙を代表して神の御位に附いて職を盡す天使の如き者である。原語の意は「保持つ」、「守る」者であらう。創三〇廿四によれば生命の樹へ入る道を守る職務があり、遂に其生命の樹へ行く道が開かるゝに至る。出卅七〇六＝九によれば恩寵の座に附て居つて永遠も贖にのみよりて衆人が救はるゝを示す 出卅六〇卅五。聖所の前の幕に縫箔してあるとふのは救主が肉體 來十〇廿 となり贖をなさんと爲給ふとの意であり。四個の造られた者即ち野の獅子、牧場の牛、空間の鳥、世界の人間を代表する。エホバの寶位の下に居るは世界がエホバの足臺であるからである。ケルビムは讚美する時世界と共に唱ふ 默四〇十一、又 默五〇十一＝十四 默四〇六＝九、辭解天使、セラピム。

こくくわい(國會)、有名い希伯來人の學者なる裁判官スルツベルガによれば昔時モーセの時代からイスラエルには「アムハアレツ」(國の民とか地の民とか譯してある)といふ國會があつた。アムハアレツには上院と下院とがあつて、上院は十二人の君主等、下院は七十人の長老等から成立つた。アムハアレツといふ言は聖書に四十九箇所見ゆる、其中四十二箇所は國會といふ意があつた 創廿三〇七、十二、十三 利廿〇二＝四 王下十一〇十四＝廿 十五〇五 十六〇十五 廿一〇廿四 廿三〇卅＝卅五 廿五〇三、十九 耶一〇十八 卅四〇十九 卅七〇二 四十四〇廿一 五十二〇六、廿五 結七〇廿七 十二〇十九 廿二〇廿九 卅九〇十三 四十五〇廿二 四十六〇三＝九 哈十二〇 代下廿三〇十三、廿六〇廿一、廿一 廿五 卅三〇。ヘテ人の中にもアムハアレツがあつたと見える 創廿三〇七、十二。希伯來人のアムハアレツには政治上の權威のみならず裁判權もあつた、政治上權威の一の實例は 王下十一〇 と 代下廿三〇 とに記いてある 王下十一〇廿。國會議事堂ベテハアムはエルサレムの神

殿の山に建設て居つたが、後子ブザラダンに燒かれた（耶卅九。○八）。其時にアムハアレツの書記官と六十人の議員とが擄はれた（王下廿五。○十九）。サウルを選んだのもアムハアレツであつた（母前九○廿。二＝廿四）。サウルはアムハアレツの會館に召ばれたが、其處に議員三十名が集つて居つた。サムエルが話をした庖人は式部官であつたといふ。其後サムエルは再ミヅパでアムハアレツを召集め、サウルの王たる事を確めて家に歸らしめた（母前十○。十七、廿五）。アムハアレツの裁判權に就て（王上廿一○。八＝十六）と（耶廿六○）とを見よ、又其基として（民十一○。十六、十七）と（廿七○二、七＝十一）とをも見よ。サンヒドリムの源なるアムハアレツは「大會堂」よりも以前、又イスラエルがバビロンへ擄はるゝ前後にあつた。イスラエルは暫時くバビロンに居つたので、バビロンの文明を模倣て國會を設けたといふ人もあるが、然樣ならば國會の模倣をしたイスラエルが存つて居り、國會の源なるバビロンが無くなつたといふのは何故であらうか。アムハアレツの事はよく預言書にある。預言者に二種あり、預言書を書かない許多の預言者は終に墮落し、民の權利を濫用する者となつた。其に反して預言書を書く預言者は人民の權利を保護り、民の爲に動いた。此預言書を見れば預言者、祭司、王の外に治め審判く權のあるアムハアレツ（國會）があつた樣である。國會の源はダビデの時全國が一致しなかつた以前にあつたと見える。又バビロンに擄はれて居る間も其後もあつたといふのは事實であるらしい、聖書を信頼する國民はアムハアレツの如き國會を採用ゐて堅固な國となるといふ。

こころみ（試惑）、基督がサタンに試られ、夫に打勝ち給ふた理由は最初のアダムは神に服はず、隨意に任せた故失敗し、第二のアダムは己を卑く虛うし、僕の貌をとり、全く父に隨ひ（腓二○。五＝八）（約五○。十九）（六○五。十七）（八○廿八。五十四）（賽四十。一○八）、失敗し、詛はれた人種を贖はんが爲に臨り給ふたからである（創三○十。七＝十九）（羅八○十。九＝廿三）。サタンが第一のアダムを跌倒した如く、第二のアダムにも己が心の從に事を爲せ、跌倒さうと意ふた。此世の主サタンは世の主たるべき基督に世の主義を（約十八○。三十六）（默十三。○八）取らせやうとした。基督は肉體又精神の慾に負けず、意志に於ても負けず、苦しき時にも神の聖旨を行ふ道をとり、聖語を用ゐて容易にサタンを退け給ふた。

こころむるもの（試むる者）、惡魔の一の稱呼である。惡魔は最初蛇の貌を以て最初の婦を試た爲に神の呪詛を受けた。蛇は最初憎むべき、嫌はしい訇ふ者では無つたのであらう、元始は多分最美しく「光明の使」の如き貌であつたであらう（哥後十一。○十四）。エバを欺したから詛はれて「腹行ひて一生の間塵を食ふべし」といふ宣告を受けた、辭解惡魔。惡魔は惡心を以て人間を滅ぼさんと念ふて試るのである。神は人間を試錬すため、亦人間を堅固くする爲に惡魔の試惑を許し給ふことがある、辭解神の聖旨。併し神は無論容易に試惑より我等を救出し給ふ（創三○。伯全部。太四○。太六○九。哥前十。○十三）。

ことば（道）、希臘の原語は「ロゴス」で「言」といふ意である。聖書には基督を指してロゴスといふてあるが、其は恰是人が其の心にある思想を現すために言を用ゐる如く、神が其の御性質を現す爲に基督を遣はしたまふたからである。肉體となつて（約一○、十四）、人の如き肉身と性質とを以て現れた基督ほど神の御性質を悟り易く、また受けやすいやうに示された方法は無いのである。ヨハ子の時代に於る「ロゴス」は「神と人との間にある仲介」といふ哲學上の語であつた。またある哲學者（ノステック）は知られない神と人との間に仲介が多く、基督は其の中の一個であるといふた。然し聖靈がヨハ子の筆をもて示したまふた所は神と人との間の「道」は唯一の外ないといふのである（約一○、一＝五、十四、十六）（十四○。十六、十九）（西一○。十五）（雅一。○二）（塵後一。○十）、辭解ノステック、また約翰傳緒言を見よ。

ゴグは或君主の名でマゴグは其國名であるとみえる、（默廿○。八、九）と（結卅八○。卅九○）とにはゴグの事が記いてある。エホバの日（賽二○十。一＝廿二）（默十九○十。一＝廿一）に於て歐羅巴の北部の國々がロシヤ（結卅八○。二＝六）を見ればさうらしい）を首とし、イスラエルを烈く攻撃するが、失敗して了ふ（結卅八、卅九○）、又（亞十二○。一＝四）（十四○。一＝九）（太廿四○。十四＝卅）（默十四○。十四＝廿）（十九○十。七＝廿一）を見よ。マゴグとは同是國人の名で（創十。○二）ヤペテの子孫でスクテア人と同じであらう。神の國が諸の反對する者に勝つといふのはゴグ、マゴグの戰爭をいふのである。

こよみ（暦）

今の暦月	猶太暦月	祝節	氣候、收納等
一月	十月		高い山、時としてはエルサレムにも雪降る。平地には麥芽を出し、牧場は綠に、又花咲く。
二月	十一月		巴旦杏と無花果との花咲く。
三月	十二月	十四日、十五日プリムの祝節（結九○。廿八）	平地に蜜柑、黎檬熟し、エリコに大麥熟す。

四月	一月	十四日日暮から逾越節（出十二〇、十三〇）。 十五日＝廿一日除酵節（利廿三、〇六）。 十六日初穗を捧ぐ（利廿三〇、十＝十四）。	後（春）の雨。ヨルダンの増水。海岸の平地に大麥熟す。小麥熟しかゝる。
五月	二月	十四日特別逾越節（前月の節に會するを得ざりし者の爲）（民九〇、十、十一）。	山地大麥の收納。平地で小麥の收納。
六月	三月	六日ペンテコステ或は七週節、或は麥秋の初穗の祝節（出廿三、〇十六、出卅四、〇廿二、利廿三〇、十七、廿、民廿八、〇廿六、申十六、〇九、十）。	海邊に林檎熟す。巴旦杏熟す。早無花果。
七月	四月		四月下旬より十月上旬まで雨なし。山地に於る小麥の收納。葡萄熟しかゝる。
八月	五月		平地に橄欖の實熟す。夏無花果熟す。
九月	六月		葡萄の收納。
十月	七月	一日、喇叭の節（民廿九、〇一）。 十日贖罪の日（利十六〇廿、九＝卅四）。 十五日＝廿一日、結茅節（出廿三、〇十六、利廿三〇、卅四、申十六、〇十三）。「構廬」ともかく。 廿二日大日（民廿九、〇卅六、約七〇、卅七）。	初冬。前の雨（早い雨）降始む。耕耘、播種。
十一月	八月		北ガリラヤに橄欖の實熟す。冬の無花果尚ほ樹に存る。
十二月	九月	廿五日、修殿節（約十〇、廿二）。	霰。高い山、又時としてはエルサレム附近にも雪降る。

こうりん（御降臨）はキリストが天から來つて肉體をとりて世に居られた事を云ふ。

さいし（祭司）、人、殊に家長たる者、例へばアベル、ノア、アブラハム等の如きは自己と親族との罪の贖はれん爲に牛羊など居つて神に犧牲を供へた。然し後には神の命によつてアブラハムの曾孫にあたるレビの子孫が祭司の職に就くことゝなつた。祭司について精細しく記してあるのは出埃及記と利未記とである。殊に利未記緒言、又辭＝祭司の聖潔。

さいしのをさ（祭司の長）、祭司の中に祭司の長たるものがあつた。長は普通の祭司と異り、膏を灌がれ、特別の制服を着、胸牌（表面に十二個の區劃を爲し、十二個の石に十二支派の名を刻つたものを附着せしめた）を胸に懸けるのであつた（出廿八〇）。祭司の長は一年に唯一次犧牲の血を携へて神殿の至聖所に入り、民の爲に贖罪の祭式を爲した。元來祭司の長は一人に限り、終身職であつたが、後ヘロデ王の時政府の干渉によつて同時に二人あつたこともある。基督は我儕の祭司の長といはれてをる（來五〇九、＝十四）。

さいりん（御再臨）、舊約にある基督の御再臨に就て二の事が明瞭である、即ちメシヤが棄てられ、苦難を受け給ふといふ預言（賽五十、三〇）と又世に大なる榮光と權威とを受給ふ事（賽十一〇、耶廿三〇、結卅七〇）。此二の意味は一の預言に含まれて居る事もある（詩二〇）。預言者ですら其宣ぶる預言に意味の二つあるのを知らぬ事もあつた（彼前一〇、十、十一）。此二重の預言は或點まで成就せられた。メシヤは處女より生れて此世に臨り給ふた故、其神國は近いたといひ（太四〇、十七）、其民に棄てられ、十字架に釘られ、甦り、天に昇り、再天より此世に臨り給ふ事を預言し給ふた（太十二〇卅、十六〇一、路十二〇卅、十七〇廿、十八〇卅、十九〇十、太廿四〇、八＝四十、＝四、廿七、五＝四十六、＝卅六、一＝卅四、二＝廿七、廿五〇）。又耶穌は天に還り給ふてから、此世に再臨り給ふ迄の間に起らんとする事を預言し給ふた（太十三〇、十六〇、廿四〇四、一＝五十、十八、＝廿六）。耶穌の御再臨の事は使徒行傳と書翰と默示錄とに多く記いてある。新約中に御再臨に就て記いてある所は左の如し、（一）御再臨とは基督が御自身肉體をもつて突然世に臨り給ふ（太廿三、廿四、廿五〇、〇卅九、〇卅、卅一、可十四〇、客十七、約十四、徒一、腓三〇、撒前四〇十、六十二、〇廿四、〇三、〇二、廿、廿一、四＝十七）。（二）御再臨と教會との關係は耶穌が天より空中まで降り、死にし信者と活きて存れる聖徒とを迎へ給ふ、此が教會の待望む所である（太廿四〇卅六、四十、廿五〇、哥前十五〇五、腓三、撒前一、四〇十四、提前六、多二〇、獄廿二、四、四十八＝五十一、十三、十一、五十二、〇廿、〇十、＝十七、〇十四、十三、〇廿）。御再臨とイスラエルとの關係はダビデの契約に從ひ、イスラエルが國民として全世界から集められ、回心し、權力と平和とをもつて救はれんとする（徒十五〇十、亞十四〇、四＝十七、一＝九）。辭解王國（母後七〇、亞十三、路一〇卅、哥前十五、八＝十七、〇八、一＝卅三、〇廿八）。（三）御再臨と國々との關係は耶穌が此世に臨り給ふ時此世の全帝

國が滅亡ぼさるゝを 但二〇卅四、卅五 默十九〇十一、其審判 太廿五〇卅一‖四十六、後に世界中の人々が悔改めて信者となり、王國の恩惠に與る 賽二〇二‖四 十一〇十 六十〇三 亞八〇三、廿、廿三 十四〇十六‖廿一。今天に昇つて在られる耶穌が再此世に臨り給ふ事である。舊約全書には御再臨の事がよく預言してある 亞十二〇一 馬三。預言者は耶穌の御降臨と御再臨とを同一の事實として見て居つた、預言書緒言又 彼前一〇十‖十二 を見よ。耶穌も明瞭に其御再臨を預言し給ふた 太廿四〇、廿五〇 可十三〇 路廿一〇 約十四〇一‖三。耶穌が此世に臨り給ふた目的は神の國を設立くる爲で、肉體となり、十字架の贖罪に由つて惡魔及び其工を毀ち、世を救ひ給ふたが、此等の動作はいはゞ準備であつて、終に榮光と權威とをもつて再世に臨つて御國を全く臨らせ給ふのが大目的であるといふてもよい。耶穌が再此世に臨り給ふ事を記載する言が三ある、(一)パルセアとは「側に居る」、「體が居る」といふ意である、譬へば 哥前十六〇十七 哥後七〇六、七 腓一〇廿六。基督は實際肉體を有ち給ふまゝで再此世に臨り給ふといふ意である 哥前十五〇廿三 撒前四〇十四、十七 撒後二〇八。(二)アポカルプセスは「幕を除いて隱れた者を見せる」、「默示」といふ意である、即ち主が御再臨の時明白に人間の目前に見え給ふ 撒後一〇七 彼前一〇七、十三 四〇十三、此と 羅八〇十九 撒後二〇三、六、八 との言を比べよ。(三)エピファナイア「顯現る」、「輝く事」 提後一〇十 撒後二〇八 提前六〇十四 提後四〇一、八 多二〇十三、御再臨は一、耶穌が實際肉體 哥前一〇七 をもつて此世に臨り給ふのである 太廿三〇卅九 廿四〇卅 廿五〇卅一 可十四〇六十二 路十七〇廿四 約十四〇三 徒一〇十一 腓三〇廿、廿一 撒前四〇十四‖十七。二、御再臨は教會にもイスラエルにも萬國にも大關係がある、(イ)教會にとつては死にし信者を甦らせ、活る信者を化へ給はんとする故である 太廿四〇卅六、四十、四十四、四十八‖五十一 廿五〇十三 哥前十五〇五十一、五十二 腓三〇廿 撒前一〇十 四〇十四‖十七 提前六〇十四 多二〇十三 默廿二〇廿、(ロ)イスラエルにとつては 亞十四〇一‖九、ダビデの契約の未だ成就られない預言に從ひ、國民として其國へ集められ、信者になり、平和の時代の恩惠に與る 徒十五〇十四‖十七 辭解王國 毋後七〇八‖十七 亞十三〇八 路一〇卅一‖卅三 哥前十五〇廿四、(ハ)萬國にとつては御再臨によつて「獸」の全世界帝國が廢せられ 但二〇卅四、卅五 默十九〇十一、又 太廿五〇卅一‖四十六 の審判があり、世界中の異邦人が救はれて神の國の恩惠に與る故である 賽二〇二‖四 十一〇十 六十〇三 亞八〇三、廿、廿三 十四〇十六‖廿一。御再臨の順序に付て左の如く説明する人も數多くある、耶穌が教會を迎へんと臨り給ふ迄の時代即ち現今の時代である。今の時代は「末日」(複數)といつて、御降臨から御再臨迄の期間である。此時代には絶えず戰爭や災難があり 但九〇廿六、僞基督が起り 太廿四〇六‖十四 路廿一〇八‖十九、教會が世より召出さる 太十三〇一‖五十 十六〇十八 羅十一〇廿五。此時代の終に多の信者が道を離れる事もあり 路十八〇八 提前三〇一 四〇、不法の隱れたる者も盛になる 撒後二〇七。三、信者が世より携へられ空中に於て主に遇ふ 撒前四〇十三‖十八。其時基督に在りて死にし者先に甦り 哥前十五〇廿三、五十 撒前四〇十六

二。「基督の日」といふは此時の事であるらしい 哥前一〇八 五〇五 哥後一〇十四 腓一〇六、十 二〇十六。基督の日とは基督が聖徒に報賞と恩惠とを予へ給ふ時である、其時以來「不法の者」を「抑ふる者」が除かれる 撒後二〇七。抑ふる者とは聖靈が、聖靈をもつ所の教會を指す。(四)大患難の時即ち信者が世より主に携へられて以後、再主に携へられて世に來る迄の七年間、殊に其後の三年半の間である。大患難に就ては但書、太廿四章、可十三章、路廿一章、撒前後書また默に記載してある、七年間に就ては 但九〇廿六、廿七 を見よ。

(一)七年間の中前の三年半の事に付ては 但七〇八 の小き角(全世界を治むる最恐怖しい帝王であつて、「殘暴者」 但九〇廿七 といひ、「可惡者」 太廿四〇十五 「罪の人」 撒後二〇三、四‖八 「海より出る獸」 默十三〇一‖十 といふが信仰を棄て 但十一〇卅七‖四十四、昔時の遺存つた羅馬大帝國の十箇國を一國とし 默十三〇三、其帝王となり 但七〇廿四 默十七〇十二、猶太人と神殿の禮拜と犧牲とを七年間設くると約束した。併し三年半過去ると其約束を破り、己の宮殿をエルサレムに建築し、遂に己を神とする 但十一〇卅六‖卅八 太廿四〇十五 撒後二〇三、四 默十三〇、其時より殊に大患難が恐懼しくなる。(二)七年間の後半は全世界の大帝王(默十三〇一‖十の獸)が惡魔から世界を殘暴す特別の勢力を受くる 默十三〇五。又鬼が多く出で盛に活動く 默九〇二‖十一、此時を「艱難の時」 但十二〇一「試煉の時」 默三〇十 又「ヤコブの患難の時」 耶卅〇七 といふ。其時に「地より出づる獸」 默十三〇十一‖十八、非基督、僞の預言者 默十六〇十三 十九〇廿 廿〇十 といふ者が全世界の教會の首となり、先の獸 默十三〇一‖十 と偕に動作く 默十三〇十一‖十八。此第二の獸は 默十七〇一‖十八 の大淫婦に關係がある。大淫婦は道を離れた教會で、所謂教會的バビロンといふ。また政治的バビロンもあると見える。政治的バビロンは教會的バビロンを滅亡ぼす 默十七〇十五‖十八。併し基督が榮光の中に顯れて臨り給ふ時、政治的バビロンを滅亡ぼし給ふ。大患難の時にイスラエルの中より許多の人々が救はれ 默七〇四‖八、又異邦人も多く救はる 默七〇九、十四。

(三)實際の御再臨は基督が世界まで臨り給ふ事である。大艱難の末期に全世界の大帝王の盛大な時ハルマゲドンの大戰爭が起る。ハルマゲドンはヨルダン河の西にあるエズレルの原野にあるメギドの塚と谷とである。主耶穌が臨り給ふ時エルサレムの中に「遺れる」猶太人を攻撃する「獸」と僞の預言者の使用る萬國聯合軍とを此處で滅ぼし給ふ。聯合軍がエルサレムを來攻め [illegible]十〇廿、八‖卅二 耶穌の臨らんとし給ふ兆 太廿四〇廿九、卅 を見て(亞十四〇二 の記事の後)、メギドへ退去く樣である。聯合軍はハルマゲドンで敗亡ぼされんとし、後モアブとイドマヤとの戰場で滅ぼされて了ふ。此ハルマゲドンは「エホバの日」 賽二〇十二 の最初の事變である、(「エホバの日」は御

再臨から（彼後三〇 十＝十三）の時期までの時代をいふ）。此の如く基督は（但二〇卅 四、卅五）の擊つ石として、一打擊（但七〇廿 六、廿七）で全世界帝國を碎き給ふ（但七 〇一 ＝廿 八 默十三〇 十九〇）。此く「異邦人の時」（バビロンに擄れし時から（路廿一 〇廿四）の時代）が終り、基督は橄欖山に立ち給ふ（亞十四〇 四＝八）。基督の御再臨に由つて救はれて「遺れる」猶太人は世界中に居る猶太人と異邦人とに福音を宣傳る樣になる（亞十二 〇九 耳二 〇卅 三〇 十七 賽六十六〇 十八＝廿一）。御再臨の時に活者の審判がある（太廿五〇卅 一＝四十六）、辭解審判。王國の時代は御再臨から（哥前十五 〇廿四）の時迄の事である、辭解王國、遺餘者、審判、サタン。（五）千年期。耶穌は千年の間此世に在して其王國を設立し、世界中を統治め給ふ（默廿 〇六 默廿〇 一＝七）。此千年の間の全世界の幸福な狀態は（米四〇 一＝八）に記載してある。又此時代には義と平和とが最盛になる。心の貧しき者は地を嗣ぎ、人間は長命をし、主を識らぬ者はなく、猛獸は穩順しくなり、不正、無理はなくなり、罪は直に罰せられ、世界中の衆人が大概皆救はれ（賽十一〇 四、六＝九 六十五 〇廿 詩二 〇九 賽廿六 〇九 亞十四〇十 六＝廿一）、サタンは世界に活動く事が出來なくなる（默廿 〇）。此福なる時代に人間の身體、精神、靈魂が何程發達するか推量ることができない（賽十一〇 四＝九 詩七十二 〇一＝十）、辭解王國。（六）サタンの最後の謀叛（默廿〇 七＝十）、第二の復生と終の審判（默廿〇十 一＝十五）、神の日に於て世界は火によつて潔めらるゝ（彼後三〇 十＝十三）。（七）新天地、永遠（默廿一〇 廿二〇）。

ザカリヤ（ゼカリヤとも）、（一）紀元前八百年の頃、ゼカリヤといふ預言者（撒加利亞書の著者）があつた、彼は偶像教を信ずる人を嚴しく戒めたので石で打殺された（代下廿四 廿＝廿二）。路十一〇五十一に見ゆるは此の人らしい。（二）基督の生まれたまふ頃の祭司（路一〇五＝廿五、五十七＝八十）。

さけ（酒）、猶太人の用ゐしものには「濃酒」もあり、亦「葡萄酒」もあつた。葡萄酒には少くも三種類あつたやうである。（一）搾りたての新しい葡萄汁。（二）乾葡萄に水を加へたもの。（三）アルコール分を含まれた普通の葡萄酒。此の三種であつたといふ。聖書には酒を飲むことの危險を示してある。さて信者が酒を斷つ理由は（一）酒の中にあるアルコールは毒物であるから神の神殿、即ち信者の身體を害することの無い爲に。（二）酒に溺るゝではなく、程よく飲み、自身の醉ふといふことがなくとも酒を飲めば醉ひもし、害を受け、弱い兄弟のことを同情はず、これを迷はすことになるから。（三）飲酒は贅費である、若し此の費を善き方に用ゐたらば餓ゑんとする貧民を飽かせ、滅びんとする未信者を救ふことができるからである。

サタン、惡魔の名にて、惡心をもて人を訴へるといふ意である。聖書には「世の君」、「惡き者」、「試る者」抔いふてある、「惡魔」の條を見よ。

サタン（惡魔、また魔王）は以前ケルビムの一人であり（結一 〇五 廿八〇十 二＝十四）、大なる權威を以て宇宙の最初の一部分を宰つたと見える（創一〇、一、二）、又創世記の緒言を見よ（結廿八〇十 一＝十五）。彼は傲慢に由つて失錯した（賽十四〇十 二＝十四）。サタンが神に背いて以來（賽十四 〇十三）罪は宇宙間に初めて入つてきた。天より放逐せられ（路十〇 十八）、世界と空中とを其領分として息まず動作いて居る（弗二 〇二 彼前五 〇八）。人間が造られてから蛇に入り（創三章の註を見よ）、エバを欺し、アダムと彼の子孫とを墮落させた。創三章には「蛇」の事が記いてある、此は默廿章二節の「老蛇」と同一である。創三章の「蛇」とは原語「輝者」といふ意である、故に惡魔は以前は輝く天使（哥後十 一〇三）の如き者であつたと見える。（結廿八〇九 十一＝十）の事實に依つて解る、其故エバは容易に欺された。惡魔は種々の稱呼がある、「誑者の父」（約八〇 四十四）、「サタン」即ち惡心をもて訟へる者、「斯の世の主」（約十二 〇卅一）、「此の世の神」（哥後四 〇四）、「アバドン」、「アポリオン」、即ち滅ぼす者」（默九〇 十一）、「ベルゼブル」（太十二 〇廿四）、「ベリアル」（哥後六 〇十五）などである。又罰として惡魔は蛇の如く「腹行ひて云々」（創三〇 十四）とある、こは形容詞で、サタンは斯の如く卑められて了ふといふ解釋もある。サタンがアダムとエバとを誘惑つた時から罪は人間社會にはいつて來た（羅五〇十 二＝十四）。「アダムの契約」によれば（創三〇十 四＝十九）サタンは終に「婦の苗裔」に由つて滅さるゝ。其時からサタンは人間を救はうとなさる神に對して反對運動をするものとなつた、腕力、貪慾、私慾、野心、淫樂などに充滿た現在の世中はサタンの支配する者である（默十三 〇三）。サタンは世の主として（約十四 〇卅 十六〇 十一 哥後四 〇四）、其領分を賄賂として基督を試やうとした（太四〇 八、九）。「空中にある諸權を總宰る者」（弗二 〇二）であつて、許多の鬼の首となつて居る。神は彼に人間を死なす權威を讓り給ふた（來二〇 十四）。天に居るべき者ではないが、兄弟を訴ふる者として神の前に出る權威がある樣である（默十二 〇十）。又或程度迄は肉的信者或は己を賴む信者を試す事も許されて居る（伯一〇六 ＝十一 路廿二〇 卅一、卅二 哥前五 〇五 提前一 〇廿）。併し此權威は制限れて居り、又試された信者は基督の禱告に由り、信仰を失はない樣に守られて居る（路廿二〇 卅一、卅二 一約二 〇一）。大艱難の時にサタンは神の前に信者を訴へる權威をとらるゝ（默十二〇 七＝十二）。基督が榮光の中に臨り給ふ時サタンは千年の間縛らるゝ（默廿 〇二）。其後暫時の間釋放されて（默廿〇 三七、八）教會等を滅亡ぼす最後の運動をするが、打負れて遂に火の池に投入れらるゝのである。

サドカイ、猶太人の中にありし宗派の名にて三派の一である、紀元前二百五十年頃にサドクの主張した所から始まつた。此の

派はよく律法をば守つたが、口傳を信ぜず、天使の存在、死者の復活を疑ふた。祭司の中にも多く此の派に屬する者があり、基督の頃には富と政權とに於て重要の地位を有つて居り、世俗的に流れ、拜金主義のものが多くあつた 太十二〇十八‖廿三 徒五〇十七 〇廿三〇八 徒四〇一 五〇十七。

さばき（審判） といふに四個の事實があるやうに見える、（一）十字架に死したまふた基督に於て信者は其の罪の審判を受け、萬民の罪は定まつて居るのである 約三〇十八 弗二〇三。然し基督の贖罪を賴む者は既や審判を受けてしまつたといふ事實 約五〇廿四。（二）義人の復活の時、即ち信者は如何なる報酬を得べきかといふも一の審判である 羅十四〇十‖十三 哥後五〇九、十 撒前四〇十‖十八 默廿二〇十二 詩一。（三）信者は基督と偕に生存つて居る諸國の人を審判く 太廿五〇卅一‖卅二 西三〇四 默三〇廿一 哥前六〇三。又信者は基督と偕に世を治めんとし 默五〇九、十 默廿〇四、常に基督と偕に居り 一約三〇二 撒前四〇十七。其の間に救はるべき異邦人は救はれ、猶太人も救はるゝに至る 羅十一〇廿五、廿六 路廿一〇廿四。此の第三審判は御再臨一千年間の初期にある。（四）萬國民の審判、即ち白き大なる寶座の前にある審判である 默廿〇五‖十五、（イ）耶穌は十字架に死に、己が身に人間の蒙くべき罰を受け給ふた故、信者の受く可き審判は終了つた 約五〇廿四 羅五〇九 哥後五〇廿一 加三〇十三 來九〇廿六‖廿八 十〇十、十四‖十七 彼前二〇廿四 三〇十八、（ロ）信者は己を鞫く、信者は己の罪を見て己を罪人とし悔改めれば懲治を受けない、悔改なければ懲治を受ける 哥前十一〇卅一、卅二 撒後三〇十四、十五 十二〇十三、十四 哥前五〇五 提前一〇廿 來十二〇七、（ハ）信者の行爲の審判 哥後五〇十 太十二〇卅六 羅十四〇十 加六〇七 弗六〇八 西三〇廿四、廿五、此審判は耶穌の御再臨の時にある 太十六〇廿七 路十四〇十四 哥前四〇五 提後四〇八 默廿二〇十二、（ニ）基督の御再臨の時各國民の審判 太廿五〇卅一‖四十六、此審判は 默廿〇十一 白き大なる寶座の前の審判と違ふ、太廿五章の審判の時に復生の記事はない、審判を受ける者は活る國民であり、書が展かるゝと記いてない、三種の者が集合つて居る、「綿羊」、「山羊」、「兄弟」である。時期は基督の御再臨の時（節卅一）で、場所は世界である。基督の「兄弟」とは大艱難の間福音を萬國民に宣傳へる「遺れる」猶太人であるといふ解釋もある、辭解「遺餘者」。各國民は兄弟の待遇に從つて賞罰を受くる、（ホ）御再臨の時イスラエルの受る審判 結廿〇卅 亞十四〇四 瑪三〇一‖七 四〇一‖二、（ヘ）千年期後墮落した天使の審判 猶六、是はサタンの審判と同時であらう 默廿〇七‖十 彼後二〇四 默廿〇十。信者は基督と偕に此審判をする 哥前六〇三。悔改めずに死んだ衆人の審判 默廿〇十一‖十五 辭解再臨。

さばきの日 に就て「さばき」又「さいりん」を見よ。

サマリヤびと、紀元前七百廿一年アッスリヤ王シャルマ子セルはイスラエル（北の十支族）をアッスリヤに捕へて往つた。其の結果としてアッスリヤ其の他から種々の人種をイスラエル、即ちサマリヤに移住せしめたのである。然るに此の人々は固より偶像教徒であつたが、遂には眞の神をのみ拜むやうになり、モーセとその律法とについて常に猶太人と論じた。又猶太人とサマリヤ人とは非常に不調和となつてゐた 約四〇九 約八〇四十八 路十〇廿‖卅七。今は僅に百廿人だけ存つて居り、モーセの五卷（舊約の創世記より申命記に至る）と詩篇とのみを聖書と信じて居つたやうである。

サムエル は最終の士師であつて、モーセを除いては最初の預言者であつた。其の親は子がなかつたので、神に祈り、篤信なる妻ハンナから生まれたのである。彼は生後神に獻げられ、堅固なる獻身的人物となつて忠義に神に事へ、イスラエル人の牛耳を攬り、國民の士師として、統治權を握つて居つた。國民が神に國王を與へよと願ふた時（勿論此の時までイスラエル人には王がなかつた）サムエルは王があれば壓制さるゝこともあらうとて忠告をしたが、人民は承知しなかつた。そこで彼は神の許認を得てサウロ、後には又ダビデに膏を灌いで、イスラエルの王とした。また彼は祭司の職をも爲したのである 母前一〇〇‖廿八 又は 母緒言 徒三〇廿四 十三〇廿。

サルゴン はアッスリヤ國の有名い帝であつた、預言書緒言を見よ。サルゴンは紀元前七百廿二年即ちサマリアが捕移された年に帝になつた。サルゴンの前の王シャルマ子セルが紀元前七百廿四年サマリアを攻めた時サルゴンは其大將とし、サマリアを陷れて帝となつた。紀元前七百廿年サマリアに居るイスラエル人が謀叛した爲サルゴンは此を鎭定め、七百十七年彼はヘテ人の都會カルケミシを陷れたので、ヘテ人の帝國は滅亡びてしまつた。サルゴンは七百十四年頃にエダを取り、またバビロンをも取つた。七百五年に其子セナケリブは帝になつた、辭‖年表。

さんびか（讚美歌）、讚美歌の起原は詩篇とこれに類する作歌とであつた。主意は神を讚め、罪を懺悔し、事を願ひ、また誓ふなどのことを詠ふたのである 弗五〇十九、辭‖詩篇また哥林多書を見よ。

サンヒドリム、猶太には祭司、長老、學者など凡そ七十人より成る議會があつて、これをサンヒドリムと稱へて居つた。國會の如きものであつたが、政治上の權威はなかつた。然し猶太は教會と政府と緻密な關係を有つて居つた。聖書には「審判」、また「集議

所」と譯してある 太五〇、太十〇、辭＝國會、會堂。

さんねいつたい（三位一體）、神に於る大秘義である。さて神は唯一であるが、聖父、聖子、聖靈の三個にわかれて居る、辭＝ペルソナ見よ。一個人に三つ（即ち氣、魂、魄）の別のあるが如く、此の三つがあつても三人ではなく、一人である。人は神の像につくられたとあるが、人に三つの靈性があるとしたら其造主なる神、即ち父と子と靈とは其の性、力、榮、德など各個同等である。尚ほ精しくいへば此三個は三柱の神々が別々に在すといふのでなく、唯一の神であつて、其の職掌が違ふといふのである（父といひ、子といひ、靈といふは決して職務の名ではないが）。例へば父なる神は萬物の造主で萬物を統治し、保護し。子なる神は父を示し、萬民の罪を贖ひ、教會の首となり、遂に世を救ふて、惡魔を滅ぼし、王の王、君の君となりたまふ。靈なる神は人の心に父と子とを信ぜしめ、人心を潔め、活かしたまふが如きないふ。舊約全書にもよく三位一體の教義が記いてある、（一）神の聖名「エロヒム」は複數、又神の代名詞も複數である 創一、居十一、廿四、士十三、六〇、十一〇、十三〇、十四〇、廿六、十九、十四、廿五、廿九、六、十九、創一、廿二〇、廿二、廿二〇廿、廿四＝廿 出二〇、三〇、詩百十廿六、廿二、〇一、賽六、〇八。神に三個ある事は 賽六 〇三 で解り、又父と子との關係に就ては 詩二 〇七 涼一 〇五 に記してある。聖靈は人格であり、又神の御權能と聖德とを有給ふ事が明瞭である 創一 居十一、廿四、士十三、六〇、十一〇、十三〇、十四〇、十五〇 撒後廿 三〇二 〇十三 伯廿六 廿三 詩百六 廿三 〇四 〇卅三 詩百九 賽四十 五十九 〇七 〇七 〇十 六十三、 又 民二〇。（二）子なる神が舊約時代にも世に現れ給ふた樣である 創十八〇一、十 三、十七＝廿二 廿二〇廿、四＝廿 然し舊約時代が了つた時に肉體となり給ふ事が舊約中に預言せられた 創三〇 賽七〇十 十五 九〇 耶廿三 〇五、六 新約全書には尙精細く記いてある、（ロ）其人格には三個があつて父と子の緣がある。また聖靈とは神が靈として存在し給ふのみで、人間を救ふ爲に父と子と靈とは樣々に顯現れ、又動作き給ふ 約三〇五、六、。時として父と子と靈とは同時に現はれて居る 太三〇十 十七、可一〇 一、廿二 路三〇廿、 辭＝神、神の聖名、基督、聖靈、又 創一 二〇四 十四 〇 十五 〇二 〇一 十七 廿一 〇 廿三 〇 母前一 馬三〇 十八 太八 約一 徒二 約廿二 〇三 〇二 〇一 〇四 〇廿七 を見よ。聖書に現はれた三位一體の事は舊約時代の始に於ても重に父たる神の事が現はれて居るが、次第と少なくなるに從ひ、子なる神に就ての現示が增してくる。新約には最初の部分に重に子なる神の事が記してあるが、漸次と聖靈なる神の事が多く記さるゝに至る。併しペンテコステ 徒二 の時から聖靈は己の事を言はず、耶穌を益重要に顯はし、又現在教會の時代中耶穌の御再臨迄は耶穌の事が彌重要になる、然と耶穌が來り、神の聖國を臨らせ給ふ時に 哥前十五〇 廿四、廿八 の如く「國を父の神に付さん…是れ神萬物の上に主たらん爲なり」。

し（死―肉體の）は（一）罪の結果である 創三〇。人間は皆死ぬから（二）諸の死んだ體は 賽六〇。（三）關係なく、靈魂は自覺をもつて活き續く 哈二 〇五 路十六 廿三 九、十六。（四）腐にによりて救はれた人は皆死なればならないのではない 撒前四〇十。（六）肉體は「幕屋」で其中に寓る者は「我」であり、何時か我は我寓屋を脫ぐ事がある 哥後五〇 一＝八 らさるゝからである 詩三〇 廿七、一 撒前四〇十 四＝十八 哥前 〇四十二 五〇五 十一、十二 撒前四〇十 五＝十七 哥後一〇十 十五 四＝十四 三＝十五。（七）信者は死ぬと直に主と偕になる、肉體はどうなるかといへば 哥後五〇 一＝八 詩一〇 四十三 路廿三〇 廿三 を研究せよ。基督の死に就ては 太廿七 〇五十 を見よ。

し（死―靈的の）、靈的の死とは生れたまゝの人即ち未だ罪の救を受けざる人の狀態である 弗二。未だ神より永生を受けざる人、 哥前四〇十 八、十九、未だ聖靈を受けざる人、人の肉體が死んだ後も靈的に死んだ人の靈魂は永遠に苦んで神を離れてをる、之を第二の死といふ 啓二〇 廿〇六、 〇八。

シオン（山）、エルサレムの西南部を成した高處の名で、ダビデ王は此處に王宮を造つた。後にはエルサレム全體を指してシオンと稱するに至つた。神は殊に聖業を現す所として教會をもシオンと稱ふるやうになつた 來十二〇廿。

しかい（死海）、又「鹽の海」 申三〇 書三〇 十七 といふてヨルダン河の落る所の湖で、鹽分が非常に多く二割五分以上ある。其中に生物は居らない、出口がないので毎日六百萬噸程の水が蒸發して了ふといふ。死海の水面は地中海の水面より千二百九十二尺程低い、死海の長さは十九里幅は四里、最深い所は千三百尺である。水は鹹辛く鷄卵も浮ぶ事がある。死海の現在地はアブラハムの頃滅ぼされたソドムとゴモラとが在つた 創十四 〇三、十四 〇廿 十九〇 結四十七〇、 辭＝ソドム。

じかん（時間）、（一）一日は日沒から日沒迄。（二）鷄鳴時は二回あつた、（イ）夜半が過ぎた後、（ロ）早晨前 可十三 十四。（三）日の清涼き時分 創三、八、午後二時頃から六時頃迄、（四）日の熱き時刻 創十八、 〇一、午前十時頃から午後二時頃迄。（五）夜は日沒から日出迄。（六）、（イ）舊約の「夜の初更」は午後九時頃から夜半迄 哀二〇、 中更は夜半から午前三時迄、早晨は午前三時から六時迄、（ロ）新約の初

更は午後六時から九時迄、二更は午後九時から夜半迄、三更は夜半から午前三時迄、四更は午前三時から六時迄であつた。

じじん(寺人) さは原の意味は唯宮殿の官人で侍從の類であつた、併し寺人になつてから責任の重い役をもつ官吏もあつた、譬へば 創卅七 四〇 但一 帖一 二七 〇三 〇十 二三、四。寺人は「主の會集」に與られない 帖廿三 〇一 さいふてもダビデの宮殿にあつた 代上廿 〇十五 王下廿四。ユダに居つた 路廿一 〇廿四 寺人は大抵外國人であつた 耶卅八、また 太十九 〇七 を見よ。

じだい(時代)、時代とは人間が神の聖旨に遵ふか、遵はぬかに從つて、七の時代があるとみえるが、一契約」と比較して見よ、(一) 無罪無邪氣の時代、原始の人は罪を知らず、罪を犯せば罰さるゝと警告された。エバは 創三〇 一三六 傲慢のため失錯つたが、其夫は誘惑されなくても失敗した 羅前二 〇十四。人間の(二)本心の時代、最初の人間はよく識つて居る神の聖旨に叛き、罪惡を經驗する樣になつて善惡を辨へる本心が盛んになつてきた。惡をなさず、善を行ひ、犧牲を携て神の前に出づべき時代であつたが、其時代にも人間は失敗した 創六 〇五、其罰として ノアの時洪水に因つて滅ぼされた。其故人間は世の末まで本心に從はねばならぬ。(三) 人間ノ政府即ち人間が人間を統治むる時代。人間は人の生命を取る(人を死なす)さいふ非常な權威を與へられた。其大なる權威の中に人間の政治の權威がすべて含有んで居る。其故神の予へ給ふた世界を託つて居る人間は神の爲其聖旨に服從つて世を治むる筈であるのに、實は猶太人も異邦人も「己」の利益を圖り、「己」の爲に世を統御して居つた。此人間政治時代の初めから猶太人が失敗してバビロンに捕はれてから、異邦人のみ世を治める權威を有つ樣に成つた 但二〇卅六 路廿一 〇廿四 羅十五 〇十四。(四) 約束の時代、神が先祖アブラハムに約束を與へ給ふた 路廿一 羅十六 〇十四 其時から「異邦人の時」が始まつた、雛=異邦人契約の方面から言へば神のアブラハムに與へ給ふた契約は無條件で、何時迄も效力がある。スコビルド博士はイスラエルがシナイ山で愚惡を賴ます、律法を信賴む樣になつた故、律法の時代は始まつたさいふ。(五) 律法の時代、シナイ山で律法が與へられてから、キリスト基督の十字架までの時代、猶太人は律法を託つて居つたが、始終夫を破つた。彼等の以前の有樣 出十九〇、其責任 出十九 五、六 〇 羅十 一=四、其故神の予 失敗 王下十七 〇七 二、十九 徒二〇廿 三、廿三 審判 王下十七 〇 羅二 一=六、廿七 〇 路廿一 〇 廿=廿四。(六) 恩惠の時代、耶穌基督の十字架と復活の時からの時代である 羅三 〇廿 四=廿六

四〇廿五、(併し廣く言へば創世記三〇十五の時からである、舊約時代の信者は來らんとする救主の贖罪に由つて恩惠で救はれた)。恩惠の時代では律法に從ふさいふのでなく、基督を救主として受容れ、其結果として善行を現はすさいふ事である 羅一〇十三 猶三〇 弁六 二、十五 。恩惠の時代には恩惠の方面から人間は試されたが、基督を十字架に釘けて殺した 徒四〇。此時代の終に教會は信仰の道を離れ、審判を受けるさ預言してある 提後三〇。(七) 王國の時代、(イ)壓制、束縛時代が變つて基督の國の正義、平安の時代さなる 賽十一、(ロ) 神の事を證すべき、神の忍耐の時代が變つて審判の時代さなる 太廿五〇弁 徒十七〇 羅廿〇七、(ハ) 勤勞が變つて報酬さなる 啓廿一、(ニ) 艱難が變つて榮さなる 羅八〇十、(ホ) 盲目なるイスラエルが懲戒を受くる時代が變つて救はれる時代さなる 羅十一〇廿 五=廿七、(ト) 受造者の歎き勞苦む事が神の諸子の顯れる時に終り、榮なる自由に入る 羅八〇十 九=廿一 創三〇 賽十一〇。

じふかい(十誡) さは凡そ三千五百年以前に神がモーセに由つて人間に與へ給ふたところの誡命である 出廿〇一。

しと(使徒)、主が此世に在られた間に召給ふた十二人は使徒であり、甦りて天に昇つた後召し給ふたパウロ、特別に聖靈により召されたバルナバも使徒である 徒十三 十四〇。又イスカリオテのユダの代にマッテアが闔で選ばれ、十一人の使徒等と共に數へられた 徒一〇十 六=廿八。使徒さなる條件は(一) 直接主に選ばれ、或は聖靈に選ばるゝ事 太十 一、二 可三〇十 三、十四 路六〇 十三 徒九〇、六十五 十三 二〇 廿二〇十、廿四、十五 十七 羅一〇。(二) 職務さして「天國は近けり」と宣ぶる事 太十 五、六、十 六 太四〇、十七 又天國の權力を顯はす事 太十〇。(四) 教會に信者を容れる權威はペテロ 太十六 十九 及び他の使徒等にも 太十八 予へられた事。(五) 未來に於て十二の支派を鞫かんとする事 太十九。(六) 教會が現はれた時に 太十八 帖三〇一 十二 使徒等と他の信者等とは特別に聖靈により召けた 徒二〇。又新しい殿の基礎さなり 弗二〇廿、十字架に釘けられ死て甦つた主に依つて救拔を得らるゝとの福音を、又他の事も誤謬なく萬民に宣傳へる事。(七) 甦りて天に昇つた後召し給ふたパウロ、特別に聖靈により召されたバルナバも使徒である 徒十三 十四〇。又イスカリオテのユダの代にマッテアが闔で選ばれ、十一人の使徒等と共に數へられた 徒一〇十 六=廿八。使徒さなる條件は(一) 直接主に選ばれ、或は聖靈に選ばるゝ事 太十 一、二 可三〇十 三、十四 路六〇 十三 徒九〇、六十五 十三 二〇 廿二〇十、廿四、十五 十七 羅一〇。(二) 職務さして「天國は近けり」と宣ぶる事 太十 五、六、十 六 太四〇、十七 又天國の權力を顯はす事 太十〇。(四) 教會に信者を容れる權威はペテロ 太十六 十九 及び他の使徒等にも 太十八 予へられた事。(五) 未來に於て十二の支派を鞫かんとする事 太十九。(六) 教會が現はれた時に 太十八 帖三〇一 十二 使徒等と他の信者等とは特別に聖靈により召けた 徒二〇。又新しい殿の基礎さなり 弗二〇廿、十字架に釘けられ死て甦つた主に依つて救拔を得らるゝとの福音を、又他の事も誤謬なく萬民に宣傳へる事。(七) 甦りて天に昇つた後召し給ふたパウロ、特別に聖靈により召されたバルナバも使徒である 徒十三 十四〇。

シナイ(山)、アラビヤにある山で、神がモーセによつて人に十條聖誡、其の他の現示を爲したまひし山である、また 加四〇 を見よ。

しふぎしよ(集議所)、 辭=サンヒドリム又國會。

しつじ（執事）、原語は「僕」、または「使者」の意である。初代の教會には貧窮なる信者を扶助することなど俗務を執行する必要があつた。長老といふ者もあつたが、説教なし、祈禱なし、信者の信仰を扶掖けるなど餘りに忙しくあつたので、施濟、救助のことに專任のものを設けんとて、教會の中に執事といふ會吏を選んだ、これが執事の嚆矢である 徒六〇一‖八 提前三〇八‖十三 腓一〇一 を見よ。また傳道することもあつた 徒八〇五‖十三。アブラハムは至高き神の祭司メルキセデクに「十分の一」を饋り 創十四〇廿、ヤコブはエホバに「十分の一」を獻ぐる事を約束した 創廿八〇廿二。家畜と農作物との十分の一を獻ぐべしとの律法があつた 利廿七〇三十、卅二。農作物を賣り金を獻げてもよいが、家畜は家畜其ものを十分の一奉納ればならぬ。紅い染料に浸した杖の下を通る者の第十番にあたる家畜を神に獻げる者と聖別した。人民の納むる十分の一をレビ人が受け、其内の十分の一を祭司の分として別々にした、漸次と民は十分の一を納める事を怠つてきた故、ヒゼキヤも 代下卅一〇五、十二、十九、子ヘミヤも 尼十二〇四十四、アモスも 亞四〇四 其を實行させた、又 馬三〇八、十 を見よ。パリサイ人は外面のみ熱心で極端に流れて了つた 太廿三〇廿三 路十八〇十二 來七〇五‖八、今も或信者は十分の一を獻ぐる、之は善い事であるが、命ぜられたのではなく、隨意である、然し實は財産の十分の十を神より受けて委託物とするのが至當である 哥前六〇廿 哥後八〇九。

じふにのわかれ（十二の支派） はアブラハムの孫ヤコブの十二人の子等及び其子孫である。聖書に十二の支派の目録は二十箇所に記いてある、即ち 創廿九、卅、卅五〇 創四十六〇 創四十九〇 出一〇 民一〇一‖十五 民一〇廿‖四十三 民二〇七、十 民十三〇 民廿六〇 民卅四〇 申廿七〇 申卅三〇 書十三〇 士五〇 代上二〇一‖ 代上二〇三‖八、四十 代上十二〇 代上廿七〇 結四十八〇 黙七〇。右の夫々の目録の順序は其を書く目的によつて違ふ、先祖の生れた順序もあり、其子孫の住ふ地方の位置に從つて記いたのもある。パレスチナに於る北方の十の支派、南方の二の支派に付て 王上十二〇 代下十〇、十一 を見よ。俘囚になつて居つた十の支派に付ては 黙二〇 申廿八〇六十二 雅十一〇十一‖十三 何三〇四 八〇 を見よ。

しへん（詩篇）、詩篇緒言を見よ。神が聖書によつて一切顯示し給ふた事を受容れるのが信仰である。聖書に現はれた神を信頼し、又神の遣はし給ふた耶穌基督を救主とし、主として受容れ 約一〇 て、依賴み、其結果として愛の心、從つて善行 雅二〇十四‖廿二 を顯すのが信仰である。四の方面より信仰を見ると（一）救拯を得させる信仰とは己の善行を賴まず、我罪を贖ひ給ふた基督にのみ依賴む 羅四〇五、廿三‖廿五 のである。（二）祈る信仰とは 約一五〇十四、十五 の如く其聖旨に從つて何事でも祈求はゞ我儕の祈禱を聽き給ふといふのである。（三）亦

未だ見ざる者の實在を認めるのは信仰に由つてゞある 來十一〇一‖三。（四）日々の行爲に應用する信仰即ち我身を修むる所の信仰 來十一〇卅九。

しんげん（箴言）、箴言の緒言を見よ。

しんじや 信者、獨一の眞の神を我神とし、耶穌基督は神の獨子であり、我罪を贖ふ爲に十字架に死に、死より甦り、今天に在して懇求し給ひ、再世に臨らんとし給ふ救主として、心より悔改めて信頼する人が信者である。

しんじやとおきて（信者と律法）、羅馬書七章に記いてある記事は、更生つたにはちがひないが、多少律法を賴み、未だ八章に記してある聖靈の與へ給ふ自由を受けて居らない信者の經驗であると見える。パウロの信仰上の經驗には三段ある、（一）信心深き猶太人として責む可き所なき迄に律法を守つて居つた 腓三〇六 使廿三〇一。（二）信者になつて以來律法の靈的意味を認めて 羅七〇十四、己の罪を感ずるに至つた 羅七〇九 パウロは、何時 羅七〇七‖廿五 の經驗をしたか能く分らないが、使徒行傳九章九節の時か、或は加拉太書一章十七節の時かも知れない。（三）神よりの顯示によつて大に其經驗が進んできて、「基督の身により律法に就いて殺されし者也」羅七〇四。又其裏に寓り給ふ聖靈により、「罪と死の法より釋さるゝ」者となり 羅八〇二。又聖靈に從つて行ふ者で、其中に律法の義が成就せられた 羅八〇四、辭＝肉。信者には生來の舊性又更生に由り神よりの新性もある 哥前一〇廿三 哥後一〇四 加二〇廿 西一〇。信者にある舊性と新性とが爭ふて信者は能く舊性に負けるが、聖靈は信者の裏に寓り、舊性に勝ち、新性を活し給ふ 羅八〇二 加五〇十六、十七 弗六〇十二。

しんじやのさいしたること（信者の祭司たる事）。（一）神がモーセによつて律法を予へ給ふ迄、各家族の長は各祭司の責格を有つて居た 創八〇廿 廿六〇廿五 卅一〇五十四。（二）律法の予へらるゝ時イスラエルが神に服へば「祭司の國人」となる 出十九〇五、六 といふ約束があつた、併しイスラエルは神の律法を守らなかつた。アロンの血統の人の中より祭司が選ばるゝ樣になり、又アロンの子孫なるレビの族が祭司の下に神事に服する樣になつた 出廿八〇一。（三）併し基督の時代からの「恩の時代」に於て、諸ての信者は「祭司の國」になつて居る 彼前二〇九 黙一〇六。（四）祭司の大特權は神の前に出られる事であつた。舊約時代の祭司は祭司の長のみ年に一次至聖所に入つた 來九〇七。然し基督が死に給ひし時御身の儀表なる至聖所の前の幔が裂て以來、今では信者即ち祭司は祭司の長基督の如く至聖所に入る權利がある 來十〇十九‖廿二。其處には肉體をもつ基督が御出になる 來四〇十六 九〇廿四 十〇十九‖廿二。（五）信者＝祭司として（イ）其身を

活る 祭 物として神に獻ぐる 羅十二 辭二〇 提後四 一猶三 羅一〇、（ロ）來十三 ○十六 ○十三 羅十二 加六 三猶一〇 來十三 加六 多三〇、 ○十六 五＝八 ○十三 ○六 ○十 十四 又信者＝祭司は懇求する者として勤めて居る 提前二 西四〇、 ○一 十二 見よ。

しんやく（新約）、神は舊約時代の人に代贖を賴むことによって救ふといふ契約を爲したまふた。其の時の人は基督の儀表となつて居つた犧牲を賴んだが、基督は世に來り、萬國、萬世の萬民萬罪を贖ふに足る大犧牲となりたまふたので、舊約を成就せられた。基督の此の代償によつて人を救ひたまふといふ神の新なる約束、これが即ち「新約」である 哥後三 耶前十一 來八〇六、「新約」全書の緒言を

しゅ（主）、原語は「クリオス」、語だけは主といふ意である。人間の主もあり 太六〇 二十七 太十五〇 三十五 可十三〇 ○九 弗六、神たる主もある 西四。 ○一 主とは創世記十五〇二のアドナイと同じ、又馬太傳廿二〇四十三＝四十五。新約にある「主」の使用が三ある、（一）ヘブル語のエホバを譯したもの 太二〇廿二 十五 太二〇 太三 太四〇 太十一 太廿一 可十二〇 路二〇 路二。 七、十 ○三 七、十 ○廿五 ○九 廿九、卅 六十八 ○九 （二）耶穌御自身斯の如く此語を用ゐ給ふた 太四〇 太十一 可十二。 （三）然し「クリオス」（主）といふ語は專ら耶穌を指して用ゐられ、新約には此意味で六百六十三箇所に記してある。耶穌に「主」といふ名を附ける理由はエホバと同じものであるを示す爲である 太三 太十二 ○八 ○九 ○廿二 ○廿六 路一〇 約八〇 五十八 約十四〇 八＝十 約廿〇 ○五 徒九 ○廿三 徒十三 ○廿二、 又 約廿〇、 廿八 辭＝神の聖名。

しゅうけう（宗敎）とは人間と神との緣故、關係である。靈魂の救はるゝ方法、又靈的に靈魂を修養する事と義しい行爲とを現は一事 羅一〇 廿七 を宗敎といふ。又人間が何物でも禮拜し依賴する事を宗敎といふ、辭＝偶像敎。

しゅのつかひ 主の使、意味が二個ある、（一）エホバ御自身をいふ、エホバは天より親しくアブラハムに語りたまふたことがあつた 創廿二。 ○十五 またモーセにも同じことがあつた 出三。 （二）舊約時代、いまだ肉體を取りたまはぬ前、目に見ゆる形體をもて現れたまふたキリストたる使者をいふ、ダニエルに於るは其の一例である 但三〇。

しゅ（ひ 主の日）、辭＝再臨。

じゅんけうしや（殉敎者）、神を信じ、キリストを賴んだ人は世人から迫害を受け、或は政府に反するとか、習慣、國風を紊すとか、

營業を妨害するとかいはれて牢獄に繫がれ、虐待せられ、甚だしきに至つては燒殺され、頸跡られたこともあつた。かく其の信仰、主義に忠實であつて殺された人を「殉敎者」といふ 來十一〇卅。 三＝四十

しよくざいしよ（贖罪所）は幕屋にもあり、又神殿にもあつた。櫃の中には十誡を刻つた石板が入れてあつたのである。祭司の長は此の櫃の蓋に犧牲の血を灌ぎ、倘ほ其の上には神の御榮光が現れた。此等のことの意味は律法を守るに依て己を救はうと思はずして、犧牲なる基督の代贖を賴んで居る人を神は救ひたまふ。はれた人は常に神の榮光を受けるといふのである。此の贖罪所は又基督の儀表であつた。又救

しよきくわん 書記官、辭解學者。

すぎこし（逾越）、「禮節」を見よ。

すくひ（救拯）、ヘブル、希伯來と希臘との原語には助けられる、安全、保護られる、癒される、瘳なしといふ種々の意がある、最意味の廣い語であつて其中には義とせられ、贖はれ、恩惠と和平とを享け、基督の義を我義とせられ、赦され、潔められること、（一）信者は罪人たる資格と罰とより最早救はれて 路七〇 哥前一 哥後二 船二〇 提後一、 安全になつて居ること。（二）信者は現在の罪、即ち惡き習癖と罪の力とより救はれつゝある 羅六〇 二〇十 徒後二 羅八 加 二〇 五十 十四 二、十五 ○十三 ○二 ○十九、廿 哥後三。 （三）信者は基督に適ふ者となる 羅十三 來十〇 腓前一 一猶三。 救拯は善行を示すに由て受ける者でなく、全く信仰により神の賜として ○十八 ○九 ○五 ○二 救 ○十 救 善行 をの關係は 羅三〇廿 四〇一 六〇 哥二。 ○八 救 ○廿 九、十 五＝八 を見よ。 廿三

ストイク、希臘にて名高い哲學派である。其の敎ふる所によれば宇宙を統御するものは「理」であり、人が此の理に從ふて生活することは其の最も大切なる本分である。これに從ふ者は困難にも快樂にも影響を蒙らないといふ。結局厭世主義である、萬有神の敎で、我慢主義であつた、徒十七〇十八の註を見よ。

スクテヤ人は元は黑海に居たが、ヨウロッパの東北方と亞細亞の中央と北の方とに居る未開の大人種だと思はれる樣に成つた。

せいぐわん（誓願）、人が此のことは此くせん、彼の事件は彼爲すまじと眞面目に神に誓ふことをいふ。誓願は爲るも爲ざるも其

の人の自由なりしが、一旦誓ふた以上は何等の事情があつても守らなければならん（民卅。不潔な商賣をして利けたものを誓願に用ゐるは嚴しく禁じられて居つた（申廿三。「ナザレ人」たる誓願をした者は特別な義務に聖別せられた人で、かゝる人は（例へばサムソン、サムエル、またバプテスマのヨハネの如き）斷然酒を禁じ、髮を薙らず、死骸に近かなかつた。また一時誓願する人もあつた（徒十八、徒廿一23廿六。

せいしよ（聖書）　は神が人間に與へ給ふた默示である、聖書繙言を見よ。猶太人の信ずる所によれば、モーセがシナイ山で神よりうけた律法は聖書に書いてあるものばかりでなく、その外にもあつたが、モーセは之れを聖書に書かすしてヨシュアに傳へた、ヨシュアは士師に傳へ、士師は預言者に傳へ、終にタルムドといふ書に書かれたといふ、併しこのタルムドに書いてあることは實際あてにならぬものである。

せいべつ（聖別）、原語は神の有として他と區別すること、即ち物事を神の用ゐ給ふ物とすることで、特別に神に屬するものは潔い聖なる物といはれた。神御自身は絶對的聖なる哉、其の聖子も聖靈も、聖名、聖實、聖書、聖典、聖民、皆神の聖き物即ち神の物と區別せられて居る、故に之等の物を亂用するのは大なる罪惡である（哥前六〇、辭一聖書。聖別の意味は二ある、（一）神の聖旨に背く物事より離れる事。（二）神の屬になつて了ふ事（申廿二、（イ）聖別とは希望に於ても、行爲に於ても「世中」より離れる事、又惡い信者、殊に異端を敎ふる人を離る〻事（提後二20廿一、（ロ）聖別とは世或は敎會にある惡に捫らない事でなく、其惡に與つて陷らないといふ意である（約十七15、（ハ）聖別の報は（哥後六10十加六、（ニ）眞正の聖別の模範は基督であり（來七26、パリサイ人の聖別は機械的であつた、（太三7路七30前九31廿三九）を見よ。祭司の聖別に就ては「祭司」を見よ。さいしのせいべつ（祭司の聖別）。神殿を聖別する事に就て（王上八64代下五5四14）を比べ見よ、祭司の聖別に就ては（利八30一31九24廿四）を見よ、アロンも水の聖別に與つた（重生の模表である（多三5約三5六）。（一）アロンも此聖別を受けなければならない、基督は聖別を受け給ふにおよばなかつた（來七26六11廿八）。（一）アロンは一方からいへば基督の儀表であつた、基督御自身はヨハネから洗禮を受ける必要はなかつたが、尙是罪人の代表者として又祭司の長アロンの事を成就せんが爲に、バプテスマを受け給ふた、水を受けて後靑（聖靈）を灌がれ給ふた（出廿九4、太三16四11十六。

祭司の長の衣服は（一）裏衣（出廿八39、布で製り足までに達る長きものであつた。（二）エポデに屬する明衣（出廿八31廿五は靑き布で作り、頭を入る〻孔が其眞中において居る短い衣服で、其裾の周圍に石榴（即ち實を結ぶもの〻模表）が金、靑、紫、紅の糸で縫箔してあつた。石榴と石榴の間に金の鈴（即ち保證の儀表）がついて居り、エポデの衣服は縫箔した帶で束ねられた。（三）エポデ（出廿八5は金、靑、紫、紅の糸で縫箔した布で作つた物で、表と裏即ち胸を蔽ふ方と背を蔽ふ方とがあつた、肩の處で結び、下部は帶で結めたものであつた。金の槽に嵌めた二の瑪瑙（出廿八9は肩（力のある所）に附けた、其で樹の枝或は體の肢の如く基督より同一じ生命を受て居る故、互に綿密な關係が出來て居る、世界中の信者は一の大家族ゆゑ、其交際、緣故を「聖徒の交」といふ。

（出廿八6、（四）胸牌（出廿八30廿五はウリムとトンミムとを納れる四角な布の袋、胸牌には玉が嵌めてあつた、出廿八17廿九を見よ、審判の胸牌といふた（出廿八。（五）頭帕（出廿八37の前の方に「エホバに聖」と鐫つけた純金の板がついて居つた（出廿八。（六）

せいと（聖徒）、信者をいふ稱呼である。信者は必ずしも罪のない神聖なる徒でないが、贖はれたものとして、又基督と聖靈とによりて、聖潔められたものとして、聖徒と稱びたまふのである。

せいとのまじはり（聖徒の交）、耶穌の贖罪の結果として信者は新しい身分が予へらる〻。基督に連り、聖靈を受けて居る者とし て、神の目から見給へば潔められて居る、又聖別せられて居つて聖徒と稱れる、其で樹の枝或は體の肢の如く基督より同一じ生命を受て居る故、互に綿密な關係が出來て居る、世界中の信者は一の大家族ゆゑ、其交際、緣故を「聖徒の交」といふ。

せいれい（聖靈）、辭一三位一體。舊約全書に現はれてゐる聖靈に就ての記事は（一）聖靈は人格たる者であり、神たる者である。（二）宇宙の創造に與かり、全能なる者で（創一2伯廿六13出廿三4詩百四30出廿一、不在る所なき者であり（詩九〇七、人を照らし（伯廿二8、奇巧を予へ（出三一3出廿八3出廿一、力を與へ（士十四6、智慧と爲遂ぐる才能を予へ（出廿五十一耳二10來三4出廿八3）默示を予へ（民十一25廿七18）、神の僕を強め給ふ者である（詩五十一11、聖靈（詩五十一11、「智慧、聰明の靈、謀畧、才能の靈、知識の靈、エホバをおそる〻の靈」（賽十一2、惠ふかき聖靈（詩百四十30、鞫する燒つくす靈（來四12、「智慧、聰明の靈、恩惠と祈禱との靈（亞十二10）と稱へらる。（四）舊約時代に於て聖靈は求めなくとも自ら人々の上に降り給ふた樣に見える。新約時代に於ても尙信者等の上に止まつて居られるのは明白である、之は基督の贖罪

と甦とに由て予へられた恩惠である 約七〇卅九 〇十六〇七 卅三 徒二〇一〓六 加四〇。(五)一、舊約には將來に於て聖靈がイスラエルの上に注がるゝとある 結卅七〇十四 卅九〇廿九。又「一切の人」、「我僕、婢」の上に靈を注がんとある 耳二〇廿八、廿九 二、新約全書には(一)舊約の如く聖靈は神性なる人格である 約十四〇十六、十七、廿六 十五〇廿六 十六〇七〓十五 太廿八〇十九。(二)人が求めないでも自ら人々の上に臨り給ふ、併し基督は其弟子等に父に祈れば聖靈を受けらるゝと教へ給ふた 路十一〇十三、(是は特別に受くるといふ意即ち常も有て居る 羅八〇九 といふよりも、聖靈の力、聖潔、慰安を餘計に受るといふ意であらう)。(三)耶穌曰ひ給ふ「我父に求めん、父必ず別に慰むる者を爾曹に賜ひて窮なく爾曹と偕に在らしむべし」。(四)甦生の夜集まつて居る弟子等に「氣を噓きて彼等に曰ひけるは聖靈を受けよ」約廿〇廿二、併し「爾曹上より權を授けらるゝまではエルサレムに留まれ」とも曰ひ給ふた 路廿四〇四十九 徒一〇八。(五)ペンテコステの日に聖靈は集つて居た信者の各人の上に止まり給ふた 徒二〇一〓四。(六)ペンテコステの後福音は先に猶太人に傳へられ、使徒等は信ずる者の上に手を按き聖靈を受けさせた 徒八〇十七 九〇十七、(七)其後殊にペテロによつて異邦人が王國に入るやうになつた、徒行傳十章。聖靈は信ずる人々に與へられた 徒十〇四十四 十一〇十五、十八、聖靈はよく信仰する者に予へらるゝ、(イ)信ずる者は聖靈に由り生れ更る 約三〇三、六 一約五〇一、(ロ)聖靈は信者の心に住み 羅八〇九、信者を其殿とし給ふ 哥前六〇十九 羅八〇九〓十五 加四〇六。信者は「皆一靈に在りてバプテスマを受け一の體となり」哥前十二〇十三 一約二〇廿、廿七、又約束の聖靈を以て印せらる 弗一〇十三 四〇卅。三、衆の信者は聖靈を有て居る 羅八〇、併し聖靈に滿たされて居る筈である 徒二〇四 四〇廿九〓卅一 弗一〇十八 五〇、時々滿さるる事もある。四、聖靈は基督が肉體をとり給ふた事に大關係がある、孕まれ 太一〇十八〓廿 路一〇卅五、バプテスマを受け 太三〇十六 可一〇十 路三〇廿二 約一〇卅二、卅三 動作き 路四〇一、十四 甦り給ふた時も 羅八〇十一 亦此時代にも常に聖靈の證を受け給ふ 約十五〇廿六 十六〇八〓十一、十三〓十四。五、聖靈と教會との關係は聖靈が教會を建て 太十六〇十八 來十二〇廿三、信者が一の靈に在りてバプテスマを受け 哥前十二〇十二、十三、神に奉事るやうに賜を與へられ 哥前十二〇七〓十一、十七、卅 徒一〇八 二〇四 哥前二〇四 導かるゝ 路二〇廿七 四〇一 徒十六〇六、七。六、信者は聖靈の殿になつて居る 哥前三〇十六、十七。七、聖靈と信者との關係は三ある、(イ)聖靈は信者と偕に在り給ふ 約十四〇十七、聖靈が偕に在るといふ關係を以て罪の罪たる事を曉らせ 約十六〇九、基督を信賴すべき救主として顯はし 約十六〇十四、信仰を予へ 哥前十二〇八、再生を予へ給ふ 約三〇三〓十六、(ロ)聖靈は信者の衷に止まり給ふ 哥前六〇十九、肉慾に克つ力を與へ 羅八〇二〓四 加五〇十六、十七、信者の徳を建て 加五〇廿二、廿三、信者の荏弱を助け 羅八〇廿六、祈らせ 弗六〇十八、喜んで神と交らせ 弗二〇十八、信者が神の子たる事を實と爲給ふ 加四〇六。聖書を以て信者を潔め、聖別し 弗五〇廿六 提後二〇十三 彼前一〇二、慰め、懇求し 羅八〇廿六、基督を顯し給ふ 約十六〇十四、(八)聖靈が信者の上に降り給ふのは基督に事へる樣に才能を受させる爲である 徒二〇四 十〇四十四。八、聖靈に對して未信者の犯す罪は聖靈を瀆す事 太十二〇卅一、聖靈に逆ふ事 徒七〇五十一、侮る事 來十〇廿九。信者の犯す罪は惡を離れず、聖靈を憂へしめ 弗四〇卅、卅一、御指導に從はないで聖靈を熄す事 撒前五〇十九。聖靈に對する聖徒の態度は身も靈も委れ、聖潔られて使ふていたゞくのである 弗四〇卅。九、聖靈の儀表は膏 約三〇卅四 來一〇九、水 約七〇卅八、卅九 風、徒二〇二 約三〇八 火 徒二〇三、鴿 太三〇十六、質 弗一〇十三。印 弗一〇十四 四〇卅。(一)活動終了 約十四〇四。(二)所有物 提後二〇十九。(三)安全 但六〇十七。

セナケリブ はバビロンを取り、サマリアを滅ぼしたアッスリヤの大王サルゴンの子で、潰散れ易いアッスリヤ帝國を治めて居つた。ユダの王ヒゼキヤの時に 王下十八〇十三〓十六、スリヤ、ペニキア、パレスチナにある謀叛を鎭める爲ユダを攻撃たが失敗した。

ぜに(錢)、(一)ダリクとは波斯の金貨で、凡そ十圓五十錢の價 喇二〇六十九 尼七〇七十〓七十二。(二)レプタ 可十二〇四十二 路十二〇五十九 〇廿一、二。又 太五〇廿六 の「分釐」とは青銅で凡そ二厘(太十〇廿九 と 路十二〇六 とにある錢は一箇凡そ二錢に當る)。(三)銀即ち 可六〇卅七 約六〇七 等の「銀」は三十四錢の價値ある「デナリオン」といふ銀貨。(四)金即ち 太十七〇廿七 の金は一圓廿八錢で「スタテル」といふ銀貨。(五)銀は舊約の「シケル」といふものならば凡そ一圓卅錢に當り、新約(イ)「アグリオン」とは一圓廿八錢に當る 太廿六〇十五 廿七〇三、五、九 徒十九〇十九、(ロ)「ドラクメ」といふものならば三十四錢に當る 路十五〇八、九。(六)納金とは六十四錢である。

ぜんせかいていこく(全世界帝國) に就ては 辭―再臨 又但以理書緒言、また「年表」、「圖面」を見よ。

せんれい(洗禮) 辭―バプテスマ。

セラ は詩篇の中に七十一箇所又哈三〇三、九、十三にある語で、音樂を暫時止める所に入れた語。或は靜なる彈琴法を變へて強く彈くべしといふ意ある語であらう、詩篇の緒言を見よ。「セラ」の說明は少なくとも六ある、即ち音樂の(一)休止。(二)繰返。(三)節の終。(四)樂器を最強く彈すべき記號。(五)短い折返を唱ふやうな處である。(六)或は嚴肅に敬禮すべき所の記號。

セラピム とは天使の中で尊き職をなす者。原語の意義は「焚く者」といふ。セラピムといふ言は 賽六〇一〓八 に限つて居る。ケル

ヒムは神の前に潔くない者が來らぬ樣に役事て居り、セラビムは信者の中に潔くない者がない樣に役事て居るとみえる、辭＝ケルビム。

ゼロテ、猶太人の熱心なる宗教的國家主義の政黨であつた。自國を征服し、併呑した羅馬と羅馬人とを庇護ふヘロデ王に反對した。十二使徒の中に「ゼロテといへるシモン」といふのがあつた　路六〇　徒一〇。十三

ソドム、ソドムとゴモラとは多分死海の北の方にあつた市邑である。可なり繁昌したる市邑であつたらうが、惡るべき惡風俗の行はれた所であつた。アブラハムの甥のロトがソドムに居つた時、神は市邑を滅ぼさんと決心したまふた。然しアブラハムは十人の義人があるなら滅ぼす勿れと祈つたが、ごうしても十人の義人を發見ださなかつたので、神は火と硫黄とを降らして、ソドムと他に四個の市邑を滅ぼしたまふて、今は其の處在地さへ明白でない、創世記第十三章、第十八、十九章を見よ。

そなへもの（祭物）、（禮物）、（獻物）、（一）罪の爲に獻げる犧牲をいふ。舊約時代に罪を犯した人（誰でも罪の無いものはないが）は羊、牛、山羊、鳩などの無瑕の動物を祭壇に携來り、祭司の前にて犧牲の首に手を按き、罪を告白してそれを殺した。祭司は其の血を祭壇等に灌ぎ、其の死體を燒いてしまつたのである。此く祭物を爲す意味は代贖によつて罪を赦された人は潔められるゝ、また其の身を全く神に獻ぐるといふことである、利未記第一章＝第七章又緒言を見よ。（二）感謝の意を表する時に獻ぐるものをいふ。これも動物に添へて煎餠、油、乳香、鹽を供へたので、利未記第三、七章を見よ。（三）祭司に任ぜらるゝ時の供物をいふ。動物を宰つたが、ある部分を燔かすに祭司の所得さした、例へば出廿九〇　廿六＝を見よ。（四）特別に獻げたもの、即ち臨時の祭物をいふ、「供前のパン」、また「犧牲」を見よ、利未記緒言及び一〇＝七〇を見よ。

そなへのパン（供前のパン）、出廿五〇　廿三＝。是は祭司の資格を有てる　利廿四。　擬前二　獻一　獻六　諸　の信者の生命を養ふ神のパン　即ち基督の儀表である。天より降り給ふた基督は生命を予へ給ふ基督であるから供前のパンは生命を養ふ基督の儀表である。供前のパンは　詩十二　廿七　の地に落ちた麥で、患難の磨にて粉碎され　詩十二　審判の火につて彼を食ひ、又基督を念ふて信仰を養ふ意もある　來十三　二三。

そら（天空）、天の意は三ある、（一）雲が起り、鳥が飛ぶ所の空　創一　廿四、　詩一　七八。（二）星のある所の空間　創一　十五、十七。（三）神の在す　所　申四〇　王上八　詩百十五　帥後十二、　王下八　廿七　廿四　哥後十二、　此處には　天使も居り　太廿四　廿六　二三、　教はれた人も居らんとする　所　太五〇　廿六　二一＝四、　又基督が懇求し給ふ　所　羅八〇卅三、卅四　來六、　御再臨の時には其處から臨り給ふ　帥後四。　十六

ソロモン、紀元前大凡一千年頃、四十年間猶太に君臨した、き智さ力と榮とを兼備して、國を治め、第一の神殿（辭＝聖殿）を建てたとで特に世に知られたのである。聖書中にソロモン王の記述したものが三卷ある、（一）道德上及び宗教上の諺言を集めたもので、舊約書中の「箴言」がそれである。（二）「傳道之書」といつて、ソロモン自身に親しく經驗した所を敎へたものである。人生の意味を調べ、學問、快樂、事業などこそ人生に滿足を與ふるものなれとして試みたが、遂に皆「空の空なり」と悟つた。かく失望はしたが、去りて厭世家とはならず、「神を畏れ、其の誡命を守れ、これは諸の人の本分たり」といふに結着して居る。（三）「雅歌」といふがある、これは基督と其の敎會との關係を文學的に、雅味を含んで敎へ、敎會が基督に對してすることを記してある。箴言、傳道之書、雅歌の各緒言を見よ。

さうざう（創造）、神は何もなき所より新に萬物を創造りたまふた。創造の順序は太初に物質、それより光、諸星宿、世界の海陸を分ち、草木、動物、終に御自身の性にまたがふて人間を造り、今は創造の業を休止んで居らるゝのである。創世記第一、二章及び同緒言を見よ。又「年表」參照。

たかきところ（崇邱）、神又偶像を拜むに築つた崇邱であつた　民廿二〇　王上十一　七　廿三　十四〇。カナン人の使用る崇邱があつたが、イスラエル人は崇邱を毀つ事を命ぜられた　民廿三〇　申十二　シロに禮拜がなく、エルサレムの神殿が未成功い前に、或崇邱はエホバを拜むため假に許された　詩七十八〇六十、六十一＝六十七、六十九　王上三　代下一　又　王上十二、其傍にアシラ（辭＝アシラ）を建て、又近傍に偶像のため家根があつた。崇邱には禮拜に來る衆人が供物を食る爲腰掛が置かれてあつたといふ。崇邱は邑を築り、神に對して罪を犯した。崇邱の造方は左の如し例へば五十坪の面積の場所を定め、地面を平し、其上に祭壇を置き　王上十二　〇卅二　王上三　〇二、四　〇三　又　王下一　廿三　強ひて　崇邱の　柱（六尺か其以上の高）を列べた　王上十四　〇廿三　那十七。　或　崇邱の周圍には禮拜に來る衆人が供物を食る爲腰掛が置かれてあつたといふ。　崇

邱には祭司も附て居つた。尙ほ崇邱にては忌むべき不義が行はれたこともある、辭解「アシラ」を見よ。

たとへ（譬喩）、譬喩といふものには三種ある、（一）物語の形狀になつて居るもの、例へば（士九〇七。二十五）（二）形容した簡略い說敎の如きもの、例へば（要五〇。一二七）（三）行爲、所爲を以て事物を敎へるのもある、例へば（始卅七〇十六二廿二）の如し。基督の語りたまふたものは左の如くある、

（一）馬太福音書にのみ記されたる譬喩、稗子、太十三〇廿四二卅。藏れた寶、太十三〇四十四二。發見した眞珠、太十三〇四十五二。網にかゝつた魚、太十三〇四十七二。慈悲の無い僕、太十八〇廿三二。葡萄園の農夫、太廿〇一二。二人の息子、太廿一〇廿八二。王の子の婚筵、太廿二〇二二。十人の童女、太廿五〇一二。銀（タレント）、太廿五〇十四二。綿羊と山羊、太廿五〇卅一二。

（二）馬可福音書にのみ記されたる譬喩、成長の分らぬ種、可四〇廿六二。旅より歸來る主人、可十三〇卅四二。

（三）路加福音書にのみ記されたる譬喩、二人の債務者、路七〇四十一二。善きサマリヤ人、路十〇卅二。不斷の祈禱、路十一〇五二。愚なる富人、路十二〇十六二。御再臨の期待、路十二〇卅五二。智き家宰、路十二〇四十二二。果を結ばぬ無花果の樹、路十三〇六二。大なる筵、路十四〇十六二。城を築き、戰を爲す王、路十四〇廿八二。十枚の銀貨、路十五〇八二。放蕩息子、路十五〇十一二。不義なる操會者、路十六〇一二。富人とラザロ、路十六〇十九二。無益の僕、路十七〇七二。不義なる裁判人、路十八〇二二。パリサイと稅吏、路十八〇九二。十斤、路十九〇十二二。

（四）約翰福音書にのみ記されたる譬喩、羊と牧者、約十〇一二。葡萄樹と其の枝、約十五〇一二。

（五）馬太と路加とに記されたる譬喩、磐或は沙の上に建てられた家、太七〇廿四二、路六〇四十七二。麪種、太十三〇卅三、路十三〇廿一。迷ふた羊、太十八〇十二二、路十五〇四二。

（六）馬太、馬可、路加にある譬喩、斗の下の燈、太五〇十五、可四〇廿一、路八〇十六。新布を以て舊衣を補ふ、太九〇十六、可二〇廿一、路五〇卅六。舊革囊に新酒、太九〇十七、可二〇廿二、路五〇卅七。播種、太十三〇三二、可四〇三二、路八〇五二。芥種、太十三〇卅一二、可四〇卅二、路十三〇十八二。惡虐き農夫、太廿一〇卅三二、可十二〇一二、路廿〇九二。無花果樹と凡ての樹、太廿四〇卅二二、可十三〇廿八、路廿一〇廿九二。

ダニエルの七十しう（ダニエルの七十週）、（但九〇廿四二廿七）の註を見れば終の一週間（七年間）は其前の六十九週間とは別々になつて居る、此終の一週間を六十九週の連續とすれば無意味になる。メシヤは其時に（六十九の一週間の終に）聖別られた敎會をも救はれたイスラエルをも受けられないで、御再臨の時になれば受けらるゝ、故に終の一週間（七年間）を將來に於て始まる者とせねばならない、此終の一週間即ち但以理書の第七十週の週間に就ては但以理書緒言を見よ。

たねいれぬぱんのいはひ、辭＝祝を見よ。

ダビデ、イスラエルの第二代の王、其の履歷は（母前十六〇、王上廿〇）、また（代上八〇卅三、廿九〇卅）、また詩篇と母前との緒言を見よ。

たましひ（靈魂）、人間には（撒前五〇廿三）に記いてある如く靈、生、身があり、人間は右の三のものから成立て居る。靈と生とは其性が違ふものである、或は一のもので動作が違ふといふ二說がある。生は（希伯來語で子フエシ、希臘語でゾスウケエ）人間にも動物にもある、其中悟性、感覺、認識力がある、併し動物は死ぬ時に皆消滅なるらしい。靈は（希伯來語でルアク、希臘語でヌウマ）精神であり、其中に理性、意志、本心があつて、永遠く存在するものである。人が死ぬ時に身體は塵になり、靈は神の許へ歸り、審判を受くべき者となつて居る。結局靈の身を活かす現象が生命であるとすれば靈が身に入つて居る間身を活し、また活す靈が出ると身は（生命が止んで）直に死ぬといふ事になる。一方からいへば靈と生とは一か二かといふ議論は言に就ての議論であるが、兎に角生を別々の者としても實際存るべき者は靈である。原語に於て生（希伯來語の子フエシと希臘語のブスウケエ）又靈（希伯來語ルアク、希臘語のヌウマ）の用法は明瞭としない點が餘程ある。英語の通り交るに用ゐる事もあるが、どうしても靈（希伯來語ルアク、希臘語ヌウマ）の方が高尙である、神又聖靈に就てはよくルアクを用ゐ、又天使と人間との中神へ歸る方に就て用ゐる言である、辭＝人間。

ダマスコ、は世界中最古い市邑でノアより五代目の後裔が建てたといふ。スリヤの昔の都會であつた。現今も此市邑の人口は十萬ある。沙漠中にある市邑でアバナとパルパルとの二河の水に濕されて（王下五〇十二）、田畑と庭園とが多く、無花果、胡桃、石榴、梅、

杏、梨、林檎等産出る。昔からエジプト、スリア、ツロ、アッスリヤさ他の東洋の國々の商人等の往來する道路の會ふ所である爲、元來繁華な市邑であつた 結廿七〇十八 摩三〇十二。アブラハムの僕エリエゼルの生れた地 創十四〇十五 十五〇二。ダビデに取られ 撒後八〇五、六 代上十八〇五－七、其後イスラエルさ爭ふ所のスリアの都府さなつた 王上十一〇廿三、廿四。ナアマンの在所 王下五〇一、十二。アッスリヤ王テグラテピレセルが遂に市邑を取り、摩一〇三－五 の預言の通り王國を斷絶せしめられた。其後ダマスコは順々にバビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、ロマの所有になつた 哥後十一〇卅二。ダマスコには猶太人が多く居つた 徒九〇二。此市邑に近き所でパウロは救はれ 徒九〇二、三、十 廿二〇六、十一、十二 廿六〇十二、終に此所より救出れた 徒九〇廿四、廿五 廿六〇廿 加一〇十七。「直」さいふ街は今日も猶在つて、市街の中央を通つて居る、其長さは約三十町。紀元後六百三十四年にアラビヤ人に征服せられ、千五百十六年より土耳古國領分さなつた。

だんじき(斷食)、斷食しなければならぬさいふ教規はないが、任意にすることがあつた、今も尚ほ禁じられては居らぬ。其の目的は肉體の慾情を去り、精神を潔めて、嚴肅に神さ交通ることである。悲哀い時、疑團を抱いた時、聖別したい時に斷食することがある 徒廿七〇九 太九〇十四 徒十〇卅。耶穌の斷食したまふたことは馬太第四章、路加第四章に見ゆ、また 太六〇十六 を見よ。

ちごく(地獄)、神より遠く離れて、天に正反對の處で、悔改めない人の永遠も苦楚を受くる場所の稱である。然し地獄さいふに三個の意味があるやうである、(一)「ヘデ井ーズ」は死者の靈の入る處をいひ。(二)「アビス」はヘデ井ーズよりも下にあるさせられ。(三)は「トフエッド」、「ゲヘンナ」太五〇廿二 廿九、三十 太十〇廿八 太廿三〇卅三 彼後二〇四 また「火の池」、ヘブル語は最下の苦き所。

ちやうらう(長老)、舊約時代には人民中の古老が審判さ統治さの職務に任じ、教會に於て重立つた人さなつて居つた。また新約の教會が起つた時にも教會内に重要なる位地を有つたのである。其の職務章程さも見るべきは使徒行傳十四〇廿三、同十五〇四、六、廿三、同十六〇四、同廿〇十七、提多一〇五、雅各五〇十四、彼得前五〇一、二約翰及び三約翰の書にある。長老の動作は即ち統治する事 提前三〇四、五 五〇十七、異端者等を禦ぎ、神の子へ給ふた默示を守る事 多一〇九、牧者が羊を導き養ふ如く教會を牧する事 徒廿〇廿八 約廿一〇十六 來十三〇十七 彼前五〇二。長老は聖靈によつて教會に立てられた 徒廿〇廿八、又よく徒十四〇廿三、三〇一－七を見よ。「長老」さ「監督」さは階級が同一であるさ思ふ教會もあり、又監督は長老の上に於て務めて居つたさ思ふ教會もある。默示録に記いてある「長老」は榮光に入つて居る教會の代表者であらう、贖はれて神に近き所に居る者である 默五〇八、九。昔日のイスラエル人は十二支派に分れて居り、又主の弟子(使徒)の數は十二人であつたから、舊約教會から十二人、新約教會から十二人、合して廿四人の代表者さいふ說がある。又舊約時代の祭司は廿四班になつて居たからさいふ說もある、或は又舊約の歴史書さ預言書さの數が廿四卷であるから長老の數を以て其の卷數に擬したさもいふ。

ぢんえい(陣營)、イスラエル人がエジプトよりカナンへ往く途中の曠野を通つた時に置いたところの陣營の形狀は 民一〇五十－二〇卅四 三〇十四－卅九 十〇十一－廿八 に記載してある。其の眞中には聖き天幕が置かれ、天幕の周圍に十二の支派が東西南北それ〴〵三づゝあつた。十二の支派には旗があつたさいふ、辭解の結尾に繪圖の中に陣營の模樣が記してある、辭解の圖を見よ。

ちゑ(智慧)、(一)希伯來人は知識の源が三あるさいふた、即ち律法さ預言さ智慧。律法は神が人間に予へた聖旨であり、預言は神の聖旨を解說す者であり、智慧は人間の方から神の予へ給ふた律法さ預言を受納れ、夫に付て熟考へた上で、できる經驗である。智慧を記いた書は約百記、箴言、傳道書「エクレジアステス」「ソロモンの智慧」。(二)パウロが 哥前二〇六－十六 に用ゐて居る「智慧」さいふ意味は聖靈が信者に敎へ給ふ神の眞理さいふ事である。ノスチックは我等に眞の智慧があるさ誇つて居つたが、パウロは智慧の源は眞正の源なる神であるさ主張した。「エクレジアステス」も「ソロモンの智慧」も聖書にはないさ知れ。

つみのひと(罪の人)、「罪の人」、また「淪亡の子」さは一方より見れば惡魔であるが、又一方より見れば將來に現れんさする惡魔の最も惡き使者たる一個の人であらう、故に罪の人たる羅馬帝國を倒し、又主の再び世に臨りたまふ時に亡ぼされんさする罪の人たる君主もある。其の他マホメト、羅馬法王、ナポレオン等いふ說明もあつた、辭＝再臨 但七〇八、二十五 撒後二〇 默十三〇四八 十九〇廿 を見よ。

つみ(罪)、罪はサタンより出で 賽十四〇十二－十四、アダムに由つて世に入り 羅五〇十二。すべての衆人(基督を除き)のもつものである 羅三〇廿三 [illegible]。罪は死を生ずる、其で衆人の肉體も靈魂も死ぬべき者さなつて居る 創二〇十七 三〇十九 結十八〇四、廿 羅六〇廿三。基督の贖によらなければ罪の結果を免るゝ事はできず、たゞ信仰によりて免るゝ 徒十三〇卅八、卅九。罪は(一)行爲である、即ち神の聖旨を破り、或は怠る事。(二)狀態である、即ち義のない事。(三) 來九〇廿六 徒四〇十二、性質である、即ち神に敵する事である。聖書に「罪」、「咎」、「惡」等さ飜譯せられた原語は種

種ある、此等を合せて見れば神が如何なる目をもつて人類の墮落した心を見給ふかゞ解る。舊約には（一）「チヤタ」＝的にあたらない 士廿〇十六、躓く 箴十九〇二、不足い事。（二）「アシヤム」＝思慮が惡く過失つて犯す罪 利四〇十三 五〇二、三 民五〇六、七 士廿一〇廿二 代上廿一〇三 代下十九〇十 廿八〇十、十三。（三）「アヴエン」＝殊に偶像を賴む事、愚なる事 何四〇五十 十〇五、八 歴五〇五 詩十〇七 箴廿二〇八。（四）「アヴア」＝曲つた事 母前廿〇卅 母後十九〇十九 王上八〇四十七 伯卅三〇廿七。（五）「ハマル」＝艱難、勞苦 賽十〇一 哈一〇三 民廿三〇廿一。（六）「ハヴアル」＝不公平、不正直 詩四十〇三 八十二〇二 箴廿九〇廿七 賽廿六〇十 利十九〇十五、卅五。（七）「ハバル」＝行過ぎる、境を越る事 詩十七〇三 何六〇七 八〇一。（八）「ラア」＝害する、破壞る、腐敗 母前十七〇廿八 王上二〇十九 箴廿〇十四 耶廿四〇二。（九）「パシア」＝謀叛 詩五十一〇十三 賽四十三〇廿七。（十）「ラアシアア」＝墮落した靈魂が常に感動きて惡を作り續ける事 伯三〇十七 賽五十三〇九 五十七〇廿、廿一。（十一）「マハル」＝不忠、約束を破る事 書七〇一 廿二〇十六、廿 代下廿六〇十八 廿八〇廿二 卅三〇十九 拉九〇二、四 尼十三〇廿七。（十二）「シアガグ」＝迷へる事 利四〇十三 民十五〇廿二、卅 詩百十九〇廿一。（十三）「ジンマ」＝考へて故意さ犯す罪、殊に姦淫。（十四）「チアサド」＝恥辱。（十五）「シアル」＝過失。以上は舊約の事であるが、新約には（一）「ハマルテア」＝不信用 羅五〇十二 來十〇六、八。（二）「パアプトマ」＝失錯 羅五〇十五、十七、十八。（三）「ポンエリア」＝惡心の所爲 太六〇廿三 十二〇卅九 路十一〇廿九。（四）「カキア」＝墮落心、慾。（五）「アノミア」＝不法、無法。（六）「アセスモス」＝律法を破り恣にする事 彼後二〇七 三〇十七。（七）「アセピア」＝不平、不孝。（八）「アパイサイア」＝頑固。（九）「パラコエ」＝強頑いこさ。（十）「パラバイノ」＝行過ぐる。（十一）「パレルコマイ」＝行過ぐる、怠る。（十二）「アデキア」＝不義。（十三）「プラ子オ」＝迷ふこさ。（十四）「アストケオ」＝脫る〻 提前一〇六。（十五）「ヘテマ」＝不足、減する 羅十一〇十二 哥前六〇七。結局罪さは神の聖旨に合はない事である 一約五〇十七 羅十四〇廿三 一〇廿一—卅二 約一〇十一 三〇十八—廿一 太十二〇卅二 雅四〇十七。

ツロ、は紀元前二千七百五十年からあつた舊い名高い市邑で、海岸に暗礁さ岩さより成つた島があり、其島さ陸さの間に築堤があつた。海岸には舊いツロがあり、島には新しいツロが建設られた。カナンの國がイスラエル人に占領れた時にツロはアセルの支派の所有になつたが、彼等は逐出されずにしまつた。ダビデが宮殿を建築し、ソロモンが神殿を建立た時にツロから材料さ職工さを備ふた 母後五〇十一 王上五〇十八 代上廿二〇一—五。邑は大に榮えたが、預言者の強く責めた所であつた 賽廿三〇 耶廿五〇廿二 四十七〇四 結廿六〇十五 耳三〇四、八 摩一〇九、十 亞九〇二—四。ツロ人は物品を製造し、商業、航海、移住する事等で有名であつた。カルタゴの殖民地を拓き、紫染料、金物、硝子等を製造し、商人は君主の如くなつて居つた。ツロはアッスリヤ帝サルゴン、其後子ブカデ子ザルに十三年間かゝつて取られた。此邑に對して名高い預言は 結廿六〇一—廿八〇十九 廿九〇十八—廿 にある。アレキサンドル王は七個月を費して邑を攻取つた。主耶蘇はシドンへ御出になつたこさがある 太十五〇廿一 可七〇廿四—卅一、又 太十一〇廿一、廿二 路十〇十三、十四 を見よ。第一世紀頃にツロには信者が居つた 徒廿一〇三—六。オリゲエンは紀元後二百五十四年に

此處で死んだ。ユセビヤスは紀元後三百廿三年にツロで傳道した。紀元後六百卅八年に回教徒はツロを取り、其後紀元後千百廿四年には十字軍に占領せられた。バルバロサはツロの大會堂に葬られた。千二百九十一年から土耳古の屬さなつた。

つかさ（有司また宰）、聖書中「つかさ」さいふに二種ある、（一）「會堂の宰」徒十八〇八 で、一會堂に數人あつたこともある 徒十三〇十五 可五〇廿二。宰は集會の司會者であつて、聖書の誦讀をなし、祈る人さ說教する人さを定めた 徒十三〇十五、また凡て禮拜式の取締を爲したのである 路十三〇十四。（二）高等議會の議員で祭司なる宰もあつた 約三〇一 七〇廿六 徒四〇五 さ 八、十五 また 廿三〇五。王を「つかさ」さもいふた。

てし（弟子）、基督の使徒、また其の他隨從した人をいふた、雅各書緒言を見よ。

十二使徒の名	前の職業	著述書名	傳道任地其の他	死及び死處
シモン、別稱ペテロ又ケパ。	漁業。	彼得前書。彼得後書。	猶太人、また羅馬、バビロン等。	逆十字架に釘けられ羅馬に死ぬ（口碑）。
アンデレ。	漁業。		スクテヤ、希臘、小亞細亞（口碑）。	Xの形の磔架に釘けられて死ぬ（口碑）。
年長ヤコブ、別稱ボアネルゲ（雷の子）。	漁業。		エルサレム、又猶太。	紀元後四十四年ヘロデ王の爲にエルサレムにて首斬らる、徒十二〇。
ヨハ子、別稱ボアネルゲ（雷の子）。	漁業。	約翰傳。約翰第一、二、三書。默示錄。	小亞細亞、殊にエペソ。	パトモス島に流刑さなり、第一世紀の終の頃に召還せらる。

年少ヤコブ。		雅各書(?)。	猶太、及び埃及。	埃及にて十字架に死し、或はエルサレムにて殺さる(口碑)。
ユダ、別稱タッタイ、レッパイ。		猶太書。	アッスリヤとペルシヤ(口碑)。	ペルシヤにて殉教したりといふ(口碑)。
ピリポ。			フルギヤ。	フルギヤのヒエラポリで死ぬ(口碑)。
バルトロマイ、別稱ナタナエル。				打殺さる(口碑)。
マタイ、別稱レビ。	稅吏。	馬太傳。		エテオピヤに殉教(口碑)。
トマス、別稱デドモ。			多分スリヤ、ペルシヤ、最後に印度。	他に多く例ある如く祈りつゝ射殺さる(口碑)。
シモン、別稱ゼロテ。				十字架に死ぬ(口碑)。
ユダ、イスカリオテといふ。				自殺す、太廿七〇三―十。

てつがく(哲學)、森羅萬象の本來の狀態、目的を研究するを哲學といふ。人間の立場に立ち、人間の力量だけをもつて宇宙と人間と神との三と各個の關係を研究する亦これを哲學といふ。ヒッペン博士によれば哲學の研究すべきもの四ある、(一)存在(實體論)、萬有は何より成立つて居るかといへばこれに對して三個の答案がある、(い)萬有は一原より出でたといひ、即ち「一元論」といふ、而して其の一元は物質なりとするものと靈なりとするものとがある。(ろ)萬有は二原より出たといひ、即ち「二元論」といふ、而して其の所說によれば物質と靈とが互に相動いて萬物を生ずるといふのである。(は)萬有は多數の原因より成立つとし、これを「多元論」といふ。(二)宇宙論には原始なく萬有は凡て皆變轉に變轉を加へて極りなしとする者、また宇宙論には造物者なる神なしとする者がある。また萬有は一切理解することができぬといふ。此の論者には所謂不可思議論者に反して、神ありといふ者もある。此の論者の中には萬有皆神なりといふ萬有神論もあり、また多神教もある。神は唯一なれど宇宙を創造して、自然の法則を定めた以上は一切を其の法則に委れて自ら手を下すことはないといふので、これは自然神教といはれて居る。また第一原因にして、全知全能なる人格の神ありと信ずる有神論もある。(三)心理學、「我」といふ者は事物を認めて、それを入れておく別々の一個人、即ち存在物があるか、または我といふ者は流れて居る所の經驗の繼續のみ、流れ終れば我も亦無しといふ所論であり、自覺の本源、性質、成長を研究するのは心理學の一部である。(四)知識論は外部のものを外部のものとして知らるゝか、或は外部のものを見聞して心の中で其の意思のみを認めるかといふ研究である。自覺は別個のものであつて、外部にあるもの我が自覺に關係なくして實在物なりといふのは實在論である。外部のものを外部のものとして覺えられず、我が自覺の中にある其の物の觀念だけ覺えるといふのは唯心論また觀念論といふのである。また知識を得る方法について論ずることもある、固より經驗のできぬ前自ら眞理を認めるか、また然うでなく經驗によつて始めて知識を得るといふ論者もある。ある說に人間には理解力、智があるから五官の證明が無くとも、また五官の證明を得てからも其の理解力によつて事物を判斷することができると。結局此の論は理解力を知識の本とするのである。此の說に反して五官と經驗とを知識の本源とする人もある、右の外哲學問題は(五)論理學。(六)倫理學。(七)政治學。(八)美學もある。而して此の六、七、八は實地的必要なる問題である。また一より八までは宗教に大關係がある、固より眞正の宗教は哲學に基くものでなく、また基いて居らんが、宗教中には眞正の哲學を含んで居る。東洋哲學は固より宗教に大關係あるものであつた。宇宙には統一がないか、人生は如何、人道は如何と固より大に研究せ

られてあつた。歐洲に於ては希臘が哲學の母で、多くの哲學者も輩出したのである。(一)紀元前六百年よりソクラテスの時(前四七二年=)までは專ら宇宙は何より成立つたかといふを論じ。(二)ソクラテス、プラトー、アリストテルの時代(四七〇年=三二二年)には事物の本質と觀念とを研究した。尙ほ標準の高い道德をも敎へたのである。ソクラテスは歸納推理を用ゐ、アリストテルは理に愜ふことだけ承知し、彼は道理をもて萬事を判斷する心算であつた。(三)ソクラテス等の後の哲學は遂に倫理學に重きを置くに至つた。エピキュラス(三四二=二七〇)は結果に由つて行爲の善惡が判斷せらるゝ、また繼續快樂以上慾望むべきものなしと唱道した。ストイク派のゼノ(三〇八年)の敎ふる處によれば行爲の結果に關らず、行爲其の物が善ければ善し、惡ければ惡しと主張し、また義務の命ずる處はどこまでも服從はなければならんのであつた、さらば人間は固よりかく狼狽へるから。哲學のみにては天地人に隱れた奧義を理解するとはできないから人間の要求するものが二個ある、第一はわが貧弱い知情意を活し躍らす力があるまいか、また第二は道理以上の默示があるまいかといふのである。若し我が心を開き、謙遜して我が悟を活したまへと祈り、また我が經驗以上の眞理を敎へたまへと誠心誠意に願ふならば宇宙の造主なる神は天地人の奧義を顕示したまふのである。宇宙の統一に靈魂を滿足せしめたまふ天の父と靈魂の救はるべき道、また天地人を調和せしめたまふ贖主を悟るに必要なる聖靈の力と基督の默示とを加へられなければ哲學のみで人間は安んずることができないのである。

てん(天)、天は神でなく、神の居らるゝ處である。天地といふ時は「宇宙」と同じ意に用ゐらるゝ。聖書には天が三種ある、(一)雲が動く所の下の空。(二)星がある所の高い空。(三)至高き天即ち神の在し給ふ所、又辭=神、地獄を見よ。

てんこく(天國)、辭=神の國。天國と神の國 太六〇三十三 とは意味が違ふ。神の國は神の統治し給ふのみの者で、宇宙、天、眞正の敎會、眞實なる信者を神の國といふ。此世は惡魔の領分となり、此世の主は惡魔である。併し耶穌基督は惡魔及び其業を碎たんが爲世に來り給ふた、換言れば神の國を世に置かんがため、否全世界をして神の統治を受けしめんがため來り給ふた。今神の國の世に入つて居るだけを天國といふ。神の國は近いて居る 太三〇二 が、未だ十分に來らぬ。耶穌は再此世に臨り、天國を全世界に擴め給ふて神の國を全く來らせ給ふ 太六〇十一。天國の定義は但以理書二〇卅四=卅六、四十四、七〇廿三=廿七に見ゆる。即ち山より人の手によらず鑿れて出た石(基督)が反對する全世界帝國を打碎いたならば是が天の神の建て給ふ御國である 太廿四〇廿九=廿五〇四十六 路十九〇十二=十九 帖十五〇十四=十七。ダビデの裔に約束し給ひし國である 母後七〇七、十。此國の事は預言書に記載してある 亞十二〇八。又耶穌の國になるべしと確實に言はれた 路一〇卅二、卅三。現代の世にある天國の狀態は 太十三〇一=五十二 に記いてある。又 路一〇三十三 哥前十五〇廿八 を見よ。太五〇=七〇 には天國の憲法と主義とが記いてある。天國が十分に遍く來る時には此憲法に記いてある通りになる。其國の義は 賽十一〇四、五 賽三十二〇一 にある義と同じ。山上の說敎 太五〇=七〇 によれば罪は唯行爲にあるのみならず、動機にもある 太五〇廿一、廿二、廿七、廿八。猶太人は義を禮式にし、天國を眼に見ゆる者として居つた故眞の天國を棄てた。猶太人は心の貧しき者と柔和なる者とのみ其國に與かる事を知つて居る筈であつた 賽十一〇四。又彼等がよく賴みし詩第七十二篇を見よ、成程將來の天國に大關係はあるが、今でも心の貧しき者又罪を哀む者、義を慕ふ者程信者は福である。山上の說敎は未信者にとつて罪を定むる者となつて居る、太五〇=七〇 の註を見よ。

てんのつかひ(天使) は宇宙と人間との造らるゝ前に造られた靈物で、罪を犯さずに居り 彼前一〇十二、神の御用を勤むるものである 來一〇十四 路二〇十三。天使は靈物である 詩百四〇四 來一〇十四 が、人間の形體をとる力がある 創十九〇一、五 出三〇二 民廿二〇廿二=卅一 士二〇一 六〇十一、廿二 十三〇三、六 代上廿一〇十六、廿 太一〇廿 路一〇廿六 約廿〇十二 徒七〇卅 十二〇七、八。男女の區別はない樣である 太廿二〇卅 可十二〇廿五。天使の數は非常に多く 太廿六〇五十三 來十二〇廿二 默五〇十一 詩六十八〇十七、其權能は大なる者である 母後十四〇廿 詩百三〇廿 百四〇四 王下十九〇卅五。神の寶位の周圍に居ることができ 默五〇十一 七〇十一、信者に事へ 來一〇十四、守り 王上十九〇五 詩卅四〇七 九十一〇十一 但六〇廿二 太二〇十三、十九 四〇十一 路廿二〇四十三 徒五〇十九 十二〇七=十、信者を赤子の時から生涯守ると見える 來一〇十四 太十八〇十 詩廿一〇十一。天使は我儕を見て居る 哥前四〇九 弗三〇十。信者が死ぬる時天使は之を迎へる 路十六〇廿二。人は「天使等より少しく遜る」、基督は肉體と成りて、暫時の間斯る位地になり給ふた 詩八〇四、五、六 來二〇六、九。是は御自身の處即ち天使等よりも貴き處迄信者を擧げ給ふ爲であつた 來二〇九、十。御再臨の時に天使は耶穌に伴ふ 太廿五〇卅一。萬國民を審判く準備をする者は天使である 太十三〇卅、卅九、四十一、四十二 廿五〇卅二。王國の時代は天使でなく、基督と信者とが治める者となる。天使の中には階級がある樣である 羅八〇卅八。ミカエルはイスラエルと甦生とに關する天使の長であるとみえる 但十〇十三、廿一 十二〇一 猶九 帖前四〇十六。ガブリエルのことは 但八〇十六 九〇廿一 路一〇十九、廿七 に見ゆ。舊約全書にある「エホバの使」又「神の使」とは大抵神が天使の形體をとつて現はれ給ふた意である 創十六〇七=十三 廿一〇十七=十九 廿二〇十一=十六 卅一〇十一=十三 出三〇二=四 士二〇一 六〇十二=十六 十三〇三=廿二。辭=神

の名又神の子等、また惡魔を見よ。洪水の前に墮落した天使と人間なる婦との子で、身體の大きな恐怖しい惡行を爲す者があつた（創六〇二の註）。彼等は洪水に由つて滅ぼされた（箇十・彼後二。四・〇五）。（併し洪水の後にも亦墮落した天使が世に見えて、カナンに居つて創十四〇五　十五〇十八＝廿一　出三〇八、十七　廿三〇　申七　申廿〇十七　書十二〇八）子ピリムといひ、またエミ人と（申二〇十、廿三）いふ耳でなく、アナク人の子又レパイムともいふた（民十三〇卅三　申三〇十一）。彼等はイスラエルの劍によつてカナンより放逐されねばならぬのであつた（申廿〇十七　書三〇十　十三〇十三　十五〇六十三　十六〇十　十七〇十八　十九　士一〇。）多分多くの子ピリムが他の國へ逃れ行き、ヨルダンの東パシヤンに巨人の都市を建てた、其古跡は今も猶存つて居る。又埃及にも居たらしく、希臘の神代誌の起原となつたといふ說もある（創六〇四）。其でバビロンの創造碑に記いてある神々、埃及の死人に就て記してある書物、又他の國々の宇宙論は皆舊時の示現の亂れた者であるやうに見える）。原始は人間の如く自由な意志を予へられて居つたが、遂に神に背く樣になつた。原の榮光は失つても始の如き勢力を以て非常に世を亂す、此等の墮落した天使の中に二樣あるとみえる（一）「己が本位を守らず、其住處を離れ」、地獄に投げいれ、幽穴に置き」、審判を待たせらるゝ者もある（箇六〇四　彼後二。）（二）サタンの使等となつて居る者もある、此等は或は（太七〇廿二）の「鬼」と同一であるかも知れない（創三〇一　默廿〇十　太廿五〇四十一）、辭＝サタン、惡魔。

としより（長老）、辭＝長老を見よ。

とらはれ（俘囚）、イスラエル人とユダヤ人とは衆多の罪を犯した結果、約紀元前七百卅六年から五百卅八年迄、バビロン、アッスリヤへ漸次に俘囚となつて往つた、（一）イスラエルは先に行き、テグラテピレセルは紀元前七百卅六年にナフタリの邑からイスラエル人を取り（王下十五〇廿九）、アッスリヤへ擄へて行つた。又ヨルダンの東國からルベン、ガド、マナセの支派の子孫（代上五〇廿）を擄へて行つた。七百廿二年にサマリアが取られ、其の子孫は許多メソポタミヤとメデアとに擄へられて行つた（王下十七〇五、六）。サルゴン帝はイスラエル人をアッスリヤに移住民として置き、其代にアッスリヤ人をサマリアに置いた、其でサマリアには混つた人種ができた。イスラエルの俘囚の中にはエルサレムへ歸つた人もある（路二〇卅六）、併し大部分はアッスリヤ等に寓まり、以前の宗教と習慣とを維持し、時々エルサレムへ訪れて來た（徒二〇九　廿六〇七）。（二）セナケリブはユダヤ人の中より二十萬人程バビロンに携へて行つたといふ（王下十八〇十三）。ユダヤ人の俘囚の事は百五十年以前に預言せられた（賽六〇十一、十二　十一〇十二）、又（耶廿五〇一、十一、十二）。紀元前六百〇五年子プカデ子ザルは或部分を取り（代下卅六〇二＝七　但一〇一＝三）、七年後で（王下廿四〇十四＝十六）の通り大部分を取つた。其後十一年經過と殘餘た人々を大抵皆取て了ひ（王下廿五〇二＝廿一）、其後五年經過て擄れた人もあつた（耶五十二〇卅）。俘囚の中でも種々の特權があつた、例へば家を建築し、商賣し（耶廿九〇五＝七　嘉二〇六十五）、また最上の官吏になる事もできた（但二〇四十八　民一〇十一）。また自分等の祭司と教師とをもつて居つた（耶廿九〇一　嘉一〇五　嘉一〇一）、五百卅八年にクロス王はユダヤ人に己が國へ還り、神殿を建なはす事を許可した故（嘉一〇一＝四）、約四萬三千人歸國つた、併し許多のユダヤ人はバビロンに留まる事を望み、メソポタミアとメデアとに居るイスラエル人と偕に「散されたる者」となつて居つた（亞六〇九、十　徒二〇九）。此「散さるゝ」（誡命に服はれば）といふことは前から預言されてあつた（利廿六〇卅三＝卅七　申四〇廿七、廿八　廿八〇六十四＝六十八）。啻バビロン耳ならず、エジプト、ロマ、ギリシア、スリア等へ許多く散て居つた。

どれい（奴隷）は疇昔からあつたもので、希伯來人の奴隷の價値は一人約四拾圓であつた（創卅七〇廿八）。ヘブル人の中にある奴隷の待遇に就ては（出廿一〇　利廿五〇　申廿一〇）、又（創十七〇十＝十四　申十二〇十二、十八　十六〇十一、十四　出廿〇十　廿三〇十二）を見よ。ヘブル人は奴隷を親切に待遇ふべしといふ律法をもつてをつた（創廿四〇　得二〇四　創十五〇二、三　代上二〇卅四、卅五）。六年經過と奴隷を自由にせねばならず、（利廿五〇四十）を見よ、他國の如く奴隷を賣買する事は出來なかつた（出廿一〇十六　申廿四〇七）。右は舊約時代の狀態であつたが、新約時代になると基督の教訓に遵ひ漸次と奴隷を有たぬやうになつた。然し從來た習慣が矯正る迄は其主人に服從ふ事を命ぜられた（弗六〇五＝八　西三〇二＝廿五　提前六〇一、二）。遁げた奴隷に自ら其主人に歸る精神を與へ（門十＝十六）、羅馬帝國の奴隷の狀態を矯正し、神の目から見給へば主人と奴隷とは兄弟であると教へ（哥前七〇廿一、廿二　加三〇廿八　西三〇十一）、主人に奴隷の權利を保護るやうに教へた（弗六〇九　西四〇一）。奴隷制度は人の價値を明瞭にした上で廢するやうになつてをつた。

ナイル河は埃及の大河である（賽廿三〇三）。其源泉は熱帶にあるヴイクトリア、ニアンザ湖であるが、通常其源は白ナイル及び青ナイルといふ、白ナイルと青ナイルとの落合ふ所にカルツームといふ市邑があり、其所から一千八百哩流れ、二の河口即ちダミエタとロセタといふ所で地中海に入る。以前は河口が七箇になつて。千八百哩の流域は殆ど皆沙漠であるが、河の水を處々へ堀割で引くから田畑を潤す。河岸は急で數百尺高くなつてをる。カルツームから下流約千二百哩、河口から上流六百哩にアッスアンといふ所がある、其處から僅か上流に花崗石の段層の横面を露出したものがあつて、河流が通路を造り、瀑布を成して居る、其瀑布は最上流第一の瀑布で、その南部はエテオピヤ、北部は埃及である。花崗石は赤く琢磨くと光澤がで

る。ナイル河は毎年時を定めて汎濫るゝが、遠き水源に多く雨降り、近處に後れて降る故に起るのである、河水が溢れるのは二三回あるが、漸次に增して八月の末から九月の終迄溢れ、十月の中に復增水してくるが、此時が最深いさうである。十一月の末に水が減少と畑が乾き、種子を播くのである。パロ王の時は七月から十月迄水增し、十一月から二月迄作物が生じて豐り、三月から六月迄は收穫であつた。

ながさのはかり(長の尺度)、(一)キユピトとは約一尺半(臂節から將指の尖まで)其外普通のキユピトよりも一手濶程長き者 結四十〇五 四十〇十三。(二)「尋」は伸した兩手の端から端迄で約六尺 徒廿七〇廿八。(三)「間竿」結四十〇、四十一〇 是は六キユピト凡一丈に宛る。

ナザレびと、民數紀略六章にはナザレ人の事が精細く書いてある、又 耶卅五〇六、七 士十三〇四、五 哥前十一〇十四、廿八 歷二〇十一、十二 路一〇十五 (徒廿一〇廿‖廿六) なども見よ。ナザレ人が酒を禁つて居つた理由は肉情の娛樂を離れて 詩百四〇十五、唯神と交るのを樂とするにあつた 詩八十〇七 詩九十六〇十二、十三 哈三〇十八 腓四〇四、十。また髮を長くして居つたが、其理由は男が恥を忍ぶのである 哥前十一〇十四、蓋し基督の爲に喜んで、辱めらるゝといふ解釋もある。またナザレ人は耶穌の儀表であつた、耶穌は 來七〇廿六 の如く「聖潔くして不善き事なく、穢垢なくして罪人に遠かれり」、全き決心を以て神に事へ 約一〇十八 約六〇三十八、神の爲には如何な事でも、何程よい者でも讓り給ふた 來十二〇四 十六‖五十。原音「ナジリ」にて、「ナザレ村」には關係なし。

なだめのそなへもの(挽回の祭物)、一約二〇二 四〇十 來九〇五 にある原語の意味は 利十六〇十四 の「贖罪所」と同じ。舊約時代の「贖罪の大なる日」に於て祭司の長は犧牲の牡牛の血を携つて至聖所にある契約の櫃の蓋(「ヒラステリオン」即ち「恩の座」)に灑いだ。契約の櫃には律法が入つて居つたから實は契約の櫃が審判する筈であるが、犧牲の血(即ち代償が罰を享けた事を意味する血)が灑がれた爲神は其義を保りながら恩惠として罪人の罪を赦す事ができる 羅三〇廿六。審判の座は恩の座になる 來九〇十一‖十五 四〇十四‖十六 出廿五〇廿一、廿二、神の義の圓滿を減ずる事もなく、害する事もなくして其慈悲と恩寵とを十分に顯す事である。

なやみ(患難)、基督御再臨の前にも患難はあるが、「大なる患難」は基督が教會を迎へんとて臨給ふ時と教會を携へて臨給ふ時との間にある。太廿四〇十四‖廿五、可十三〇十四‖廿一、路廿一〇廿四‖廿七、撒後一〇七、同二〇一‖十七、默六〇‖十九〇。詩篇二、五、默七〇十四。ダニエルの「第七十週間」の後の半分即ち三年半の間に起り、言盡されぬ患難がある。

其終に默十九〇十九‖廿一の大決戰となる。其時に基督は 但二〇卅四 に錄してある「石」として全世界帝國の權威を碎き給ふ」。太廿四〇十五‖廿八 の委細は(一)聖所に立ち殘暴す憎むべき者、十五節。(二)其時エルサレムに居る猶太人の信者を警告する事 太廿四〇十六‖廿。(三)大患難と僞基督との事 太廿四〇廿一‖廿六。(四)全世界帝國が急に打たるゝ事 太廿四〇廿七、廿八。(五)榮光の中に主が現れ、萬民に見られ給ふ事と、イスラエルが集めらるゝ事 太廿四〇廿九‖卅一。(六)無花果樹の徵 太廿四〇卅二、卅三。(七)現在の時代に對しての警告 太廿四〇卅四‖五十一 默四〇五、又但二、七、九章と默十三章、辭‖遺餘者 賽一〇九 羅十一〇五、殊に辭‖再臨。

にく(肉)、肉には種々の意味がある、(一)凡ての生物 創六〇十七。(二)人 創六〇十二。(三)靈性と區別したる肉體 西二〇五。(四)偶像に獻げた肉。(五)生來即ち未だ更生らざる人間である。斯る人は靈、性、身に於て己を中心とし、罪を犯して神に反對する者である 羅七〇十八。重生らない人は肉に在り、重生つた人は靈に在る 羅八〇九。併し重生つた人にも「肉」の力が存つてをる故、其信者の「行」(即ち日々の思念、希望、言語、行爲)を肉に從つてするか 哥前三〇一‖四 加五〇十六、十七、或は聖靈に導かれて 加五〇十八 するか、夫は信者の隨意である(信者の責任の恐しき事)。聖靈に從つて行めば行む程肉に克つ 羅八〇二、四 加五〇十六、十七。人には三樣ある、(一)アダム的人は 哥前十五〇廿二 雅三〇十五 猶十九 未だ重生らざる人である 約三〇三、五 斯る人は學者、辯舌家、紳士であつても聖書の靈的奧義を少しも理解しない。(二)靈的の人は、重生り、聖靈に滿され、常に神と交る人 約五〇十八‖廿。(三)肉的の人は重生つて居ても肉に從つて歩むから常に「基督に在る赤子」である、斯る信者は聖書の最解り易い敎義のみを理解するのみである。

ニコライ宗に就ては默緒言又 默二〇十五 を見よ。

ニ子べ、昔日の大帝國アッスリヤの首府で、バビロンの北方にあつた。紀元前約二千三百年の頃にノアの曾孫ニムロデの建てた都城で、廿四里四方あつたといふ。城壁の高さ一百尺あり、其の上を兵車三輛を并べて走らせることができた。五百年間は獨立して居つたが、紀元前六百六年メド、ペルシヤ帝國に滅ぼされて、其の後再建されないのである。預言者ヨナの傳道した市邑である、ヨナ書緒言を見よ。預言者ナホム、エゼキエル、ミカ、イザヤ、ゼパニヤ、ヨナはニ子べの運命を預言した。

ニムロデ、創十〇八、九 代上一〇十。サタンはニムロデを以て始めて神に敵する萬民の首として立てたやうである。其後サタンは漸次と子ナカデ

子ザル、アレキサンドル、ナポレオン等を立てゝ見たが、終には實際罪の子を立てる。ニムロデはエホバに反對し己を尊崇めさせた、彼が建てたバビロンは當時から神に逆ひ、敵する者の形容、模表となつて居る。

にんげん(人間)、人間は進化された者でなく、創造された者である（創一〇廿七　創二〇七　太十九〇四　可十〇六）。ハクスレーが言ふ如く「最低級い人間と最高い動物との間には渉られない淵がある」。最高い動物でも神を識る能力、宗教心は少しもないが、人間は神の性質に象つた者として、神の如く三位一體なる者である（三位一體を見よ）。人には氣、魂、魄がある。又撒前書五〇廿三の通り靈、生、身の三より成立て居る者である。靈とは物を識る能力で（哥前二〇十一）、靈界の情、神の情まで曉れる者である。生は自覺する能で、草木には自覺はなく、動物には低い意味に於てある（創一〇廿四）。然し人間の生は極めて意味が深く、人間の生には其情、願望、愛等が宿つて居る（詩四十二〇一—六）。生と心とは然程差異はない、又生を人格と同じ意に用ゐる事もある。身體は完全なる人間に缺べからざる者である、故に甦るべき者となつて居る（約五〇廿八　廿九　哥前十五〇四十七—五十　默廿〇十一—十三）。身は靈と生との機關である、辭—靈魂。

子テニ人 は多分ミデアン人とギベオン人、亦他の俘囚の子孫であらう。彼等はイスラエル人になつたが僕の身分になつて居つた、（嗣八〇廿）を見れば子テニ人はレビ人を手傳ふためダビデと牧伯等の供へた人間であつた（嗣二〇五十八　六十　尼七〇　代上九〇二）。彼等の中にはエレサレムのオペル山に住む者もあり（尼三〇廿六）、エルサレムの周圍にある邑々に住む者もあつた（尼七〇七十三）。又（尼七〇廿四）と（尼十〇廿八、廿九）とを見よ。

子ピリム は墮落した天使とアダムの女等との子女であつたとの解釋もある（創六〇）。身體が巨く甚だ惡者であつて剪滅されなければならぬ故其時代の諸の人は大洪水で滅ぼされた（彼後二〇五　猶十〇四?）。然し子ピリムは洪水の後にも尚存して居つた、（創六〇四）の「其後」を洪水の後とすれば）。洪水の後の子ピリムは以前カナンに居つたと見える（創十二〇六　十四〇五）、（レパイムは子ピリムの子孫であつた）（創十五〇十八—廿一　出三〇八、十七　申十二〇八?）。イスラエルはカナン人を滅ぼす筈であつた（書三〇十）が、全く逐ばらはなかつた（書十三〇十三　十五〇六十三）。子ピリムが他國へ遁げたとしても無理はない。其子孫なる者が或はバシャンの市邑（其舊跡が今も遺つて居る）を作り、或は埃及の大な石碑等を造り、又希臘の古事記の源であつたかも知れない。子ピリムの中で名聲ある人々はアナク、ラパ、エミム、ホリム、ザムズミム、アビム等であつた（申二〇十、十一、廿—廿三）。アナクと其父アルバとに就ては（創卅五〇廿七　書十五〇十三　廿一〇十一）、英譯は「巨人」で、身長高く力ある者であつた（申二〇十、十一、廿一—廿三　九〇二　民十三〇卅三　申三〇十一）。

「レパイム」の意味は「ラパの子孫」である。彼等に就ての記事は（創六〇四　十四〇五　十五〇廿　民廿三〇卅三　書十二〇十五　母後五〇十八　五〇廿二、廿三　代上十一〇十五　十四〇九　廿〇四　伯十六〇十四　廿六〇五　詩八十八〇十　箴二〇十八　九〇十八　廿一〇十六　賽十四〇九　十七〇五　廿六〇十四、十九）にあるが、（賽廿六〇十四）によればレパイムは甦る事がないといふ。サタンは墮落した天使を用ゐて神が約束し給ひし「苗裔」（創三〇十五）即ち基督の先祖となるべき者を滅ぼさんとし、其の後屢々同手段を弄した、例へばカナン移住に先鞭を着け（創十二〇六）、またアブラハムを試たこともあつた（創十二〇十—廿　廿〇一—十八）。饑饉を起して神の選民を滅ぼさんとし（創五十〇廿）、更にイスラエル人の男を殺し（出一〇十、十五　二〇五　來十一〇廿三）、また民衆悉皆を滅ぼさんとした（出卅二〇十）。ヨシヤパテの時（代下廿〇一　廿一〇四、六）の、ともあり、アタリヤが王の後裔を殺し（代下廿二〇十）嬰孩ヨアシのみ獨り殘存つたこともあつた（代下廿二〇十一—廿四〇一）。ヘゼキヤは子の無い時に二人の恐ろしき敵に出會ひ（賽卅六　卅八〇一　詩百卅〇六）。また俘囚の時には惡漢ハマン國民を屠殺しやうとし（斯三〇六、十二、十三）更に新約時代に入つてはヨセフを惱まし（太一〇十八、—廿）、或はヘロデを用ゐ（太二）、或は耶穌御自身を誘ひ（太四〇）、或は（路四〇廿八、廿九）の如き、其の他人の敵、自然の變を以てし、遂には十字架をもて、墓を以て「苗裔」を滅ぼさんとしたが、是は畫餅となつたのである。

子ブカデ子ザル はバビロン帝國を設立した（紀元前六百二十五年）。ナボポラサルの子で、帝王にならない前にカルケミシの戰でバビロン帝國の領分を征伐しやうとした。エジプト王パロ子コに勝つた（紀元前六百〇五年）。子ブカデ子ザルはエルサレムを取り、エジプト迄行かうとした時に父が死んだ爲、ダニエルと其友を携れ（但一〇三—廿）、バビロンへ歸つた。エホヤキム、エコニア、ゼデキヤが各謀叛した時（王下廿四〇　耶廿二〇十八　結十七〇十二—十五）、子ブカデ子ザルは來つて、終にエルサレムを占領つた（紀元前五百八十六年）。是でユダの王國は消滅つた（結十二〇十三　耶卅四〇三）。其後子ブカデ子ザルはツロとピニキアとを取り、又エジプトで大勝利を得た（耶四十六〇十三—廿六　結廿九〇二—廿）。占領た國の住民を己の帝國の各地へ移住民として置き、此等の人民の勞動で二十の宮を建て、堡壘を築り、堀割を掘り、波止場、水道、公園、宮殿等を造り、遂には萬國の大帝王になる目的であつたらしい、其故傲慢になり、大きな肖像を建て人民に拜ませた（但三章）、其爲に罰を蒙けた（但四〇卅三）、後には眞面目になりエホバを拜む樣になつた（但四〇卅四—卅七）。

紀元前	記事
永遠より	行の上部より記すは聖經記事、途中より記すは普通記事と知るべし。
	神 創一〇一、約一〇一。
	元始に神天地を造る 創一〇一。
	天の使を造る 伯卅八〇六、七。
	ある天の使墮落して惡魔と成る、辭＝サタン。
四〇〇四年	人造られ、男をアダム、女をエバといひ、エデンの園におかる、辭＝アダム。
	一、舊契約、辭＝契約。
	(一)行爲の契約――善を行へば恩惠を受くる 創二〇十五＝十七
	人罪を犯してエデンより放逐ださる 創三〇二、三。
	(二)恩惠の契約――恩惠によつて救はる 創三〇十五 出二〇八。
	一千年間罪非常に世に蔓る 創三〇＝六〇。
二五〇〇(約)	ノア百廿年間世人に悔改を宣ぶ。
二三四八年	大洪水起り、ノアの一家八人は基督の救拯の表號なる方舟にて救はる。
二二四七年	バベル(の塔)の時より人々世界に散らさる。
二二〇五年	埃及、巴比倫の歷史の始。夏紀(支那)一八一。八年
二〇〇〇年	アリアン人印度に攻入る。

紀元前	記事
二〇〇〇(約)	アブラハム迄アシヤに依り、それからビーチヤに依り、新約はデビスに依る。
	二 舊約教會――其の契約、辭＝契約。
一九二八年	アブラハム生る、カルデヤよりカナンに移る。
一九二四年	(一)神アブラハムと契約す。
一九〇四年	此の頃ダマスコ市建てらる。
	バビロニアの王ハムラビ。
	ソドムとゴモラと滅亡ぶ。
一九〇三年	(二)イサク(アブラハムの子)生る、神はアブラハムにせられた契約を繼ぐべき後嗣としたまふ。
一八四四年	ヤコブ(イサクの子)生る、アブラハムとイサクとにせられた契約の恩を繼ぐべき後嗣としたまふ。割禮。
一七七五年	ヤコブの子等漸々生るゝ。
一七六六年	商紀(支那)一一五。四年
一七五二年	ヨセフ(ヤコブの子)生る、長じて兄弟に嫉まれ、埃及に行き、遂に同國の總理大臣となる。
一七一六年	七年間埃及其の他に大飢饉始まる。ヨセフ埃及人と親族とを救ふ。
一五七八年	モーセ生る。
一五〇〇年	神はモーセを召して、其の民を埃及王パロの手より

紀元前	聖經	普通	記事
	記事	記事	
	救出ださせ、また罪の性質を示す律法を萬民に與へさせたまふ。		
一四九九年	モーセ召さる 出三〇＝十一〇。		
同	パロ神の命に聽從はず、埃及國民は十回の大災厄(罰)を蒙らせらる。		
一四九八年	イスラエル人モーセに導かれて埃及より救出ださる。		
一四九七年	西乃山に於て神はモーセにより十誡、舊約教會の規則其の他を人民に與へたまふ 出廿〇＝。		
同	イスラエル人はカデシ、パル子アにてカナン人を攻擊する勇氣を阻喪ひ、謀叛したので四十年間曠野に彷徨せしめらる 書全卷。		
一四五九年	モーセ子ボ山に死す 申卅四〇。		
一四五八年	遂にヨルダン河を渡り、廿四年間戰ひ、ヨシユアに導かれて、神の約束したまふたカナンを征服し、占領す。		
一四二七年	イスラエル國はこれより三三二年の間オス子ル、サムソン、デボラ、ギデオン、エブタ等の士師に統		

紀元前	聖經	普通	記事
	記事	記事	
	御せらる。		
一三七五(約)	シヤルマ子セル第一世アッスリヤ王。		
一一六二年	テグラテピレセル第一世アッスリヤ王。		
一一二二年	周紀(支那)二五。五年		
一一二一年	サムエル預言者士師 二七一＝一〇六五。		
一一〇二年	イスラエル國始めてサウロ王を戴いて王國となる。		
一〇六三年	ダビデ第二代の王となる。		
一〇二二年	ソロモン第三代の王となる。預言者ガドとナタン。		
一〇一一年	第一神殿(エルサレムにソロモンの建てた)竣成りて、奉獻式行はる。		
一〇〇〇年	ソロモン王の榮の時、此の時よりおとろへ始む。		
九八二年	イスラエル國二個に分裂れて、南をユダ王國、北をイスラエル王國といふ。兩國とも爾來四百年間次第に偶像を禮拜するに至る、殊に北に甚太しくなる。		
同	ユダのレハベアム王＝九六六、王上十四〇 廿一＝卅一 代下十一〇、十二〇。		
同	イスラエルのヤラベアム王＝九六一 王下十二〇＝十四〇。		
九七九年	アビヤ、エド、シマイヤ預言す。		

紀元前	聖経普通記事 記事
九六六年	ユダの王アビアム＝九六三 ○一＝八 王上十五 三〇 代下十。
九六三年	ユダの王アサ＝九二二 九＝廿四 王上十五〇 ＝十六〇 代下十四〇。
九六一年	イスラエルの王ナダブ＝九六〇 廿五＝廿二 王上十五〇。
九六〇年	同 バアシヤ＝九三七 六＝十六〇七 王上十五〇十。
同	オデデ、アザリア、ハナニ、エヒユ預言者。
九三七年	イスラエルの王エラ、ジムリ＝九三六 〇八＝廿 王上十六。
九三六年	同 オムリ（テブニと同に）＝九二五 廿一＝廿八 王上十六〇。
九三一年	サマリアの邑建てらる。
九二五年	イスラエル王アハブ＝九〇四 ＝廿二〇四十 王上十六〇廿九。
九十八年	エリヤとエリシヤ預言者 王下十三〇。
九二二年	ユダの王ヨシヤパテ 王上廿二〇＝ 王下八〇十六 代下十七〇。
九一一年	シアルマレ子セル第二世＝八七六。
九〇五年	イスラエル王アハジアはアハブと一所に王と成つた。アハジヤは九〇四より自ら王となる 王上廿二〇五 十一＝五十三 王下一〇。
九〇四年	イスラエルの王ヨラム＝八九三 七＝九〇 王下一〇年。
九〇〇年	ユダの王ヨラム＝八九三 六＝廿四 王下八〇十 一〇 代下廿。
八九三年	ユダの王アハジア＝八九三 五＝廿九 王下八〇廿 〇一＝九 代下廿二。 アタリア

紀元前	聖経普通記事 記事
八九三年	王＝八八七 一〇 王下十 〇十＝ 代下廿二。
八八七年	イスラエルの王エヒユ＝八六五 ＝十〇 王下九〇。
八八七年	ユダの王ヨアシ＝八四七 〇十二〇 王下十一 〇＝廿四 代下廿三。
八六五年	イスラエル王ヨアハズ＝八四八 〇一＝九 王下十三。
同	ヨアシ＝八三二 〇十四 王下十三。
八六五年	ゼカリア預言者。
八五一年	ヨエル預言者。
八四八年	ユダの王アマジア＝八一八 四〇 王下十 五〇 代下廿。
八四七年	ガバデア預言者。
八三四年	イスラエル王ヤラベアム第二世＝七九二 四〇 王下十。
八三二年	ユダの王ウジヤ＝七五五 五〇 王下十 代下〇。 廿六
八〇六年	アモス預言者。
七九三年	ホセア預言者。
七九二年	希臘有史時代。
七七六年	イザヤ預言者。
七六九年	イスラエル王ゼカリア 王下十五〇。 八＝十二
七六八年	同 シヤルム、ミメナヘム＝七五八 王下十五〇。 十三＝廿二
七五八年	同 ペカヒア＝七五六 王下十五〇。 廿三＝廿六

紀元前	聖経普通記事 記事
七五六年	イスラエル王ペカ＝七三六 〇廿七 王下十五。
七五五年	ユダの王ヨタム＝七三九 裏七 〇一 王下十五〇。 廿二＝廿八
七五三年	羅馬府創設。
七四五年	テグラテピレセル第三世＝七二七。
七四〇年	ミカ預言者。
七二六年	イスラエル王ホセア＝ 五〇廿 王下十 一＝六 十七〇。
七二三年	ユダの王ヒゼキヤ＝六九五 〇＝廿〇 王下十八 裏廿六〇 ＝廿九〇〇 代下廿九＝。 廿二〇
七二二年	サルゴン＝七〇五サルゴンは七一〇メロダクバラダンに勝つてバビロンの王となる。 イスラエル人捕虜となる。 サマリヤ陥落。
	セナケリブ＝六八一。
	エジプトのテルハカ 〇廿一八 十九。 〇九
	ユダの王マナセ＝六四〇 一〇 王下廿 代下卅。 三〇
	エズラハドン＝六六八。
	アシユルバニパル＝六三八。 神武天皇御即位、日本紀元第一年。
	ユダの王アモン＝六三八 十九＝廿六 王下廿一〇 廿一＝廿五 代下卅三〇。
	ナホム預言者。
	ユダ王ヨシア＝六〇八 廿三〇 王下廿二〇、 代下卅五〇 卅四、。

紀元前	聖経普通記事 記事
七十八年	
七〇五年	
七〇一年	
六九五年	
六八一年	
六六八年	
六六〇年	
六四〇年	
六四七年	
六三八年	

紀元前	聖経普通記事 記事
六三六年	ゼパニヤ預言者。
六二六年	エレミヤ預言者。
六二一年	ホルダ女預言者。
六〇八年	ユダの王エホヤハズ 〇一＝九 王下十三
六〇七年	同 エホヤキム＝五九七 四＝廿四〇七 王下廿三〇卅。 ニ子ベ滅亡ぶ。 最初の「世界帝國」と稱ふバビロン建つ 前六〇。 五年
六〇六年	ハバクク預言者。 子ブカデ子ザルカルケミシにてエジプト軍に勝つ。
六〇五年	ダニエルはとらはれとなつてバビロンに行く。
五九七年	ユダの王エホヤキンとゼデキヤ 王下廿四〇八。 ＝廿五〇卅
五九七年	ユダヤから多數のとらはれバビロンに行く。
五九六年	エゼキエル預言者。
五八八年	エルサレム陥落し、燒かる。
五八六年	七十年間のとらはれの始。
五八一年	綴靖天皇（紀元八十年）。
五六四年（？）	神邇生る。

紀元前	聖經普通記事記事
五五一年	孔夫子生まる。
五四九年	安寧天皇（紀元百十二年）。
五三八年	メド、ペルシヤ第二、世界帝國＝三三一。
同	クロスユダヤ人を國へ歸す（嗣一）。
五二〇年	ハガイとゼカリヤ預言者（嗣一〇）。
五十六年	第二神殿できあがる。
五一〇年	懿德天皇（紀元一。五二年）　羅馬共和國。
五〇〇年（約）	ユダヤ人國へ歸る時代。
四七五年	孝昭天皇（紀元一。八六年）
四五八年	エズラ（學士）と子ヘミヤ（前四四四年）とエルサレムの城壁を修築し、歸還せる人民を整理す。
四四四年	子ヘミヤエルサレムに行く。
四二八年	マラキ預言者。
三九一年（約）	舊約全書の各卷定まる。
三九九年	ソクラテス死す。
三九二年	孝安天皇（二六。九年）
三四七年	プラトー死す。

紀元前	聖經普通記事記事
三三二年	アレキサンデリヤ港創設。
同	ユダヤ人多く此の地に住ふに至る。
三二二年	アリストーテル死す。
三二〇年	トロミ、ソテルエルサレムを陷る。
同	ユダヤ人多く埃及に移住し居る。
三一二年	スリヤ國のセルセデ王等の時代。
二九〇年	孝靈天皇（紀元三。七一年）　孟子死す（前二八。九年）
二八四年	希伯來語の舊約全書希臘語に飜譯せられ、セプチュアジントと稱す。
二五六年	周（支那）亡ぶ。
二三一年	秦始皇帝（支那秦紀の始）、韃靼人を追ひ、道路を通じ、運河を穿ち、萬里の長城を築く。
二〇六年	秦（支那）亡ぶ。
二〇二年	漢（前）の代起る（前二〇二年。後二三年）
一九七年	アンテオカス大王ユダヤを征服す。
一七〇年	アンテオカス、エピパ子スエルサレムを陷れ、神殿の中に偶像を安置す。

紀元前	聖經普通記事記事
一六七年	マカベ（愛國者）其の他ユダヤ國獨立の爲に奮戰す。
一六五年	「ユダ、マカベ」といふ大愛國者と大將の時代。
一五七年	開化天皇（紀元五。〇四年）
一四一年	シモン、マカベ猶太國を獨立せしむ。
同	希臘國羅馬帝國に屬す。
一〇九年	パリサイ、サドカイの名始めて史上に見ゆ。
九七年	崇神天皇（紀元五。六四年）
六三年	ポンペイ（羅馬の大將）エルサレムを陷れ、神殿の至聖所を瀆す。　ユダヤ國ロマの屬國となる。
五四年	クラサス（羅馬の大將）神殿の什寶を掠め、三萬の猶太人を奴隷とす。
四〇年	終の（祭司なる王）マカベ、アンテゴナス王となりしが、羅馬政府はヘロデを王となす。
三七年	ヘロデ大王エルサレムを領してユダヤの王となる。
三一年	ユダヤ國大地震。

紀元前	聖經普通記事記事
三〇年	エジプト、スリヤ（前二七年）等ロマの屬國となる。
一八年	ヘロデ神殿の修繕（殆ど新に）に着手す。
四年	ヘロデ死す。アケラオ猶太、サマリヤ、イドミヤの王となる。

耶穌基督の御降誕は世の所謂紀元の前五年の尾か、或は四年の始である。

（基督の御降誕の年を以て紀元の起因としたのは御降誕の時よりでは無く、紀元五百卅六年に至りて定めたのである、其時學士ダイオニシウスエクシグースはよく計算したが、誤つて實際より四年或は五年後れた者を定めた、故に御降誕は紀元前五年或は四年にあると知べし。此年表中福音書に記してある者は此改正紀元に從ひ、然らざるは普通紀元に從ふて擧げたのである）。

以下新約時代。

紀元後	聖經普通記事	紀元後	聖經普通記事
紀元前五年十二月(?)	イエスキリスト誕生。 御一代の記事は「四福音和合表」を參照すべし。	五二年	撒後書五二、ガラテヤ五五、マコ五六年㊟、コリントせんしょ五七年、ロマ五八年、コリントこうしょ五七、テモテ前五六年、ロマ五七年、羅哥前後書五七、テモテ後書五七、提ヅ四五年、ヤコブ六〇年、太ペテロ前後書六四年、ペテロ後書六五年、ユダ書六六年、ヨハネ默示錄六六年、ヨハネ一二三書六九年、ヨハネ福音書九〇年㊟
紀元前六年	天皇第廿五年 紀元六年。 支那漢哀帝建平二年。	五四年	
六年	ユダヤ國スリヤに合併せらる。	五五年	
八年	イエス耶蘇エルサレムの神殿に詣ず。	六〇年	
一四年	カイザル、アウグスト死す 前卅一年㊟。後一四年	六二年	
二五年	ポンテオピラトユダヤの方伯となる。	六四年	
二六年		六七年	
三〇年	イエス耶蘇の十字架刑 實は卅四年。	六八年(約)	
同	ペンテコステの日聖靈降臨 同上。		
三四年	パウロ基督を信ず 實は卅八年。		
三七年	信徒の數五千餘人。 カリギユラロマ帝となる 三七年㊟、四一年㊟。		
同	クラウヂオ 四一年㊟、五四年		
四六年	パウロ第一次巡回傳道。		
五一年	第二次巡回 五一年。エルサレム會議。 新約全書——福音書及び書簡——成る、撒前後書		

紀元後	聖經普通記事
七〇年	エルサレムの滅亡、ロマ大將テトス討手として包圍攻撃し、火、又食道を斷たれ、ユダヤ人百十萬人死し、十九萬人奴隷とせらる 路十九〇四十、一一四十四、太廿四。〇二 此の時より教會は世の宗教と哲學とに對して福音の眞理を擧證す（所謂辯證時代）七〇年㊟。二五四年
同	日本武尊東夷征伐 九七年㊟一一三。參紀元七五七年
九七年	第二世紀と第三世紀とは「教會師父」の時代、彼等は專ら基督の神性、人の罪、基督の贖罪によつて救はるゝといふ教理を辯論す。信徒の數五十萬人餘。
一〇〇年	クレメント死す。
一〇二年	イグナシアス（ヨハ子の友で四十年間アンテオケ教會の監督であり、偶像教の儀式に參與らず、獅子の穴に投ぜられて）死す。
一一五年	ジヤスチンマーター（殉教者）羅馬にて教育ある人の爲に基督教の眞理を說く、今年ロマにて首斬らる。
一六六年	ポリカープ（ヨハ子の弟子にてスムルナの監督を爲し、異端の攻撃に努めた高德な人）基督を棄てよと迫られ、「我は八十六年間主に事へ、主の御手よりたゞ聖恩をのみ賜はりぬ、いで我が王にして我が救主なる主を呪ひまつるを得んや」と答へ、從容として燒殺さる。
一六八年	イレニアス、（リオンの監督）初代の教會が受けた聖書各卷の目錄をかき、自ら初代教會の聖書と今日のものと同一なる證據となる、紀元二百二年に殉教す。
同	神功皇后新羅（朝鮮）征伐。
二〇〇年	テルトリアン多數の神學書を著述す。
二〇一年	第三世紀より第八世紀まで教會は內憂（異端）を攻撃し、大會を開いて教理の定義を明にす 二五四年㊟、七三〇年
二五四年	オリヅエン（有名なる學者で其の頃流行した哲學說に通曉く）基督教のみ人の靈性に滿足を與へるものと證す。
二八〇年	晉（支那）の代 二八〇年㊟、四一九年 百濟の王仁初めて論語、千字文を我に獻ず。
二八五年	

紀元後	聖經普通記事
二八六年	ロマ帝國東西に分かる、紀元三二五年コンスタンテン獨り帝となる。
三一二年	コンスタンテン基督教徒となる、これより基督教はロマ帝國に信奉せらる、コンスタンテン、コンスタンテノプル（今の土耳古の首都）を創設す。
三二五年	ニカヤ大會。アタナシヤス基督の神の子であるとの教理を辯證す。 ニカヤ信條（使徒信經）採用せらる。
同	アントニ修道院を開始す、彼は俸給を受けず、施濟を爲して一生を送る。
三四五年	ジエローム猶太のベテレヘムにて聖書を拉丁語に翻譯す。
三七四年	アンブロース（ミランの監督）讃美歌を修成し、音樂（多分ダビデの時よりあつた）を整理す。
三七五年	中世史一四五三年。北ヨーロッパ人種南漸し、ロマに來て、遂に占居す、ロマ帝國は全滅したれども、彼等基督教に歸依するに至る。
三八一年	コンスタンテノプル大會に於て聖靈の神たることを辯論、信條決定す。
三九五年	オーガステン（アフリカヒッポの監督となつた有名なる神學者）パプテスマを受く。
三九七年	クリソストム（コンスタンテノプルの監督にて（金口說教者といはれた人）懼るゝを知らずに惡弊を叱責す。
四三一年	エペソ四三一年、カルセドン四五一年、コンスタンテノプル三五三年又六八〇年の大會に於て基督は肉體になりたまふた神の子で、神性と人性との兩性より成立つたものなりとの教義を決す。
五〇〇年（約）	ロマ帝國は人心腐敗して遂に全帝國滅亡す四七六年。北方より來た人種（ゴス人、ハンス人、バンダル人）占領す四七六年―五三六年。歐洲封建制度始まる。 信徒の數百五十萬人。 百濟より佛像、經論を我に獻ず、欽明天皇十三年紀元一二一二年。 北周亡び、隋起る。 オーガステン（ヒッポの監督でない）英國に傳道す。
五五二年	
五八一年	
五九六年	

紀元後	聖經普通記事
六一八年	唐の代六一八年―九〇七年。
六三二年	マホメト死す。
六六七年	都を滋賀に移す。
六六九年	藤原鎌足死す。
六七〇年	藤原氏の時代紀元一三三〇年。
七一一年	サラセン人（回教徒）ヒスパニヤ（西班牙）を通つて歐洲を奪はんとして、チヤールスマーテル大將となり七三二年トールスに戰ひ、遂に回教徒を放逐し、歐洲の基督教始めて救はる。
七三〇年	教會の教理の組織の時代七三〇年―七五一七年。
八〇〇年	シヤレマン西歐の帝となる八一四年。
九六〇年	宋の代九六〇年―一二六年。
九九九年	歐洲の社會紛亂し、無知、壓制、飢饉、疫病等流行し、人々世の終末近しと思ふ。
一〇〇〇年	人は大に變つて力を受け、勤勉し、大會堂立ち、發明、發見頻に造る、要するに社會進歩の時代となる。 信徒の數五千萬餘人。

紀元後	聖經普通記事
一〇五六年	基督教會東西に分離し、西（羅馬）を中心とするの天主公教會（羅馬教會ともいふ）といひ、東（コンスタンテノプル）を中心とせるを希臘教會（正教會とも）といふ。 羅馬法王は帝王の如き權能を有つに至る、然し基督教會の爲には一大禍根をなす。
一〇九六年	十字軍起る、回教徒にエルサレム其の他の地を占領せられたれば歐洲人はこれを奪還さんとし一〇九六年より一二七〇年まで八回の大戰を爲し、其の軍は赤き十字架を旗章としたので此の稱を得た、遂にエルサレムを奪還したが、それが爲に二百萬人を戰死せしめたといふ。後ユダヤは回教徒たる土耳古の領地となつて今日に至る。 論理的に基督教を說明する時代、ヒルデブランド、アンセルム、アクイナス等輩出す一〇〇〇年―一三〇〇年頃。
一一〇〇年	
一一五六年	源平時代。
一一七六年	賴朝總追捕使となる。
一二〇〇年	拉丁語讃美歌の成りし時代。一三〇〇年頃。
一二〇五年	北條氏時代一八六―一八五年。 足利氏時代一八七―年。

紀元後	聖經普通記事 記事
一二六〇年	ゲン祖忽必烈立つ 一三二。
一二八一年	元寇の亂。
一三四八年	大砲始めて戰陣に採用せらる。
一三五〇年	ウヰクリフ聖書を英語に譯す。
一三六八年	明代 一三六八年。
一三九二年	朝鮮太祖李成桂（現李王の祖）即位。
一四五二年	印刷術發明（歐洲にて）。
一四五三年	コンスタンテノプル回教徒の手に落つ。
一四九二年	コロンブスアメリカ大陸發見。
一五〇〇年	大改革の時代。基督教徒大約一億人を數ふ。
一五一七年	宗教改革徐々起り、聖書と其の純粹なる教理を世に發表し、また教會の習弊を改善する目的にて起る。
同	信仰の告白を作る時代 一五一七年―一七二〇年、獨逸にルーテル、瑞西にズウヰングリとカルピン、英國にウヰクリフ一三五。一三〇年。テンデル 一五三五年、クラマー 一五三九年等宗教改革の大家輩出す。
一五一七年	プロテスタント派（俗に新教といふ、然し宗教改革は基督教の維新或は復古といふべし）起る、新教會と稱するがよし。これは一五一七年より一七三九年に亘りて漸々に成り、ルーテル教會は一五一七年、長老教會（我が國にて日本基督教會といふは此の派）は一五二〇年、バプテスト教會は一五二三年に起る。英國聖公會亦起る。
一五三二年	英國聖公會ロマ法王の主權を非認す。
一五三七年	ジエスイト派（天主教の一派）起る、彼等は最初平民に傳道する目的にて起りしが、外國傳道を始め、各國の有司と提携し、其の權威を借りて運動くを目的とする惡弊に陷るに至る。
一五四二年	家康生る。葡萄牙人始めて我に來る、彼等砲術を齎す。
一五八〇年	組合教會派起る。
一五八三年	ザピエー（天主教ジエスイト派）我に來り、傳道を始む 天正十一年。

紀元後	聖經普通記事 記事
一五八五年	秀吉基督教を禁ず。
一五八八年	我が國に於ける最初の迫害。
一五九〇年	家康江戸城（今の東京）を修築して居城す。
一五九二年	秀吉朝鮮征伐。
一五九七年	我が國天主教徒を迫害すること始まり、數年間繼續す。
一五九八年	ヘンリ四世（佛國）ナンテの條例を定めてプロテスタント派と羅馬教派と同一の權利を有するものとす。
一六〇〇年	闘ケ原の戰 慶長五年。
一六〇三年	德川家康征夷大將軍となる 慶長八年。
一六一八年	天主教とプロテスタントとの三十年戰始まる 一六四八年。
一六二四年	基督教（天主教）禁制 寛永元年。オランダ人出島に追はる 一六三九年。
一六三三年	公然の基督教徒無きに至る。
一六三六年	山田長政暹羅に死す。
	清朝起る。

紀元後	聖經普通記事 記事
一六六〇年	パンヤン天路歷程を著す 一六七二年。
一六八五年	ナンテ條例の改正。佛國プロテスタント（ヒユーゲノトと稱ふ）多く北米國に殖民す。
一七〇一年	英國にて外國傳道の組織成る。
一七一四年	デンマークにて傳道會國外に宣教師を派す。
一七二三年	丁抹國の傳道會モレビアン傳道會成り、ケーリ、トマス印度に派遣せらる。
一七三九年	メソデスト派起る。
一七四四年	友會起る。
一七六九年	ナポレオン 歐洲を風靡す、及び其の時代 一七六九年―一八二一年。
一七七六年	北米合衆國獨立 一七七六年―一七八三年。
一七八九年	佛國革命始まる（所謂「道理の世」を理想として、遂に「恐怖の世」となつた）人民の惡虐恰も惡鬼の如し。
一七九二年	英國浸禮教會傳道會起る 一七九二年。
一七九五年	倫敦傳道協會南米に宣教師を派す 一七九五年。

紀元後	聖經普通記事記事
一八〇〇年	傳道世紀にして、本紀は發明、發見の時期となり、學術勃興し、社會主義稱道せらる。
同	萬國傳道の第十九世。信徒の數二億人。
一八〇四年	英國及び外國聖書會社創立 一八〇四年。米國聖書會社成る 一八一六年。
一八〇七年	清國傳道着手、モリソン派遣 一八〇七年、ジヤヅスンビルマに遣はさる 一八一三年。
一八二〇年	太平洋諸島傳道着手、ハワイ 一八二〇年、フヰジ 一八三五年、ニユー、ヘブライヅ 一八三九年等。
一八三八年	ペルシヤ傳道 一八三八年。マクギルバレー暹羅傳道 一八四〇年。
一八四四年	基督教青年會ジヨージウヰリアムスの首唱にて倫敦に組織せらる。
一八五二年	天主教會傳道着手。
一八五四年	明治天皇。
一八五九年	米國提督ペルリ來る。米國及び歐洲諸國との通商條約成る 一八五四年―一八五九年。
	初めて(近代)宣教師來る、リギンス、ウヰリアムス、ヘボン、ブラナン、バラー、フルベッキ等。
一八六四年	初めてプロテスタント派信徒起る、佐賀の村田若狹等 元治元年。
一八六五年	救世軍ブース大將によつて英國に創設せらる。
一八六七年	英國長老教會臺灣傳道着手。清國內地傳道會成る。
一八六八年	明治天皇御踐祚 慶應三年。
一八六九年	德川慶喜大政を奉還す 同年。
一八七〇年	王政復古。鳥羽、伏見より始まり、內國に戰起る、所謂維新の戰。
一八七一年	組合教會傳道着手 明治二年。
一八七二年	正教會傳道着手 明治三年。
	廢藩置縣。郡建制度成る。穢多、非人の稱を廢す 明治四年。
	最初のプロテスタント派教會―橫濱海岸日本基督教會立つ。アメリカ浸禮教會傳道着手 明治四年。
	太陽曆を採用 明治五年。

紀元後	聖經普通記事記事
一八七三年	基督教禁止の制札を撤去す。日本メソデスト教會、美以教會傳道着手 明治六年。
一八七四年	復讐を禁ず。
	婦人嬌風會同盟成る 明治七年。
	民選議院設置の請願。佐賀の亂。臺灣征討。
一八七五年	基督教書類會社開業。エバンジエリカン、アソシエーション傳道着手 明治八年。
	千島、樺太交換。
一八七六年	聖書會社開業 明治九年。
	廢刀令。熊本、秋月、萩の暴動。
一八七七年	美普教會傳道着手 明治十年。
	西南の役。自由黨起る。
一八七九年	今上陛下御降誕 明治十二年。
一八八〇年	新約全書飜譯完成す 明治十三年。
同	世界信徒の數四億三千萬人。
一八八三年	基督教會(一派の名)傳道着手 明治十六年。
一八八五年	友會、またゼルマン、エバンジエリカル、ミシヨン傳道着手 明治十八年。
一八八六年	美以教會(南)傳道着手 明治十九年。
一八八七年	米國キリステアン、コンベンション傳道着手 明治十九年。
一八八八年	歐化主義隆盛の時 明治廿年。
一八八九年	舊約全書飜譯完成す 明治廿一年。
	憲法發布、信教の自由。
	南バプテスト、コンベンション傳道着手。基督教青年會成る。
	第一議會召集。
一八九一年	スカンデ子ビアン、ジヤパン、アライアンス我に、またカナダプレスビテリアン臺灣に傳道着手 明治廿四年。
一八九二年	ルーテル教會傳道着手 明治廿五年。
一八九四年	日清戰役 明治廿七年。
一八九五年	救世軍傳道着手、またキリステアン及びミシヨナリー、アライアンス同上、ヘルフジバー、フエイス、ミシヨン、同上 明治廿八年。

紀元後	聖經普通記事記事
一八九六年	セブンス、デー、アドベンテスト傳道着手。同胞教會同上（明治廿九年）
一八九七年	英照皇太后崩御（明治卅年）
一八九九年	內地雜居を許す（明治卅二年）
一九〇〇年	淸國義和團の亂。
一九〇一年	東洋宣教會傳道着手（明治卅四年）
一九〇二年	フリー、メソデスト教會傳道着手。婦人基督教嬌風會同盟成る（明治卅五年）
一九〇四年	日英同盟成る。
同	青年女子基督教徒協會成る（明治卅七年）
一九一二年	日露戰役。
一九一四年	明治天皇崩御。今上天皇御即位。
	歐洲大戰亂起る。

聖書の教ふる所に從ひ、世の末に於て起るべきことを總合すれば左順序の如し。

一 澆季の世、基督御再臨の前、罪は世界に周かるべし（提後三〇、同四〇、同三〇十、一＝五、一、二、三、十四）

紀元後	聖經普通記事記事
二	基督其の教會を迎へん爲の御再臨（撒前四〇十、三＝十八、哥前十五。〇廿三）
	世界の大艱難（撒後二〇、默五〇一＝、默十九〇、弗五〇、二＝十二、十八〇廿四、一＝十、廿七、哥後十、一〇二）猶太人救はる（羅十一〇廿。二＝卅一）
	基督其の教會を携へて來臨り（撒前三、撒後一〇、〇十三、八＝十、同二、默十九〇十、〇八、一＝廿〇三）一千年間世界を統御す（默廿〇、四＝六、提後二、哥前六。〇十二、〇二）
	審判（一）（羅十四〇、哥後五、哥前三〇、同四、同四。〇十、八＝十五、〇五、〇五）
	（二）（太廿五〇卅。一＝四十六）
三	最後の勝利及びサタンの全滅。
	最後の審判（默廿〇十、提後四、羅十四〇。一＝十三、〇一、十＝十二）
	地獄（默廿〇十、來六〇、同十〇廿、猶、提前六、太五〇廿、同十四、十五、七、八、六＝卅一、七、〇九、二、廿九、〇廿、同廿三、彼後二。八、〇卅三、〇四）
	天（一）（默廿一、羅八〇十、來一〇、彼後三〇。〇一、八＝廿三、十、十一、十＝十三）
	（二）（來四、彼前一、提後四、雅一〇、彼前五、腓二〇九。〇四、〇八、十二、〇四、＝十一）
	神、「これ神すべての物の上に主たらん爲なり」（哥前十五。〇廿八）

ノア、ノアの傳に就ては（創五〇廿、八＝九〇）、又辭＝契約。ノアとエノクとは洪水前の時代の義人で神と偕に歩めりと記いてある（創五〇、六〇。廿四、九）。エノクは洪水の審判の前に「死なざるやうに移されたり」（來十一。〇五）。夫で此時代の末期の大艱難の前に世より携へられんとする聖徒の儀表となつた（撒前四〇十、默三、但十二、太廿四、四＝十七、〇十、〇一、〇廿一）。ノアは世に存つて洪水の間保護られて居つた。大艱難の間世に在つて保護られんとする猶太人の儀表である（耶卅〇、默十二〇十、賽六十五〇、六十六〇、默廿一。五＝九、三＝十六、十七＝十九、廿＝廿二、〇一）。方舟は基督の儀表で方舟の中に在る者が洪水より救はれた如く、基督に在る者（信者）は未來の審判より救はるゝ（來十一、弗一〇一、三、四、〇七、六、七、十一、十三）。「瀝青」（創六〇、十六）といふ言は（利十七、〇十一）の「贖罪」と同語である。贖罪に由つて信者は審判の水より救はれ、また基督に於ける屬として安全である。方舟には尙一の意味がある、其は大艱難の時（太廿四〇、廿一、廿二）主を賴む猶太人が（辭＝遺餘者）生存つて保護れんとする事を指すのであると見える（創五〇廿、撒前四〇十、來十一、賽二〇、廿六〇。二＝廿四、五＝十七、〇五、十、十一、廿、廿一）。

のがれのまち（逃遁邑）は六箇所あつた。ヨルダンの東部に三箇（申四〇四十、一＝四十三）、西部に三箇（書廿。〇七）。此は皆レビ人の邑であつた（申四〇四十。一＝四十三）。故意でなく誤つて人を殺した者は復讐する者の手より救ひ出さるゝ爲に逃ぐべき處になつて居つた（民卅、申十、書廿。五〇、九〇、〇）を見よ。

のこれるもの（遺餘者）、何程教會が衰微へても常に忠義な「遺餘者」がをつた。イスラエル國民の中に「イスラエル」といふ靈的な眞實の信者があつて、又現在もあり、又終局まである。エリヤの時代にバアルを拜まず、エホバを耳拜む七千人が有つた（王上十九。〇十八）。イザヤの時代に僅少と雖遺餘者があつた（賽一。〇九）。捕虜となつて居つた時代にもエゼキエル、ダニエル、シヤデラク、メシヤク、アベデ子ゴ、エステル、モルデカイ、如き忠義無二の猶太人があつた。捕虜の中の一部分はバビロンからエズラと子ヘミヤとに導かれて歸國つた。基督が世に降り給ふた時パプテスマのヨハ子、シメオンとアンナ、またエルサレムにて贖を望める者もあつた（路二〇。卅八）。現代には信者なる猶太人がある（羅十一、〇四、五）、然し來らんとする大艱難の時にイスラエルの或部分は耶穌をメシヤとして信じ、教會が世より携へられて後耶穌の證人となる（默七〇、三＝八）、辭＝再臨。其中には殉教者となる者もあり（默六〇九、＝十一）、又死なずに千年間の王國に入る者もある（亞十二〇六。＝十三〇九）。大艱難の時に遺れる者の事が詩篇に記いてある、又羅馬書十一章を見よ、またイスラエル（創十二、羅十一、〇二、〇廿六）王國（創一〇廿、亞十二。六＝廿八、〇八）。

ノステックは（ノステック派）は最初の教會に起つた大異端の始のもので、百廿年から二百七十年の間熾盛になつて居つた、使

徒行傳緒言を見よ。ノステックといふ語は聖書に見えないが、哥前二〇に「智慧」とあるはノステックといふ語である。此傲慢なる奇異な事を教へるノステック派によれば「我等のみ眞正の智慧がある、我等耳奥義の智慧を以て宇宙や存在の理が解る」と。其智慧、其眞理は（一）二の物即ち靈と物質とである、靈は善で物質は惡であり、兩方も（靈と物質、善と惡）永遠より存在して居るものである。（二）善惡より物の出る事がある、其出物を各エオンといふ、併し全體なる者としていへばプレロマといふ。（三）世造といふ者がある、其はエオンの中に最低いエオンが出て、靈と物質との間に立ち、近處の元素を以て世界等を創造つた。（四）罪といふ者がある、罪は物質に附屬物であるから物質が入つて居る物に罪も含つて居る。（五）救拯といふ者は靈を物質より分離すのである、離す者は最高いエオンなる基督である。物質に惡があるから基督の肉體は眞實の體でなく、唯形狀耳で人の目から視れば一箇の外觀であつたと。（六）ノステックの教へる道德は肉體に慾がある、併し肉體は物質即ち惡が附屬て居る物である故諸の慾を制へなければならないと。右の異端に對して使徒等と最初の教會の先輩者とはよく答辯した哥前二〇、西一〇、九、十。又ヨハ子の書いた物には基督、罪、神、宇宙、救拯等に關きて眞正の教義を宣べて居る。

パアル、往昔からピニケ人とカナン人との拜んだ神で、日輪であるとの說がある。禮拜は不潔を極めたといふ。此の名を有つた神が他に多くあつた。猶太人が誤つて拜したのは大抵此の偶像であつた。パアルとは主といふ意で、イスラエルの王アハブがピニケのシドン人の王の女イゼベルを娶つた時パアル教がイスラエルに入つて旺盛になつた。パアルを天然のいのち即ち土にも家畜にも生ずる力を與へる者として拜んだ。パアルといふ名は地方に由り變つた、例へば「パアルペオル」民廿五、〇三。崇邱でパアルを拜み、人間を犧牲にする事があつた耶十九、〇五。祭司が小刀をもつて己の身體に傷くる事もあり王上十八、〇廿八、又不潔な事もあつた王上十四、〇廿四、パアルは月の女神アシトレテ（辭＝アシトレテ）にも關係があつた。パアルの祭壇の傍にアシラの像のある事（辭＝アシラ）もあつた士六、〇卅。一時イスラエルに旺盛になつたパアル教はカルメル山で預言者エリヤに非常に王上十八、〇攻擊られた。エヒウ王は熱心にパアル教に反對したが、其邪教は多少國に存つて居た。ヒゼキヤ王も能く反對運動をした何二、〇八、四〇、十三。ユダではヨシア（王）がパアル教を抑へた王下廿三、〇四、五。エレミヤと他の預言者等も大にパアル教と奮戰つた耶十五、〇四、五。

パウロ（保羅）、パウロに就ては使徒行傳七章から終局まで、使徒行傳の緒言及び各書翰、羅馬書から希伯來書を見よ。

はか（墓）、希伯來人は天然の洞穴に屍を葬つた創廿三、〇九、賽廿二、〇十六、太廿七、〇六十、約十一、〇卅八。此洞穴を廣くする事もあつたが、此中の底に穴を堀り、其上に蓋を置く事もあり、壁に棚を堀る事或は磐に横穴を鑿け、又箱の形狀に堀る事もあつた。あまり棺を使用ゐないが、富者は石の棺を用ゐた。洞穴或は横穴でも其口へ石の蓋をし、封印する習慣があつた約十一、〇卅八、太廿七、〇六十、其は猛獸が死骸を荒さない爲である。また園に設ける墓もあつた王下廿一、〇十八、廿六、併し大抵は邑の外にあつた、墓を白く塗る事もあつた太廿三、〇廿七が、裝飾や消毒のため計りでなく、能く見えて人が接觸つて穢れない爲であつた。石碑と（墓標）石造の建物ともあつたが、稀であつた王上廿三、〇十七。家族は一緒に一の洞穴に葬られる事が多かつた母後二、〇卅二、王上十三、〇廿二。貧者の爲に墓地が備へてあつた太廿七、〇七、辭＝陰府。

はくがい（迫害）に就ては辭＝けうくわいれきし。

バシヤンはヨルダンの東部に在つてヨルダンの上流の方からアラビアの沙漠の境界迄の國で、石垣のある邑が六十あつた申三〇、四、五、王上四、〇十三。其國にはアブラハムの時に體の巨大なるレパイムといふ人種が居つた創十四、〇五。其人種の最後の王はオグといふた民廿一、〇卅、三＝卅五、申三〇、一＝七。マナセの支派が其國を有つやうになつた申三〇、十三。バシヤンの名物は牛特廿二、〇十二、結卅九、〇十八、羊申卅二、〇十四、橿樹賽二〇、十三であつた。

バテは凡そ一斗五升に當る王上七、〇卅六、卅八、代下二、〇十、四〇、五、第七、〇廿二、賽五、〇十、結四十、五〇十、十一、〇十四、辭＝容積量。

パトモス、小亞細亞の西南、クレテ島の東北にある樹の無い周廻六哩の小島である、ヨハ子は此の島にある時默示錄に記した異象を見たのである默一、〇九。

パビロン、パビロン帝國の首府であつた。バベルの塔の建てられた位地にノアの曾孫ニムロデが（紀元前二千二百三十年に）パビロンを建てた。其後紀元前約廿世紀の半頃ハムラビ王の京城と成つた。紀元前六世紀中子ブカデ子ザル王の時代に最も盛であつた。ニ子ベには劣つたが、非常に大なる市邑で、其形は正方形、市邑の中央を北西の隅から南東の隅にとユフラテ河が貫流して居つた。正味四里四方の都會で、今のロンドンに五倍し、二重の石壁を繞らし、延長十六里、高さは三十丈、厚さ八丈、悉皆で一百個の青銅製の門があつて出入をなし、市街は莊大なる店舗、美麗なる別莊、宮殿、社堂又善美を盡せる花園まで備へら

れ、家屋と塀とは皆煉瓦であつた。勿論今は滅亡して一の舊址たるのみである（賽十三〇十、十四〇一、廿一〇、四十六〇、四十七〇、耶五十。三〇＝廿三、一＝十、一、二、一＝三、一〇）。バビロンの市邑が再建られないのは（賽十三〇十、耶五十一〇廿四＝廿九＝廿二、六、六十二＝六十四）によつて解る。預言書に記いてある「バビロン」は實際存在したに相違ないが、たゞ市邑といふ意もあつて、世の政治社會等の混雜なる狀態を（賽十三〇四）「バビロン」といふたこともある。原語は「混雜」といふ意、「異邦人の時」（路廿一〇廿四、默十六〇十四）を見よ。賽十一章を見ればイスラエルが其國に居つて神の恩惠を萬民の上に來らすのは神の設立んとし給ふ秩序である、さうでない者をば「バビロン」といふ。「バビロン」とはまた腐敗した政治や宗教をいふこともある。（「エジプト」とは世中、「二子べ」とは世の傲慢と榮華といふ義である）。宗教的「バビロン」は政治的「バビロン」（異邦人の全世界帝國）に虐待され（默十七、〇十六）政治的「バビロン」は御再臨の時主耶穌基督に亡ぼさるゝ（默十九〇十、九＝廿一）、又（默十八〇二）を見よ。

はふりつ（法律）に就ては辭＝律法。

パプテスマ、基督の立てたまふた禮典が二個ある、即ちパプテスマと晩餐の禮とである、「禮典」の條を見よ。人は聖靈の御感動で更生る、「うまれかはり」を見よ。其の時人は罪を棄て、「かつれい」を見よ、神に心を潔められ、聖別していたゞき、印證として其の印象パプテスマを受くるのである。パプテスマには三個の意味が教へらるゝ、即ち（一）印象であつて、水をもて身體を洗ふ如く、基督の贖罪の血をもて靈魂を潔めるのである（徒二〇卅、八、四十一）。目に見ゆる水は目に見えない基督の贖罪の血の結果を示す。（二）印證であつて、悔改めた信頼者がパプテスマを受ける時は恰も神が其の印を其の人の身に捺したまふ如く、證をするのである。（三）儀式であつて、信者が教會のものとなる神聖い禮典である。されば志願者は聖父、聖子、聖靈の名に入れられてパプテスマを受けなければならぬ。耶穌が少しの罪もないのに何故悔改の印象なるパプテスマを受け給ふたかといへば信者の代表者とし、模範として受けたまふた樣である、耶穌は程なく預言者、祭司、王の職教に任じられて膏を灌がれんとし給ふ時であつた。耶穌の儀表レビ人なる祭司は先に水で聖別められて後膏を灌がれた（出廿九〇、四＝七）、然し基督も後に祭司の職務（來九〇十四）を盡し給ふた（太三〇十三＝十七）にある如く膏（聖靈）を灌がれ、其前に印象としてパプテスマを受け給ふた。

パプテスマ――（聖靈の）、聖靈は基督によつて信者に與へらるゝのであるが、ある信者には聖靈の特別なる潔むる能力（徒十五、〇八、九）、また傳道する能力（徒一、四〇、〇八、卅一）を與へらるゝことがある。而して此の能力を與へたまふ者は基督である（太三〇、約一〇。十一、卅三）。また此の能力はパプテスマを受けない前に與へらるゝこともあり（徒十〇四十、四＝四十八）、パプテスマと同時にもあり（徒九〇十、七、十八、十九〇、一＝六）、或はパプテスマの後にあることもある（徒二〇、卅八）。此の能力を受くる方法は信じ（加三〇、十四）、求め（約七〇、卅七）、願ふ（路十一〇、九＝十三）ことである、凡ての信者はこれを願ふて受くべき筈である、辭＝よみ。

パプテスマのヨハ子、ヨハ子は人々に基督を受くる準備として悔改めよ、心を潔めよとすゝめ、悔改めた人に悔改の印象としてパプテスマを施したのである（太三〇）。

パラダイス（樂園）、本とペルシヤの語で、原義は「遊園地」（また樂園）であつたが、後には救はれた人の此の世を去つてから往く幸福な所を指す語となつた（創二、〇八、路廿三〇、四十三、哥後十二、〇一＝四、默二。〇七）。

パラム、紀元前大凡一千四百五十年頃の人でメソポタミヤの預言者である。イスラエル人がカナンの地に入らうとした時モアブの國に居つたことがある、其の時モアブの王パラクはパラムを召んでイスラエル人を詛はせやうとした。然し神はパラムを戒飭め、（またパラムの乘つて居た驢馬が人の言語をもて詛ふことを止めたので、民數紀略廿二〇廿八を見よ、）パラムはイスラエル人を祝してモアブ人を詛ふに至つた。然しパラムは善くないことをした、即ち賄賂を取り、またイスラエル人が偶像を拜み、不潔を行ふやうに誘へよとパラクに勸めたことである（默二〇、十四、彼後二〇。十五、十六）。

パリサイ人とは「聖別した人」といふ意で、猶太人の中の一宗派であつた。猶太人がバビロンより還つてきた時分預言者が居なかつたので信心深き「チヤセデム」「聖者」といふ人々が起り、バビロンから還つてきた猶太人の子孫に律法をよく守らせた。本來パリサイ人は活る信仰を有つて居つたが、漸次と律法の文面を重んじ過ぎて形式的になつた。パリサイ人は神はモーセに舊約全書に記いてある律法ばかりを予へたまふたでなく、其他口頭で樣々の律法を教へ給ふたとはパリサイ派の主張で、此等の律法を聖書と同じ樣に鄭重にして居つた（太十五、可七〇八、加一〇。二、三＝十三、十四）。パリサイ人は自己の宗派を眞實と信じて其宗派から離れないと誓つて居つた。彼等は熱心克己、自分は義人（路十八、〇九）と自信し、自ら罪あり、乏しとは感じなかつた（路七〇。卅九）。パリサイ人は他の衆人よりも耶穌を迫害し

た、又耶蘇に嚴しく詰責られた 太廿三〇十 路十一四。貪慾深く、野心に滿ち苦々しき擧動をなして恥づる所なき人物となつた。彼等の中からニコデモ、ヨセフ、パウロの如き善い人もでたが、大抵は悔ひ改むることをせず、偽善者で終つた。然れば柔和なる基督も彼等の僞善を惡んで非常に彼等を叱責りたまふたことがあつた。

バルナバ、「マコ」を見よ。

ハルマケドン、アルマケドンに同じ。

パロ、埃及王の職名である。モーセの時代にイスラエル人を壓制したパロの名は「大なる家」の意である。「エジプト」を參照せよ。

パロのこゝろ（パロの心）、神がパロの心を剛愎にしたまふたといふ意はパロが神の行ひ給ふた奇跡を見、モーセとアロンとが神に遣された證據を見てもパロは己の心を頑固にした、神がパロに此くせねばならんと要求なされた時、パロは拒んで己の心を頑固にした、光を棄て服ふ可き者に背くならば必ず本心と心とは頑くなり剛愎になる 羅九〇十、又一旦神は人に自由な意志を予へ給ふたから其自由を一方からいへば奪ひたまふことはない。

パンだね（酵）、形容語として惡い意で、隱れて動作く惡である 哥前五〇、惡毒と暴很 哥前六八、惡教義 太十六。パリサイ、サドカイ、ヘロデの黨の事 太十六 可八〇。パリサイ人の缺點は心に就て疑惑を抱いてをつた 太廿三、廿五。ヘロデの黨は世中の事又猶太人の中にあるヘロデの政黨である 太廿二〇十 可三六。創十九〇三參照。然し太十三〇卅三を善き意に解する人もある。

はんさい（燔祭）、「そなへもの」を見よ。燔祭の肉が燒盡くされたといふこと、罪人が其の身を無條件にて神に獻げて了つたといふこと、また物質なる此の世に屬するものが精神的のもの、即ち此の世の中より潔められたものとなつたといふことである。

ばんさん（晩餐）、聖餐、また聖晩餐といふ。基督が其の贖罪を紀念せしめん爲に創設けたまふた禮典である、「禮典」を見よ。少許のパンを食ひ、葡萄酒を飲みて、殊に基督の十字架の死を記え、基督に交り、また目に見ゆる飲食物を身體に入るゝ如く、目に見えぬ基督を精神的に受けるのである。此の晩餐式の儀表であらう。

ひ（火）、犧牲をば火で燒いて神に獻ぐるやうに御命令があつた。直接に神から犧牲を燒く火の出る事もあつた 利九〇。此火をたえず燃して惱ないやうにした 利六〇九、又代下七 十六〇 王上十八〇 代上廿一 廿三 廿四 代上廿二 廿六。火といふ者は神の聖潔の儀表である 哥十二、（一）神の惡いとし給ふ者を審判くものとなり 創十九〇 河九〇四十 三廿四十八 默廿〇。（二）神の善とし給ふ者を表す者となり 出三 復前一 出十三。（三）物を潔むる者となる 瑪三 二廿十四。

ひつじ（羊）、猶太國では羊を飼育することが盛であつた。羊は性質の柔和なもの、また有益なもの、肉は食物となり、毛は織物となり、潔い動物であるから犧牲として多く用ゐられたのである。耶蘇は御自分を牧者に、信者を羊に譬へたまふたことがある。羊の牢といふは夜分羊の休む所で、狼などを防ぐ爲に堺をつくつてをいた。また牢を教會とし、御自分を門（牢の）として教へたまふたこともある。羊は自分の牧者の聲をよく記えて居り、牧者は各羊に一ヶ名をつけてをいて、遠くから呼集め、貢ふては往かす、先に立つて導くのが常である。

ひとのこ（人の子）、猶太人として耶蘇はダビデの裔、神の懷より來り給ふたものとして神の子、人間となり萬民の代表者として人の子と稱はれた 哥前十五〇四。基督は猶太人のため耳でなく、萬民との關係を以て世に降り 路十九、十字架に死し、甦り 太十二〇四十 二十〇十 八十九、再世に臨らんとする 太廿四〇卅 路十二 七廿四十 〇四十 三〇 十二 雙七〇 九〇 一卅二 〇七 十三。事を語つた時に己を人の子と言ひ給ふた 約一〇四十 九廿五十一 太十〇五、。人の子として人間に恩惠を與へんとする 三〇 十五 〇三 十四 六、七 〇二 〇七 太廿三。人の子として諸の審判をなさんとし給ふ 約五〇廿 二廿七。

ひながた（儀表）、は眞理を含み眞理を教へる者である。聖書にある儀表は神の決定め給ふ者で 哥前十〇、必ず儀表に對して實物があ

り、儀表は專ら舊約にあり、實物は多く新約にある、譬へば舊約時代の儀表なる犧牲は新約時代の實物即ち基督に對するものである。儀表には（一）人あり 羅五〇。十四（二）事件あり 哥前十〇十一（三）物あり 來十〇。二十（四）禮拜物等あり 來九〇。十一、また儀式もある 哥前五。〇七 出埃及記と利未記との緒言を見よ。

ヒビ人、元はカナンに居た人種であつた 創十〇。十七 出三〇。十七 書九。〇一 シケムにも 創卅三。〇十八 卅四。〇二、レバノン山の近所にも居つた 書九〇。一、七 ヨシユヤを欺き、其の時からイスラエル人の僕となり 書九。〇 後にソロモンに事へる者となつた 王上九〇。廿＝廿二

ぶだうしゆ（葡萄酒）、聖書には八の異つた言を以て飜譯してある、（一）「ヤヰン」は百四十二個所にあつて、醱酵した種々の葡萄酒を指す 創九〇。十四〇。十八 母前廿五〇。卅六、卅七 雙廿八。〇一 耶廿三。〇九 又夫よりもよい意味に於て 創四十九。〇十二 雙九。〇七 民六〇十。三＝廿 出廿九。〇四十 利廿三。〇十三 民十五。〇五 （二）「チロシ」は舊約全書の三十四個所にある 何四〇。十一 鹿三。〇十 雙六十。二〇八 耳二〇。廿四 米六〇。十五 （三）「チエメル」は八個所 申卅二。〇十四 雙廿七〇。二、三 鹿六。〇九 （四）「シエカル」は大麥と蜂蜜が棗とで製へた濃酒 民廿八。〇七 申十四〇。廿五、廿六 （五）「ハセス」は新しい甘い葡萄酒 雙四十九。〇廿六 耳三〇十。七、十八 慶九〇。十三 （六）「ソベ」は種々の醉せる濃酒 雙一〇。廿二 何四〇。十八 （七）「ミムサク」は混つた葡萄酒 鹿廿三。〇卅 雙六十五。〇十一 （八）「シエマリム」は古い葡萄酒 詩七十。五〇八 雙廿五。〇六 播一〇。十二 耶四十八。〇十一 又其他乾葡萄の塊或は舍利別の塊といふ物もあつた 母後六。〇十九 代上十。六〇三 駁二。〇五 何三。〇一、辭解「さけ」。

ふるきひと（舊人）、弗四〇廿二、西三〇九。「舊人」とは生來の自然に罪を犯す汚れた心といふ意である。羅六〇六 にある「舊人」は生れたまゝの人といふ意であるが、弗四〇。廿二 西三〇九 の「舊人」は生れたまゝなる人の行爲といふ意である。神の方面からいへば信者は基督と一體なる者故信者の舊人は基督と偕に十字架に釘られて既に死んで居る、併し信者の方面からいへば信者は決心して舊人を脫去て新人を衣、舊人を十字架に釘けた者と意はなければならない 西三〇八。＝十四 弗四〇。廿四 辭解あたらしきひと。

ふくいん（福音）、父たる神があり、救主の贖罪によつて人を救ひ、其の聖き靈を人に與へ、救はれた人を教へ、潔め、活かし、導き、慰め、又永生を與へ、永遠の幸福と發達と功績とを加へたまふといふ、これが「福音」の大意である。（一）福音とは喜の音といふ意である。（二）四の方面から解明がある、（一）「王國の福音」、是は即ち神が母後書七〇八に從つて政治的に又靈的にもイスラエルに關する萬國の王國を設立せんと爲給ふ。其王はダビデの後嗣たる耶穌基督である、千年の間人間社會に於て神の義が顯はれ行はるゝに至る 太三。〇二 此福音が專ら傳へらるゝのはパプテスマのヨハ子の時から耶穌の衆人より棄てられた時迄、又大艱難の間に耶穌が榮光の中に臨らんとし給ふまでの時である 太廿四。〇十四 （二）「神の恩惠の福音」とは耶穌基督が世の罪を負はんが爲十字架に死に、甦り給ふた事に由りて之を信ずる者は義とせらるゝ、福音は律法によりて詛はれた人を救ふので「神の恩惠の福音」ともいひ 徒廿〇。廿四 神の愛より出るものである故「神の福音」羅一〇。一 ともいひ、基督の犧牲に由るので「基督の福音」哥後十〇十四 とも言ひ、榮に居られ衆の人を榮に導き給ふ 來二〇。十 神に關する事である故「神の榮の福音」ともいふ 提前一。〇十一 哥後四。〇四 、すべて信ずる者を救はんとの神の大能 羅一〇。十六 である故我儕を「救ふ福音」ともいひ、儀式によらずして救ふ福音である故「割禮を受けざる福音」加二〇七 ともいひ、我儕が神と和ぎ、眞正の平安を予へらるゝ故「和平なる福音」とも言ふ 弗六〇。十五 （三）「永遠くある所の福音」默十四〇六 との意義は大艱難の末に、諸國の審判の前に於て世の衆人に 太廿五。〇卅一 宣傳へる福音であつて、專ら審判の事であるのに猶太人と大艱難中に救を得たる者とにとつては喜の音になる樣である 默七〇九。＝十四 路廿一。〇廿八 詩九十六〇。十一＝十三 賽卅五〇。四＝十 （四）パウロのいふ「我が福音」羅二〇。十六 、是は「神の福音」と同じであるが〔（二）を見よ〕。其結果となつて居る所は、信者が世より選ばれ、種々の緣、位地、特權、責任ある教會の事とパウロの福音に加へられて居る、以弗所書と哥羅西書とを見よ。また「異なる福音」もある 加一。〇六 哥後十。一〇四 、是は眞正の福音ではない、此異なる福音は恩惠のみに由りて救はれ保護られ完全せらるゝ事を拒み、人間の所謂功績を多少依賴み救はる可き者であるといふ、例へば加拉太人は法を賴み、哥羅西人は 西二〇。十八 の如き事を賴んだ。

ペテロ、彼得前書の緒言、また辭＝弟子を見よ。

ベテレヘム、エルサレムから五哩（二里餘）許南方に離れた邑で、ダビデ王の住つたことがあるので、「ダビデの邑」とも稱ふた。基督が此の邑に生まれたまふたので殊に著名である、太二〇十六を見よ。目下は人口大約五千である。基督が生まれたまふた場所なりと言傳へて居る一の洞穴がある、後に教會の集會の爲に用ゐたので、此の洞穴は最も古い禮拜堂となつた。ベテレヘムは「パンの家」といふ意味であるが、此の邊の土地が豐饒であつたからであらう。ゼブルンの支派の地に同名の邑があつたがつまらぬ所であつた。それと混じない爲に此をベテレヘム、エフラタといふたこともある 米五。〇二

ベニヤミン、イスラエル（即ちヤコブ）の十二人の子の一人て、ラケルより生まれた。其生地はベテレヘムであつた。而して其子孫の住ふた地をベニヤミンと稱したのである。ソロモン王の死後イスラエル國が南北兩朝に分れた時此支派はユダの方に屬して猶太王國となつた。

ペレアはヨルダン河の東方に沿ふてガリラヤ湖と死海との間にある國であつた。基督は死の前三ヶ月間屢々ペレアに傳道せられたことがある。

ヘブル或はヘブライ、アブラハムの孫にヤコブといふ人があつたが、後に神の御教示でイスラエルと改名をしたのである。此の事情で神の方面から見る猶太人はイスラエル人といひ、ヘブル語を用ゐて、昔時の律法を守る人の方面から見る猶太人はヘブル人といはれた。ヘブルと稱へた理由は一定し難いが、カナン人がアブラハムを「ヘブル人」といつたのに始まつたやうである。ギリシヤ語を用ゐる猶太人をば希臘人といふた。

ヘブロンはユダの山の地方の古い邑で、アブラハムの時代に既にあつたことが見える（書十五〇十。三、五十四）。此處でサラが死に（創廿三〇、二十廿）、アナキ人も居つた處である（書十四〇。十十四）。カレブは此邑を取つた（土一〇十。十五）。またヘブロンは逃遁の邑の一であつた（書廿。〇七）。ダビデ王は七年半の間ヘブロンに居つて國を統治めた（母後二〇一。三、十一、卅二）。現今も衰微へない邑である。

ベルセブル、蠅の偶像。穢いもの。惡鬼の首（太十〇、廿五）、（太十二〇、廿四、廿七、可三〇、廿二）、（路十一〇十、五、十八、十九）をいふ。

ヘロデ、聖書に見ゆるヘロデは（アケラチを加れて）八人ある。ヘロデ大王、其子アケラチ、ヘロデピリポ第一世、ヘロデピリポ第二世、ヘロデアンテパス、其孫のヘロデ（徒廿五、〇十三）、ヘロデアグリッパ第一世、と其曾孫ヘロデアグリッパ第二世。（一）ヘロデ大王（太二、〇一、路一、〇五）は紀元前三十七年から後四年迄ユダヤの王となつて居つた。彼はエドム人で權力ある虐王、十度妻を娶り、よく羅馬の政黨の機嫌を取り、ユダヤに劇場、競馬場などを設け、饑饉の時に許多の金を寄附し、又紀元前十九年から十年間猶太人を喜ばす爲神殿を改築をした。己の王位を安んずる爲自身の妻子をさへ殺し、本心に責られて憂鬱の人となり、其苦慮、混雜の中にダビデの皇室の新王が生れた事を聞き、彼を殺さうと企て、ベテレヘムの男兒を殺した（太二〇一。十九）。終に不治ない病氣に罹り、死

なんとする時重立たる猶太人をエリコへ召集め、幽閉めて殺せと自分の姉妹に命じた。斯く許多の人々が殺されるならば己の爲でなくとも兎に角己の死ぬ時に許多の人々が悲歎むと意ふた故である。併し此企圖は實行されなかつたので衆人は非常に喜んだといふ。（二）アケラチ（太二〇、廿二）はユダヤの王となり、紀元前四年から紀元後六年迄支配した。（三）ピリポ第一世はヘロデヤを娶つた（太十四、〇三、可六〇、十七、路三〇、十九）。（四）ヘロデピリポ第二世（路三、〇一）は紀元前四年から紀元後三十三年までガリラヤの東國の分封の君であつた。（五）ヘロデアンテパスの母はサマリヤ人であつた、アンテパスは其兄アケラチと偕に羅馬で教育を受け、ガリラヤとペレアを領分として貰つた。其異腹の兄弟ピリポの妻ヘロデヤと不義を行ひて娶つた（太十四、〇三、四）。ヘロデヤはアンテパスを唆してバプテスマのヨハ子を殺させた（太十四〇、一十三）。耶穌が十字架に死給ふた時ヘロデはエルサレムで、耶穌を嘲弄した（路廿三〇七、十二、十五、徒四〇、廿七）。後にヘロデヤはアグリッパを妬み、アンテパスと共に羅馬へ行き、羅馬帝に王の位地を懇請つたが、アグリッパは書簡を以てアンテパスを訴へた故、遂に羅馬帝はアンテパスを佛國の里昂へ流罪にした、アンテパスは紀元前四年から紀元後三十九年迄ガリラヤの分封の君であつた（路三〇、一十九、九〇、十三〇、廿一、廿三、〇七、太十四、〇二、三、可六〇、十四）。（六）（徒廿五、〇十三）のヘロデはヘロデ大王の子アリストブラスの子で、紀元後四十一年から四十八年迄カルセスの王となつて居つた。（七）ヘロデアグリッパ第一世はヘロデ大王の子アリストブラスの子で、紀元後四十一年から四十四年迄ユダヤの王となつて居つた、羅馬で教育を受け長い間同處に止まつた居た、漸次と領分が擴くなり、遂にはヘロデ大王の領地と同樣になつた。ヘロデアグリッパはヤコブを殺し（徒十二、〇一、二）、ペテロを獄にいれた（徒十二〇、三十九）。人に譽られた時榮を神に歸せざる爲蟲に噬まれて死んだ（徒十二〇、廿三）。四人の子があつて其中の三人の事が聖書に書いてある、即ちベルニケ（徒廿五、〇十三）、デルシラ（徒廿四、〇廿四）、アグリッパ第二世。（八）アグリッパ第二世も羅馬で教育を受け、紀元後四十八年羅馬帝クラウデからレバノン山地方の小領地を與へられ、王となつた。此アグリッパ王の前でパウロは己を辯護した（徒廿五〇十三、廿六〇卅二）。

ヘロデのともがら（ヘロデの黨）、基督の頃の猶太にあつた政黨である。彼等の主義、政策は當時猶太國が羅馬に征服せられて居つたので、猶太國を獨立國とし、ヘロデを以て國王としやうといふのであつた。彼等はパリサイ派に反對せる政派でありながら彼の派と合同して基督を排したことがあつた（可三、〇六、十二〇、十三）。

ペンテコステ、 「いはひ」の條（二）、又徒二〇を見よ。

ヘテびと（ヘテ人）、 イスラエル人がカナンに入らない遠き曩昔ヘテ人の細亞の西海岸、北部カパドキア、南部カナンであつた。其帝國には二の都會があつて一はユフラテ河にあるカルヘミシ、他はオロンステ河にあるカデシであつた。五百年間埃及と戰爭ふた。紀元前一千百年から四百年間アッスリアの攻撃を防禦いだが、紀元前七百十七年アッスリヤ帝サルゴンに敗られた。此帝國には種々の支派があつて、各王をもつて居り、アブラハムの時には南パレスチナに小殖民地があつた 創廿三〇。イスラエル人がカナンを取つてから後も或ヘテ人はカナンに留り、イスラエル人と結婚した 後得十七、廿一、創廿六、廿四、三、四十五 辭—アンモン人。聖書に記いてある如く 王下七〇六 ヘテ人は身丈の低い、皮膚は黄色で蒙古人の如き顏、髭髯がなく、眼と髪毛とは黑くて長く生し、支那人のやうに辮髪にし、尖つた帽子を被り、寛かな短衣を着、靴は脚踝の處で結付け、先は上方に曲つてゐたさいふ。右の記事等は昔の石碑を見て了解つたのである。

ペリシテ人 の元は埃及の海岸が、クレテ島であつた 耶四十七〇四 慶九。終に地中海の東南海岸の國を取り 申三〇廿二、卅一〇廿四 廿六、いつ、五 の名高い邑を有つて居つた、ガザ、アシドド、アシケロン、ガデ、エクロン、此邑は各君主の統治を受けて居つた 書十三〇二三 士三。ペリシテは始終イスラエル人を煩ましたが、是はイスラエル人が神より受くる懲治であつた 士十三〇。士師等は常に彼等と戰爭ふたが、終にサムエルは彼等に勝利つた 撒前七〇。ペリシテ人は其後サウルとダビデとの代に時々ユダを征服しやうとしたが 撒前十三〇廿七、五十二 十四〇四十 十七〇一 十八〇十 十八〇十 七廿二 五十二 七廿二 廿三 一、廿七〇廿三 一廿三 一、廿八 〇一 目的を達せず、其後漸次と衰微へた。

ペルソナ は我さいふので、畢竟人格さいふ意になる。神、天使、（墮落した天使、惡鬼と其使も）亦人間もペルソナと言はるる。動物には體に於ても亦或點まで精神に於ても人間に類似て居る處があるが、ペルソナとはいはれない、辭—三位一體。

ホザナ、 希伯來語で「救ひたまへと祈る」さいふ意味である 太廿一〇。九〇十五。

ポンテオ ピラト はロマ帝テベリヤカイザルよりユダヤの第五の知事（方伯ともいふ）に命ぜられた人であつた。時は紀元後廿六、廿七であつた。其の妻に付て 太廿七〇十九 を見よ。ピロの云ふ處によれば、彼はロマへよびもどされてガリヤ（フランス）へ流刑され、其所で自殺したさうである。

ホメル に就ては辭—容積量。

ほろびのこ（淪亡の子） 辭—再臨。

マカベ は舊約時の末期におこつた愛國者でユダヤをスリヤ王等の手より救ふた義士であつた、辭—年表、教會歷史。

まくや（幕屋）、 神殿のできない時代に神が猶太人によつて人間に與へたまふた假設の神殿である。全體は長方形に張つた天幕であつて、中は二室にしきり、前室を聖所さいひ、其の廣さは奥行大約三十尺、幅十五尺、高さ十五尺であつた 其の奥の一室即ち至聖所は凡て十五尺づゝであつた、（但し此尺度は後に造られた神殿のものと同じ尺度としていふ）。一本の心棒から右左に三本づゝ、上に一本の枝狀なものがあり、各端は平にし、其の尖端に燈臺が附けてあり、智慧と生命さを表す記號させられた。また十二個の供御のパンが臺の上にあつたが、これは日曜日毎に新なるパンと取換へ、日曜日毎に祭司は此のパンを聖所で食ふたのである。其の意味は神の前に生命があるさいふのであらう。尙ほ香壇があつて香を燻いたが、これは信者の祈禱を表したのである 出三〇、三四。

至聖所には契約の櫃が置かれてあつた。其の中には彼の十誡を刻したアロンの杖さは民數紀略第十七章に綺く記されたアロンの奇跡を行へる杖である。櫃の上の右左に有翼生物の像があり、互に對面ふて蹲み、各個翼を高くあげて贖罪所を蔽ふ形狀をして居つた、「贖罪所」を見よ。新約全書に記いてある幕屋の說明を見れば三の儀表的の意がある、（一）神が聖靈に由りて居み給ふ教會の儀表 出廿五 九—廿二、廿三〇。（二）信者の儀表 羅後六。（三）天に在る者の儀表 來十二〇。幕屋の種々の者は皆基督の儀表である、（イ）契約の櫃の木は沙漠に生ずる木で基督の卑くなり給ふた意 賽五十三〇二。木に着せた黃金は榮光ある神が顯れ給ふた事、神性は人性を含むさいふこと。信者も基督にある屬さ看做されて居る 加一 出卅八〇十 一—十六、出卅八〇廿 五—廿七 一、利十七〇廿 一—廿三 一。幕屋の板が地に觸らず、銀の座の上に置てあつた如く信者は銀（贖罪）によつて世より離れて居る 加四

又板が中間の横木で一體になつて居つた樣に信者等にある靈と生命とは一である（加二〇、二十　弗四、三　弗二〇、廿一）、（ロ）契約の櫃の中にある物（い）契約の櫃が律法を含んで居つた樣に基督は其心に神の聖旨を抱いて居られた（出廿五、〇十六）、（ろ）其櫃の中には曠野の食物マナがあつた（出十六、〇卅三）、基督は其民の糧である、（は）櫃の中の果を結んだアロンの杖は耶穌の甦生の儀表であつた、（ハ）契約の櫃の用途、其蓋は審判の座ではなく、贖罪の血を灌がれた恩惠の座となつて居つた（羅三〇、廿五）、又利未記書の緒言を見よ。聖所と至聖所との間にある幔は基督の御身の儀表である（太廿七、〇五十　來十、〇廿）、幕があつたから罪ある人は神の前に出られなかつた（來九、〇八）、然し基督は斯る障礙になつて居る罪を己が身に任せられ、人間の罪を負擔なされた。基督が死なれた時上（神）より下まで此幔の裂けた（太廿七、五十一）のは代償の贖罪に由つて障礙する罪が消滅れ、悔改めた人は律法を守るによらず、恩惠に頼りて救はれ、神の御前に自由自在に出られるのである。偖神殿の祭司は裂けた幔を必ず聯合したに相違ない、何故ならば基督の死後四十年間は神殿の儀式が執行はれて居つた故である。併是がガラテヤの信者の過誤つた所で、即ち律法を守るべしといふ教誨であつた（加一〇、六＝九）。銅の祭壇は基督の十字架の儀表であつて十字架上に基督は己が身を燔祭として屠られ給ふた（來九〇、十四）。圍の四圍の布は人間の顯はすべき基督の如き義といふ意、幕屋の周圍の幕（塀の用）は八尺（出廿七、〇十八）にて人は踰る事が爲得ず、入口からでなければ入られなかつた、即ち我儕人間は基督程の義がなければ己を救ふ事はできない（羅三〇十、九＝二十　羅十〇、三＝五）。門は基督の事である故、門より入らなければ入られない（出廿七、〇十六　約七、〇九）。樣々の色があつた（出廿六〇、三十一）が、青は基督が天より降りし事、紫はダビデ王の裔たる事、紅は犧牲になりし事、布の幕がかゝつた柱の鈎と桁とは（出卅八、〇廿七）銀で作られた、何故ならば基督が其贖に由りて我儕の爲天父の前に路を開け給ふたからである。圍の柱は眞鍮の座に載つて居つた、眞鍮は義の審判といふ意（民廿一、〇九）、神は其義を守り、維持しつゝ其恩惠を顯はし給ふ（羅三〇廿、一＝廿六）。油は聖靈の儀表であつた（來一、〇九）。幕屋には二の光があつた、（一）聖所に於ては燈臺の光（出廿五〇、三十一）。又（二）至聖所に於ては神の顯れたる御榮光、現今は聖所と至聖所の間の幔がされた故一の室になつて居る（太廿七〇五、十、五十一　來九〇、六＝八　來十〇十、九＝廿一）。此二の光が今もある、基督は生命の光として（約八〇、十二）神の潔き徒を照し給ふ、又「シキナ」即ち神の顯れたる榮光は基督の御面に見えて居る（哥後四、〇六）。信者は祭司の資格を有つて此二種の光の中に容れられて居る（彼前二、〇九　一約一、〇七）。聖靈に滿されて居れば（弗五〇、十八）、光の中に歩む。清き油を携來る（出廿七、〇廿）といふのは神の前に出られ

る權利は基督の贖の血に由るのである（弗二〇、十三）、然し同是かく人が神の前に出で、其聖旨を曉り、神と交際り、主の榮を見、其同じ像に化る事などは皆聖靈に由るのである（弗二〇、十八　哥前二〇、十四、十五　哥後十三、〇十四　腓二、〇一　哥後三、〇十八）。

マコに就ては馬可傳緒言を見よ。

マゴクに就てはゴグを見よ。

マタイ、馬太福音書の緒言、また「弟子」を見よ。

まじゆつ（魔術）とはある言か術かを用ゐ、惡鬼を頼み、人間や動物や天然物をでも感化さする手段で往昔からあつた（出七〇、十一　但二、〇二　約八〇、十一）、然し徒十三〇八、十の事がふくんで居り、無論斯る事は禁じてあつた（申十八、〇十）。

マナとは神が曠野に居つたイスラエル人に天より與へ給ふた食物であつた（出十六、〇一＝民十一、〇九　詩七十八、〇廿四　百五〇、四十）を見よ。日曜日には與へられなかつた、其前の日に餘程に與へられた（出十六〇、廿二＝卅）、少し天幕に置かれた事は（出十六〇卅、二＝卅五）に見ゆ。ヨルダン河を渡つてから與へられなくなつた。（書五〇十、＝十二）

まぼろし（異象）、辭＝ゆめ。

マリア、新約全書に記いてあるマリアは六人ある、（一）耶穌の母（路一〇廿六、＝五十六）。（二）マグダラのマリア（路八、〇二　太廿七〇、五十六　太廿八、〇一）。（三）年少ヤコブとヨセとの母（可十五、〇四十）、此マリア（約十九、〇廿五　太廿七〇、五十六　可十五、〇四十）はアルパイ（一名クロパ（約十九、〇廿五））の妻であり、又耶穌の母の姉妹であるらしい。（四）ベタニヤのラザロとマルタとの姉妹（路十〇卅、九、四十二　約十一、〇一、二、十九、廿、廿八、卅一、卅二、四十五　約十二、〇三）、又（太廿六、〇七　可十四、〇三＝九）。（五）ヨハ子名をマコといふ人の母で、パルナバの姉妹（徒十二、〇十二）。（六）羅馬でパウロを扶助た婦人（羅十六、〇六）。

みちをはなるゝこと（道を離るゝ事）、「道を離るゝ」とは信者が耶穌基督の神の子たる事に就き、又其十字架の犧牲に由つてのみ人の罪の贖はれる事について現された默示を棄つる事である（一約四〇、一＝三　腓三〇、十八　彼後二、〇一）、道を離れることに就ては（提後四、〇三、四）見よ。「道を離るゝ人」は信仰を離れても信者の名を棄てない（提後三、〇五）、道を離るゝことは眞理に對する誤謬（徒十九〇、一＝六）、異端（提後二〇、廿五、廿六）とも異なる、是等は業でないかもしれない。「道を離るゝ」者は罰せられる（懇後二〇、十＝十二　彼後二〇、十七、廿一　猶十一、＝十五　默三〇十、四＝十六）、道を離るゝ教師に就ては（提後四、〇三　彼後二〇、一＝十九　猶四、

八、十一‖十三、十六　を見よ、辭‖再臨。

みつぎとり（稅吏）　稅吏とはいへど實は政府の吏員でなく、御用商人の如きものである。抑々羅馬帝國の政府では諸屬國より直接に租稅を徵收つることをせず、徵收てんとする稅額を定め、一私人に徵稅の權を與へ、其の引受けたる人より納稅せしむる仕組であつた、此の引受人、即ち徵稅者を稅吏と稱へたのであるが、其の人物は殆ど皆行險者の類にて、正直な人は無かつた。されば政府で定めた稅額よりも多く、また强制的に徵稅てゝ無法の利潤を得たのである。かく自國を滅ぼした政府の爲に納稅のことを爲すのと、人物が殘酷、無慈悲で、不義の利を得ることによつて人民には蛇蝎の如く忌嫌はれたのである。

みや（聖殿）また神殿。「みや」は「幕屋」の如く世界史に於て最重要なる建物であつた、蓋し神殿も幕屋と同じ目的をもて造られ、同じ儀式の擧げらるゝ所、同じく其内に神の榮光が顯れたからである。さて神殿はエルサレムにあつたのであるが、最初より基督の後に滅ぼさるゝまで三次造營られたのであつた。第一を「ソロモンの神殿」といひ、紀元前一千年の頃神の命令と指導とによつてソロモン王の建築したものであつた。然し其建築材料はソロモンの父ダビデ王の集めたもので、彼は父の志望を繼いだのであつた。建築材料、附屬の門廊また祭具類は金、銀、玉、石、名木であつて、其建築費は少くとも今日の廿五億圓であつた。建築に從事した職工はユダヤ人と異邦人とを合はせて十八萬人、監督者三千八百五十人を數へたといへば其工事の大なりしを知るであらう。かく多數の人が此大工事をしたのであるから建築中の神殿は雜然、騷然として大混戰場の如くであつたらうと想像るゝが、實は怪まるゝまで靜肅であつた。さいふは建築地に於て木を切り、石を鑿むことをせず、他處にて切組を爲し、運搬び來つて、初めて此處に組立て、絕對に無音工事をしたからである。神殿、門廊等のあつた敷地は六百尺四方で約二萬坪あつた。神殿の屋背は黃金板で閃々、煌々晃明くして正視するを得なんだ程であつたくあつたことである。敷地即ち「庭」の周圍に數多の房室があつて、祭司等の詰所、また寶物類の倉庫とせられた。神殿中の「聖所」には幕屋と同じく香壇があり、燈臺があつた、但幕屋の如く七個の枝ある一基のものでなく、一燈づゝを點くべき七基の黃金製のものであつた。また「供御のパン」をおく金臺は幕屋に一基であつたが、神殿には十基とせられ、更に黃金製の器具が多くおかれたさいふ。然し此ソロモンの神殿は紀元前五百八十六年にバビロン王ネブカデネサルの軍勢に燒かれてしまつた。第二を「ゼルバベルの神殿」といひ、紀元前五百廿八年、ユダヤ人がバビロン俘囚より歸國して再建したものであつた。此稱呼はゼルバベルが主唱者となつてできたからである。第三神殿は殆ど新に建築後五百年を歷て第二神殿を大に修繕したのであつた。建築せられたが、實は第二神殿は大に破損したので、ヘロデ王は紀元前十九年大修繕に着手した。然し彼は規模を變じて建坪を擴く、大くし、普通の石を廢して白大理石を用ゐ、中には長七十尺、幅十尺の石もあつた（圖面參照）。然し此神殿には幕屋また第一神殿の如く「至聖所」に「契約の櫃」なく、空虛であつた。聖所さいふ幔幕が垂れてあつた 太廿七、五一 ヨハ、一九、一〇。此神殿はエルサレム滅亡の時、即ち紀元後七十年ロマ兵の爲に燒失はれてしまふた。神殿には毎日犧牲を供へ、日曜日と祝節日とには特別なる犧牲などを獻げられたのである、辭解「いはひ」、また「そなへもの」を見よ。

（「第四神殿」）といふのがある、これは エゼキエル預言 結 緒言また四十〇―四十八〇神殿は信者に似て居つた 撒前五、一三 （一）外部の目に見ゆる庭は身體に當り。（二）聖所は即ち潔い感情を起す所の生に當り。（三）至聖所即ち神に接る所は 出廿五、二二 靈に當る。至聖所に在る契約の櫃には他のものよりも多く基督の儀表が含んで居つた。

みやもり（殿司）　は神殿でつとめ動亂の起らぬやう警察の如き職務をもつた。節會の時に多くの人々がエルサレムへ集まるので亂のおこる事もあつた、また異邦人の自由に神殿に入る事は禁じてあつたから殿司は必要であつた。

むくい（報賞）、神は悔改めて信ずる人に救を與へ、又忠實に動作く信者に報賞を與へ給ふ、救拔は贖で 詩四一、一二 勤勞によつて得らるゝものである 太十、一〇 路十九、一七 箴前九、一〇 傳後四、一四、廿五 提後四、八 默二一、一〇。賞は御再臨の時に受けんとする者である 太十六、廿七 提後四、八 默二一、一〇。

めかけ（妾）、救拔は今有つて居る者である 路七、五〇 詩三、五一 箴六、廿四 六、一七 報賞は、報 創二〇、一四 が罪を犯して以來多妻、蓄妾の惡習慣ができた。元始に人間が創造られた時に神は一夫一婦と定め給ふた 太十九、五 傳前六、一〇、一六 聖書に記してある歷史を見れば妾等は心配と失敗とを招く者となつて居つた 創二〇、一四 傳‖結婚 創二〇、一四 太十九、一六 。

めかた(衡量)、(一)「シケル」は標準である、一シケルは凡五匁、(「聖所のシケル」出卅〇十三と「王の權衡のシケル」とがあつた、其量目は不明ぬ)。(二)「ベカ」とは約二匁半 出卅八〇廿六。(三)「ゲラ」とはシケルの二十分の一即ち約二分五厘に値る 出卅〇十三 利廿七〇廿五 民三〇四十七。(四)「マ子」とは約五百匁、即ち我が三斤と二十匁 結四十五〇十二。(五)「斤」は(イ)「マ子」即ち五百匁もある 王上十〇十七 以二〇六十九 尼七〇七十一、七十二。(ロ)「ミナ」(英改正譯欄外) 路十九〇十三＝廿五 は凡百廿匁。(ハ)「リトラ」約十二〇三 十九〇卅九 は約九十匁。(六)「タラント」出廿五〇卅九 等は(一)ヘブルのキッカル、(イ) 出卅〇廿五、廿六「聖所のシケル」の三千倍。(ロ)「王のタラント」は約百廿貫(約六萬千五百圓)。(ニ)銀のタラントは約百〇八貫。(ハ)金のタラントは約百四十五貫。(二)ギリシヤの「タラント」(新約にあるもの)は百〇五貫に値る。

メデア、辭解の終にある地圖を見よ、メド、ペルシヤ帝國は大帝國の中第二位であつた 但二〇卅一 八〇二十一 但五〇卅一。第一位の大帝國はバビロンであつた。ペルシヤ王クロスがバビロンを取つた年は紀元前五百卅九年であつた。

メルキセデク はアブラハムを祝したサレムの王なる祭司 創十四〇十七＝廿 詩百十〇四 來五〇六、十 六〇廿 七〇一＝廿一 であつた。基督の儀表となるべき點は、(一)王なる祭司であり 創十四〇十八 亞六〇十三。(二)「我が正義の王」といふ名を有ち 來十一〇五。サレム(平和)の王となり 來十一〇六＝九。(三)其生れた日又末期の日も記いてなかつた 約一〇一 羅六〇九 來七〇廿三＝廿五。(四)人間から祭司に任ぜられたのでなかつた 詩百十〇四。(五)メルキセデクは甦つた基督の儀表となつて居つた、何故なれば彼の獻げたパンと葡萄酒とは犧牲の紀念物であるからである。(六)來六〇廿の「メルキセデクの班の如く」とは基督は義の王、平和の王として王の權威をもつて窮なく祭司であるといふ意である 來七〇廿三、廿四 來十一〇四＝九 來七〇二。併し(七)職務の點に於て基督は却てアロンの祭司に似て居られた 來五〇一＝六 九〇一＝廿八。

めぐみ(恩惠)、「恩惠の定義」は多三章四、五節にある。律法を賴み、守るに由りては救拯を得られない。完全く守ることができない故神の恩惠を賴まなければならない。神は恩惠によつて信者を義人と看做し給ふ 羅三〇廿一、廿二 四〇四 八〇九 腓三〇十七 羅十〇四＝十。恩惠は唯受ける賜である 出十九〇五 弗一〇一＝九 申廿八〇一＝六 弗二〇八 羅四〇四、五。殊に新約の時代は恩惠の時代である、基督の十字架の贖罪と復活とによつて、律法を守り、己を救ふ事のできない我儕人間の罪は疾に罰せられたから唯信賴して救はる、故に殊に恩惠の時代といはるゝ 羅三〇廿四＝廿六 四〇廿四、廿五 約一〇十二、十三 〇三十六 一約五〇十一＝十二。併し舊約時代も同是恩惠の時代である、何故ならば其時代の信者も犧牲の贖によりて救はれたからである、十字架の贖も其に擬へた犧牲も唯實物と儀表との差異だけで、意味は一である、辭＝時代。ヨハ子 約一〇十七を見よ、神は恩寵に由りて人を救ひ給ふのみならず、信者になつた後も恩寵に由りて其人を取扱ひ給ふ。救はれた人は律法の下に居らず、恩惠の下に在る 羅六〇十四。神の恩惠に由つて信者に貴き資格を與へ給ふた耳でなく、信者の衷に様々の德を建て給ふ 約十五〇四、五 加五〇廿二、廿三。故に恩惠は(一)事へる事に關係もあり 羅十二〇六 十五〇十五、十六 哥前一〇三＝七 十五〇十 哥後十二〇九、十 加二〇九 弗三〇七、八 四〇七 腓一〇七 提後二〇一、二 〇十。(二)成長に同じ 哥後一〇十一 弗四〇廿九 西三〇十六 撒後一〇十二 來四〇十六 十二〇廿八、廿九 十三〇九 雅四〇六 彼前五〇五、十 彼後三〇十八。(三)施濟にも 哥後四〇十五 八〇一、六、七、十九 九〇十四。

メシヤ(メッシヤとも)、希伯來語であつて、希臘語の「キリスト」に同じ。語の意味は「膏を灌がれたる者」、即ち神に命ぜられて遣はされた救主。

めつばう(滅亡)、「エルサレムの滅亡」を見よ。

モーセ、ユダヤ人が大將なり、立法者なり、先祖に救拯を得させたものなりとして尊敬したのは此のモーセであつた。彼はレビの支派から生まれ、猶太國民が埃及で同國王パロに壓制されて居る頃、不思議にもパロの皇女に育てられ、四十歳の時ミデアンに往き、また四十年間其の地に住み、其の後神の指示と命令とによつて埃及に歸り、神の能力によつて同國人をパロの抑壓から救出だしたのである、「いはひ、逾越」の條を見よ。それから四十年間アラビヤの曠野を經て、イスラエル人をカナンの地に嚮導いた。此の大旅行の間シナイ山で神から律法を與へられ(おきて及び十誡を見よ)、其の律法は犧牲法、道德法、また民法などの基礎となつた。モーセによつて神は猶太人を堅牢なる國民としたまふた。又神はアダム、ノア、アブラハムになさつたと同じくモーセにも贖罪の契約を爲したまふたのである。モーセの種々の律法、儀式は基督に大なる關係がある。モーセは救主なる基督の儀表であつた 哥六十一〇一 路四〇十八 哥後一〇十 撒前一〇十。(一)神に選ばれた救主 出三〇七＝十 徒七〇廿五 約三〇十四。(二)イスラエルに棄てられ異邦人に往き 出二〇十一＝十五 徒七〇廿五 十八〇五、六 廿八〇十七＝廿八。(三)其間に異邦の女子を娶り 出二〇十六＝廿一 太十二〇十四＝廿一 哥後十一〇二 弗五〇卅二。(四)復イスラエルの救主として現はるゝ時に受容れらるゝ 出四〇廿九＝卅一 羅十一〇廿四＝廿六 徒十五〇十四＝十七。(五)又モーセが基督の儀表たる事は(イ)預言者として 徒三〇廿二、廿三。(ロ)辯護士として 出卅二〇卅一＝卅五 一約二〇一。(ハ)懇求者として 出十七〇一＝六 來七〇廿五。(ニ)指導者及王として 申卅三〇四、五 黙五〇十 來二〇十、又 來三〇五、六を見よ。

もつやく（沒藥）　はアラビアにある小い木の脂から製るもので、禮式に用ゐる油に入った 出卅〇廿三。東方の博士は耶穌に獻げ 太二〇十一、十字架の時には疼痛を寬和ぐる爲に主に獻げられた 可十五〇廿三。また 約十九〇卅九 を見よ。木乃伊を製る時にも用ゐたといふ。

モロク　は（耶四十九〇三のマルカムに同じ）アンモン人の偶像 王上十一〇七、でバアルに關係があった 耶卅二〇卅五。子女等を火に焚き犧牲としてモロクに獻げた。利十八〇廿一 廿〇一＝五 には嚴禁じられたが、此憎む可き事は後に復起った 詩百六〇卅八 耶七〇卅一 十九〇四、五 結十六〇廿一 廿三〇卅七、卅九 代下廿八〇三 卅三〇六 王下廿一〇六 廿三〇十 王下十七〇十七。

やくそく（約束）、辭＝契約又時代の中にある約束の時代を見よ、神がアブラハムと其子孫とに予へ給ふた約束は 創一〇廿八＝ 消滅ない約束である 加三〇十五＝十八 三〇十九＝廿九 四〇一＝七。

ヤコブ、（一）イサクの子で、アブラハムの孫にあたる人であつた。彼は猾智のある人で、父を欺いて兄エソウの長子權を奪ひ、故郷を遁れ、途中で神の幻象を見、強ひて神より恩惠を得た 創卅二〇廿四＝卅二。後には大層立派な人物となり、また神はアブラハムのそれと同じ契約をなしたまふたのである、「エサウ」の條を見よ。（二）年長ヤコブといひ、ヨハ子の兄弟であつて使徒となつた人である。（三）少、あるひは小ヤコブ、彼は身幹が低くあつたのか、或は年齡が年長ヤコブより若いので此の稱を得たのであらう、「でし」を見よ。アルパイの子で、彼も亦使徒となつた人である。（四）「主の兄弟」と稱せられたヤコブがある、また一に「正義ヤコブ」ともいはれ、エルサレムの監督となり、雅各書の著者であらう。

やまひ（病）、病氣は最初の人間が罪を犯した結果である 創三〇十六＝十九、羅五〇十二。又現代人の犯す罪の結果である 箴二〇十七＝廿二 廿三〇廿九＝卅二。又神が懲治の爲に病を許し給ふ事もある 出九〇八＝ 民十一〇卅三 十二〇九＝十一 申廿八〇廿一、廿二、卅五、六十 撒後廿四〇十一。併し病氣は諸く罪の罰であるとは言へない 伯二〇一＝十 約九〇一＝三。聖書に記いてある病氣の種類は即ち熱病 申廿八〇廿二 太八〇十四 約四〇五十二、皮膚病 利十三〇六＝八、卅八、卅九、赤痢 代下廿一〇十五、十八 徒廿八〇八、眼病 默三〇十八、腫物 申廿八〇廿七 約十一〇九、癱瘓 太八〇六 九〇二 徒九〇卅三。神が藥又醫師なしに直接に病を痊し給ふ事もある、斯る場合には患者のために特別な信仰と確信とを予へ給ふとみえる。又藥と療治と看護とに因りて痊し給ふ事もある、併し藥を用ゐても用ゐなくても痊す者は人間の體を創造り藥に效驗を予へ、人に信仰を予へ給ふ神の他にないのである 詩百三〇三＝五。

やはらぎ（和）、羅五〇十＝十一 哥後五〇十八、十九、廿 弗二〇十五 十六 哥一〇廿＝ にある基督の贖の結果は二ある、（一）神の方からいへば「宥められ給ふた」といふ即ち其正義を維持し、滿足して罪人の罪を赦したまふ事ができる。（二）信者の方からいへば信者は和げられて居る、信者といふ者は如何な者であるかといへば生來つた神に敵する心、又神を嫌ふ心を全く變へて神を愛し、信賴するやうになるのを「和ぐ」といふ。神が和げられ給ふたとはいへず、神は宥められ人は和げられたといふのである 哥後五〇十八＝廿一。

ヤペテ、創九〇十八 十〇卅二を見よ、辭解の終にある第二圖を見よ。

ユダ　に付てはユダ書緒言を見よ。

ユダヤ、サウロ王、ダビデ王、またソロモン王の時にはイスラエル國十二支派の一であつたが、ソロモンの子レハベアムの時全國が二個に分かれ、南部の二支派、即ちユダとベニヤミンとが「ユダヤ王國」となり、北部の十支派は「イスラエル王國」となつた。然し遂には國全體を稱してユダヤといふたのである。

ユダヤ人の國會　に就ては國會を見よ。

ユフラテ河　はメソポタミアの西部にある河である。聖書に大河とか、たゞ河（よく知れて居るから）と記いてあるのは大抵ユフラテ河のことである。メソポタミアの西の境界になつて居つた 創十五〇十八 卅一〇廿一。

ゆらい（由來）、由來とは家族の歴史である。創世記によれば（一）天地の由來 二〇四＝。（二）アダムの 五〇一＝。（三）ノアの 六〇九＝。（四）ノアの子等の 十〇一＝。（五）セムの 十一〇十＝廿六。（六）テラの 十一〇廿七＝。（七） 廿五〇十二＝十八。（八） 廿五〇十九＝。（九） 卅六〇一＝八。（十） 卅六〇九＝四十三。（十一） 卅七〇二＝五十〇廿六。

ヨベル、原語の意味は「歡喜の大聲」、「喇叭の音」 利廿五〇 である。五十年毎に七月の十日大なる贖罪の日に於て喇叭を吹く、其時諸の奴隷は自由を得、諸の地所は前の地主の所有となり、田畝にも其一年間は種を播かぬことになつてなつた 利廿五〇八＝五十五 廿七〇十七、十八 民卅六〇四。

ゆめ（夢）、（一）空しき夢 伯廿〇八 詩七十三〇廿 賽廿九〇七。（二）神が或事を教へる爲、或は見た人の精神を指導く爲、ギデオンの如し 士七〇十三。事が示現てあつた夢 創廿〇三 廿八〇十二 卅一〇十 卅七〇五、九、十、廿 四十〇五 四十一〇一、十五、廿五、廿六 王上三〇五 但二〇一、四、卅六 四〇一＝ 七〇一 太一〇廿 二〇十二 創四十一〇十六、廿八、四十七 勿論不道德を勸誘め或はヱホバを拜まないやうに導く夢ならば惡きことはいふまでもない 申十三〇一＝五 耶廿三〇廿五＝卅二 廿九〇八 亞十〇二。其他預言者の受けたる異象等もあつたが、確實なるもののみ受けた 耶廿三〇十六、廿一、廿二、廿七 賽八〇廿 申十八〇十＝。宗敎の歴史に於て唯聖書にある異象のみ最も聖く正義いも

のである、聖書の異象に顯れた預言は成就せられたから異象の神から予へられた事は明白である。

ゆるし(免)、原語は「他へ遣る」といふ意、即ち罪人より其罪を離す事である。人が罪を赦すと神の罪を赦し給ふとの區別は、(一)人が他人の罪を赦す時には罰を與へず、過料をもさらず、唯罪を赦すといふのであるが、神が人の罪を赦し給ふ時は罰、過料なしに濟まぬ、(利四〇卅五 太廿六〇廿八 來九〇廿二)を能く見よ。又犧牲(創四〇四 來十〇十八)の法がある、信者が罪を犯す時には神と親く接られないが、其罪を告白すれば免さるゝ、然し其赦免は常に基督の贖罪に由るのである(一約一〇六=九 一約二〇二)。(二)人が他人の罪を赦し得るのは神が我儕の罪を赦し給ふからである(弗四〇卅二 太十八〇卅二、卅三)。されば我儕が他人の罪を赦さないならば自分の罪も神には赦されない(太六〇十二=十五)。

ようせきりやう(容積量)、(一)「ログ」は約二合一勺(利十四〇十、十二、十五、廿一、廿四)。(二)「カブ」は約六合三勺(王下六〇廿五)。(三)「コイニクス」は同是約六合三勺(默六〇六)。(四)「十分の一」は約一升二合(出十六〇卅六 廿九〇四十 利十四〇十、廿一 廿三〇十三、十七 廿四〇五 民十五〇四、六、九 廿八〇九、十三、廿、廿八 廿九〇三、四、九、十、十四、十五)。(五)「オメル」は約一升五合(出十六〇十六、十八、廿二、卅二、卅三、卅六 結四十五〇十一)。(六)「ヒン」は二升一合(出廿九〇四十 卅〇廿四 利十九〇卅六 廿三〇十三 民十五〇四=十 廿八〇五、七、十四 結四〇十一 四十五〇廿四 四十六〇五、七、十一、十四)。(七)「セア」は約五斗(創十八〇六 撒前廿五〇十八 王上十八〇卅二 王下七〇一、十六、十八 賽廿七〇八)。(八)「バテ」は一斗五升(王上七〇廿六、卅八 代下二〇十 四〇五 拉七〇廿二 賽五〇十 結四十五〇十、十一、十四)。(九)「エパ」は約一斗五升(出十六〇卅六 利五〇十一 六〇廿)。(十)「ホメル」は約一石六斗(利廿七〇十六 民十一〇卅二 賽五〇十 結四十五〇十一=十四 何三〇二)。(十一)「コル」(結四十五〇十四)同是約一石六斗。(十二)處々に「升斗」といふ語で右の語の原語を譯してある、例へば、(イ)「エーパ」(申廿五〇十四、十五 箴廿〇十 米六〇十)。(ロ)「シャリシ」は多分エパの三分の一であらう(詩八十〇五 賽四十〇十二)。(ハ)「バトス」は「バテ」と同じ(路十六〇六)。

よげんしや(預言者)、神に召され、特別の力を賜はり、神の聖旨を人に傳へる者の稱呼である。非常な權威と勢力とを以て職務を執行し、其の重なる職務は基督のことを預め告知らせることであつた。賽緒言の前にある預言書緒言を見よ。

よげんしやのじだいとたこくのれきし(預言者の時代と他國の歴史)、イスラエルはシナイ山で受けた律法を守つたならば幸福であつたが、屢々神に警告せられても全く失敗した上、猶神の懲罰に頓着せず、終に擄となり、諸國に散されて了つた。此悲しい歴史の中の約四百年間即ち紀元前約八百五十年=四百二十年は預言者の盛に預言した時代であつた。其四百年の間に北方のイスラエルは南方のユダより分離して、異邦人の如く神を頼まず、漸次と衰微へてしまつた。ユダは同是惡事が數多くあつたが、兎に角神を頼み、多少ダビデの契約を信頼して居つた、併し信仰が不足いため終にイスラエルの如く擄となつた、辭=契約を見よ。此四百年間イスラエルとユダとの敵は東西南北にあつた。(一)東方のアンモン、モアブ、エドム等の諸國は小さくあつてもイスラエル、ユダの大敵と同盟して餘程彼等を苦めた。(二)西にあるペリシテ人も從來ユダとイスラエルとの敵であつた、辭解中「圖」を見よ。(三)南にはエジプトも敵となつたことあり。(四)北スリヤがある、スリヤ人はエラム人でユダヤ人と同人種であつたが、大概イスラエル、ユダの敵であつた。預言書緒言を見よ。

よげんしよ(預言書)、舊約全書の預言書緒言を見よ。

よざい(餘罪)、辭=犧牲。

ヨナ、小預言者の一人で、ニ子べに福音を宣傳へよと命ぜられた。然しニ子べに傳道するを恐れ、其の責任を遁れやうと船に乘つて、地中海を渡つた所が、暴風雨にあひ、自己の不義、不忠を船人に白狀して、海中に投入れてしまつた。然し神の備へたまふた大魚に呑まれ、また神の奇跡によつて不思議にも三日目に魚の腹中より救出だされ、それよりニ子べに福音を宣傳へた。約拿書、約拿書緒言および太十二〇卅九=四十一を見よ。

よのなか(世の中)、世中といふ者は惡い意味に於てはサタンが腕力、貪慾、私慾、野心、快樂を以て不信者を欺き、支配する所である(太四〇八、九 約十二〇卅一 十四〇卅 十八〇卅六 哥前二〇六、十二 一約二〇十五=十七)。此世中は武力、學力、文明、宗教を以て立派に外觀を裝ふて居るが、其裏面には紛爭と腕力とが潛んでなる。外面は如何になつて居ても救はれずに、聖靈の宿らない人々は世中に屬する者である、辭=救援。

ヨハ子といふ名は新約に四人見える、(一)祭司の長の親族(徒四〇六)。(二)福音記者馬可の別名(徒十二〇廿五)。(三)バプテスマのヨハ子(路一、太三)。(四)使徒ヨハ子(約翰傳緒言を見よ)。

ヨブ、ヨブ記緒言を見よ。

よみ(陰府)、舊約全書の希伯來語の「シェオル」で、新約の「ヘデヰース」と同意義であり(哈二〇五)、新約には(太十一〇廿三 十六〇十八 路十〇十五 徒二〇廿七、卅一 默一

〇十八　六〇八　廿〇十三、十四 に記いてある。肉體が死し後甦る迄靈の居る場所である。（一）基督が天に御還りになつて後パラダイス即ち陰府の福なる方は變つたとの說もある、其時まではパラダイス即ちアブラハムの懷 路十六〇廿三 は救はるゝ死者の在る處であつて 路十六〇廿五、廿二、四十三、其處に在る人等は知情意を備へ、慰められて居つた 路十六〇廿五。基督の傍で十字架に死んだ罪人は其日基督と偕に樂園に在つたが、救はれない人等は陰府の苦い方に居る。陰府の上と下との間に巨なる淵があり、下に在る人々は 路十六〇十九＝卅一 の人の如く知情意をもつて苦痛をも感じて居つた。（二）然し基督が甦り天に還り給ふて以來、樂園の狀態は一變し 哥後十二〇一＝四、樂園は第三の天と同く、神の前の場所となつて居るらしい。 弗四〇八＝十 によれば基督は陰府の幸福なる方を高く擧げ給ふたのである。今は信者の靈が肉體を去ると直に主と偕になる場所、然れど救はれない人の場所は素より變らないと見える、其終末は 默廿〇十三、十四 に記してある如くである、辭＝樂園、地獄。

よみがへり（復活）、元來人は最初の人の犯した罪の罰として死ぬるである 羅五〇十二＝十四、然し基督の贖罪によつて、人の肉體は死んでも復活るのである。（一）元始の人間が肉體の甦生を信じ 創廿二〇五、來十一〇十九、伯十九〇廿五＝廿七、預言者も此事を顯はして居つた 賽廿六〇十九、但十二〇二、十三、何十三〇十四。舊約全書には死人の甦る事が書いてある 王下四〇卅二＝卅五、十三〇廿一。（二）耶穌基督は死者を甦へらせ給ふた 太九〇廿五、路七〇十二＝十五、約十一〇四十三、四十四。又御自分も死より甦ることを預言し給ふた 約十〇十八、路廿四〇一＝八。（三）基督が甦へつて後間もなく他の死者が甦つた 太廿七〇五十二、五十三。又使徒等も死者を甦らせた事があつた 徒九〇卅六＝四十一、廿〇九、十。（四）將來に於る復活に二の性質がある 約五〇廿八、始の方は「生を得るに甦り」 約五〇廿九、默廿〇十四、廿二、廿三、撒前四〇十四＝十七、後の方は「審判を得るに甦る」と 約五〇廿八、廿九、默廿〇十一＝十三 ある。第一の甦生と第二との間には一千年間ある。第一の復活は基督の御再臨の時に起る者で 哥前十五〇廿三、其時舊約時代中に死んだ信者と、教會の時代の信者とは偕に空中に於て主耶穌に遇ふ 撒前四〇十六、十七。又大難の時の殉教者も第一の復活に與る 默廿〇四。（五）我儕の現今の身體も甦るが、肉體に對する關係は種子が收穫に對すると同一である 哥前十五〇卅七、卅八、十五〇四十二＝四十九。（六）其時生きて居る信者の身體は瞬息間に化はる 哥前十五〇五十＝五十三、默廿〇十七、廿一、是が 羅八〇廿三 の「身體の救はるゝこと」である。（七）千年が終ると「審判を得るに甦る」になるのである 約五〇廿九、又其に就て 默廿〇十五 を見よ。

らいびやう（癩病）、舊約時代から多くあつた難病である。傳染病であるから舊約の時には嚴重な規則ができ、普通の人と交際するを許されなかつた。されば若し途中で人に出會ふことがあれば「不潔、不潔」と大聲に叫ぶべしと規定せられてをつた。癩病は罪の譬になつてをる、蓋は癩病も罪も共に傳染し、性質を遺傳し、次第に甚太くなり、汚す、腐る、神より離るゝ、又神の能力によらなければ免るゝことができないからである。 利十三〇 の註を見よ。「癩病人」即ち罪人は己の罪を認め 哥前十一〇三十一、其を告白はし潔めて 一約一〇九 貰はなければならん。潔禮については利未記十四〇一―卅二を見よ、其時に（一）罪人は受動的になる 羅四〇四、五。（二）癩病人が祭司を求むるといふよりも祭司が癩病人を求むる 路十九〇十。（三）血を流すこと有らざれば赦さるゝ事なし 來九〇廿二。（四）「もし基督甦らざりしならば爾曹の信仰は徒然くなんぢらは尙罪に居らん」 哥前十五〇十七。

ラヲデキヤに就ては默緒言を見よ。

れいてん（禮典）、基督教の禮典はたゞ二個、即ちバプテスマと晩餐とである。兩者ともに基督の自ら設けたまふたもので、この目に見ゆる表號を以て目に見えない恩寵を信仰によつて人に得させたまふのである。「バプテスマ」、また「ばんさん」の條を見よ。

レバイムは多分巨人であつたらう。彼等はアブラハムの前にヨルダン河の東西に居た人種であつた、辭＝子ピリム。

レビびと（レビ人）、レビはアブラハムの曾孫に當る人で、ヤコブの子であつた。イスラエル人はヤコブ（イスラエルともいふた）の十二人の子が各自其の子孫をもて十二支派を組織したので、レビの支派を「レビ人」といふたのである。然しレビ人は他の支派の如く土地の分配を受けず、全支派中の四十八個の町村に分れ、家畜の牧場としてある地を所有して居つた。アロン（レビ支派に屬した）の後裔は皆幕屋と神殿との奉事に任じ、ダビテ王の時にレビ人は（一）祭司のことを爲し。（二）判事と書記とのことを爲し。（三）衛士の職務を爲し。（四）音樂師のことを爲したのである。

ロトはアブラハムの甥で、ソドム（ソドムを見よ）に住んだ人である。神はソドムとゴモラとを滅ぼしたまふ時ロトと其の家族とのみ救ひたまふたが、ロトの妻は神の戒飭に反き、燒けて居る市街を反顧いたので鹽の柱と化つて死んだのである、路十七〇廿八＝卅二、創十三〇＝十九〇、彼後二〇六＝九、を見よ。

ロマ(羅馬)、羅馬書の緒言を見よ。

おはせること(負はせる事)、きすること(歸する事)、基督は信者の不義を負擔けて其罰を全く受けて贖ひ給ふたから信者は無罪となる、其で神は基督の義を信者の義とし給ふのを「歸する」或は「負はせる」といふ。

わうこく(王國)、創一〇廿六＝廿八　亞十二〇八　太三〇二　哥前十五〇廿四、又辭＝天國と神の國とを見よ。(一)アブラハムが神に召さるゝまでの時代。(一)神は最初の人間に世界を統治むる權威を與へ給ふたが創一〇廿六、廿八、彼等が其權威を喪つた時サタンは此世の主となつた太四〇八＝十　詩十四〇卅。(二)洪水の後でノアの契約に從ふて創九〇六、神は人間に人を統御むる權威を與へ給ふた。二、アブラハムが召れた時イスラエルに於ては神政體が特別に與へられた。アブラハムの子孫が「神の民」となり創十二〇一＝三　羅十一〇一＝五、神は御計畫を其民に依て萬民に顯はして成就げ給ふ。其計畫には左の如き順序がある、(一)モーセが仲保者となる事出三〇一＝十　十九〇九　二十四〇一。(二)ヨシユアが指導者となる事書一〇一＝五。(三)士師の職務土二〇一＝十八。人民が神政體を廢し、王を請求したる事。サウル母前八〇一＝七　九〇十二＝十七。三、ダビデの王國、(一)ダビデは神に選ばれて母前十六〇一＝十三。(二)契約を予へられた母後七〇八＝十六　詩八十九〇三、四、廿、廿一、廿八＝卅七。(三)預言者はダビデの契約を說明する、賽一〇廿五、廿六から亞十二〇六＝八迄を見よ。其說明によれば、(い)王國はダビデの嗣子に由つて設立せられんとする、其嗣子は即ち處女より生れ眞の人性を有つたが、同是インマヌエル(神我等と偕にあり)で大能の神、永久の父、平和の君と稱へる基督である賽七〇十三、十四　九〇六、七　十一〇一　邪廿三〇五　結卅四〇廿三　卅七〇廿四　何三〇四、五。(ろ)此王國の源は天で、權威は其處より來るが但二〇卅四、卅五、四十四、四十五、王國は地上に建設られ、エルサレムが其都となる賽二〇二＝四　四〇三、五　廿三、廿四　卅三〇廿　六十二〇一＝七　邪廿三〇五　卅二〇卅八＝四十　耳三〇一、十六、十七。(は)第一に世界中から集められ、歸され、悔改めたイスラエルの爲に王國は遂に萬國萬民に迄擴播らんとする詩二〇八　廿二〇〇　廿四〇廿七　賽一〇十一、十三　耶廿三〇五＝八　廿七〇廿三＝四十　卅七〇廿一＝廿五　亞九〇十　十四〇十六＝十九　詩二〇六＝八　賽六十〇十二。(に)義と平和との王國になる、謙遜る者が世を嗣ぐ、王國が來る時に人は長命をし、主を知らざる人はなく、猛獸の猛威は取除かれ、人々は公平に鞫かれ、罪を犯せば直に罰せられ、世界の人々の過半以上救はるゝに至る賽十一〇四、六＝九　六十五〇廿　詩二〇九　賽廿六〇九　亞十四〇十六＝廿一。サタンは廢される默廿〇一＝五。此義と平和との王國時代に人間は靈、精神、肉體に於ても言ひ盡し難き程發展する賽十一〇四＝九　詩七十二〇一＝十。(ほ)異邦人の大帝國が審判を受けたらば王國は人の我儘によらず、神の權力により設立せらるゝ詩二〇四＝九　賽九〇七　但二〇卅五、四十四、四十五　亞十四〇一＝十九。(へ)イスラエルの國へ還さるゝ事と王國の設立は主の臨らんとし給ふ事に關係がある卅卅〇三＝五　詩二〇一＝九　亞十四〇四。(と)ダビデの子孫が主に從順はないならば罰せらるゝといふ條件は契約に附て居つた母後七〇十四　詩八十九〇卅＝卅三、が、從順はなかつたのでバビロンへ擄となり、又世界中に散された。其時遺餘者がゼルバベルに導かれて、エルサレムに還つて來た。エルサレムは現代迄異邦人の統治を受けて居るが、ダビデの契約は廢せられずして詩八十九〇卅三＝卅七、爾後必ず成就せらる徒十五〇十四＝十七。四、新約全書には猶精細く王國が記載してある、(一)ダビデの契約母後七〇八＝十七　亞十二〇八が續き、新約時代に入り、此時代を貫徹つて居る路一〇卅一＝卅三。王國の王はベテレヘムで太二〇一　米五〇二處女より生れ給ふた太一〇十八＝廿五　賽七〇十四。(二)バプテスマのヨハ子も耶穌も亦十二人の弟子等も「天國は近けり」と宣傳たが、猶太人は天國を棄て太十一〇廿一　廿一〇四十二、四十三、又其王を十字架に釘けて殺した。(三)其以前に王は王國の奧義を現はし給ふた太十三〇一＝五十が、其奧義は御自身の棄てられた時と再世に臨り給ふ時との間に成就られつゝある。(四)又教會を建設て給ふといふ奧義をも宣べ給ふた太十六〇十八。後で此奧義は殊にパウロに依つて宣傳られ、天國と教會の奧義とは共に弗三〇九＝十一。此時代に成就げらるゝ。(五)王國の奧義の末は王が榮光の中に現れ給ふ收穫である太十三〇卅九＝四十九、五十。其前に教會は世より擧げられて主に遇ふ撒前四〇十四＝十七。(六)王が御再臨の時にダビデの位を立て直し、散らされたイスラエルを集め、一千年間主として御自身全世界を統治め給ふ太廿四〇廿七＝三十　路一〇卅一＝卅三　徒十五〇十四＝十七　默廿〇一＝十。(七)斯の如く神に叛いた全世界がダビデの裔なる耶穌基督に由つて神の統治を受くる樣になり、十分神の支配を受けた後には斯の如くなる、「諸の政および諸の權威と能を滅ぼして國を父の神に付さん、是れ終なり、是れ神萬物の上に主たらん爲なり」哥前十五〇廿四＝廿八　默廿二〇一。王國の時代は第七の時代となつて居る、辭＝時代。

わがふ(創造の日の)、創一〇の「日」の意に種々議論がある創二〇四　太十〇十五。神は最初に物質を造り給ふた一〇が、いまだ形狀もなく、運動もなく、唯造られたる儘であつた。それから聖靈によつて物質に運動が起つた一〇、此の運動によつて物質と物質と接觸し、衝突し、軋轢して是に熱を生じ、一大火團が生ずるに至つた一〇。此の火團が次第に熱を減じて收縮し、遂に太陽系の如きものを成すに至り、回轉運動の爲に中心は膨脹し、遂に本體より離れて大輪(今土星にある如き)を造り、輪が裁斷れては一團となり、最大なるも最遠距離に規道を定めて遊星となり、太陽を中心として其の周圍を回轉することゝはなつた一〇六＝八、(然し九節は此の世界に限つたのであらう)。而して何萬年の後此の地球は冷却し、收縮するに從つて皺、即ち山や谷等を生じ、更に冷却して植物が生じ、更に大に冷却して生物が生じたのである。十一節、廿一節等は決して進化論に反對しない、即ち最初は極めて單純なる草、虫、貝の如きものができ、境遇等によりて複雜みたるものに進展したので毫も十一節に抵

觸せず、却て實蔵は「其の類に從ひ」て果を結んだとある、結局實蔵はいつまでも其の類のみを生ずると教へたのである（普前十五〇。卅八―卅九。十四節より十九節の意は神が此の時代に於て日月星辰を造り給ふたといふのでなく、第四の時代に於て其の雲霧が晴れたので世界より日月星辰の光明を見るやうになつたのである。

わがふへう四福音の和合表、辭解の尾部を見よ。

ゐちとおこなひ（位置と行動）、信者の位置と行動とは異つて居る。位置とは神の目から見給ふ所の信者の受けたる立場と身分、又三位一體なる神との緣故である（約一〇十一三、五一十七、羅八〇一、十二〇二、卅一二十二〇、新前一一十二〇二、卅一二十三、廿六、加三〇、卅一〇三―二〇四、十四、一一十九、前二〇九、一五〇。此方面からいへば信者は神の子と後嗣とになつて居り（加四、七、基督に於て造られ（弗二、十二、基督と偕に十字架に釘られ（加二、二〇。（併し弗一、三、の「天の處」といふ語は神に從ひ（羅八〇一、十二、死に（西二、〇廿）て、葬られ（西二、十二）基督を衣て居る（弗二、西三、一、天の處に擧げられて居る（弗二、三、六）。（併し弗一、三、の「天の處」といふ語は「天に屬ける事」と譯してもよい、其で信者は基督に連つて居て、靈的光（羅八〇十、前二一、三、一、五、一、緣故（約廿七、十七、來二〇、十一、一、前二〇九、一、動作（約十七、〇十八、本廿八、苦楚（詩一〇・三〇、西一〇、嗣業（羅八〇十、未來の神國の榮を有ち（羅八、〇九、聖靈の衷に居る（羅八、九、）。併し信者の實際の行動は始終試惑に遇ひ、時々愼まざる爲に罪惡に陷るが、直に悔改めて力を受くるといふ經驗がある、實は許多の信者の行動と其基督に於ける位置とは一致ない、併し謙遜に赤心を以て聖靈の特別なる力を信仰によりて受けさへすれば世と肉と照寵に打勝つ事ができる。信者の行動が其位置と適合ふ樣に、神は聖言（約十七、十七、五）、御再臨の時（前四〇、六〇、）、最後に一變する事（一約三、二）に由つて信者を指導き潔め給ふ、其で遂に諸信者の行動は實際其位置と適合ふ樣になる。併し其によつて無頓着で罪を犯さんとする信者があるならば羅六章を研究せよ、辭＝聖潔。

をはりのとき（終の時）、辭＝再臨。

をはりのひ（末日）とは復生と審判との事（約六〇、九、四十、十四、四十四、五十四、來一〇、一、後十七。（二）敎會に關する「末日」とは意義が違ふ（提後三〇、一―三、一―八、一、併し漸次に信仰が衰へ、多數の信者が道を離れる時の事である（提後三、四〇。（三）イスラエルに關する「末日」とはイスラエルが尊められて惠まるゝ時即ち王國時代といふ意である（賽二〇、二―四、來四〇。末とはイスラエルの歷史の「終」といふ意である。

四福音和合表

注意 普通の基督紀元は昔から誤つて實際四年後れて定められて居る、されば基督は紀元前第五年に降誕したまふたので、本表は其の年曆に從ふてある、後の「年表」は普通のものによると知るべし

年月所	事	寶	馬太	馬可	路加	約翰
紀元前	イエス耶穌の誕生、及び十二歲の事實。					
	1. 序文。					
	2. 系圖。					
六年九月	3. ヨハ子誕生の預告。					
五年五月	4. 耶穌誕生の預告。					
ナザレ						
三月―六月	5. マリア、エリサベツを訪ねること。					
ユダヤ						
六月	6. バプテスマのヨハ子の誕生。					
ユダヤ						
ベテレヘム	7. 天使ヨセフに顯ること。					
十二月	8. 耶穌の誕生。					
ベテレヘム	9. 天使牧羊者に顯ること。					
同上	10. イエス耶穌の割禮、及び神殿に携へられ、シメヲン、アンナに歡迎せらるゝこと。					
四年一月		一〇一―十四	一〇一―十七	一〇十八―廿五	一〇一―四	一〇一―十四
		三〇廿三―卅八			三〇廿三―卅八	
		一〇五―廿五	二〇一―七	二〇八―廿	一〇五十七―八十	一〇廿六―八
		一〇廿六―卅			一〇廿九―五十六	一〇廿九―五
		二〇廿一―卅八			二〇廿一―卅八	

年月所	事實	馬太	馬可	路加	約翰
四年一‖四月 ベテレヘム	11. 學者の訪來ること。	二〇一‖十二	……	……	……
四年	12. 埃及に逃れ給ふこと。	二〇十三‖十五	……	……	……
四年四月	13. ヘロデベテレヘムの男嬰兒を殺すこと。	二〇十六‖十八	……	……	……
紀元前 紀元後	14. ナザレに歸り給ふこと。	二〇十九‖廿三	……	二〇卅九、四十	……
八年	15. 耶穌十二歳の時逾越節に神殿へ上り給ふこと。	……	……	二〇四十一‖五十二	……
廿六年	基督宣教の準備				
廿六年より廿七年一月	16. バプテスマのヨハ子の說教。	三〇一‖十二	一〇一‖八	三〇一‖十八	……
	17. 基督バプテスマをうけ給ふこと。	三〇十三‖十七	一〇九‖十一	三〇廿一‖廿三	……
一、二月	18. 惡魔に試られ給ふこと。	四〇一‖十一	一〇十二、十三	四〇一‖十三	……
廿七年 ベタバラ	19. ヨハ子耶穌を擧證すること。	……	……	……	一〇十五‖卅四
廿七年 ベタバラ	20. ヨハ子の弟子二人耶穌に從ふこと。アンデレシモンを伴ふと。	……	……	……	一〇卅五‖四十二
二月	21. 基督ガリラヤに歸り、ピリポを召給ふこと。ピリポナタナエルを呼ぶこと。	……	……	……	一〇四十三‖五十一
二月	22. カナに於る第一の奇跡、及びカペナウン訪問。	……	……	……	二〇一‖十二
	基督の宣教、第一の逾越節より第二まで。				

年月所	事實	馬太	馬可	路加	約翰
四月 廿七年	23. 基督逾越節の爲エルサレムに行き、神殿を清め、奇跡を行ひ給ふこと。多くの者信仰すること。	……	……	……	二〇十三‖廿五
四月	24. ニコデモ夜耶穌を訪ぬること。	……	……	……	三〇一‖廿一
	25. 基督エルサレムを去り、八ケ月間猶太の東北地方にをり、弟子をしてバプテスマを施させ給ふこと。	……	……	……	三〇廿二
	26. ヨハ子アイノムでバプテスマを施しながら復基督を擧證すること。	……	……	……	三〇廿三‖卅六
マケルス	27. ヨハ子の捕へらるゝこと。	……	……	三〇十九、廿	……
十二月	28. 耶穌猶太を去つてガリラヤに行き給ふこと。	四〇十二	一〇十四	四〇十四、十五	四〇一‖三
十二月	29. 途中サマリヤ人に傳道し給ふこと。	……	……	……	四〇四‖四十二
十二月	30. ガリラヤ宣教を始め給ふこと。	四〇十七	一〇十四、十五	四〇十四、十五	四〇四十三‖四十五
十二月	31. 復カナに行き、カペナウンにある大臣の子を痊し給ふこと。	……	……	……	四〇四十六‖五十四
廿八年	第二の逾越節より第三まで				
四月	32. 逾越節にエルサレムに歸り、ベテスダの池で病人を痊し給ふこと。猶太人彼を殺さうとはかること。	……	……	……	五〇一‖四十七
四、五月	33. ガリラヤに歸り、ナザレで說教し給ふこと。	……	……	四〇十四‖卅	……
四、五月	34. カペナウムの宣教。	四〇十三‖十七	一〇廿一、廿二	四〇卅一、卅二	……
四、五月	35. 奇跡で多く漁らせ給ふこと。シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハ子召されて弟子となること。	四〇十八‖廿二	一〇十六‖廿	五〇一‖十一	……

年月所	事	實	馬太	馬可	路加	約翰
カペナウム 廿八年	36. 耶穌惡鬼を追出し給ふこと。		……	一〇廿三＝廿八	四〇卅三＝卅七	……
四、五月	37. シモンの岳母及び他の病人を痊し給ふこと。		八〇十四＝十七	一〇廿九＝卅四	四〇卅八＝四十一	……
カペナウム 四、五月	38. 弟子等とガリラヤを巡回し給ふこと。		四〇廿三＝廿五	一〇卅五＝卅九	四〇四十二＝四十四	……
廿八年	39. 癩病人を痊し、群衆を避けて野に退き給ふこと。		八〇一＝四	一〇四十＝四十五	五〇十二＝十六	……
ガリラヤ 五、六月	40. カペナウムに歸り、癱瘋を痊し給ふこと。		九〇二＝八	二〇一＝十二	五〇十七＝廿六	……
夏 カペナウム	41. マタイを弟子とし、彼の家で筵をうけ、說教し給ふこと。		九〇九＝十三	二〇十三＝十七	五〇廿七＝卅二	……
夏 カペナウム	42. 斷食し給はない理由について反對者に答へ給ふこと。		九〇十四＝十七	二〇十八＝廿二	五〇卅三＝卅九	……
	43. ガリラヤに向ひ歸り給ふ時、弟子等安息日に麥の穗を摘みしこと。		十二〇一＝八	二〇廿三＝廿八	六〇一＝五	……
夏 カペナウム	44. 安息日に手の枯へた人を痊し給ふたので、パリサイ人等彼を殺さうとはかること。		十二〇九＝十四	三〇一＝六	六〇六＝十一	……
夏 廿八年	45. 湖邊に退き、人々を痊し給ふこと。		十二〇十五＝廿一	三〇七＝十二	……	……
	46. 湖の南方にある小山に上り、終夜祈つてから十二弟子を選び給ふこと。		十〇一＝四十二	三〇十三＝十九	六〇十二＝十九	……
夏 ハチン山	47. 山上の說教。		五〇一＝八〇一	……	六〇廿＝四十九	……

年月所	事	實	馬太	馬可	路加	約翰
夏 カペナウム	48. 百夫の長の僕を痊し給ふこと。		八〇五＝十三	……	七〇一＝十	……
夏	49. ナインで嫠の子を甦生らせ給ふこと。		……	……	七〇十一＝十七	……
夏 ガリラヤ	50. パプテスマのヨハ子獄から使を以て質問すること。		十一〇二＝十九	……	七〇十八＝卅五	……
	51. 耶穌コラジン、ベテサイダ、カペナウムを責め、重荷を負へる者を招き給ふこと。		十一〇廿＝卅	……	……	……
夏 廿八年	52. 或婦パリサイ人の家で主の足に香膏を塗奉ること。		……	……	七〇卅六＝五十	……
秋	53. 二日ガリラヤを巡回して說教し給ふこと。		……	……	八〇一＝三	……
カペナウン 秋	54. カペナウムに歸り、鬼につかれた瞽の瘖を痊し給ふこと、パリサイ人等これを見てベルゼブルの行爲であると云ふこと。		十二〇廿二＝卅七	三〇廿二＝卅	十一〇十四、十五、十七＝廿三	……
秋	55. 休徵を求むる者に答へ給ふこと。		十二〇卅八＝四十五	……	十一〇十六、廿四＝卅六	……
カペナウム	56. 親族等は狂氣したと思つて彼をとらへやうとすること。		十二〇四十六＝五十	三〇十九＝廿一、卅一＝卅五	八〇十九＝廿一	……
秋	57. 舟の中より播種譬など七の比喩を敎へ給ふこと。		十三〇一＝五十三	四〇一＝卅四	八〇四＝十八	……
ガリラヤ湖 同上	58. 耶穌弟子等と湖を渡り風浪を鎭め給ふこと。		八〇十八＝廿七	四〇卅五＝四十一	八〇廿二＝廿五	……
秋	59. ガダラで二の惡鬼につかれた者を痊し給ふこと。		八〇廿八＝卅四	五〇一＝廿	八〇廿六＝四十	……
秋 カペナウム	60. 西岸へ歸り、ヤイロの娘を甦生らせ、血漏を患ふ婦を痊し給ふこと。		九〇一、十八＝廿六	五〇廿一＝四十三	八〇四十＝五十六	……

年月所	事實	馬太	馬可	路加	約翰
秋 カペナウム	61. 二人の瞽を痊し、惡鬼を追出し給ふこと。	九〇廿七＝卅四	……	……	……
廿九年	62. 耶穌復ナザレに行給ふこと、村人等の彼を信じないこと。	十三〇五十四＝五十八	六〇一＝六	……	……
廿九年冬	63. 基督ガリラヤを巡つて教へ給ふこと。	九〇卅五＝卅八	六〇六	……	……
冬 ガリラヤ	64. 十二弟子を派遣はし給ふこと。	十〇一＝十一〇一	六〇七＝十三	九〇一＝六	……
三月 マケルス	65. ヘロデヨハ子を殺し、又耶穌を見てヨハ子の甦生つた者と思ふこと。	十四〇一＝十二	六〇十四＝廿九	九〇七＝九	……
四月 ベテサイダ	66. 十二弟子歸つて來てその行爲を報告すること。主彼等と野に退き五千人に食物を與へ給ふこと。	十四〇十三＝廿一	六〇卅＝四十四	九〇十＝十七	六〇一＝十四
廿九年四月	67. 弟子等を西岸のベテサイダへ歸し、耶穌自ら夜水上を歩み給ふこと。	十四〇廿二＝卅三	六〇四十五＝五十六	……	六〇十五＝廿一
四月 カペナウム	68. 奇跡で食物を得た大衆がカペナウムで耶穌に遇ふこと。耶穌會堂で說教し給ふこと。ペテロ信仰を告白すること。	……	……	……	六〇廿二＝七十一
四月	69. 第三の逾越節より最後の逾越節の始まで。	十四〇卅四＝卅六	六〇五十五、五十六	……	……
四月	70. 數日間ゲ子サレの野で病人を痊し給ふこと。	十五〇一＝廿	七〇一＝廿三	……	……
廿九年 夏	71. 耶穌ツロとシドンとに行き給ふこと。サイロピニケの婦己の信仰の爲その娘の病を痊さるゝこと。	十五〇廿一＝廿八	七〇廿四＝卅	……	……
夏	72. デカポリスを經て歸り、ガリラヤ湖邊の山へ上つて多くの人を痊し、四千人に食物を與へ給ふこと。	十五〇廿九＝卅八	七〇卅一＝八〇九	……	……
夏	73. 湖を渡つてダルマヌタに行き給ふこと。	十五〇卅九	八〇十	……	……
夏 カペナウム	74. パリサイ、サドカイの人々休徵を求むること。	十六〇一＝四	八〇十一、十二	……	……
夏	75. 舟でベテサイダに渡り、異教の麪酵について戒め給ふこと。	十六〇四＝十二	八〇十三＝廿一	……	……
夏 ベテサイダ	76. 瞽を痊し給ふこと。	……	八〇廿二＝廿六	……	……
夏	77. カイザリア、ピリピ地方へ行き給ふこと。ペテロの告白。	十六〇十三＝廿	八〇廿七＝卅	九〇十八＝廿一	……
夏 ピリピ	78. 死と甦生とを預言し給ふこと、ペテロ戒めらるゝこと。	十六〇廿一＝廿八	八〇卅一＝九〇一	九〇廿二＝廿七	……
夏 ピリピ	79. 六日後ヘルモン山で容貌變り給ふこと。	十七〇一＝十三	九〇二＝十三	九〇廿八＝卅六	……
夏 ピリピ	80. 翌日山を下り、弟子等の追出されなかつた惡鬼を追出だしたまふこと。	十七〇十四＝廿一	九〇十四＝廿九	九〇卅七＝四十三	……
夏 ガリラヤ	81. 耶穌再たび己の死と甦生とを預言し給ふこと。	十七〇廿二、廿三	九〇卅＝卅二	九〇四十四、四十五	……
夏	82. カペナウンで奇跡にて魚から納金を得たまふこと。	十七〇廿四＝廿七	……	……	……
夏 カペナウム	83. 弟子等の中誰か大なるといつて互に爭ふこと、耶穌は小兒のごとくなり、人の罪を赦すべき事を教へたまふこと。耶穌				

年月所	事	實	馬太	馬可	路加	約翰
廿九年	の名によつて惡鬼を追出だした者を弟子等の禁めた事をヨハ子主に告奉ること。		十八〇一＝卅五	九〇卅三＝五十	九〇四十六＝五十	
秋 エルサレム	第三の逾越節の六ヶ月後に構廬の節に行き給ふ事。					
秋 エルサレム	84. 節の中頃ガリラヤを去り、神殿で教へ給ふこと。					七〇一＝十
	85. 人々耶穌について言爭ふと。有司等彼を捕らへやうとしてニコデモ反對すること。					七〇十四
秋同上	86. 奸淫を犯した婦をあはれみ給ふこと。					七〇十一＝五十三
同上	87. 耶穌神殿で自己はアブラハムよりも前に在つた世の光であると曰ひ給ふこと、猶太人等石でうたうとすること。					八〇一＝十一
同上	88. 生來の瞽である乞食を痊し給ふこと。					八〇十二＝五十九
同上	89. 基督は善き牧者であり、又門である事について說教し給ふこと。					九〇
十一、十二月の内	90. サマリヤを經てエルサレムに向ひ給ふこと、これはガリラヤを退き給ふ最後であつた。					十〇一＝廿一
同上	91. 耶穌に從はうとする人々に對する警告。					
ペレア	92. 七十人を派遣はし給ふこと。					
同上	93. 七十人歸つて來てその成功を報告すること。					
同上	94. 教法師の律法に關する問に答へて「善きサマリヤ人」の譬				九〇五十一＝五十六 九〇五十七＝六十二 十〇一＝十六 十〇十七＝廿四	

年月所	事	實	馬太	馬可	路加	約翰
廿九年	喩談を語り給ふこと。					
ペレア	95. 耶穌ベタニヤにマリアとマルタとを訪れ給ふこと。					
ペレア	96. 再たび弟子等に祈禱の道を教へ給ふこと。					
十一、十二月	97. 瘖啞である惡鬼を追出だしたまふこと、パリサイ人復この奇跡を見てベルゼブルの力と誣ふること。耶穌或パリサイ人と共に食し、僞善なる教法師と國民との災禍を說き給ふこと。					
ペレア	98. 弟子等に對する勸告。					
同上	99. 遺產を分けやうとする者耶穌の裁決を願ひ、耶穌「愚なる富者」の譬喩談をなし給ふこと。					
同上	100. 說教。					
同上	101. 禍の原因を論じて悔改の必要を教へ給ふこと。					
同上	102. 「果を結ばざる無花果樹」の譬。					
同上	103. 鬼に患はされた婦を痊したまふこと。					
十二月	104. エルサレムで、修殿節の時、耶穌神と一體である事を說き給ふこと、猶太人等第三回彼を殺さうとし、彼ペレアに退き給ふこと。					
卅年一月	105. ラザロの病めるのを聞き、再たびベタニヤに旅し給ふこと。					
ペレア	106. パリサイ人耶穌に向ひヘロデ彼を殺さうとする故ペレアを去				十〇廿五＝卅七 十〇卅八＝四十二 十一〇一＝十三 十一〇十四＝五十四 十二〇一＝十二 十二〇十三＝廿一 十二〇廿二＝五十九 十三〇一＝五 十三〇六＝九 十三〇十＝十七 十三〇廿二	十〇廿二＝四十二 十一〇一＝十六

年月所	事	寶	馬太	馬可	路加	約翰
三十年	れこ勤め、耶蘇これに答へたまふこと。					
同上	腹腹を患ふ人を癒し給ふこと。	107.				
同上	大なる筵の譬喩。	108.				
同上	彼の弟子ならば大なる困難のある事を預め期すべしと人々に警告め給ふこと。	109.				
同上	多くの稅吏彼の許に來り、パリサイ人等見てつぶやきし故、耶蘇「失へる羊」、「失へる金錢」、「放蕩子」の譬喩を語り給ふこと。	110.				
同上	弟子等に「不義なる番頭」、「富人とラザロ」の譬喩を教へ給ふこと。	111.				
同上	躓かす事に付ての教、互に人の罪を赦すべき事、人は如何に勵んでも當然の義務以上の事を行へないこと。	112.				
卅年二月	ベタニヤに行きラザロを死より甦生らせ給ふこと。	113.				
二、三月	カヤパと七十人會議とが耶蘇を殺さうと定むること。	114.				
同上	耶蘇サマリヤの境にあるエフライムに退き給ふこと。	115.				
三月	サマリヤ、ガリラヤの中央を經て最後にエルサレムに旅し給ふこと。	116.				
三月	サマリヤの境で十人の癩病人を癒し給ふこと。	117.				
三月	パリサイ人等神の國は何時來るかと問れ、耶蘇再臨を預言し給ふこと。					
三月	パリサイ人等離縁について彼に問ぬること。	120.				
同上	人々小兒を耶蘇の許につれてくること。	121.				
同上	若き富める宰耶蘇の弟子となる事を避け、ペテロは一切を捨てると誓ふこと。	122.				
同上	金儲主義の服役者を戒め給ふこと。「葡萄園の工人」の譬喩。	123.				
三月	耶蘇エルサレムに向ひ、第三回己の死と甦生とを預言し給ふこと。	124.				
三月	ヤコブとヨハ子とが此の世の王國で基督に次いで至高い位置を得やうとすること。	125.				
三月	エリコの傍で二人の瞽を癒し給ふこと。	126.				
三月	ザアカイが桑樹に上り、耶蘇に召され終に救はるゝこと。	127.				
三月	エルサレムに近き給ふた時人々神の國は直に顯ると思つたから、耶蘇はその誤解を正す爲「金子を僕に預けて旅した人」の譬喩を語り給ふこと。	128.				

年月所	事	寶	馬太	馬可	路加	約翰
三十年	給ふこと。	118.				
三月	「頽はしく願ふ婆婦」、「パリサイ人と稅吏との祈」の譬。	119.				
同上	ガリラヤからベレアを經て旅し給ふこと。					
三月	パリサイ人等離縁について彼に問ぬること。	120.	十九〇一、二	十〇一	十七〇廿一—十四	
同上	人々小兒を耶蘇の許につれてくること。	121.				
同上	若き富める宰耶蘇の弟子となる事を避け、ペテロは一切を捨てると誓ふこと。	122.	十九〇三—十二 十九〇十三—十五	十〇二—十二 十〇十三—十六	十七〇廿一—十八	
同上	金儲主義の服役者を戒め給ふこと。「葡萄園の工人」の譬喩。	123.	廿〇一—十六		十八〇十六—廿一	
三月	耶蘇エルサレムに向ひ、第三回己の死と甦生とを預言し給ふこと。	124.	廿〇十七—十九	十〇廿二—廿四	十八〇廿一—廿四	
三月	ヤコブとヨハ子とが此の世の王國で基督に次いで至高い位置を得やうとすること。	125.	廿〇廿—廿八	十〇廿五—四十五	十八〇十五—十七	
三月	エリコの傍で二人の瞽を癒し給ふこと。	126.	廿〇廿九—廿四	十〇四十六—五十二	十八〇廿五—十九〇二—十	
三月	ザアカイが桑樹に上り、耶蘇に召され終に救はるゝこと。	127.				
三月	エルサレムに近き給ふた時人々神の國は直に顯ると思つたから、耶蘇はその誤解を正す爲「金子を僕に預けて旅した人」の譬喩を語り給ふこと。	128.			十九〇十一—廿七	

年月所	事	實	馬太	馬可	路加	約翰
三十年	最後の安息日(金曜日の日沒から土曜日の日沒まで)。					
三十一日 金曜日	129. 逾越節の六日前に耶穌ベタニヤに行き、癩病人シモンの家に入り、マリア彼の頭と足に膏を塗ること。		廿六〇六＝十三	十四〇三＝九	……	十一〇五十五＝五十七、十二〇一＝八、十二〇九＝十一
四月一日 土曜日 同上	130. 猶太人耶穌を見やうとしてベタニヤへ來ること。最後の逾越節の一週。磔刑に終る。		……	……	……	
四月二日	131. 第一日(日曜日)。耶穌歡迎せられてエルサレムに入り、市の將來の運命についてなげき、夕頃ベタニヤに歸り給ふこと。		廿一〇一＝十一、十七	十一〇一＝十一	十九〇廿九＝四十四	十二〇十二＝十九
四月三日 月曜日	132. 第二日(月曜日)。ベタニヤから歸る時耶穌果のない無花果を詛ひ。神殿を清め再たびベタニヤに歸り給ふこと。		廿一〇十二＝十六、十八、十九	十一〇十二＝十九	十九〇四十五、四十六	……
四月四日 火曜日 橄欖山	133. 第三日(火曜日)。エルサレムへ上らうとする時かの無花果のすでに枯れたのを指し、信仰ある祈禱は山の如き障害物をも除去り得る事を敎へ給ふこと。		廿一〇廿＝廿二	十一〇廿＝廿六	……	……
同上日 エルサレム	134. 神殿で敎へ給ふこと。七十人會議の代人等彼の權威を詰問すること。「二人の子と葡萄園」の譬喩。		廿一〇廿三＝四十六	十一〇廿七＝十二〇十二	廿〇一＝十九	……

年月所	事	實	馬太	馬可	路加	約翰
同上日 エルサレム	135. 「婚筵」の譬喩談。		廿二〇一＝十四	……	……	……
神殿 同上	136. パリサイ人ヘロデの黨と共に彼の言を捕らへて罪に陷れやうとし、耶穌は貨幣の面にあるカイザルの像を指して答へ給ふこと。		廿二〇十五＝廿二、廿二〇廿三＝廿三	十二〇十三＝十七、十二〇十八＝廿七	廿〇廿＝廿六、廿〇廿七＝四十	……
卅年四月四日 エルサレム	137. 復活に就いてサドカイ人の非難を論破り給ふこと。		廿二〇卅五＝四十	十二〇廿八＝卅四	……	……
神殿 同上	138. 最も大なる誡は何ぞやといふ敎法師の問に答へ給ふこと。		廿二〇四十一＝四十六	十二〇卅五＝卅七	廿〇四十一＝四十四	……
同上	139. 基督若しダビデの裔であればダビデが之れを主と稱へたのは何故かと問ひ、人々を閉口せしめ給ふこと。		廿三〇	十二〇卅八＝四十、十二〇四十一＝四十四	廿〇四十五＝四十七、廿一〇一＝四	……
同上	140. 學者とパリサイ人とを誡め、エルサレムの災禍を預言し給ふこと。		……	……	……	……
同上	141. 貧き寡婦の獻金を賞め給ふこと。		……	……	……	……
同上	142. 或るギリシヤ人耶穌に遇ひたいと願ひ、耶穌は榮光をうくべき時近き、異邦人を呼集め給ふ前兆としてこの願を容れ給ふと。耶穌祈り、父答へ給ふて、その御聲弟子等に聞えること。		……	……	……	……
四月四日	143. 耶穌神殿を出て、ペテロ、ヤコブ、ヨハ子、アンデレと共に橄欖山に坐り、神殿と猶太國との滅亡を預言し給ふと。世		……	……	……	十二〇廿＝卅六

年月所	事 實		馬太	馬可	路加	約翰
卅年四月四日 橄欖山	の末の事。	144.				
	「家の主人」、「智僕と惡僕」、「十人の處女」、「銀子」、「綿羊と山羊」の譬喩談。		廿四〇四十三—五十一、廿五〇			
同日 火曜日	逾越節の二日前に耶蘇己の賣され、十字架に附けらるゝ事を預言し給ふこと。七十人會議員は詭計を用ゐて耶蘇を殺さうと謀り、ユダは主が弟子等の計を去り給ふた間を伺ひ、彼を賣る約束をすると。多くの人は主を信ぜず、或る有司は信じたけれども人望を失はんことを恐れて告白することができなかつたこと。	145.	廿六〇一—五、十四—十六	十四〇一、二、十、十四〇一、二、	廿二〇一—六	十二〇廿六—五十
三十年						
四月五日 水曜日 四月六日 木曜日の晩	イエスは弟子等と共にベタニヤに居られた樣である。	146.				
第六日（木曜日）。	耶蘇二人の弟子を市へ遣はして逾越の準備をさせ、午後其他の弟子と共にその席へ行き給ふこと。	147.	廿六〇十七—十九	十四〇十二—十六	廿二〇七—十三	
同日 上	耶蘇逾越節の晩餐を守り給ふこと。	148.	廿六〇廿	十四〇十七	廿二〇十四	
同上	弟子等の功名心を咎め、又彼等に王國を任す事を約し給ふこと。	149.				
同上	弟子の足を洗ふて愛と謙遜とを教へ給ふこと。	150.			廿二〇廿四—	
同上	主己を賣らうとする者を指示し給ふと、しかしユダは主の	151.	廿六〇廿一—廿五	十四〇十八—廿一	廿二〇廿一—廿三	十三〇廿一—廿五

年月所	事 實		馬太	馬可	路加	約翰
三十年 四月六日 木曜日の晩	晩餐の終まで席を去らなかつたこと。	151.	廿六〇廿一—廿五	十四〇十八—廿一	廿二〇廿一—廿三	十三〇廿一—廿五
同上	ペテロが惡魔に艱まされ、主の憲に依て悔改める事、十二弟子の散らさるゝを預言し給ふこと。	152.	廿六〇廿一—廿五	十四〇廿七—廿一	廿二〇廿一—廿三	十三〇廿六—廿八
同上	晩餐の禮典を立て給ふこと（路前十一〇。廿三—廿五）。	153.	廿六〇廿六、廿二—四十二	十四〇廿二—廿五	廿二〇廿九—四十六	十四〇〇—十七
四月六日 六日の晩	別離の說教。仲保の祈禱。	154.				〇廿六 十八〇一、四
ゲッセマ子 夜中	ゲッセマ子の苦痛。	155.				
	接吻する者の手にかゝつて賣され給ふこと、ペテロマルコスの耳を切り、耶蘇之れを癒し給ふこと。		廿六〇四十三—五十二	十四〇四十三—五十二	廿二〇四十三—五十三	十八〇二—十二
四月七日 午前五時から十二時迄	主が第一に夜間アンナスの所へ曳往かれ、ペテロ三度主を知らずと云ふこと。	156.	廿六〇五十三、五十四、六十—七十二	十四〇五十三、五十四、六十—七十二	廿二〇五十四—六十二	十八〇十三、十八、廿五—廿七
エルサレム 卅年四月七日午前五時から十二時まで	夜明にカヤパの前で己の救主であり、神である事を證ひ、之が爲に神を瀆す者として無理に罪せられ、嘲弄せられ給ふこと。	157.	廿六〇五十五—六十五	十四〇五十五	廿二〇六十三—七十一	十八〇十九—廿四
同上	十字架で殺す宣告を與へる爲ピラトの前へ曳行くこと。	158.	廿七〇一—五	十五〇一—五	廿三〇一—五	十八〇廿八—廿八
同上	ピラト彼をヘロデに送り、ヘロデ彼をピラトに送返すこと。	159.	廿七〇一、二、十一—十四		廿三〇六—十二	
同上	ピラトは彼を許さうとしたれど猶太人はバラバの許されん事を願ひ、ピラトは民を喜ばせやうとして主を鞭ち、猶太人は彼が自ら王とするから之を十字架に釘けよと叫び、	160.	廿六〇五十九—六十八			

	年月所事實	馬太	馬可	路加	約翰
161.	卅年四月七日 午前六時	廿七〇十五—廿六	十五〇六—十五	廿三〇十三—廿五	十八〇卅九—十九〇十六
162.	十二時				
163.	エルサレム 四月七日 十二時前	廿七〇廿七—卅	十五〇十六—十九		
164.	十二時	廿七〇三—十			
165.	十二時から				
166.	十二時から 四月七日 午後三時	廿七〇卅一—廿四	十五〇廿—廿三	廿三〇廿六—廿二	十九〇十六、十七
167.					
168.	三時から 六時	廿七〇四十五—五十四	十五〇卅三—四十一	廿三〇四十四—四十九	十九〇廿八—廿
169.					
170.	四月八日	廿七〇五十七—六十一	十五〇四十二—四十七	廿三〇五十—五十六	十九〇廿一—四十二
171.	四月九日	廿七〇六十二—六十六			
172.	同 上				
173.	同 上	廿八〇一	十六〇一—四	廿四〇一—三	廿〇二、二廿
174.	同 上	廿八〇二—四			
175.	卅年四月九日 同 上	廿八〇五—七	十六〇五—七	廿四〇四—八	
176.	同 上	廿八〇八—十	十六〇八	廿四〇九—十一	廿〇十一—十八
177.	同 上	廿八〇十一—十五	十六〇九—十	廿四〇十二	廿〇二—十

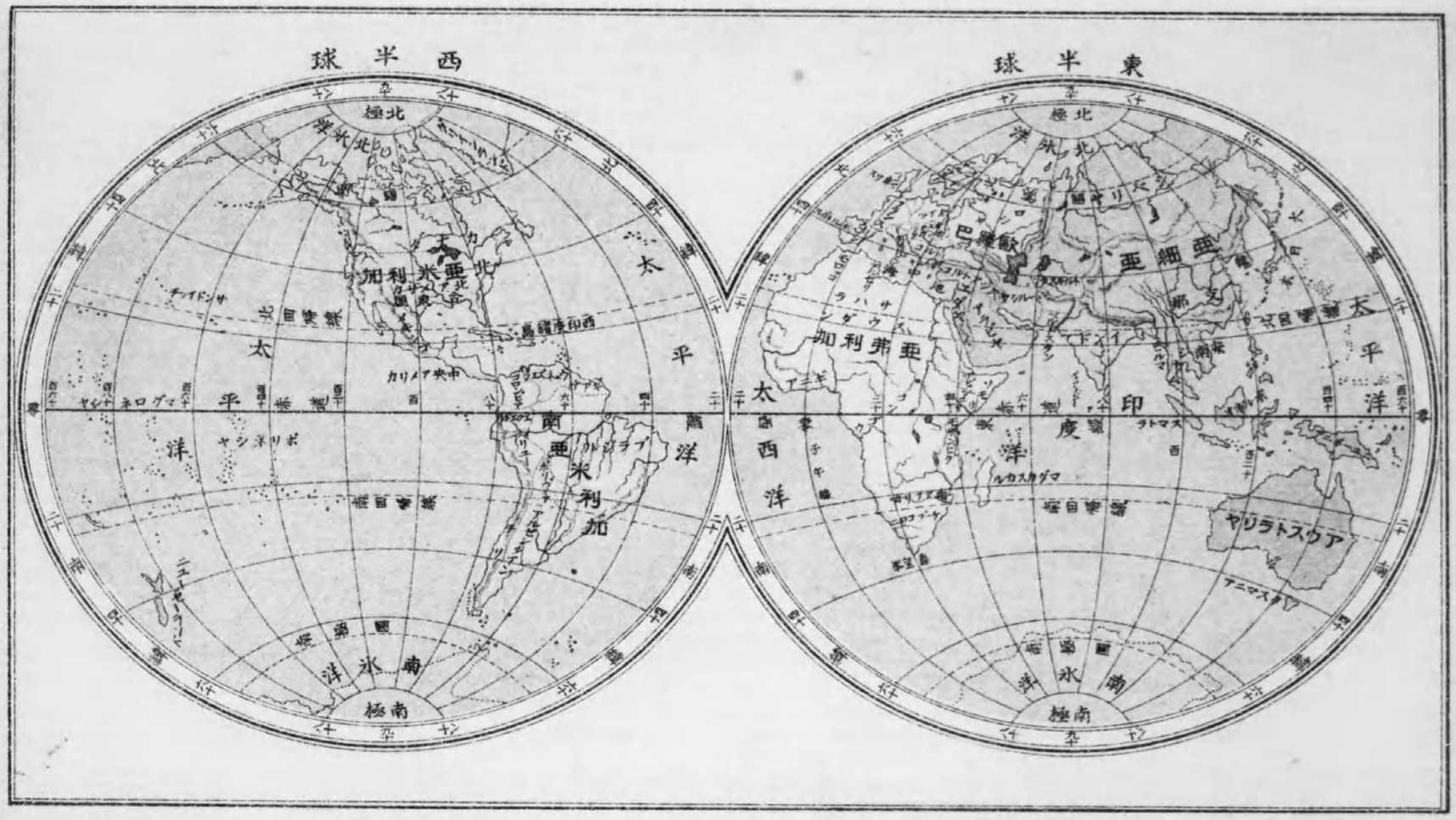
161. ピラトは妻の戒るのに拘らず宣告を下すこと。
ロマ兵卒等耶蘇に緋衣を着せ、棘の冕を頂かせ、葦を持たせて之を嘲弄すること。
162. ユダ己の罪を後悔し、神殿に入り、不義の銀子を投げおき、而して自ら縊ること（徒一〇十九）。
163. イエス耶蘇市の門まで己の十字架を負ひ給ひ、其處からクレネ子のシモン之を負ふこと。
164. ゴルゴタで十字架に附けられ給ふこと（ダマスコの門の外であらう）。十字架上の七言（其一）己を殺す者の爲に祈り給ふこと。
（其二）悔改めた盜賊をパラダイスに伴ふ事を約し給ふこと。
兵卒等彼の上衣を分け、裏衣を鬮にすること。（其三）彼の母をヨハ子に任れ給ふこと。
165. 十二時より三時まで地遍く暗黑になり、耶蘇大聲で（其四）「我が神々々…」と（其五）「我渇く」と曰ひ給ひ、人々醋を與へ、主は又（其六）「事をはりぬ」、（其七）「父よ我が靈を爾の手に託く」と曰ひ給ひ、氣絶え、神殿の幔裂け、百夫の長彼の義を證明すること。
168. 屍體を十字架から下し、油を濯いでアリマタヤのヨセフの墓へ葬ること。
169. ピラトその墓へ番兵を附ける事を許し、彼等之に封印すること。
170. イエスの御身は土曜日中墓にあつたこと。
基督復活り、四十日間顯れ、天へ昇り給ふ事。
171. 第一日（復活の）、日曜日。
夜明に復活り給ふこと。
172. 香油を持つて來た婦等は墓が開いて空虛であるのを見ること。
マグダラのマリアは歸つてペテロとヨハ子とに告ぐること。
殘の婦等は二位の天使を見、主の復活り給ふた事を教へらるゝこと。
173. マグダラのマリア墓へ歸り、耶蘇彼女に顯れ、彼弟子に報らせること（第一の顯現）。
婦等（ヤコブの母マリア、サロメ及びヨハンナ）市へ歸る時耶蘇に遇ふこと（第二の顯現）。
ペテロとヨハ子と御墓の空虛であるのを見ること。
174. 番兵祭司に報告し、祭司賄賂を與へること。

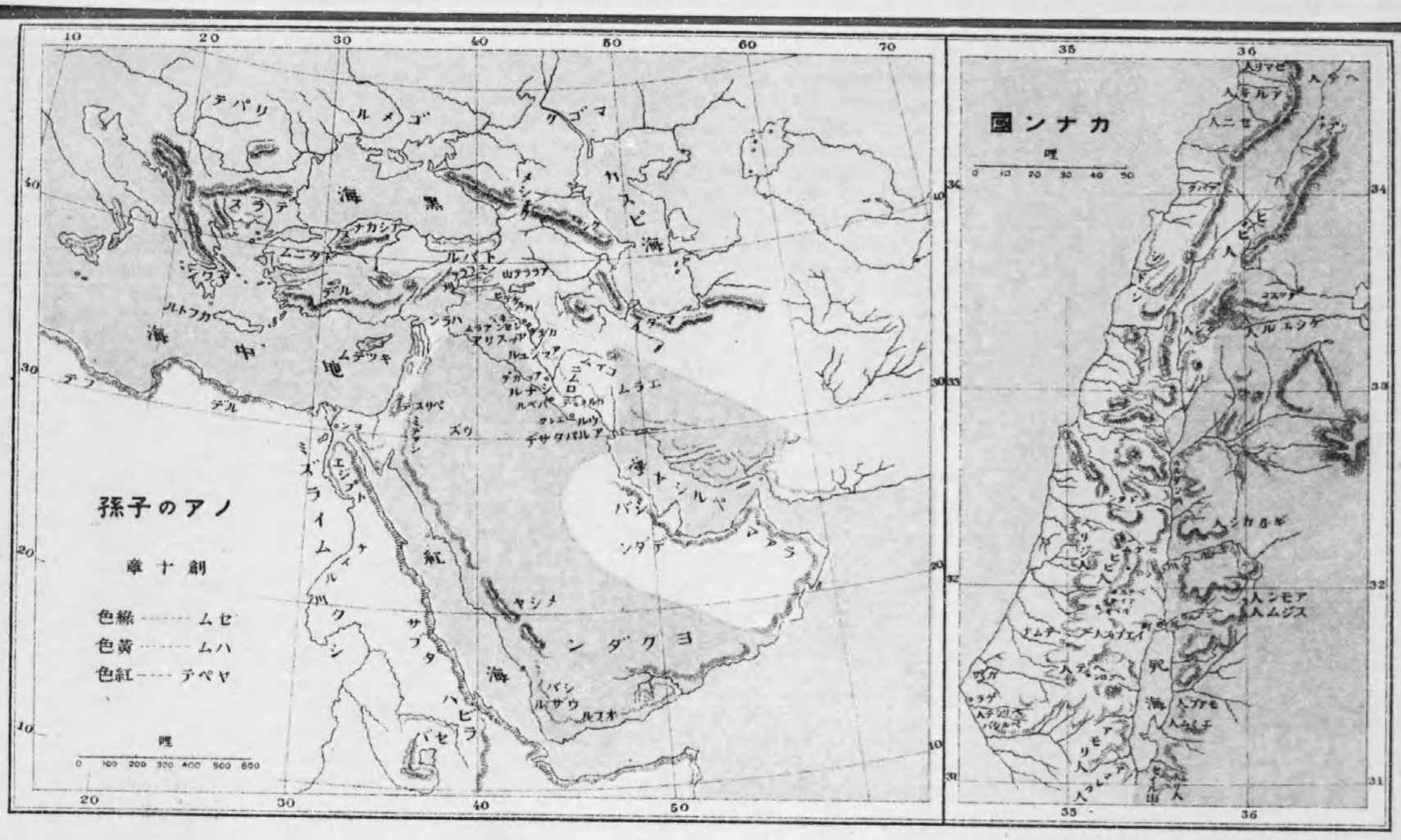
年月所	事	實	マタイ 馬太	マコ 馬可	ルカ 路加	ヨハネ 約翰
三十年 四月九日	178.	耶穌ペテロに顯れ給ふこと 哥前十五〇五（第三の顯現）。	……	……	廿四〇卅四	……
エルサレム 四月九日	179.	エマオに行く途中で二人の弟子に顯れ給ふこと（第四の顯現）。	……	十六〇十二、十三	廿四〇十三＝卅五	……
四月九日 エルサレム	180.	トマスの居らぬ時耶穌十人に顯れ給ふこと（第五の顯現）。	……	十六〇十四	廿四〇卅六＝四十九	廿〇十九＝廿三
四月十六日	181.	其後の顯現。				
	182.	復活日後の日曜日の夕、トマスも居る時耶穌復弟子等に顯れ給ふこと（第六の顯現）。	……	……	……	廿〇廿四＝廿九
		十一人ガリラヤに行き、定められた山へ上り、耶穌顯れ、萬國民に教へる事を命じ給ふこと（第七の顯現）。				
四月	183.	耶穌デベリヤの海で顯れ、シモンにその羔を牧へと命じ給ふこと（第八の顯現）。	廿八〇十六＝廿	十六〇十五＝十八	……	……
四、五月	184.	五百人以上の兄弟に顯れ給ふこと 哥前十五〇六、十一人も共に居つたらしい（第九の顯現）。	……	……	……	廿一〇一＝廿四
	185.	ヤコブに顯る（哥前十五〇三＝八）（第十の顯現）。	廿八〇十六	……	……	……
五月十八日	186.	復活日の後四十日目に凡ての使徒が見て居る中に天に昇り給ふこと 徒一〇一＝十二（第十一の顯現）。	……	十六〇十九、廿	廿四〇五十＝五十三	……

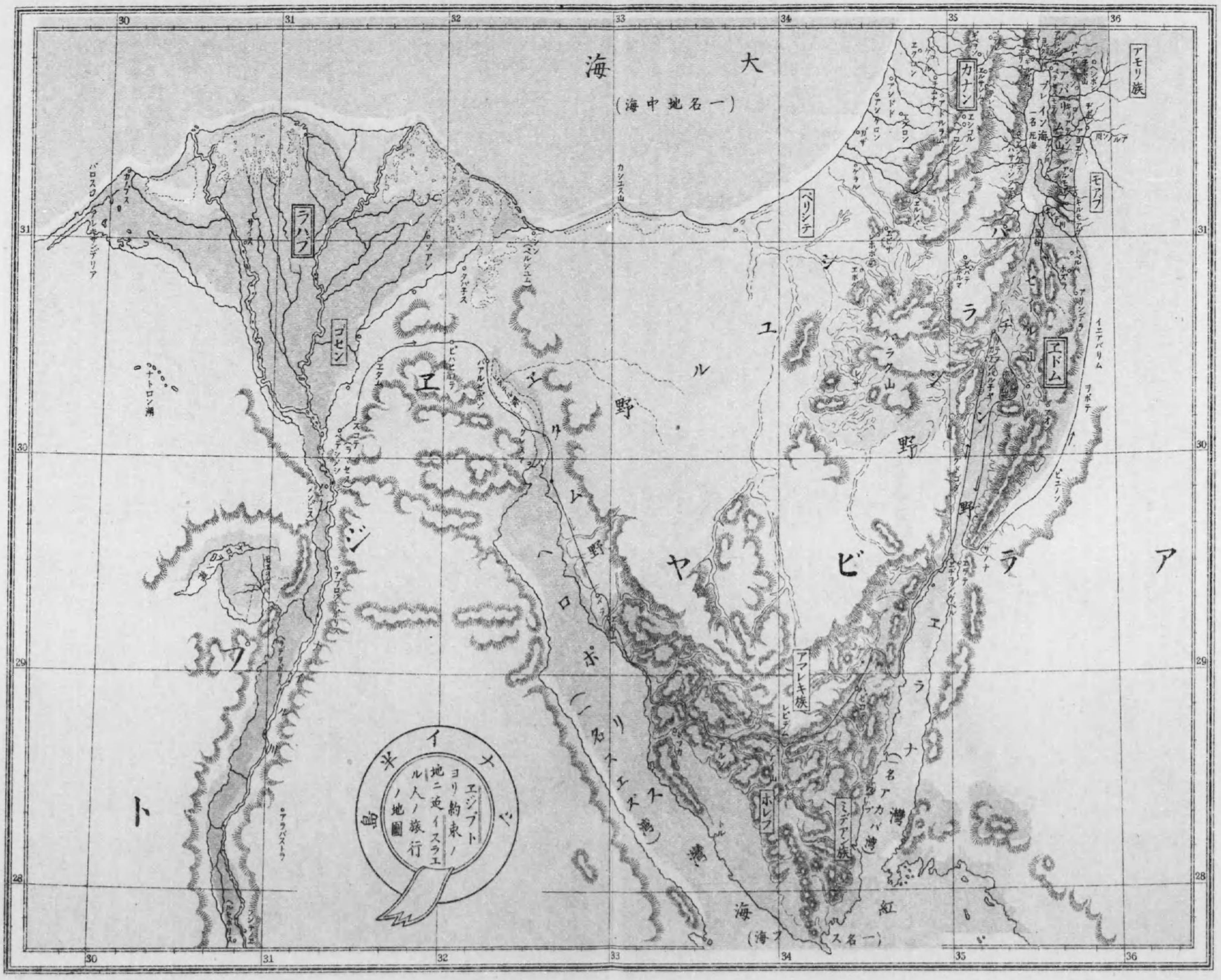
年月所	事	實	マタイ 馬太	マコ 馬可	ルカ 路加	ヨハネ 約翰
三十年 五月廿八日 日曜日	187.	ペンテコステの日に聖靈與へらる。	徒二〇一＝十一	……	……	……
エルサレム 卅三年	188.	耶穌ステパノに顯はれ給ふたこと（第十二の顯現）。	徒七〇五、六	……	……	……
と信ぜらる 卅四年	189.	耶穌パウロに顯はれ給ふたこと（第十三の顯現）。	徒廿二〇六＝十六	……	……	……
ダマスコ	190.	耶穌ヨハ子に顯はれ給ふたこと（第十四の顯現）。	默一〇九＝廿	……	……	……
六十六か九十六年のころ	191.	天に於ては耶穌が大なる祭司と王とであること。	默九〇十一＝廿八、廿一〇一＝廿七	……	……	……
パトモス						
永遠、天	192.	結論。	……	……	……	廿〇卅、卅一、廿一〇廿五

（「年表」參照）。

和合表終

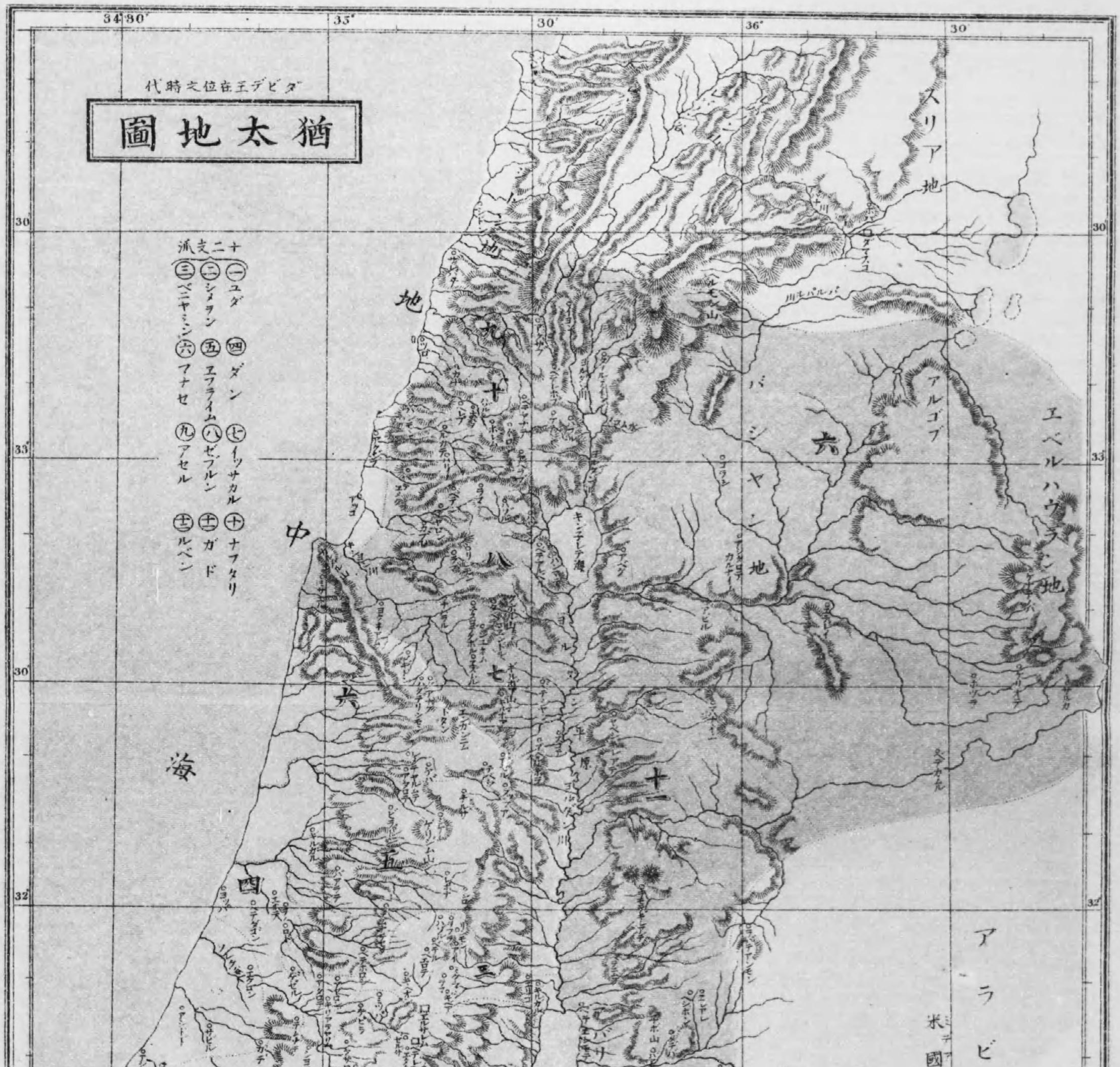

西半球
東半球
北極
北極
北極
南極
南極
太平洋
太平洋
太平洋
北亜米利加
南亜米利加
亜細亜
亜弗利加
印度洋
太西洋
ヤリラトスウア
南氷洋
南氷洋

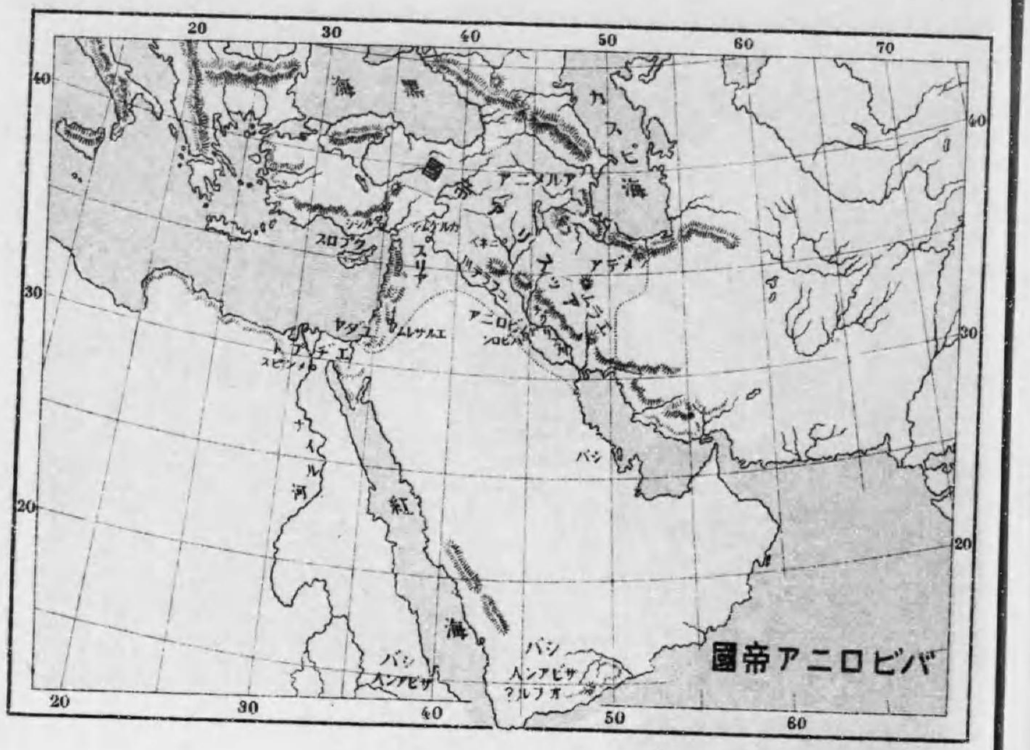

孫子のアノ
章十創
色緑……ムセ
色黄……ムハ
色紅……テペヤ
哩
0 100 200 300 400 500 600
カナン國
哩
0 10 20 30 40 50


大海
(一名地中海)
アモリ族
カナン
ペリシテ
モアブ
ラハブ
ゴセン
エドム
アマレキ族
ホレブ
ミデアン族
ナトロン湖
カシユス山
イエアバリム
ヨボテ
ヒエノン
ヒエラナ
(一名アカバ湾)
(一名スエズ湾)
(一名ス海)
エジプト
ヨリ約束ノ地ニ近イスラエル人ノ旅行ノ地圖

ダビデ王在位之時代

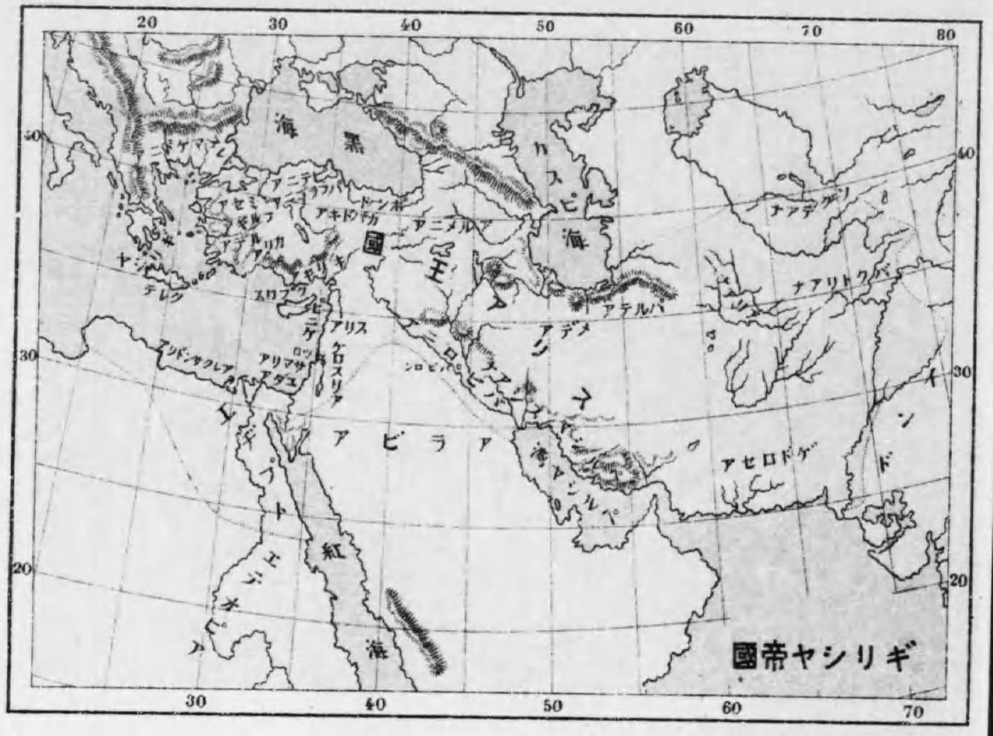
猶太地圖



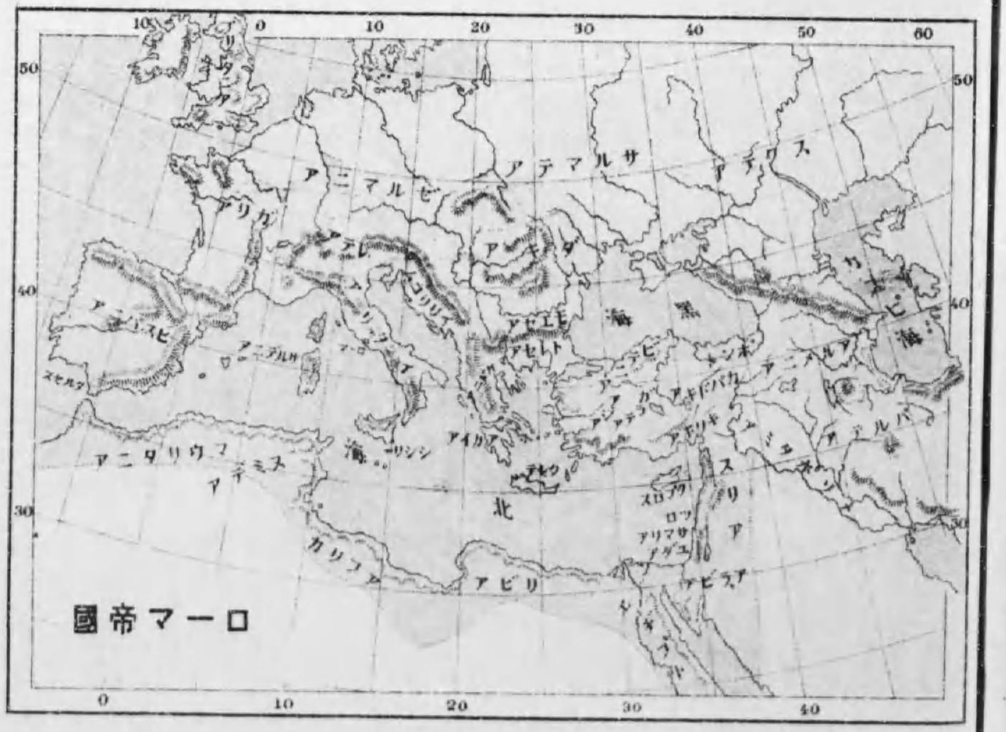


國帝アニロビバ

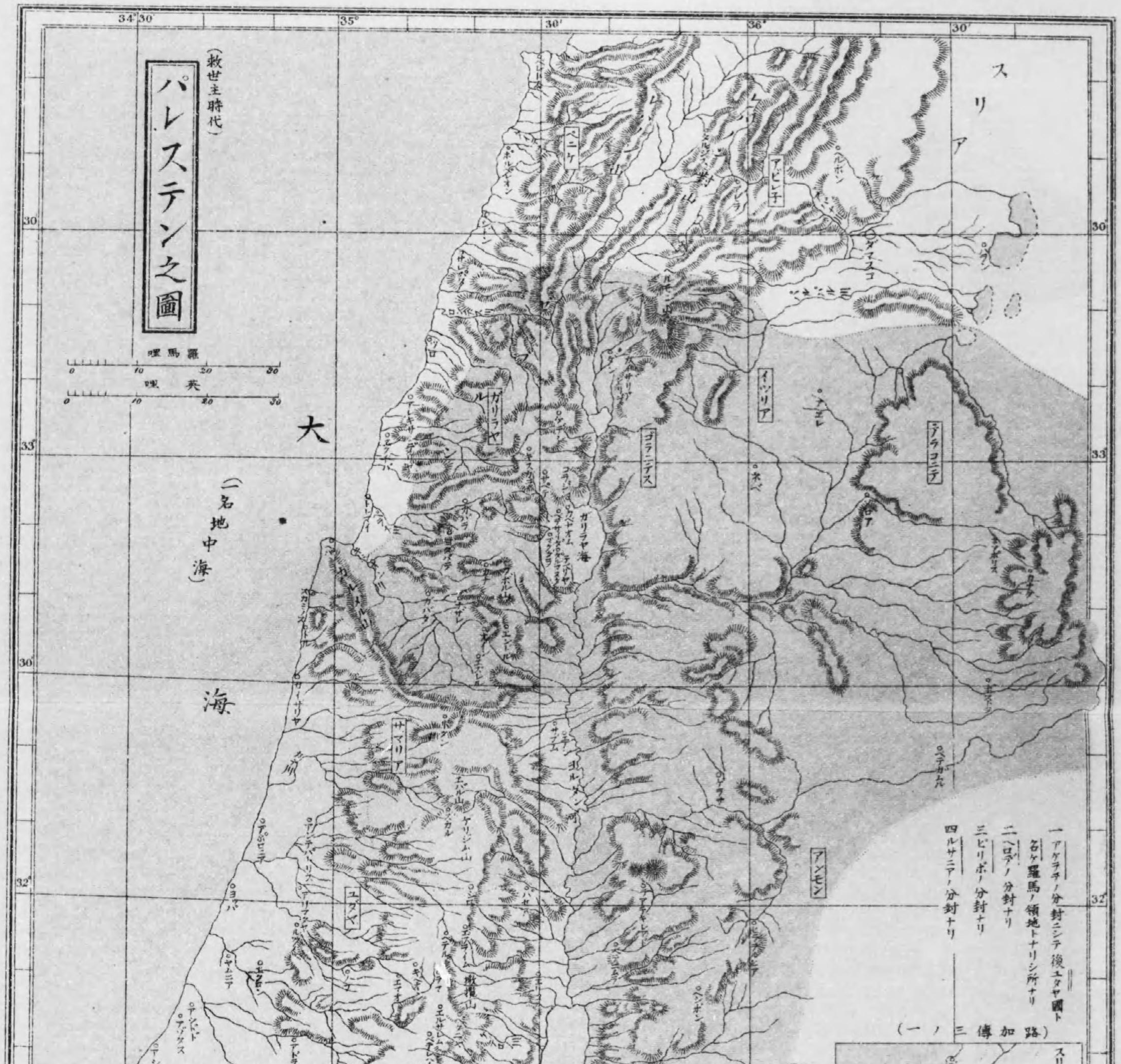
國帝アシルペ



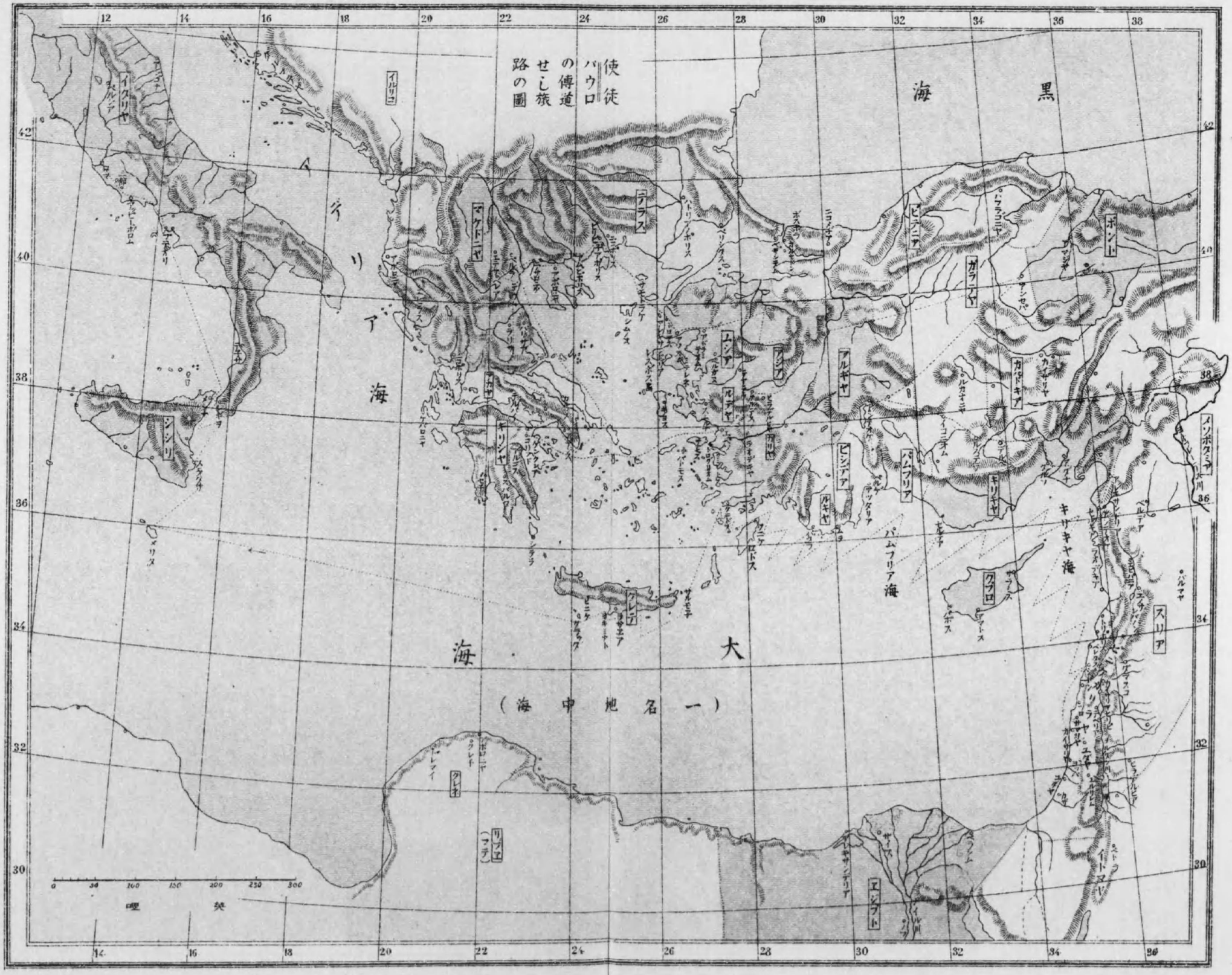
國帝ヤシリギ

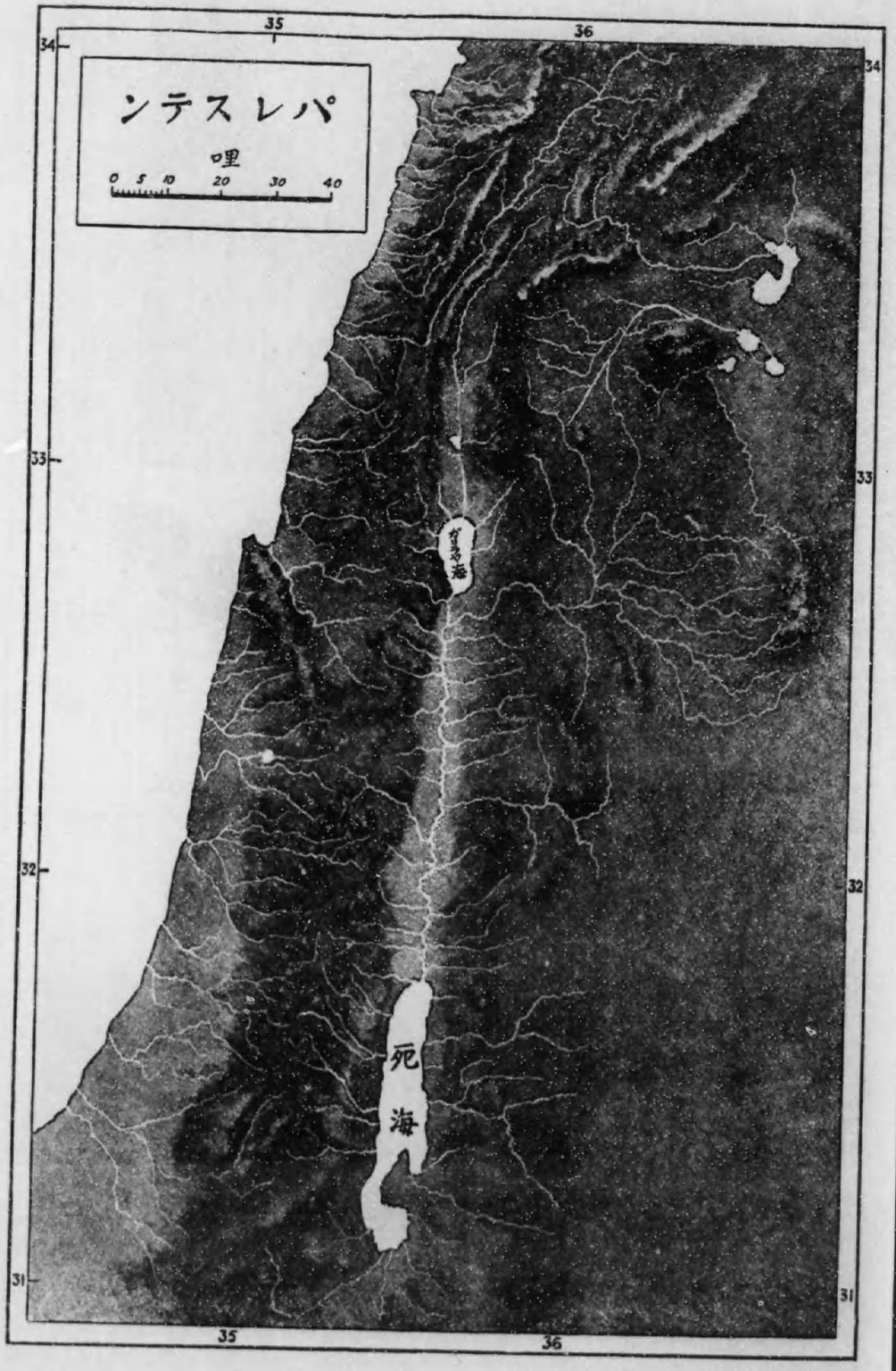


國帝マーロ


（救世主時代）
パレスチン之圖
羅馬哩
英哩
大海
（一名地中海）
死海
スリア
ペニケ
アビレ子
ダマスコ
ガリラヤ
ガリラヤ海
イツリア
ゴラニテス
テラコニテ
サマリア
ユダヤ
イドマヤ
アンモン
モアブ
一アケラオノ分封ニシテ後ユダヤ國ト名ケ羅馬ノ領地トナリシ所ナリ
二ヘロデノ分封ナリ
三ピリポノ分封ナリ
四ルサニアノ分封ナリ
（路加傳三ノ一）
アラビヤ

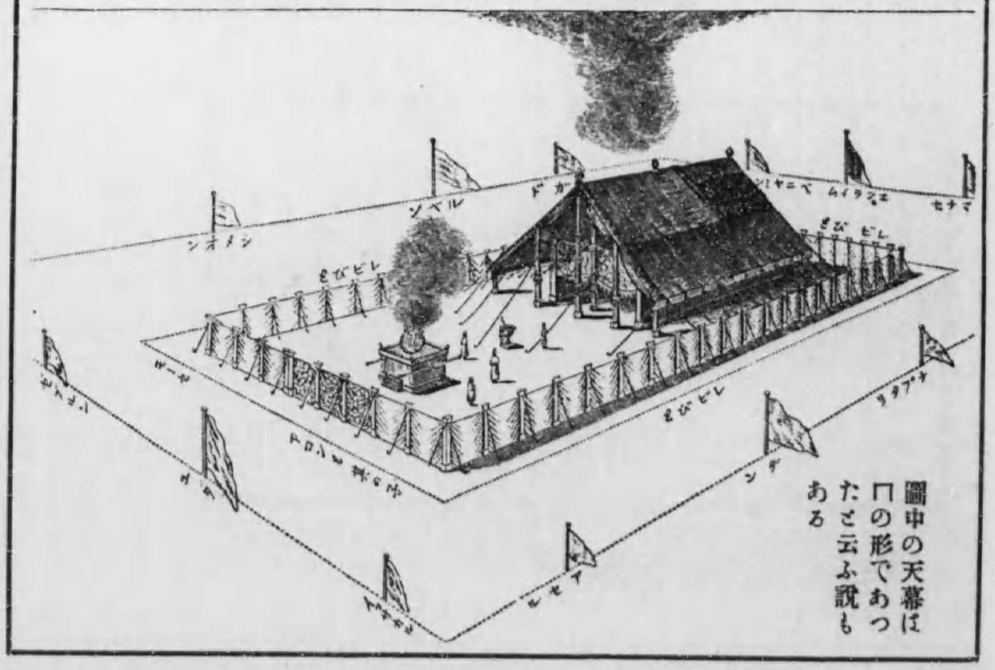
使徒パウロの傳道せし旅路の圖




ンテスレパ
哩
0 5 10 20 30 40
35
36
34
33
32
31
ガラヤ海
死
海

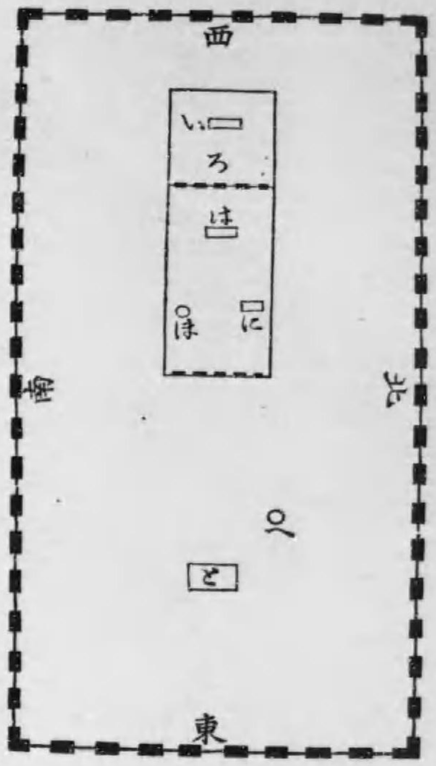
人(ひと)未(ミ)利(レ)　長(をさ)司(しの)祭(さい)　司(し)祭(さい)

案(つくへ)のンバの供(そなへ)　箱(はこ)の約(やく)契(けい)　臺(だい)燈(どう)



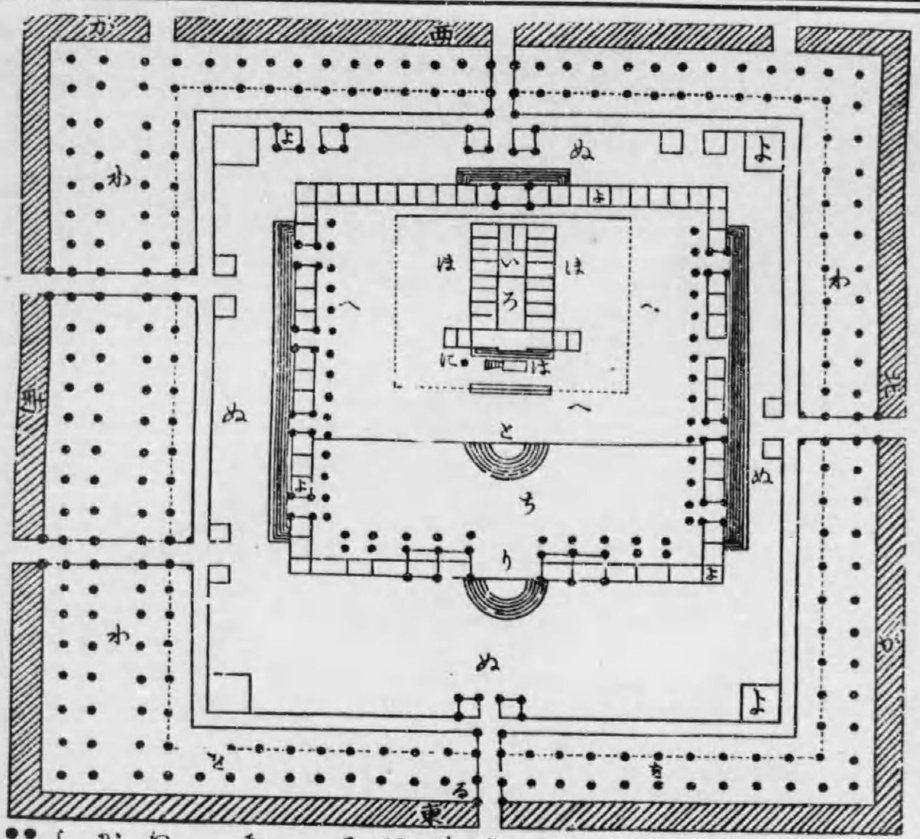
圖中の天幕は口の形であつたと云ふ説もある

舊約時代の幕屋

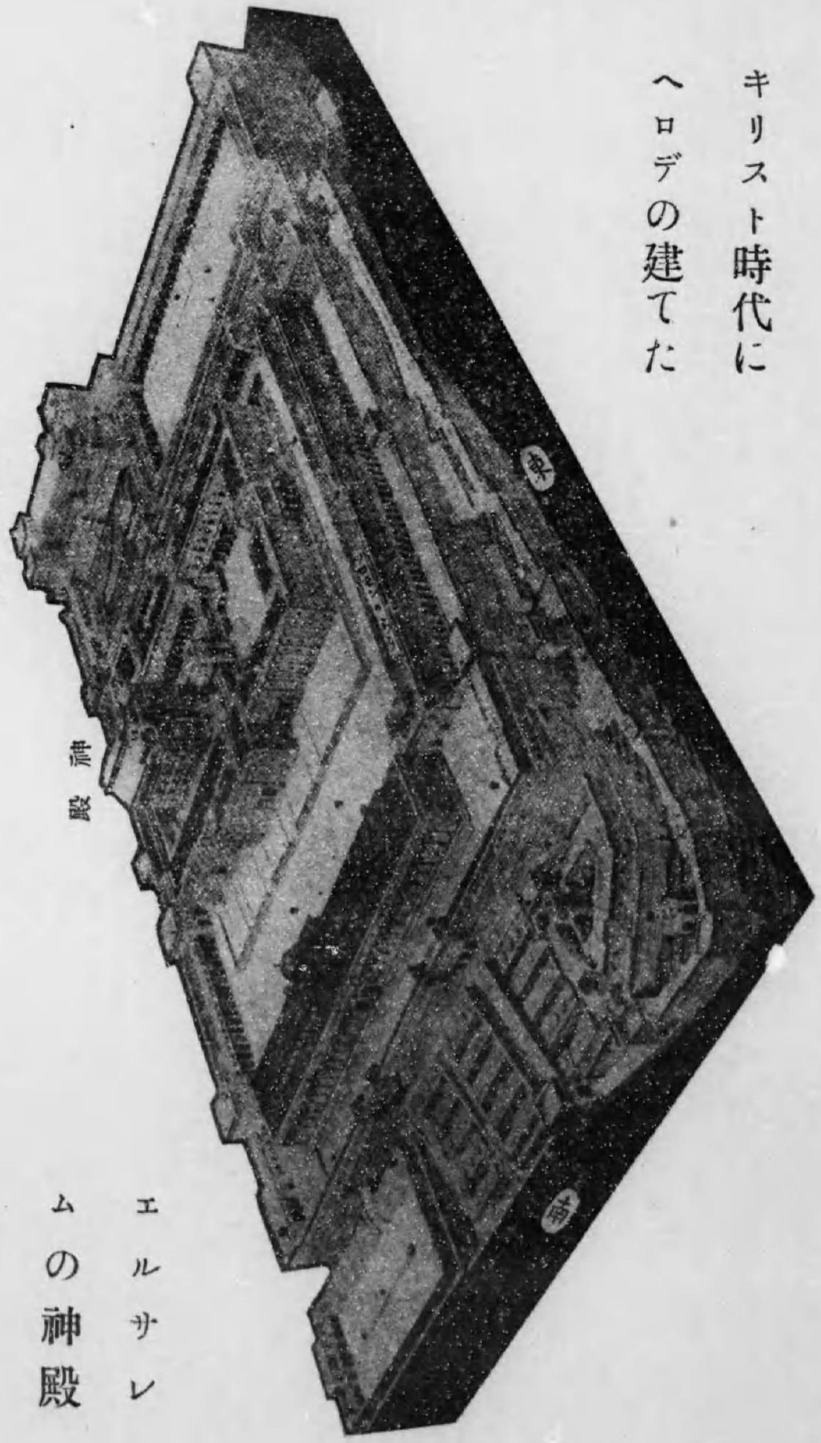


い 契約の櫃
ろ 至聖所
は 香壇
に 供前のパンの案
ほ 純金の燈臺
へ 洗盤
と 燔祭の壇

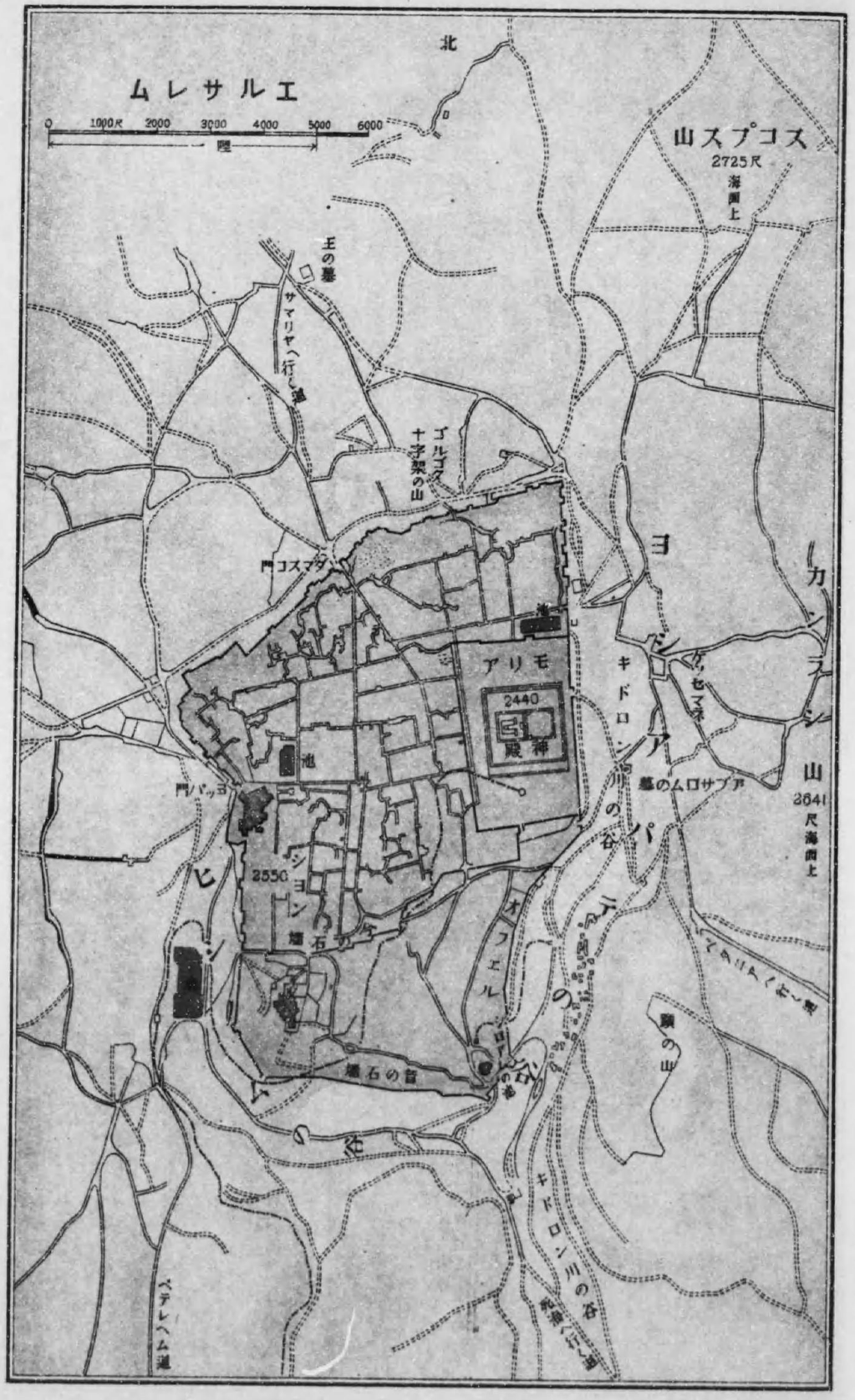
キリスト時代のエルサレムの神殿



い 至聖所
ろ 聖所
は 燔祭の壇
に 銅の洗盤
ほ 祭司の庭
へ イスラエル人の庭
と ニカノル門
ち 婦人の庭
り 美門
ぬ 異邦人の庭
る 東門（シユシヤン門）
を ソロモンの廊
わ 王の廊
か 外壁
よ 室
柱

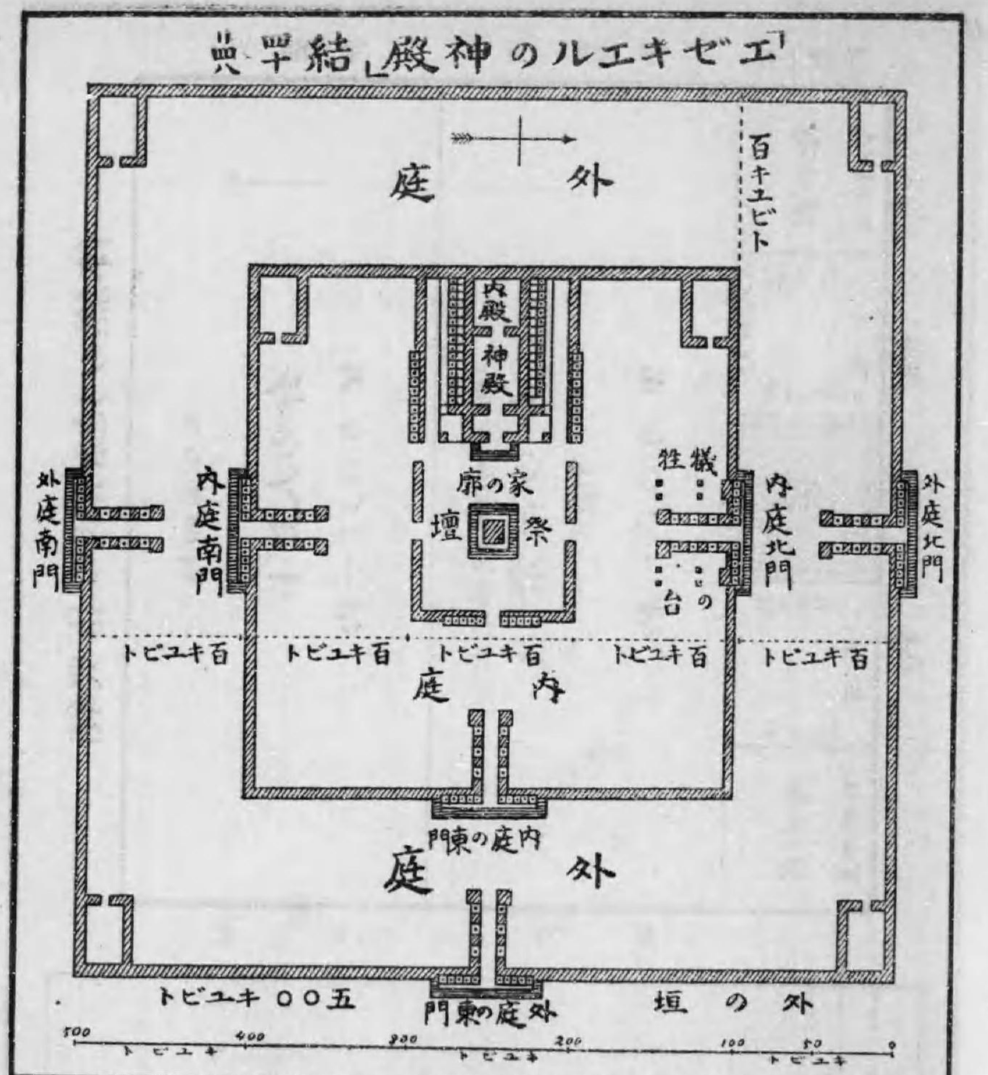


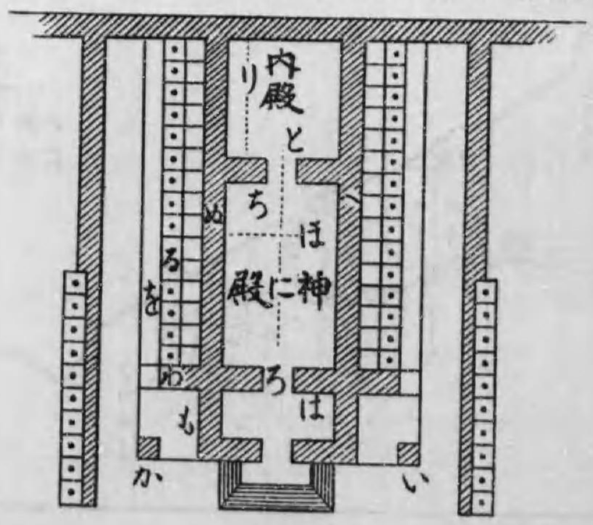
キリスト時代に
ヘロデの建てた
エルサレム
の神殿

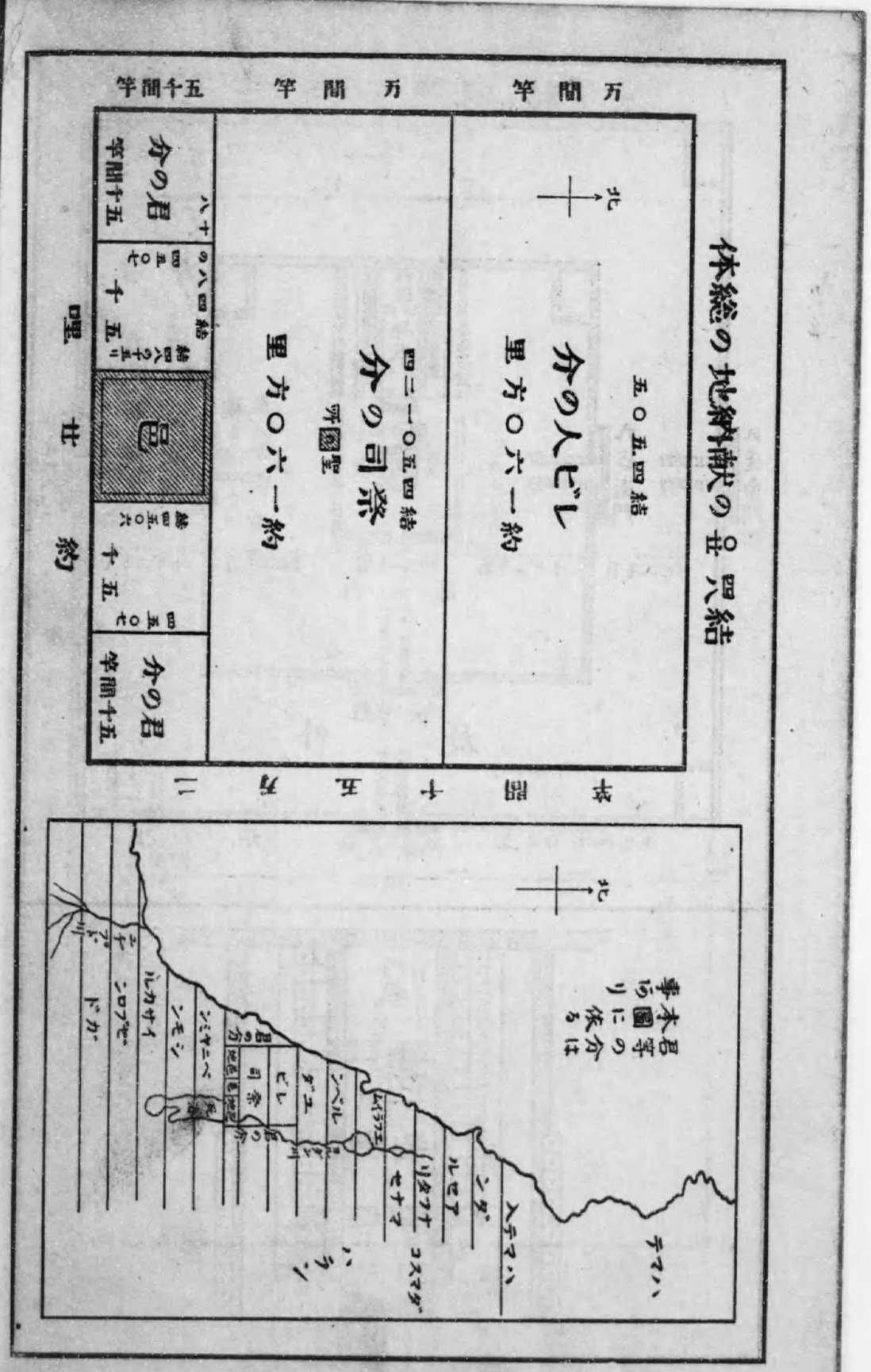


エルサレム
0 1000尺 2000 3000 4000 5000 6000
哩
北
山スプコス
2725尺
海面上
王の墓
サマリヤへ行く道
ゴルゴタ
十字架の山
門コスマダ
ヨシアパテの谷
カンラン山
2641
尺海面上
ゲッセマネ
キドロン川の谷
墓のムロサブア
アリモ
2440
殿神
池
門パッヨ
2550
ヒシヤの谷
ヒシヤの谷
オフエル
ロアの池
鎖の山
キドロン川の谷
ベテレヘム道

「エゼキエル」の神殿結構


外庭
百キユビト
内殿
神殿
家の扉
祭壇
犠牲
の台
内庭北門
外庭北門
外庭南門
内庭南門
百キユビト
百キユビト
百キユビト
百キユビト
百キユビト
内庭
東の門
内庭
外庭
五〇〇キユビト
東の門
外庭
外の垣
500
400
300
200
100
50
0
キユビト


内殿
り
と
ち
ほ
神
に
殿
ぬ
る
を
わ
も
か
ろ
は
い



大正五年八月十一日印刷
大正五年八月十五日發行

北海道北見國野付牛
編著者 ジ、ビ、ビヤソン
東京市芝區白金今里町八十九番地
同 上三浦徹
東京市赤坂區青山高樹町三番地
同 上和泉きん
東京市京橋區築地明石町八番地
基督教與文協會代表者
發行者 エス・エチ・ウエンライト
神奈川縣橫濱市太田町五丁目八七番地
印刷人 村岡平吉
神奈川縣橫濱市山下町百〇四番地
印刷所 福音印刷合資會社

定價 クロース簿表紙 金壹圓七拾五錢
　　 背皮 金貳圓
　　 總皮金縁 金四圓

發賣所

東京
基督教興文協會
教文館
基督教書類會社
警醒社書店

其他基督教書籍店ニアリ

237
C 11

終